

烏山城跡確認調査報告書

2022. 2

栃木県那須烏山市教育委員会



鳥山城跡空撮（南から）



鳥山城跡空撮（東から）



吹貫門脇石垣（南から）



本丸石垣（南西から）

烏山城跡確認調査報告書

2022. 2

栃木県那須烏山市教育委員会

序

烏山城跡は栃木県東部の那須烏山市の中心市街地にあります。那須烏山市はユネスコ無形文化遺産「山・鉢・屋台行事」の一つである「烏山の山あげ行事」が特に有名で、祭礼期間中は県内外から多くの見物客が訪れ、にぎわいます。古くより地域住民に「お城山」と呼ばれ親しまれてきたこの城跡は、かの有名な那須与一の子孫である沢村五郎資重によって築かれ、明治に至るまで城主を変えながら存続し続けた城です。廃城後は、戦中においては防空監視哨の建設、戦後にはスギ・ヒノキの植林などで手が加えられてしましましたが、お城を使っていた時の状況がほとんど手つかずの状態で保存されております。そういった良好な保存状況や城郭の規模、歴史的な背景から栃木県を代表する城郭の一つに数えられております。

那須烏山市では、烏山城跡の遺構の保存状況や性格を解明し、このすばらしい城郭を後世に引き継いでいくために、平成21年度から考古学や文献史学などの幅広い分野での総合調査を実施してきました。

本報告書は、烏山城跡の確認調査結果をまとめたものです。本書が郷土の歴史を理解し、郷土愛醸成の一助となるとともに、各方面において広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査にあたりましては多くのご指導・ご鞭撻をいただきました文化庁、栃木県教育委員会をはじめとする関係諸機関、烏山城跡発掘調査指導委員会に対しまして厚く御礼申し上げます。

また、調査をご快諾いただきました地権者の皆様をはじめとする地域の皆様に、心からの感謝を申し上げるとともに、今後ともさらなるご支援をお願いし、本報告書発刊のご挨拶とさせていただきます。

令和4年2月

那須烏山市教育委員会
教育長 田代和義

例　言

1. 本書は、栃木県那須烏山市城山地内に所在する烏山城跡の確認調査報告書である。
2. 本事業は那須烏山市教育委員会が主体となり実施した。なお、実施にあたっては国庫補助金を平成21年度から平成25年度、平成27年度から令和3年度にかけて利用した。
3. 調査は遺構の範囲や配置を確認する発掘調査と、烏山城跡に関する古文書・古絵図面等の情報収集や解析等を行う史料調査に大別して実施した。また、平成30年・31年度には烏山城跡と周辺地域の航空レーザー測量による3次元データを取得し、現況平面図の作成を実施した。
4. 本書に掲載した烏山城跡の縄張り図は、那須烏山市教育委員会が茂木孝行氏（烏山城跡調査指導委員会委員）に作成を依頼して作成いただいたものである。
5. 烏山城跡の曲輪や城砦跡の名称については古文書や古絵図面で様々な名称が用いられ、別称等も多く存在することから、本書では『栃木県の中世城館跡』（栃木県教育委員会事務局文化課編1982年）で用いられた名称に倣った。ただし、城砦跡については、同一名称もあることから別称を用いたところもある。
6. 本事業に係る事務執行は生涯学習課文化財グループが担い、業務を分担した。
7. 調査の実施から確認調査報告書作成にあたっては、文化庁第二課、栃木県教育委員会事務局文化財課、烏山城跡調査指導委員会の指導を受けると共に、以下の諸氏及び関係諸機関からご指導、ご協力を賜った。（五十音順・敬称略）
新井政一郎、新井康之、上野修一、大澤伸啓、尾島忠信、小野正敏、柏村勇二、今平利幸、斎藤慎一、斎藤恒夫、斎藤 弘、鈴木泰浩、杉浦昭博、高見哲士、田熊清彦、武川夏樹、田代 隆、田嶺良太、東原正記、津野 仁、永岡弘章、野口静雄、初山孝行、堀内秀樹、横山通有、渡辺康代
8. 烏山城跡調査指導委員会は以下で構成される。
浅野晴樹（座長・考古学）、荒川善夫（職務代理者・中世史）、大島慎一（考古学）、檜山秀雄（近世史・郷土史）、船木明夫（近世史）、茂木孝行（考古学）
9. 本報告書の執筆は「第4章第2節2（2）」を大澤伸啓氏にご寄稿いただいた。「第4章第1節3」を茂木孝行委員、「第4章第3節1」を荒川善夫委員、「第4章第3節2」を船木明夫委員、「第4章第3節3」を檜山秀雄委員、「第4章第5節」「第6章」を浅野晴樹座長に執筆いただいた。その他は事務局が執筆した。
10. 発掘調査、整理作業に参加した作業員は次のとおりである。（五十音順・敬称略）
加藤達雄、桑原恵美子、小島利三、小堀紘夫、小森英二、墨野倉弘美、豊田裕美子、中澤章、長島 詮、中村洋一郎、根本辰雄、樋山 稔、松本一夫、若松幸雄
11. 本遺跡の出土品、記録資料類は那須烏山市教育委員会が保管している。

12. 本事業の事務局体制は次のとおりである。(令和14年2月現在)

那須烏山市教育委員会	教 育 長	田代 和義
	生涯学習課長	水上 和明
	文化財グループ	
	主幹兼總括	小峯 洋一
	係 長	佐藤 篤
	学芸員係長	鈴木 芳英
	主 任	羽石 真久
	学芸員主任	石下 翔子
	主 事	田中島啓人
	〃	吉川 和徳

凡 例

1. 遺跡の略号はNK-KAJ (NASUKARASUYAMA-KARASUYAMA J YO) である。
2. 遺構の略号は、掘立柱建物：S B、溝跡：S D、土坑：S K、炉：S L、S P：柱穴、性格不明遺構：S X とし、遺構平面確認時に通じて曲輪ごとに発番した。
3. 遺構の縮尺は、挿図中にスケールで示した。
4. 遺構図中の方角は、世界測地系に基づく座標北を示し、セクション図断面水準は海拔標高である。
5. 遺構の土層注記中の略号は次のことを示す。
SP：七本桜バミス、IP：今市バミス、KP：鹿沼バミス
6. 遺物の縮尺は挿図内にスケールで示した。原則として、1/3である。
7. 出土遺物観察表中の測定値の（ ）は推定値、〔 〕は残存値を表す。
8. 遺物の写真図版縮尺は不統一である。

目 次

序

例言

凡例

第1章 調査の経緯.....	1
第2章 遺跡の概要	
第1節 地理的環境.....	2
第2節 歴史的環境.....	3
第3節 主な沿革.....	7
第3章 調査の方法.....	8
第4章 調査内容	
第1節 測量調査等	
1 全域測量図.....	10
2 石垣.....	16
3 烏山城跡の構造について.....	21
第2節 確認調査	
1 出土遺構	
(1) 本丸.....	42
(2) 古本丸.....	65
(3) 西城.....	80
(4) 中城.....	90
(5) 北城.....	93
(6) 釜ヶ入口.....	98
(7) 三の丸.....	101
2 出土遺物	
(1) 烏山城跡の陶磁器について.....	102
(2) 烏山城跡出土瓦の様相.....	136
第3節 文献、絵図調査（後ろから）	
1 戦国期烏山城と周辺地域.....	(220) 1
2 近世における烏山城絵図について.....	(211) 10
3 近世の烏山.....	(196) 25
第4節 烏山城跡での普及活動.....	143
第5節 烏山と城下の景観について.....	145
第5章 調査の総括.....	161
第6章 烏山城跡の歴史的価値.....	166
写真図版	
抄録	

卷頭図版目次

卷頭図版一

鳥山城跡空撮（南から）　鳥山城跡空撮（東から）

卷頭図版二

吹貫門脇石垣（南から）　本丸付近石垣（南西から）

図版目次

図版一 本丸	223
礎石列確認状況（北から） 折れ曲がる石列（南から）	
礎石上面の柱痕跡（南から） 肥前腕出土状況（南から）	
高段部分法面状況（南西から） 正門石垣西面（南西から）	
本丸正門石垣西面前石段（北東から） 正門石垣南面正門付近（南東から）	
図版二 古本丸	224
西側土堀（北から） 西側土堀立ち割り（東から）	
西側土堀躍盛土状況（南東から） 東側張り出し部盛土状況（南西から）	
虎口付近方形礎石（北から） 掘立柱痕跡状況（南から）	
かわらけ縫り出土状況（西から） かわらけ縫り出土かわらけ	
図版三 西城	225
トレンチ4 調査終了後状況（南西から） トレンチ5 調査終了後状況（南西から）	
SL-46確認状況（西から） トレンチ8 調査終了後状況（南から）	
トレンチ12～15 調査終了後状況（北から） トレンチ13・14 SD-50確認状況（南東から）	
SD-50かわらけ出土状況（南西から） SL-96確認状況（南から）	
図版四 中城	226
トレンチ1 調査終了後状況（東から） トレンチ1 石列確認状況（北東から）	
トレンチ1 遺物出土状況（西から） トレンチ1 遺物出土状況（西から）	
トレンチ1 東面セクション中遺物出土（西から） トレンチ2 調査終了後状況（北から）	
トレンチ2 遺物出土状況（東から） 調査終了状況（北から）	
図版五 北城	227
トレンチ1 調査終了後状況（東から） トレンチ1 SD-Iセクション（東から）	
平坦面調査開始前状況（東から） トレンチ3 遺物出土状況（北から）	
トレンチ4 遺物出土状況（北から） トレンチ6 焼土確認（南から）	
平坦面調査終了状況（東から） 調査終了（西から）	
図版六 釜ヶ入口	228
調査地点竹林整備後（東から） 表土除去状況（北から）	
地山面確認状況（北から） 調査区北側（南西から）	
調査区南側（南東から） 整地盛土内縫確認状況（南から）	
第1回調査指導委員会視察 第2回調査指導委員会視察	
図版七 遺物一（本丸・古本丸）	229
図版八 遺物二（西城）	230
図版九 遺物三（西城・中城）	231
図版十 遺物四（北城）	232

挿図目次

第1図 烏山城跡位置図	1	第49図 西城 トレンチ1～11	83
第2図 栃木県の地形区分図	2	第50図 西城 トレンチ12～15	84
第3図 周辺の主な遺跡と地形	5	第51図 西城 トレンチ セクション図	85、86
第4図 年度ごとの調査区図	9	第52図 中城 地形図	91
第5図 烏山城跡測量図	10	第53図 中城 トレンチ1・2	92
第6図 烏山城跡全城 等高線図	11、12	第54図 野州烏山城絵図（北城抜粋）	93
第7図 烏山城跡 跡張図	13、14	第55図 北城 地形図	94
第8図 烏山城跡 微地形解釈図	15	第56図 北城 トレンチ1	95
第9図 正保の城絵図一部分	16	第57図 北城 トレンチ2～6	96
第10図 貝吹門脇石垣西面 立面図・エレベーション図		第58図 築ヶ入口 测量図	98
	17	第59図 築ヶ入口 コンク図	99
第11図 正保の城絵図	18	第60図 築ヶ入口 トレンチ 平面図・立面図	99
第12図 正門付近石垣前面 立面図	19	第61図 築ヶ入口 トレンチ 平面図・セクション図	
第13図 正門付近石垣前面 立面図・断面図	19		100
第14図 三の丸石垣前面 立面図・断面図	20	第62図 三の丸三次元レーザー測量平面調査成果図	
第15図 三の丸石垣東面 立面図・断面図	20		101
第16図 主要城館分布図	21	第63図 本丸 出土遺物（1）	110
第17図 中心部	25	第64図 本丸 出土遺物（2）	111
第18図 中心部北側	25	第65図 古本丸 出土遺物（1）	112
第19図 西城及びその周辺	26	第66図 古本丸 出土遺物（2）	113
第20図 築ヶ入口周辺の旧大手道	27	第67図 古本丸 出土遺物（3）	114
第21図 大野曲輪及び周辺	27	第68図 古本丸 出土遺物（4）	115
第22図 梶葉山と泥沙門山	28	第69図 古本丸 出土遺物（5）	116
第23図 太鼓丸と七曲り口	28	第70図 古本丸 出土遺物（6）	117
第24図 十二曲り口とその周辺	29	第71図 古本丸 出土遺物（7）	118
第25図 三の丸及びその周辺	29	第72図 古本丸 出土遺物（8）	119
第26図 戦国期城下想定図	40	第73図 西城 出土遺物（1）	120
第27図 本丸 地形図	43	第74図 西城 出土遺物（2）	121
第28図 本丸 全体平面図（1）	44	第75図 西城 出土遺物（3）	122
第29図 本丸 全体平面図（2）	45	第76図 西城 出土遺物（4）	123
第30図 本丸 トレンチ1～8	46	第77図 中城 出土遺物（1）	124
第31図 本丸 トレンチ9～12・14	49	第78図 中城 出土遺物（2）	125
第32図 本丸 トレンチ11～14、SX-4	50	第79図 北城 出土遺物	125
第33図 本丸 トレンチ15～20（1）	51	第80図 築ヶ入口 出土遺物	125
第34図 本丸 トレンチ15～20（2）	52	第81図 出土瓦実測図（1）	139
第35図 本丸 トレンチ21・22、正門前石垣	53	第82図 出土瓦実測図（2）	140
第36図 本丸 SB-5・6、SX-7～10 全体平面図		第83図 他遺跡出土瓦との比較	141
	54	第84図 烏山城跡縄張図（部分）	218
第37図 本丸 磐石分類図	56	第85図 烏山城跡及び周辺城館位置図	216
第38図 本丸 SB-5	57	第86図 烏山城跡一帯の模式図	215
第39図 本丸 正門石列	62	第87図 「下野国烏山城図」（全体）	211
第40図 本丸 正門外石列	63、64	第87-2図 「下野国烏山城図」（城郭部分拡大）	211
第41図 古本丸 地形図	66	第87-3図 「下野国烏山城図」（西城周辺部分拡大）	201
第42図 古本丸 全体平面図	67	第87-4図 「下野国烏山城図」	200
第43図 盛上の状況	68	第88図 「野州烏山城絵図」（全体）	210
第44図 古本丸 トレンチ1～4	69、70	第88-2図 「野州烏山城絵図」（本丸部分拡大）	210
第45図 古本丸 トレンチ5～9	71、72	第88-3図 「野州烏山城絵図」（三の丸周辺部分拡大）	
第46図 古本丸 トレンチ10～14	73		210
第47図 古本丸 トレンチ8 SX-1	78	第88-4図 「野州烏山城絵図」（西城周辺部分拡大）	201
第48図 西城 地形図	82	第89図 「野州烏山城絵図」（全体）	209
		第89-2図 「野州烏山城絵図」（城郭部分拡大）	209

第89-3図 「野州島山城絵図」(本丸周辺部分拡大)	202
第89-4図 「野州島山城絵図」(西城周辺部分拡大)	201
第89-4図 「野州島山城絵図」(西城周辺部分拡大)	201
第89-5図 「野州島山城絵図」(三の丸部分拡大)	199
第90図 「島山城図」(全体)	208
第90-2図 「島山城図」(トレース図)(城郭部分拡大)	208
第90-3図 「島山城図」(トレース図)(本丸周辺部分拡大)	202
第90-4図 「島山城図」(トレース図)(西城周辺部分拡大)	201
第90-5図 「島山城図」	200
第91図 「島山城図」(全体)	207
第91-2図 「島山城図」(本丸周辺部分拡大)	207
第91-3図 「島山城図」(三の丸周辺部分拡大)	207
第91-4図 「島山城図」	200
第91-5図 「島山城図」(三の丸周辺部分拡大)	199
第92図 「城山地図見取彩色」(全体)	206
第92-2図 「城山地図見取彩色」(「二の丸」(本丸)周辺部分拡大)	206
第93図 「旧島山城城図」(全体)	205
第93-2図 「旧島山城城図」(本丸周辺部分拡大)	205
第93-3図 「旧島山城城図」(「三丸」(三の丸)周辺部分拡大)	205
第93-4図 「旧島山城城図」	205
第93-5図 「旧島山城城図」(三の丸周辺部分拡大)	199
第94図 「家中屋敷絵図面」(右部分)	204
第94-2図 「家中屋敷絵図面」(左部分)	204
第95図 各曲輪位置推定図(「家中屋敷絵図面」(左部分))	204
第96図 「押領屋敷之絵図」(全体)	203
第96-2図 「押領屋敷之絵図」(主屋部分(左下)拡大)	203
第97図 現在の等高線上に各曲輪の位置を比定	201
第98図 現在の等高線上に三の丸内の建物の位置を想定	199
第99図 正保城絵図 下野国島山城絵図	192
第100図 遠江守様御代 島山城内家中屋敷図	188
第101図 野州島山城絵図(部分)	184
第102図 島山城と城下広域図	145
第103図 江戸時代後半の島山城と城下町	146
第104図 江戸時代初期の島山城と城下町	155
第105図 戦国時代後半の島山城と城下町	157
第106図 近世に改変した推定範囲	163
第107図 島山城下町における付け祭りの推移	169

表目次

表1 周辺の主な遺跡	6
表2 本丸砦石 石材観察表	55
表3 本丸 土層注記(1)	58
表4 本丸 土層注記(2)	59
表5 本丸 土層注記(3)	60
表6 本丸 土層注記(4)	61
表7 本丸 道構観察表	61
表8 古本丸 土層注記(1)	74
表9 古本丸 土層注記(2)	75
表10 古本丸 土層注記(3)	76
表11 古本丸 土層注記(4)	77
表12 古本丸 道構観察表	79
表13 西城 道構観察表(1)	87
表14 西城 道構観察表(2)	88
表15 西城 土層注記(1)	89
表16 西城 土層注記(2)	90
表17 中城 道構観察表	90
表18 中城 土層注記	92
表19 北城(土塁面) 土層注記	95
表20 北城(平坦面) 土層注記	96
表21 北城 道構観察表	97
表22 釜ヶ入口 土層注記	98

表23 戦国時代の曲輪別出土陶磁器数	102
表24 曲輪別の貿易陶磁器集計表 (参考資料: 舟沢山城跡と太田金山城跡)	104
表25 北関東の主要城館との出土陶磁器の比較	106
表26 出土遺物観察表(1)	126
表27 出土遺物観察表(2)	127
表28 出土遺物観察表(3)	128
表29 出土遺物観察表(4)	129
表30 出土遺物観察表(5)	130
表31 出土遺物観察表(6)	131
表32 出土遺物観察表(7)	132
表33 出土遺物観察表(8)	133
表34 出土遺物観察表(9)	134
表35 出土遺物観察表(10)	135
表36 出土遺物(12) 観察表	142
表37 「島山城図」(第91図)・「旧島山城城図」(第93図)による各城門の比較	198
表38 大久保家が植姫家より受け取った島山城郭等の あらまし	182
表39 領内村々高帳 享保11年(1726)	181
表40 相模国飛地領の構成 加増後の享保13年(1728) 当時	181

第1章 調査の経緯

平成17年10月、烏山町と南那須町が合併して那須烏山市が誕生した。烏山城跡は、その中心市街地の北西側に隣接した喜連川丘陵の一支脈に築かれた山城である（第1図）。周辺の地形が陥しく、守りに有利なことを巧みに利用した要害の地を選んで築城されたものと考えられる。

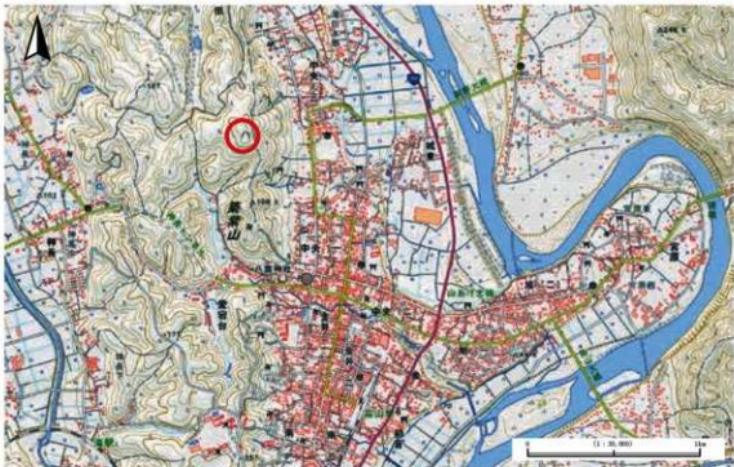
那須烏山市では、地域の歴史を知る上で貴重な文化遺産である烏山城跡を後世に保存し、地域の誇りとして活用を図っていくことが検討されたが、当時は城跡の実像が全くわからない状況であったため、現状把握のための詳細な学術調査が必要となり、調査を実施することとなった。

調査については、平成21年度から国庫補助事業を活用しながら5カ年計画で確認調査を実施し、現状把握に努めた。その結果、良好な保存状況と栃木県内でも1、2を争う広大な山城であることが判明した。そこで那須烏山市では、改めて烏山城跡について検討し、将来的な国指定史跡を目指した調査を実施することとなった。

平成28年度には、文化庁や栃木県教育委員会にその趣旨の方針をもって協議し、烏山城跡調査指導委員会を新たに組織し調査を進めることとなった。

調査指導委員会では、これまでの確認発掘調査では近世期の痕跡までしか確認できなかつたが、文献調査、現地踏査等から烏山城跡は中世から近世にかけて改修等を経ながら、明治の廢城まで継続的に使用された山城であると考えられたため、中世の城である部分と近世の城跡である部分の両方を見ることができ、その変遷を追うこともできる可能性を持った城跡であるとの証明を目指した。

そこで、確認されていない中世の痕跡を考古学的にも確認するため、未調査地点の調査を積極的に実施し、より正確な現状把握のため三次元航空レーザー測量を実施するなどの調査を実施した。



第1図 烏山城跡位置図

第2章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

烏山城跡が所在する那須烏山市は、栃木県の東部に位置し、県都宇都宮から約29kmの距離にある。

北は那珂川町、南は茂木町・市貝町、西は高根沢町と市境を接し、東は県境を持って茨城県奥久慈地域と接する。市の全域が八溝山系に属し、八溝山地のほぼ中央部から西に向かい、喜連川丘陵東縁部までが市域となる。

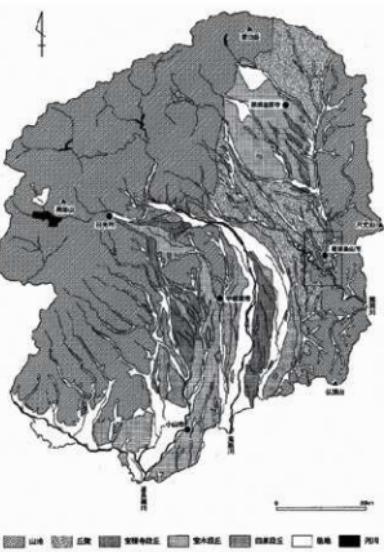
河川を見てみると、那須岳を源とする那珂川が蛇行を繰り返しながら平野部を貫流し、茨城県那珂湊市へと下り、市域の南端で荒川・江川の中小支流と合流している。那珂川の両岸には20~25mの河岸段丘が発達し、左岸は那珂川県立自然公園を有する山間地帯（八溝山地）、右岸は丘陵地帯（喜連川丘陵）と地形が2種に大別される。市東部域である八溝山地は標高300~1,000mの高度をもち、八溝・鷺子・鶴足・筑波の4山塊で構成され、本市は鷺子山塊に属する。標高約250~300mの山地帯が続き、荒川や江川等の小河川が丘陵を侵食し、狹小な平野や沖積地を形成する。市西部域である喜連川丘陵は高原山麓（矢板市）から北西一南東方向に伸び、益子町まで至る。本市は喜連川丘陵のほぼ中央部に位置し、標高はおよそ150~200m程度である。

烏山城跡は那須烏山市の中心部、那珂川右岸に連なる喜連川丘陵の一支脈上に位置し、八高山（標高206m）と呼ばれる山稜の頂部と、それに連なる丘陵や斜面を利用し構築されている。

東側は那珂川が大きく蛇行しながら南流する。高さ20~25mの河岸段丘が大きく発達し、段丘面には市街地が広がる。山城部との比高差は100mほどあり、現在は城跡が樹木に覆われているため難しくなっているが、木々の隙間から那珂川を眺めることができる。西側には江川によって形成された沖積地が広がり、神長・月次・熊田などの集落が点在する。北側は那珂川にそそぐ小河川が丘陵を開削した谷が発達している。南側は喜連川丘陵が続き、約2.5km先で完結する。その先には那珂川・荒川・江川の3河川の合流地点があり、それによって形成された氾濫原が広がっている。

引用・参考文献

栃木県教育委員会1997「龍田本郷遺跡」



第2図 栃木県の地形区分図

第2節 歴史的環境

市内には那珂川流域の段丘や丘陵上、山間部に多くの遺跡が存在している。ほとんど遺跡については本格的な発掘調査が実施されていないため多くが未詳であるが、遺跡地図作成のための分布調査により、旧石器時代から近世にかけて多くの埋蔵文化財包蔵地が確認され、古くから多くの人がこの地で生活していたことが遺跡数からも窺うことができる。

本節では時代ごとに主な遺跡をとりあげ、歴史的な環境をみていく。

旧石器時代

この時代の遺跡として挙げられるのは、曲畠遺跡、弥五郎遺跡、馬屋久保遺跡、後久保遺跡、大和久学園遺跡、宮原遺跡（1）である。

曲畠遺跡では2枚の文化層から石器などが出土している。上層ではエンドスクレイバーや尖頭器が出土し、約16,000年前のものと推測されている。下層では小型のナイフ形石器や原石などが出土し、約28,000年前のものと推測されている。

宮原遺跡では後期旧石器時代末（約13,000年前）と推定される大型尖頭器と石斧が宅地造成中に出土した。

縄文時代

市内では、草創期の遺跡は今のところ確認されていない。

早期になると遺跡数は増加する。寺山遺跡、塩屋遺跡、櫻内遺跡、兎沢遺跡（6）、戸市遺跡（16）、前登谷遺跡（21）などが確認された。調査例としては妙光寺上遺跡（11）があり、燃系文系、田戸下層式、子母口式、押型文系の土器が出土している。

前期も遺跡数は増加傾向にあり、塩谷入遺跡、大用地遺跡などで黒浜式、諸磯各形式の土器が採取されている。後久保遺跡、富士ヶ丘遺跡（5）では当地域で希少な浮島・諸磯期の住居が調査されている。

中期～後期は遺跡数も爆発的に増加し、質量ともに大規模化する。荻ノ平遺跡、白山平遺跡（3）、泉遺跡（12）、滝川前遺跡（19）、小鍋前遺跡（22）などが主な遺跡である。新道平遺跡、曲畠遺跡の調査では、大量の土坑群や住居跡、豊富な遺物が確認され、縄文集落の変遷が明らかとなっている。

晩期については全体に遺跡数が減少していく。調査例として羽場遺跡（9）、鳴井上遺跡（17）などがあり、安行・大洞の各形式の土器が採取されている。

弥生時代

斧窪遺跡では栃木県を中心に分布する二軒屋式土器と、茨城県を中心とする十王台式土器が共伴して出土した。新道平遺跡、大和久遺跡では中期の土器片が採取されているが、具体的なことは不明である。

古墳時代

斧窪遺跡からは前期バレス壺の類似土器が採取され、江川流域の黒尾原A遺跡での調査では5世紀前後の遺物（高环・埴）を伴う溝が確認されている。また、市境に位置する森後遺跡（さくら市）で実施された発掘調査では前期の堅穴建物が集中して確認され、北原遺跡（61）では前期と思われる方墳2基と堅穴住居5軒が調査されるなど、当地域における前～中期ごろの様相が明らかとなっている。

後期になると、那珂川や荒川、江川流域の段丘上や微高地などに数基から数十基の単位で古

墳が築かれるようになる。大和久古墳群、東原古墳群、大桶古墳群（24）、千本塚古墳群（29）、
塙平古墳（30）、行屋古墳（34）などが主な遺跡である。また、本市は県内屈指の横穴墓群の
密集地域として知られており、現在のところ10群90基余りの横穴墓が確認されている。那珂
川西岸の丘陵地帯や中小河川流域に分布が集中し、段丘崖や丘陵斜面に築造されている。中山
横穴墓群（25）、大日向横穴墓群（28）、小志鳥横穴墓群（31）、山崎横穴墓群（32）、向山横
穴墓群（33）などが主な遺跡である。

古代

平安時代中期に編纂された『和妙類聚抄』によると、下野国には九郡（足利・築田・安蘇・
都賀・寒川・河内・芳賀・塙屋・那須）があったことが記されている。

本市域内は荒川を境として西の地域が芳賀郡、東の地域が那須郡に区分されていたと考えら
れており、諸説あるが、大笥郷（大桶）・熊田郷（熊田）・全倉郷（田野倉）・大井郷（向田）
が存在したと考えられている。主な遺跡として、寄井前遺跡（35）、竹ノ内遺跡（38）、滝田
本郷遺跡（43）、後依遺跡（49）、浅倉A・B遺跡（58）、北原遺跡、岡ノ内遺跡（62）など
があり、郷の比定地及びその周辺域に広く分布している。

8世紀になると那須郡内においても窯業生産が開始される。本市域でも8世紀中頃に中山窯
跡（41）が作られ、9世紀前半頃に銭神窯跡（52）に移行して生産が行われていたようである。

鴻野山の所在する長者ヶ平遺跡は、古くから焼米（炭化米）が採取される場所として知られ
ており、遺跡の北側には古代官道と推定される古道「將軍道」が通っていることから、芳賀郡
新田駅家の有力候補地と考えられている。平成13年度から5か年にわたって栃木県教育委員
会が実施した確認調査により、この遺跡が奈良平安時代に營まれた官衙（古代の役所）である
ことが確認され、古道については、平成15年～18年度に那須烏山市（南那須町）によって調
査が行われ、東山道駿路である可能性が高いことが判明している。これらの成果により、平成
21年2月12日に「史跡長者ヶ平官衙遺跡附東山道跡」として指定を受けた。

中世・近世

平安時代末期から戦国時代にかけて、下野国東部地域を領有したのが那須氏である。

中世における那須氏の動向については諸説あるが、15世紀初頭（応永年間）に惣領家と庶
子家との抗争により分裂し、烏山を本拠とした庶子家（下那須氏）が次第に惣領家（上那須氏）
をしのぐ勢力となり、16世紀前半に惣領家の後継争いに乘じ、上下那須を統一したとされている。

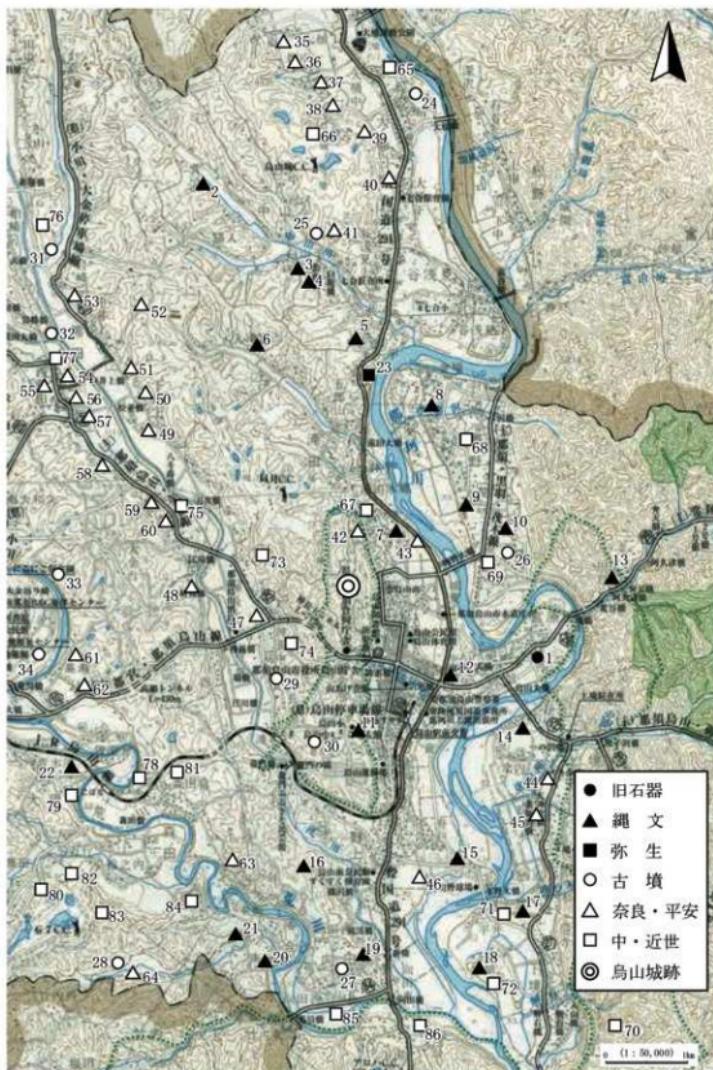
本市域は概ね那須氏の勢力範囲に属していると考えられ、那須氏一族や家臣に関連する城館
が多く築かれている。新地館跡（65）、滝田館跡（67）、福積城跡（72）、月次館跡（75）、森
田城跡（84）などが主な遺跡である。調査例としては、昭和56年に旧烏山町教育委員会が平
井城跡（71）の溝跡を調査し、平井城の東側及び南側の箱築研状の溝を確認している。年代
決定のできる遺物に乏しいため詳細な年代は不明だが、文献資料から応永年間（1394～1428年）
には存在していたとされ、烏山城とも関係の深い城跡の一つといえる。

この時代の庶民層の様相については、発掘の調査例が少なく不明な部分が多い。しかし、若
林遺跡（81）、殿門遺跡（80）、向田西遺跡（85）、北原遺跡の調査では、中近世の土坑や溝、
井戸跡、掘立柱建物跡などが確認されるなど、資料の蓄積がみられるようになってきている。

引用・参考文献

那須烏山市教育委員会2011「三ツ木西久遺跡」

那須烏山市教育委員会2014「烏山城跡確認調査概報」



第3図 周辺の主な遺跡と地形

表1 周辺の主な遺跡

No.	遺跡名	所在地	種別	No.	遺跡名	所在地	種別
○	鳥山城跡	城山	城郭跡	44	上中遺跡	上境	散布地
1	宮原遺跡	宮原	散布地	45	松ノ木遺跡	上境	散布地
2	唐津遺跡	中山	散布地	46	石神遺跡	野上	散布地
3	白山平遺跡	中山	集落跡	47	元田遺跡	神長	散布地
4	田ノ入遺跡	中山	集落跡	48	岡ノ上遺跡	神長	散布地
5	富士ヶ丘遺跡	中山	散布地	49	後佐遺跡	龜田	散布地
6	東沢遺跡	鶴田	散布地	50	北後遺跡	鶴田	散布地
7	松並遺跡	鶴田	散布地	51	六角堂遺跡	鶴田	散布地
8	林ノ後遺跡	鶴野	散布地	52	鉢神空跡	鶴田	空跡
9	羽畠遺跡	鶴野	集落跡	53	宮下△遺跡	鶴田	散布地
10	貝沼遺跡	鶴野	散布地	54	見城遺跡	鶴田	散布地
11	妙光寺上遺跡	南1丁目	散布地	55	岱内遺跡	鶴田	散布地
12	泉遺跡	旭2丁目	集落跡	56	幸運寺前遺跡	鶴田	散布地
13	瓜ヶ平遺跡	大沢	散布地	57	鎌山内遺跡	鶴田	散布地
14	三ツ木西相久遺跡	上境	集落跡	58	茂倉A・B遺跡	鶴田	散布地
15	大舟戸遺跡	野上	散布地	59	中ノ川遺跡	月次	散布地
16	戸市遺跡	野上	散布地	60	福ノ内B遺跡	月次	散布地
17	鳴井上遺跡	下境	集落跡	61	北原遺跡	高瀬	集落跡
18	稻穂城遺跡	下境	散布地	62	岡ノ内遺跡	高瀬	集落跡
19	瀧川御遺跡	向田	集落跡	63	中堀原遺跡	森田	散布地
20	桝堂遺跡	落合	集落跡	64	枇杷ノ内遺跡	落合	散布地
21	前登谷遺跡	落合	散布地	65	新地頭跡	大桶	城郭跡
22	小鍋前遺跡	大里	集落跡	66	根占前城跡	大桶	城郭跡
23	八ヶ平遺跡	中山	散布地	67	荒田頭跡	荒田	城郭跡
24	大桶古墳群	大桶	古墳	68	鶴野古館跡	鶴野	城郭跡
25	中山横穴墓群	中山	横穴墓	69	鶴野前跡	鶴野	城郭跡
26	貝沼古墳群	鶴野	古墳	70	高瀬城跡	下境	城郭跡
27	寄井塚古墳	向田	古墳	71	平舟跡	下境	城郭跡
28	大日向横穴墓群	落合	横穴墓	72	船越城跡	下境	城郭跡
29	本厚内墳群	神長	古墳	73	神長北要害跡	神長	城郭跡
30	堤平古墳	神長	古墳	74	神長北要害跡	神長	城郭跡
31	小志島横穴墓群	志島	横穴墓	75	月次頭跡	月次	城郭跡
32	山崎横穴墓群	鶴田	横穴墓	76	小志島城跡	志島	城郭跡
33	向山横穴墓群	南大和久	横穴墓	77	龜田城跡	鶴田	城郭跡
34	行星古墳	小川原	古墳	78	小崎跡	小崎	城郭跡
35	寄井前遺跡	大桶	散布地	79	放下辯頭跡	大里	城郭跡
36	十王堂遺跡	大桶	散布地	80	庭頭遺跡	曲輪	散布地
37	菟屋遺跡	大桶	散布地	81	若林遺跡	森田	散布地
38	竹ノ内遺跡	大桶	散布地	82	根小屋城跡	森田	城郭跡
39	高内遺跡	大桶	散布地	83	高瀬城跡	森田	城郭跡
40	羅原遺跡	大桶	散布地	84	森田城跡	森田	城郭跡
41	中山空跡	中山	空跡	85	向田内遺跡	向田	集落跡
42	寺町遺跡	鶴田	散布地	86	向田城跡	向田	城郭跡
43	風田本郷遺跡	鶴田	集落跡				

第3節 主な沿革

鳥山城の築城については諸説あるが、応永24年（1417）に那須氏一族の沢村五郎資重によつて築かれたとする説が一般的である。これは、延宝4年（1676）に那須郡小口村（現：那珂川町小口）の名主であった大金重貞によって編纂された「那須記」の記述によるもので、応永21年（1414）年、兄である那須資之との抗争に敗れた弟の資重が居城の沢村城（矢板市）から退去し、しばらくは下境の仮城に居を構えていたが、応永24年2月に八高山頂に築城を開始して翌25年（1418）正月に城が完成し、移り住んだというものである。ただし、この「那須記」は兄弟間抗争から約250年を経て編纂されたものであるため、記載された情報のすべてを信頼することはできないが、15世紀前半には那須氏が上那須（惣領家）と下那須（庶子家）に分裂し、下那須氏の拠点が鳥山に置かれたことは間違いがなく、約100年間にわたり分裂する状況が続いた。

16世紀前半（永正年間）、家督を巡る争いから上那須氏が断絶したことで下那須氏4代である資房が那須氏の再統一を果たす。この間、明応年間（1492～1501）に3代資実によって築城されたという説もあるが、同時代史料による裏付けはない。鳥山城跡と考えられる記述が史料に現れるのは5代政資の代になってからで、天文8年（1539）10月に下野紙園城主小山高朝が南奥羽小峯城主白川義綱に宛てた書状において、上那須山田城に拠る政資が佐竹、小田、宇都宮諸氏の軍勢とともに、子である高資（6代）が立て籠る鳥山城を攻めたという記載がある。その書状には城を攻める政資方の苦戦も伝えており、北関東を代表する諸大名の軍勢を退けるほど堅固な城郭となっていた可能性が考えられる。事実、7代資胤・8代資晴の治世においては佐竹氏や宇都宮氏などの周辺大名による度重なる侵攻や、大田原氏・大関氏などの上那須衆の離反によって鳥山城周辺でも戦闘が行われているが、いずれも撃退に成功している。

天正18年（1590）、那須資晴が小田原合戦後の豊臣秀吉による宇都宮仕置で、小田原遷座を理由に所領を没収された。資晴は鳥山城から佐良土城（大田原市）へと移り、蟄居となり、中世以来の那須氏による統治が終わりを迎える。

戦国時代末期から江戸時代中期にかけては、石高2～3万石の小藩が在任1～2年で城主の交代が繰り返される。堀氏から板倉氏が鳥山を治めていた期間（1627～1681）には城内及び城下の整備が行われた。特に、堀親昌によって行われた城内整備では、追手門や登城口（七曲・十二曲）、三の丸が東山麓に整備され、近世城郭としての基礎が整えられた。以降、三の丸が実質的な城の中核となり、山城部分は在番の家臣を置くだけの象徴的な存在になっていく。

享保10年（1725）、江州三雲（滋賀県）から幕府若年寄の大久保常春が2万石で入封する。常春は享保13年（1728）に老中に就任し、相模国の鎌倉・高座・大住・愛甲四郡内で1万石の加増を受け、都合3万石を領することとなった。以降、8代約150年にわたる大久保氏による藩政が執られた。

慶応3年（1867）、徳川幕府が天皇に政権を返した大政奉還を経て、明治6年（1873）に発せられた太政官達「全国城郭存廃ノ処分並兵營地等撰定方」により鳥山城は大田原城、黒羽城と共に廃城となった。その後、失火や大雪被害により建物が失われたとされる。

第3章 調査の方法

調査は、遺構の範囲や配置、保存状況などを確認する確認発掘調査と烏山城跡に関する古文書や絵図等の情報収集や解析等を行う文献調査とに大別して実施した。

確認発掘調査を実施した地点については、地形や遺構の広がりを考慮し、文化庁や栃木県教育委員会文化財課、烏山城跡調査指導委員会の指導、助言を受け、那須烏山市教育委員会が注意を払いながら実施した。

確認発掘調査は、平成21年度から平成25年度、平成27年度から令和元年までのおよそ10年間実施し、文献調査も平成21年度から継続して実施してきた。令和2年度から令和3年度には、文献調査の成果をまとめ、確認発掘調査で得た遺物や情報等の整理作業を実施し、本報告書を作成した。確認発掘調査を実施した各年度における調査地点と内容については第4図のとおりである。

確認発掘調査では、掘削作業前に現地測量調査を実施し、その成果をもとに地形や遺構の広がりを考慮し、局地グリッドを組み調査区を設定し、トレーニング（試掘溝）による遺構の範囲、内容確認を行った。測量調査は、調査期間の短縮や調査費用の軽減を考え、三次元レーザー測量なども取り入れながら実施した。しかし掘削作業については、山城という性格上、重機等の大型機械の進入が困難であるため、作業員による人力で掘り下げ、遺構確認作業を行った。

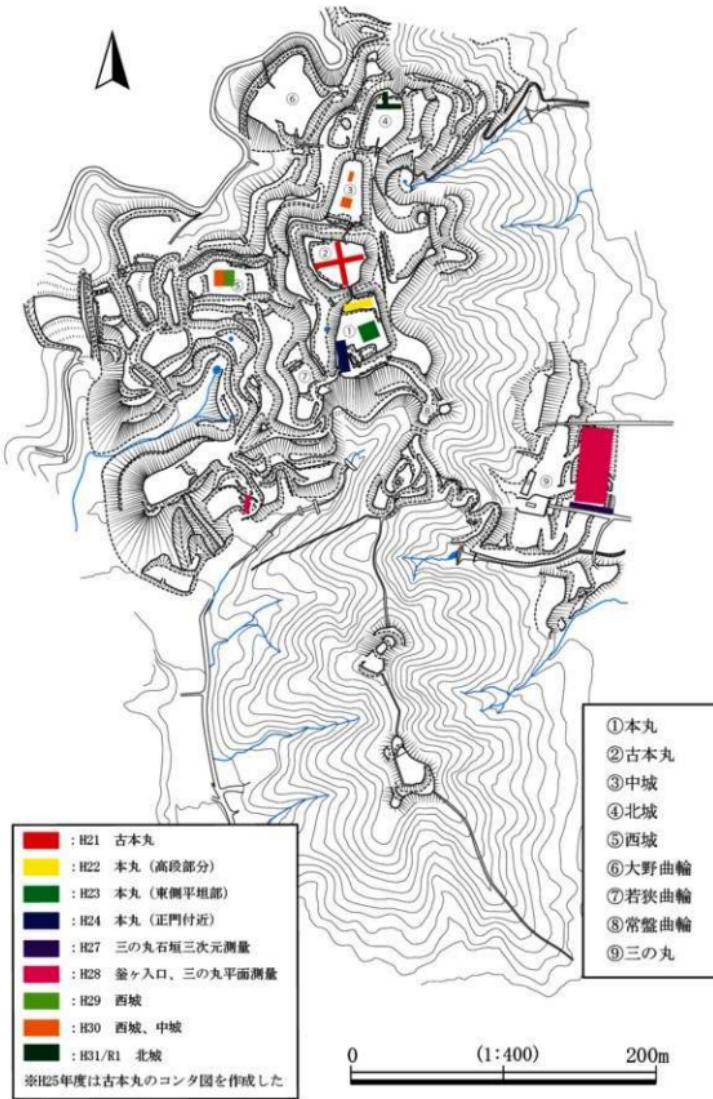
掘削、掘り下げ作業中に確認された遺構については、遺構保存の観点から完全に掘削することは避け、一段掘り下げるもしくは半蔵にとどめ、調査を実施した。また、確認発掘調査の進捗状況に合わせて調査指導委員会を開催し、調査内容や方法、今後の方針等について検討しながら進めていった。

掘削作業後には、図面作成、写真撮影等の記録作業を実施し、調査終了後は不織布等により遺構を保護したうえで埋め戻しを行い現状に復した。

整理作業についても、那須烏山市教育委員会が実施した。出土遺物など確認発掘調査で得られた情報は、調査地点ごとに整理作業を実施した。

文献調査では、これまで確認されている烏山城跡に関する古文書や絵図等の確認・整理の他に、新出資料の情報収集や解析等を試みた。また、これらの資料の保存・活用を図るために一部デジタルデータ化も行った。

このような調査の中で、調査指導委員会設置要綱に定めたとおり、委員会において必要があると認める時は、構成委員以外の出席を求め、説明又は意見を聞きながら、多分野の有識者からの助言をいただき、慎重に調査を進めた。烏山城跡から出土した貿易陶磁器を小野正敏氏、近世陶磁器を堀内秀樹氏に年代と産地についてご指導いただき、瓦については大澤伸啓氏にご指導いただいた。



第4図 年度ごとの調査区図

第4章 調査内容

第1節 測量調査等

1 全域測量図

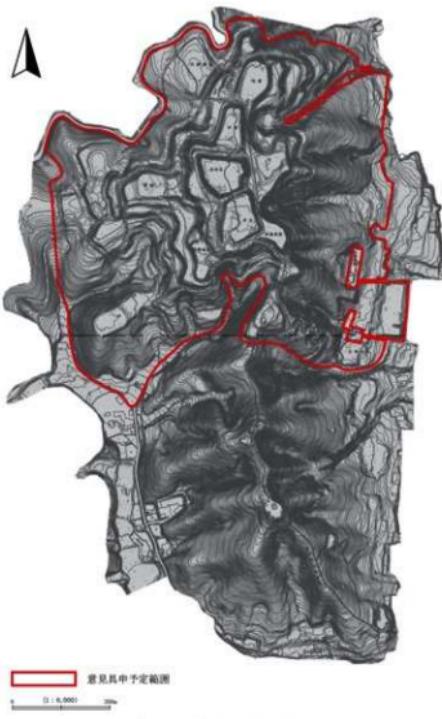
鳥山城跡では、三次元航空レーザー測量を実施し、微地形解析図（第8図）、等高線図（第6図）を作成した。この三次元航空レーザー測量は、鳥山城跡全域を含めた0.46km²を対象としており、城郭の現状を出来るだけ詳細に記録することが目的である。そのため、低高度・高密度計測が可能な回転翼機材を使用し、三次元レーザー計測は1mあたり10点以上の測点を有している。また測量成果は、電子データとして、数値地形図データファイル（地図情報レベル500）などを含むメタデータを作成し、将来的な活用を考え、汎用性の高い三次元データ表示システム（Skyline）を活用できるものとした。

微地形解析図は、三次元航空レーザー測量で得たオリジナルデータからフィルタリングを行い、地表面の標高データを作成したグラウンドデータをもとにしたものである。フィルタリングは、公共測量作業規定に則り樹木や竹林等の植生、電線や記念碑、鳥居等の小物体が対象である。そして得たこれらの点群データを視覚的に見やすくしたもののが、第8図である。

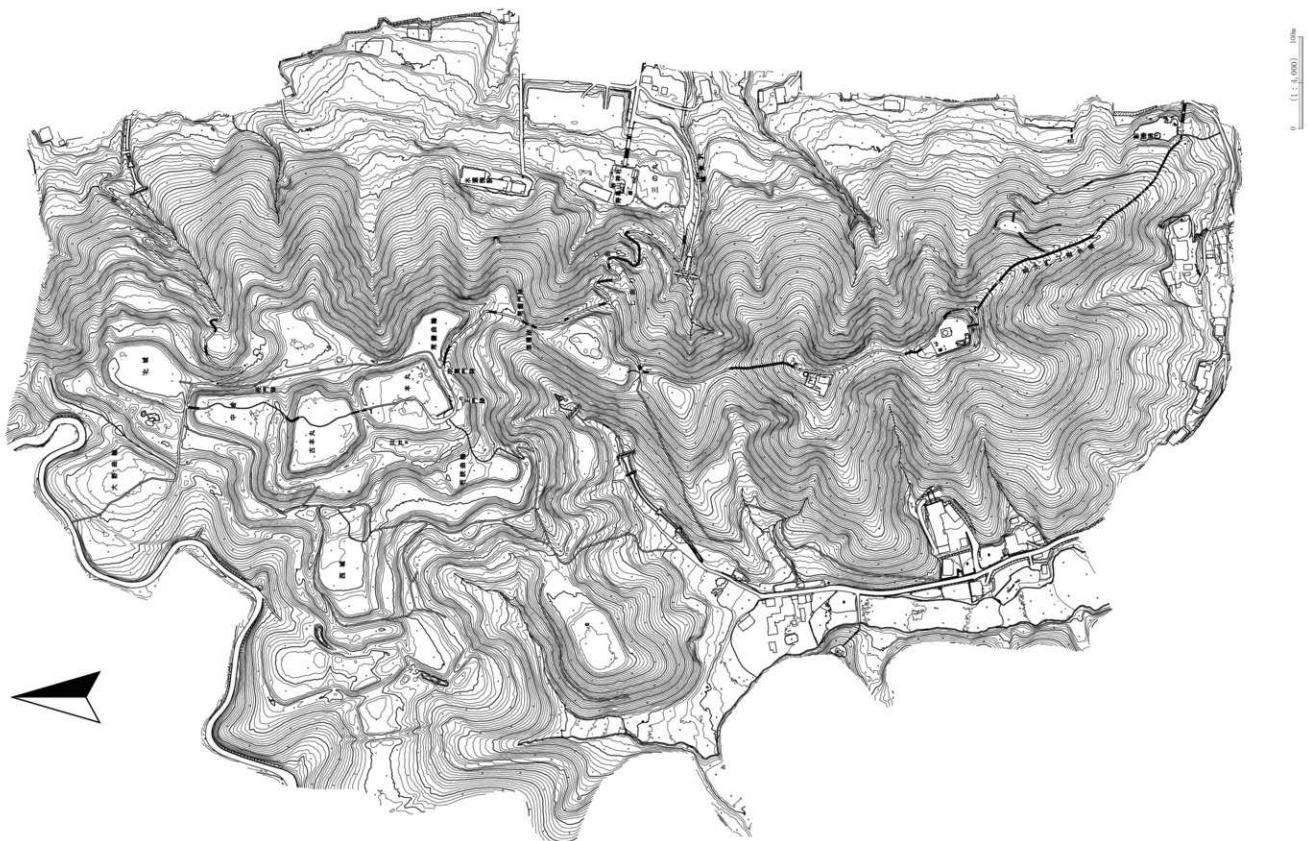
この図を測量成果として利用することで、現地調査でははつきりしなかった微地形を視覚でも確認できることから、実際に縄張図の改訂作業にも利用し、縄張図としての精度は格段に上がったのである。

等高線図については、0.2m間隔の等高線図が作成できるデータを取得した。第6図は全体を表示するため $S = 1/4000$ となっており0.25m間隔の等高線図となっている。

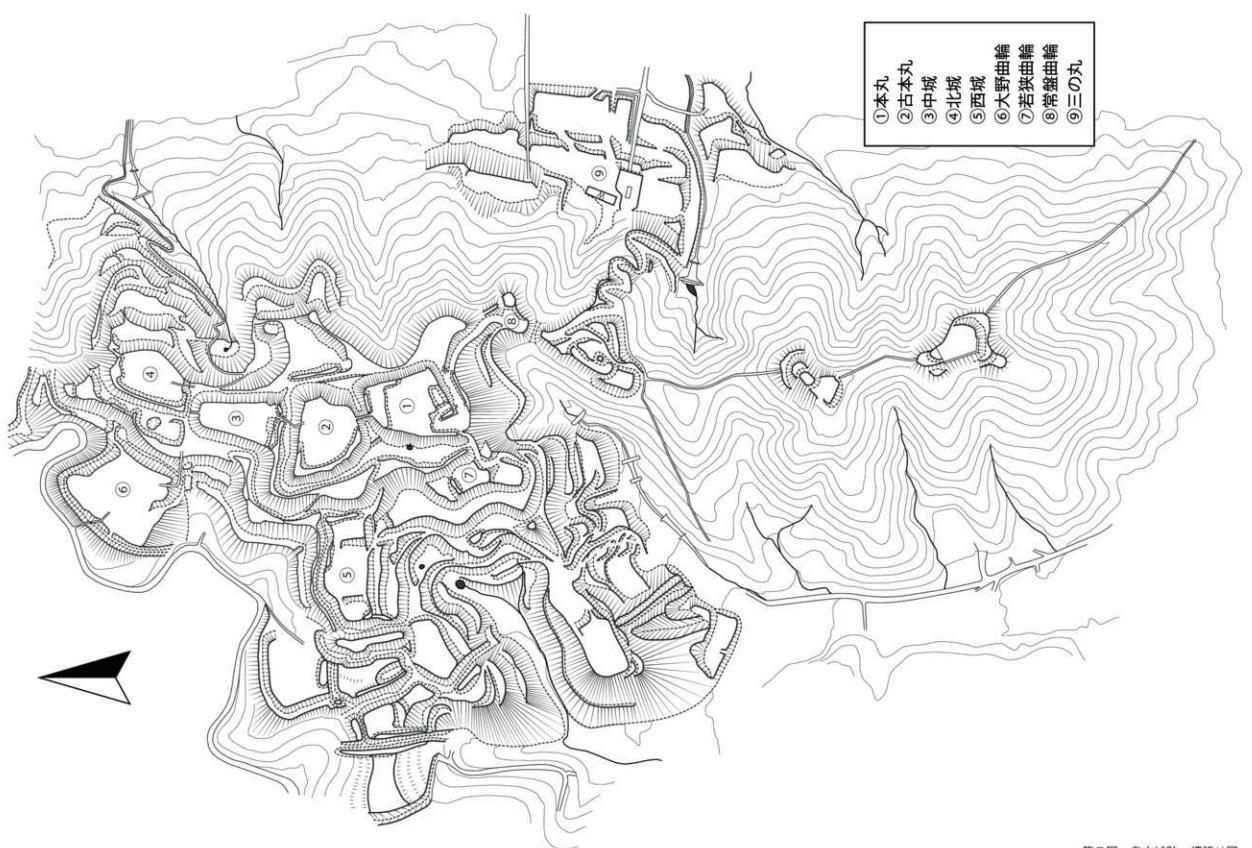
これらの三次元航空レーザー測量を実施するにあたり、地権者のご厚意により下草の刈り払いを数年かけ



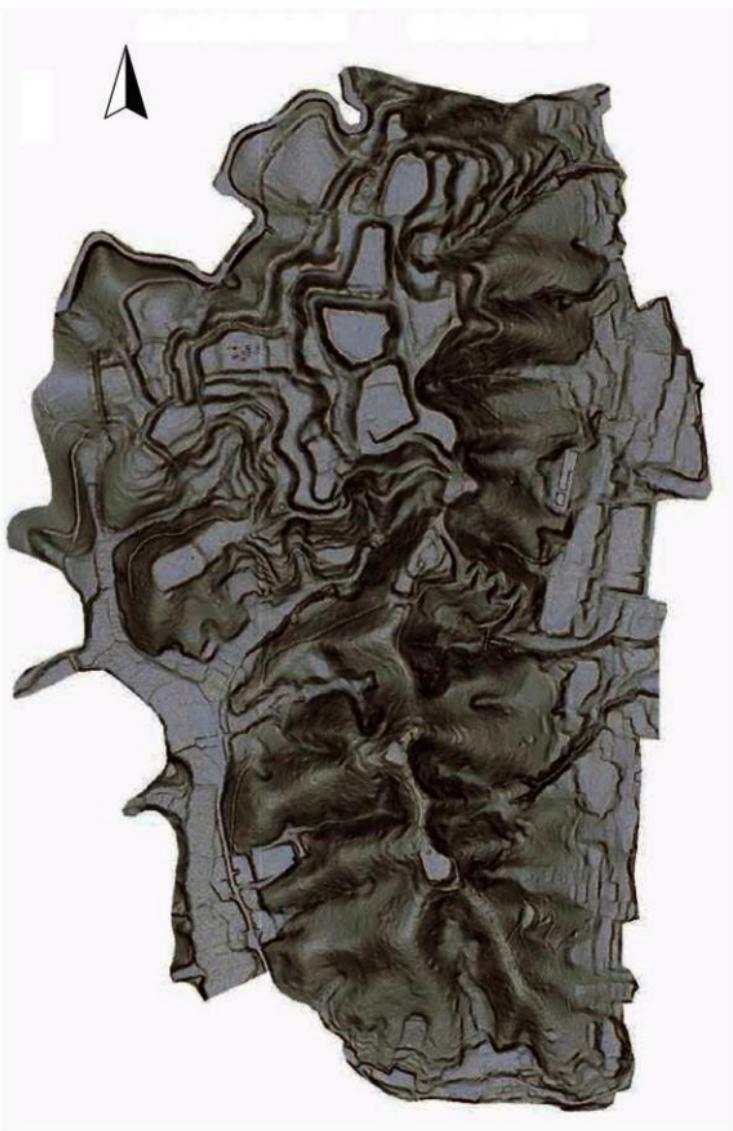
第5図 鳥山城跡測量図



第6図 烏山城跡全城 等高線図



第7図 鳥山城跡 繩張り図



第8図 烏山城跡 微地形解析図

0 (1 : 5,000) 100m

て実施させていただいた。また、地表が測量しやすいよう事前に準備するなかで、航空レーザー計測による地形、地物の判読が難しい場所については、地上レーザースキャナを併用して、現地地上測量を実施した。その実施箇所は、巨木が密集した急斜面に複雑な通路が想定された釜ヶ入口、竹林に囲まれた石垣を含む三の丸跡などであり、これらの測量データも補足測量データとして反映させたものである。

また、航空レーザー計測システムに付属するデジタルカメラで取得したデジタル空中写真、外部標定要素、及びグリッドデータを用いて作成した写真地図データ（地上解像度 10cm/pixel）も作成し、広大な城域の把握に活用できた。

平成21年度に開始した鳥山城跡確認調査であるが、当初の予想より広大な城郭であることが確認でき、地上での測量のみでは膨大な時間が想定されたが、三次元航空レーザー測量の普及により今回の測量成果を得られ、史跡化を目指し、第5図のような測量図や、第7図のように縄張図の更新など今後の保護、活用にも活かせる成果となった。

2 石垣

鳥山城跡の石垣調査については、経年劣化による石垣崩壊の危険性から早急な調査を目指した。しかし、調査実施中であった平成23年3月11日に発生した東日本大震災の影響により、部分的な崩落などが見られた。だが、写真実測が完了していた吹貫門脇石垣のみは、崩落直前の状況を記録できた。ここでは、現在確認できている吹貫門脇石垣、本丸正門付近石垣、三の丸石垣の測量成果を報告する。

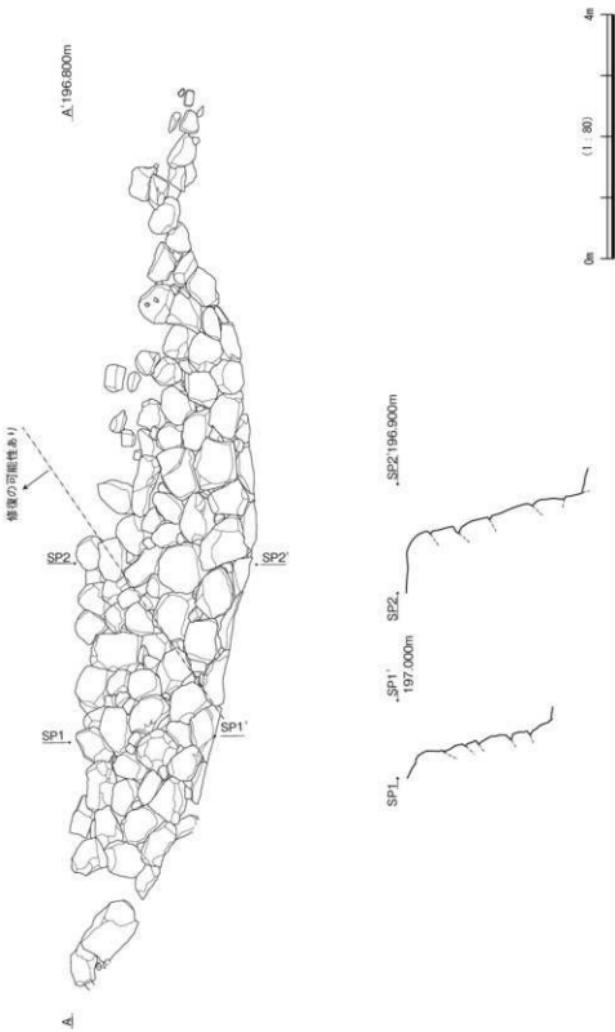
吹貫門脇石垣は、吹貫門のすぐ外側にあたる（第10図、巻頭図版二）。常磐曲輪の大手道に面する吹貫門跡から約30m現存していた。この石垣は、吹貫門跡から約15m付近で2mほどクランクしており、吹貫門から離れるに従い石積みは減少し、最後は石垣というよりは1段だけの石列のようになっている。第10図は、吹貫門からクランクする手前までの約13m部分である。石垣の最上部には、土盛りや壁等の痕跡は残っていないが、石垣の前面に堆積する土量から推測するとA(SP1-1')、B(SP2-2')の2箇所でエレベーション図を作成した場所は、石垣の最上部である可能性がある。

石垣の高さは、吹貫門に近いAラインでは2.4m、Bラインでは3mである。吹貫門から離れるに従い、石積みの部分より土積みの部分が増え約30m離れた場所では大手道から7mを越える高さが確認された。また、壁面の勾配については、扇のような勾配ではなく、A、B双方直線的であり、およそ75度である。石自体は安山岩質の石材であり、本丸正門石垣よりやや大きな自然石を使用している。形状も不揃いであまり加工されておらず、目地の隙間も広く、小詰石が少ない石垣である。第10



第9図 正保の城絵図一部分（丸印は吹貫門石垣部分）

第10図 吹貫門施石垣西面立面図・エレベーション図



図の点線より上部は横向方向に目地が通っておらず、石材自体の大きさが他の部分より小さいものが積まれているため、吹貫門側は一部修復されていると考えられる。

吹貫門脇石垣は石材同士の隙間が多く、一見崩れ易そうに見えるが、その隙間によって雨水などを石垣の外に排水する効果もあり、現状は石が動く余地のないように組み合っているため強固な石垣となっており、那須烏山市で震度6弱を観測した東日本大震災を乗り越えることができた。

本丸正門付近石垣（第12、13図）は、正門があったとされる付近から、内折形で本丸平坦面に続く通路沿いの曲輪側に位置する。正門のある南面は約13m、西面は約1.5m残存している。南面は3～4段で高さ約1mほどが残存しており、石垣というよりは石列の状態である。西面は10段ほど残り最も高い部分で約2mの石垣が残存する。吹貫門脇石垣は壁面の勾配は直線的でおおよそ75度であり、やや内に倒れた印象であったが、本丸正門付近石垣は壁面の勾配は同様に直線的だがほぼ垂直である。



第11図 正保の城絵図（丸印は本丸正門付近石垣の部分）

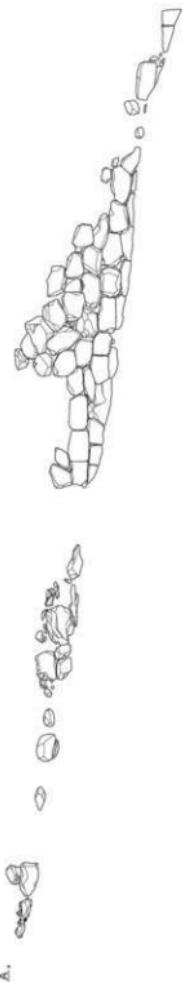
石材については一部切石を使用しており、凝灰岩質角礫岩と思われる石材が使用されている。目地の隙間がなく積まれており、表面も平らに加工されていることから、切込ハギと呼ばれる技法である。しかし、本丸正門付近石垣西面の最下段の一部にのみ吹貫門脇石垣と同じ安山岩質の石材が使われており、石垣前面の崩落土中に埋もれた部分にやはり安山岩質の石材が見られたことや、南面正門より外側の石列の石材の違いがあることが確認できた。

さらに石垣前面の調査により、石垣は地山岩盤層に直に積まれていることが確認できており、崩落した石垣の石材が、にぶい黄褐色の地山岩盤層の上に接した状態で発見されたことから、石垣前の通路使用時には、この地山岩盤層が露出していたと思われる。

この石垣の最下段には、いくつか安山岩の石材による野面積みの痕跡が見られ、その上に角礫岩の切込ハギが見られる。同じ石垣であっても、上下で石材も石を積む技法も違うということから、元々は吹貫門脇石垣の様な石垣であったところを、何らかの理由で現存する石垣に改修している可能性がある。その際に残った部分が、石材や石を積む技法の違いをうんだと考えられる。ただし、この様な違いがどの位の時期差があるのかなど、石垣自体の解体等の調査を行っていないため時期を特定する遺物も発見されておらず、詳細については不明である。

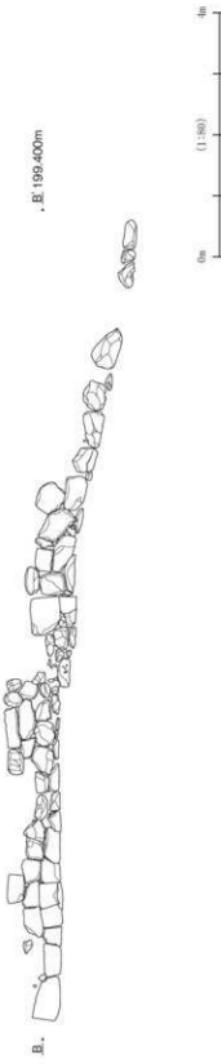
三の丸石垣（第14、15図）は、三の丸の東側、城代屋敷といわれる敷地の境に南面と東面を持ち、南東で隅をなしている。東面は内部への入口のある隅から約18m部分まで確認でき、南面は隅から約27m部分まで確認できた。この2面のぶつかる南東隅には角脇石がない算木積みが見られる。石垣は上部の平坦面までは積まれておらず、下半のみである。石垣部分はほぼ垂直に立ち上がっており、土積み部分は内側に傾斜が見られた。その上部平面の3次元レーザー測量によりこの石垣の上部には東西に長い長方形の高まりが見られ、現地には所々に礎石

A' 202.000m

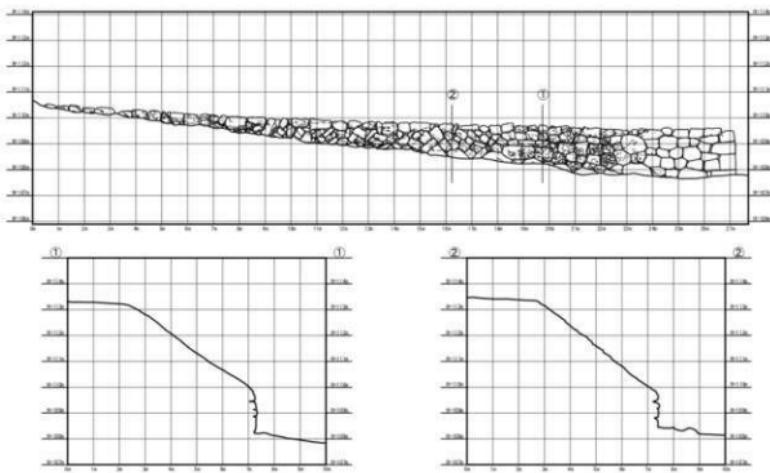


第12図 正門付近石垣西面 立面図

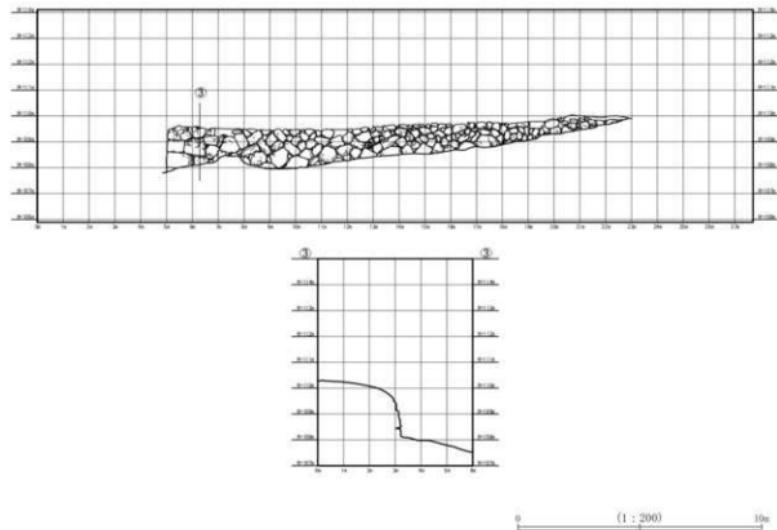
B' 199.400m



第13図 正門付近石垣南面 立面図



第14図 三の丸石垣南面 立面図・断面図



第15図 三の丸石垣東面 立面図・断面図

と思われる石材が散見できたことから、建物があったことが想定できる。

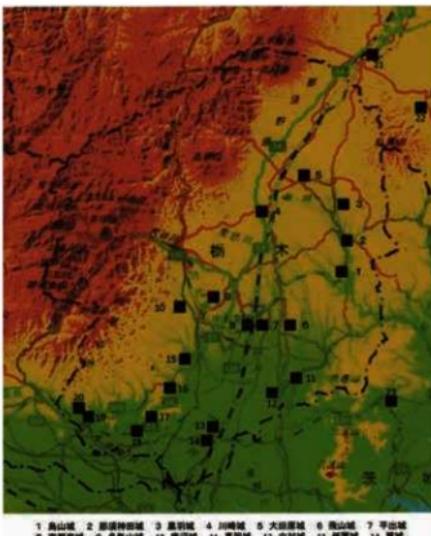
石材は、本丸正門付近石垣と同様の凝灰岩質角礫岩と思われ、四角に整形された切石である。そのため目地の隙間がなく積まれており、表面も平らに加工されていることから、切込ハギと呼ばれる技法である。しかし、南面には谷横み、落とし横みと思われる部分もあり、後世に一部補修されたことが明らかである。

鳥山城跡で確認された吹貫門脇石垣、本丸正門付近石垣、三の丸石垣の3カ所の石垣は、石材や加工痕跡から、本丸正門付近石垣、三の丸石垣は凝灰岩質角礫岩と思われる石材が使用されており、隙間がなく積まれ、表面も平らに加工されていることから、近い時期の構築である。現在見えているこの2つの石垣はおそらくは近世になり、三の丸が構築された17世紀半ば頃と考えられる。吹貫門脇石垣は、これらの石垣と比べると、石材が異なるうえ、技法も違っていることなどから17世紀初頭の慶長期以前の可能性が伺える。この石垣の構築時期については、鳥山城跡概報に記載されている茂木孝行氏の論考を参照されたいが、今まで測量による記録による表面観察に留まっており、解体を伴う発掘調査などは実施されていないことから、詳細については今後の調査を待ちたい。

3 鳥山城跡の構造について

はじめに

鳥山城の所在する栃木県においては、近年城館の発掘調査が増加しており、それに伴う報告書の刊行が相次ぐ。本城と同じ山城を例に挙げれば、県南西部佐野市の唐沢山城では、本丸虎口において鏡石を使用した石垣の積み直しに伴う調査が実施され、全国的に珍しいその構造が明らかにされつつある⁽¹⁾。また、栃木市の西方城・二条城では広範囲にわたる現状確認及び発掘調査が実施され、江戸時代初頭の遺構が残る二条城は本城との類似点も多く、石垣が確認されるなど注目される⁽²⁾。平山城としては鹿沼市の鹿沼城裾部から障子堀が発見され、小田原北条氏の影響がこの地まで及んでいたようである⁽³⁾。平城としては本県には珍しい輪郭式の網張を持つ栃木市の川連城が調査され、その形状がより明らかにされている。また、真岡市の中村城では重複する2条の空堀が確認され、館群として成立した後に中村城として再編され、新たに外堀が設けられた状況が認められた⁽⁴⁾。他に、大田原市の荒井館、宇都宮市の平出城や宇都宮城、小山市の祇園城、下野市の児山城等、県内随所で調査が行われ、多くの成果が得られている。その



第16図 主要城館分布図

ため本城の遺構を考える上で参考となる事例も、7年前の概報刊行時よりさらに充実することとなった。本来は、それらの成果が形となる報告書刊行後に、論考を行うべきだらうが、本稿では現時点で入手可能な情報を加えた上で、再度烏山城の構造を捉え直すこととする。

(1) 烏山城研究略史

栃木県内の城郭に関する資料として、慶安4年（1651）の『下野一国』は「古城之部」が堀の幅や距離が正確であり、県内に所在する戦国期から近世初頭の城郭を検討する際には貴重な資料である。しかし、烏山城は「居城之部」であるため城内の記載は無く、城下の規模が示されるのみである。約200年後の嘉永3年（1850）に河野守弘により出版された『下野國誌』にも構造に関する記載は無く、参考にはならない。近代では大正13年（1924）栃木県那須郡教育会編集の『那須郡誌』で口絵に当時の烏山町が所蔵していた絵図を使用し、記述も20行を超えるが、構造に関する記述は殆ど見られない⁽⁵⁾。次いで大正15年（1926）の栃木県県教育委員会『史蹟名勝天然記念物調査報告書』においては本城の記載は5行で城主に関する内容がそのほとんどを占めている。県内に所在する平城に関する記述には付図まであるのとは対照的な扱いである。昭和50年刊行の下野新聞社『栃木の城』でも傾向は変わらず、4ページにわたり歴代城主を中心に文章が展開されている。昭和52年（1977）刊行の大多和見記著『関東百城』において黒羽城とともに那須七騎の城址として紹介されているが、構造に関する記述は少ない。しかし、烏山城址要図として縄張図が採用されている点は画期的である。その後は翌53年（1978）の『烏山町史』に引き継がれ、烏山城地形図として主要部のみではあるものの曲輪の配置状況が図示されることとなった。翌年には『日本城郭体系』が刊行され、第4巻で隣県の茨城・群馬とともに栃木県の城館が扱われた。しかし、他県の城館に縄張図が付されるのに対し、本城を含めた多くの城郭で略図的なものが採用されるのみであり、烏山城要図として町史の図をベースとしたものが使われている。栃木県教育委員会により昭和57年（1982）に刊行された『栃木県の中世城館跡』の段階にあってもその傾向に変化は見られなかった。本県の城郭において縄張図を用いて構造に関する記載が成されるのは昭和62年（1987）に『図説中世城郭事典』において中田正光氏の縄張図と構造に関する解説が出されるまで待たねばならなかつた。平成元年（1989）に北那須郷土史研究会編『那須の戦国時代』が刊行され、縄張図の使用は平城を中心着実に増加したが、烏山城は『栃木県の中世城館跡』の図が使用されている⁽⁶⁾。塙静夫編『とちぎの古城を歩く』平成18年（2006）においても未だに町史の図が使われていた。しかし、平成23年（2011）烏山城に関する研究史上の転換期が訪れる。渡邊正樹氏により『絵図に見る烏山城』『中世城郭研究25』において城域全体の縄張図が示され、正保の城絵図を初めとする複数の絵図と遺構の比較を通じた論考がなされた。同じ年、杉浦昭博氏の著作『近世栃木の城と陣屋』が刊行され、本城の記載部分では縄張図とともに建物の復元想定図や残存する建造物に至るまでの詳細な解説がなされた。そのような背景の下で行われた烏山城における種々の調査の結果、平成26年（2014）『烏山城確認調査概報』の形となつた。それから7年、継続調査の成果を加えて本誌が刊行される⁽⁷⁾。

(2) 微地形解析図と縄張図について

栃木県内において、唐沢山城を嚆矢として赤色立体地図に代表される航空レーザー測量が実施されている。赤色立体地図自体は株式会社アジア航測の特許であるため、烏山城における同

種の図面は微地形解析図と呼称される⁽⁸⁾。曲輪の大きさや堀の幅、形態や角度等様々な情報が得られるため、従来はコンパスや歩測、場合によりハンディタイプのレーザー測距儀で行っていた縄張図の作成に比べ、正確な図面が得られることに疑いはない。ただし、城郭遺構を把握するのに万全かというとそうではない。今回の縄張図は微地形解析図を基に作成したが、曲輪の端部から法面にかかる部分は傾斜の変化が激しいためか、土壘の無い個所が土壘に見えてしまうという状態が複数箇所で発生していた。また、自然地形の斜面において傾斜の変化が起こる地点を中心で腰曲輪や帶曲輪のように表現されてしまう部分も見られた。それに加え、広葉樹の密集する場所や竹林では段差や平坦面が表現しきれていない場所も認められた。しかし、現在までに行われてきた縄張図の作成と比べ、95%を超える部分でそのまま縄張図の線として利用することが可能で、労力と成果を考えあわせて、現在までの縄張図を凌駕する成果を簡単に入手できることは確実である。また、濃淡で傾斜を表現できるうえに、データの汎用性が高く、応用範囲が広いため、県内の城館調査にますます広がっていくことと思われる。今回の縄張図作成においても立ち入り禁止箇所や見過ごしていた部分の発見など、有効な成果が数多く認められている。

(3) 烏山城の地形と地質

縄張を考慮する上でまず考えなければならないのは、地形と地質であることは言うまでもない。烏山城の築かれた八高山は、別名寿亀山とも呼ばれる標高206mの山頂から南に筑紫山、毘沙門山と連なる南北に長い丘陵である。東には那珂川が西には江川が南流し、河岸段丘が発達する。烏山城を形成する部分の地質は角礫凝灰岩と安山岩主体の部分から成り、その透水性の差によるためか湧水点が隨所に見られる。県内における大規模な拠点的山城も同様で、唐沢山城、多気山城等、湧水点が多く存在する地質の境界に築かれる傾向にある。また、東側に分布する安山岩と西側に分布する疊層で硬度が異なるため、東側では厳しい急斜面が形成され、防衛上優位に働く。それに対し、西側では軟質な故に大規模な堀の掘削や腰曲輪及び帶曲輪の造成が容易で、緩傾斜の欠陥を補完する。切り立った東斜面と複雑な遺構が高密度で分布する西側の遺構群からなる本城の様相を生み出す背景として、地層の違いが最も重要な要素である。さらに、石垣に使用される石材も現地調達されたものと判断され、安山岩質のものと角礫凝灰岩が使い分けられ、意匠の点で他の城郭にはない特徴を生み出す母体となっている。

(4) 曲輪の構成

烏山城は異論もあるものの15世紀前半の築城から19世紀後半の廢城に至るまで約450年の長きにわたり存続した城郭である。そのため、時代と共に構造は変化し、大規模なものとして5度の画期が認められるが、詳しくは後述する。本稿ではその内、明らかにされたとは言い難い築城期から中近世移行期までを中心として提示する。今回の調査では測量・発掘だけではなく、文献や絵図等の調査も行われており、近世城郭としての烏山城に関しては触れておく程度に留めたい⁽⁹⁾。

本城の縄張を表現する言葉として「五城三郭」というものがあり、この内、西城を除いた本丸、古本丸、中城、北城が、南北に伸びる尾根を堀切によって分断し、連郭式の縄張を持つ。西城はそれらの曲輪とは異なり、大規模な横堀により隔てられ、一城別郭と呼べるような構造を有する。古本丸中心の烏山城と古くから居住と政務の場であった西城を中心とした居館部分に二分できるようであり、大手は釜ヶ入口で北城北端を搦手とする構成であったものと判断さ

れる。築城当時は曲輪が近接しているものの、西城と古本丸が居館と詰の城となる根古屋式山城の関係にあったものと推測され、上下那須氏の統一まで、この形態が存続したのではないだろうか。「三郭」とされる常盤曲輪・若狭曲輪・大野曲輪の成立は「五城」に比べ新しいと考えられ、防御性がやや劣る傾向にあるが、常盤曲輪は例外で、高石垣を有する。これは異質な存在だったということではなく、後述するように短期間に普請が企図された結果生じた差異と推測される。東西に展開する曲輪群と堀や土塁は時期と目的の違いにより形成されたもので、東斜面の曲輪群は近世あるいは戦国期末に設けられた可能性が高く、西側の曲輪群は堀による遮断を主として形成され、戦国期の繩張を良好に残しており、東斜面より前段階のものと思われる。地質的にも疊層と安山岩の差があるため、掘削の技術的な側面も考慮される。七曲り道は江戸時代に整備されたものとされるが、織田信雄段階ではメインのルートとして認識されていた可能性が高い。南の尾根に連なる筑紫山・毘沙門山は物見として利用されていたものと推測され、本丸側からの視界の欠落を補完する役割を担ったものと思われる。

(5) 各曲輪の構造

中心部（第17図）

古本丸 城内最高所に築かれた曲輪である。北東側に突出部を設け横矢掛けをしている。土塁は西側にのみ存在するが、これは東側の眺望を重視する現れと思われる。虎口は南中央に平入りとなるが、土橋上に橋脚が据えられていたと推測され、木橋を渡った左手に5m四方の高まりが残存することから、虎口に付属した小規模な櫓が存在したものと考えられる。また、古本丸という名称については、戦国期に本丸と呼ばれていたかは不明であり、あくまで江戸時代になってから便宜上付された名称である。絵図には中城に向かって通路が記載されたものが認められるが、その比高から存在を肯定することはできない。形状として「行き止まりの曲輪」となるが、前述のように詰めの城と認識されていた時期の築城意図を反映している可能性がある。

発掘調査の結果、現状の形態に至る経緯の一端が明らかにされた。その最大の成果は、曲輪の周囲が造成により造り出されたものであるということと、土塁の構築方法が確認されたということである。詳細は報告書本文に譲るが、15世紀段階では尾根上の自然地形に近い形態が、その後の造成により横矢を意識した東側突出部が造り出されたようである。西側においては土塁の断ち割りが行われ、時期差も観察されている。造成客土や地山に目を向けると、岩盤まで削平されていることが確認され、もともと狭い曲輪だっただけではなく、現在よりも標高の高い位置で使用されていたことが考えられる。また、出土したかわらけが15世紀代のものであることから、上下那須氏の統一前にこの曲輪に手が入っていることが分かり、この城の変遷を知る上でも貴重な成果であった。正保の城絵図には建物が無い状態で描かれているが、建物が無いということは単に使用されない曲輪ということだろうか。何らかの儀礼空間として更地のまま保存されていた可能性も考えられるのではないかだろうか。それ以前には礎石建物が、さらに遡れば掘立柱建物が確認されており、礎石建物は織田信雄もしくは成田氏長段階と推定できる。掘立柱建物は那須氏時代のものであろうが、詳しくは不明である。

本丸 近世の改変が著しい。虎口は枡形となって、墨線を形成する石垣は意匠を凝らしたものとなる。礎石建物が検出されており、全体として近世城郭としての印象が強く、二の丸であつたとされる形跡は認められない。北側に石積みを伴う一段高い面が構築されているが、削平により造り出された面が多く、この部分で得られた土砂を虎口付近の造成に使用したものと考え

られる。調査の結果、この曲輪では石垣や石積、階段及び礎石建物等の石材を使用した造構が確認されており、正保の城絵図に描かれたものに比定できる。それ以外に重複関係にあって先行する那須氏時代の建物も想定されている。ただし、礎石建物保存のため、その下層には手を入れていない。なお、石垣底面に隣接して設置されているだろうと想定した排水溝や、礎石建物に付随すると想定された雨落ち溝は検出されず、雨水は造成客土の透水性を高めることで処理されているようである。山城の主郭に石垣を持つ構造は、県内において、栃木市に所在する藤田信吉の二条城や佐野市の佐野信吉段階に石垣が整備された唐沢山城に見られるが、石垣の完成度や意匠に関しては本城のものが新しい。同じく主郭に石垣を持つ佐野城は平山城であるものの、二の丸の虎口構造が烏山城と類似する。これらの城は慶長期に築かれた近世城郭であり、本城の本丸虎口が、現在残る形で築かれていたものこの頃であろうか⁽¹⁰⁾。

常盤曲輪 本城において本格的な石垣を有する曲輪である。乱積みの石垣は隅角部を持たず、未完成のものと判断される。曲輪上面には土塁も見られず、織豊系の城郭によく見られる繩張との類似が指摘される。近世初頭のものと思われるが、石垣に関しては後述する。南東下段には城道が整備され、そこに築かれた吹貫門は正保の城絵図にも描かれており、周囲に見られる石材も切石であるため堀氏段階の構築であったと思われる。また、散見する石材は石段が設けられていたものと推定される。

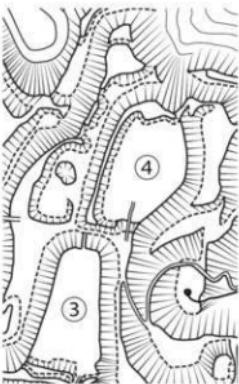
屢 常盤曲輪北側に屢と称する広い曲輪があり、本丸から常盤曲輪を経てこの曲輪に至る城道は広く、そして緩く、他の箇所に比べて整っている。近世に整備された部分と思われ、戦国期の様相は不明である。本丸・古本丸の裾には十二曲り口へと続く通路があり、土塁によって隔てられる。防御のみではなく、遮蔽の意図があるものと推測される。土塁の北端に櫻門があり、礎石も残されているが、その上面に胸穴が穿たれており、堀氏段階のものと思われる。それに対し、この曲輪から東斜面にかけて多くの腰曲輪が築かれているが、これについては佐竹氏との緊張関係が続く、16世紀の所産であると思われる。

中心部北側（第18図）

中城 南側の虎口は食い違いとなっている。古本丸と同様に行き止まりの曲輪に見えるが、北城との比高は移動に不向きなほどではなく、平入りの坂虎口と思われる。曲輪の形状は北辺の短い台形を呈する。古本丸側にのみ土塁が設けられている。単純に見えるが周囲に通路が配され、兵站の有機的な運用の要となる曲輪である。発掘調査においては整地方法に違いのあることが確認されている。手をかけて平坦面を造



第17図 中心部



第18図 中心部北側

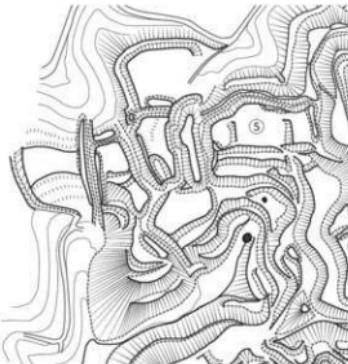
り出していることから、あえて広い空間を確保したものと考えられる。

北城 捣手として認識される。十二曲りが開かれるまでは、山裾へ腰曲輪経由で到達したものと思われ、下段の帶曲輪群を統括する役割を担う。通路防御だけでなく、搦手口を見せないための遮蔽の役割を担う土壘と監視のための櫓台を併せ持つ。現状では直線的に曲輪上面に進入できるが、当時は本丸側から侵入し左に折れてから、右に曲がって侵入したものと推定される。発掘調査範囲が広く取れなかったため、虎口形状を明らかにすることはできなかった。また、造成が行われているため中世段階の遺構は検出されていない。この曲輪の先には北端の防備として西の井戸曲輪から続く堀切となる部分の先に2本の堀切が存在し、城域の北限となっている（第21図）。

井戸曲輪 北城西下に新たに発見された大井戸は直径が8m以上あり、県内では唐沢山城に匹敵する。周囲より掘り窪められ、土壘に囲まれたかのような形状を呈する。発掘調査は実施していないため確証はないが、その形状から井戸曲輪と考えられる。正保の城絵図には描かれていおらず、近世には使用されなくなっていたものだろうか。井戸曲輪は東側、十二曲り口にあるもののみが絵図に描かれている。

西城及びその周辺（第19図）

西城 15世紀前半段階の鳥山城主郭と思われる。南に虎口が開き、古本丸方向である東側が一段高くなる。発掘調査の結果、曲輪内に古い時期の溝が確認され、当初曲輪を区画していたものが、時代の変化に伴って西城の役割が増大するにつれて、造成されて一体化したものと思われる。西側の腰曲輪や堀切から成る遺構群は、本城の中心であった西城防衛のために築かれたもので、重厚な防御網を構成している。また、東側の長大な横堀は連郭式を呈する山上の城郭部と居住域を区分する目的も有しており、皆川城や唐沢山城の山裾に見られる大規模な横堀と性格を同じくするものと考えられる。これらの遺構が成立した要因は機能的なものだけでなく、西城周辺が堆積層であり他と比べ軟弱なため、大規模な掘削が可能であったことも挙げられる。西城もしくは西の丸という呼称で思い浮かぶのは大坂城においては京極竜子、伏見城においては淀殿であろうが、姫路城の西の丸では千姫と女性の名がよく知られているため御殿のイメージが付いてしまっているが、隠居所に使用されることも多く、前出の唐沢山城においては養子佐野信吉に家督を譲った後の佐野房綱（天徳寺宝衍）が居住したのも西の丸であった。本城においては、当初居館として築かれた西城が中世的な居住と政務を一体化する構造から、政務を古本丸へと分離して居住空間のみが残存。その後居住空間が本丸（当時の二の丸）へと移動しても近親者の屋敷として残ったものと考えられる。前述のように西側に見られる曲輪群や多くの堀切は、緩やかな尾根の防備性を高め、南側に築かれた多くの腰曲輪は谷筋からの進入を遮断する。また、古本丸との間に見られる通路は全てが



第19図 西城及びその周辺

上段から攻撃できる配置となっており、虎口自体に複雑さは無いものの、入り組んだ通路が進入を阻む構造となっている。また、侵入する敵に対しての機能だけではなく、曲輪間の連絡を密にし、有機的な人員配置が可能となる構造をしている。発掘調査においては古い時期の溝と共に柱間6尺5寸の建物跡が確認され、慶長期以降に建てられたものと推定される。この柱間は前出佐野城本丸でも確認されており、豊臣朝大坂城や徳川期の街道整備でも使われ、慶長2年3月24日付の長宗我部元親百箇条の記載にも「城普請其の外何によらず、本間六尺五寸たるべきこと」とある⁽¹¹⁾。

若狭曲輪 帯曲輪であり、自然地形を生かし屈曲している。土塁や段差を持ち、釜ヶ入口から古本丸方面への屈曲させた通路上に虎口を設けて敵の侵入に備えている。下段の帯曲輪は釜ヶ入口から西城へ向かう通路防備の役割を担い、堀線が非常に長く築かれている。西城の尾根と長者峰の尾根の双方を監視でき、有機的に結合する役割を担うものと判断される。

釜ヶ入口周辺の旧大手道（第20図）

長者峰 釜ヶ入口北西の尾根先端に造られた曲輪である。戦国期の大手防備の拠点と思われる。土塁を持たず視界が四方に開け、釜ヶ入口から侵入した敵が広い尾根上に上ったところを側面攻撃する構造となっている。南斜面には狹長な堅堀を持ち、緩い支尾根を葛折れに登る敵に対する抑えとする。曲輪の上面には井戸が穿たれており、絵図には建物も描かれている。島山城築城当時からの曲輪と思われる。

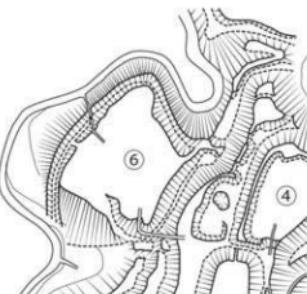
釜ヶ入口と葛折れ 前出の長者峰から南に伸びる尾根と太鼓櫓から南西に伸びる尾根によって山裾が最も狭くなった箇所に釜ヶ入口であったと推定される。概報段階の縄張図では、現道の直登ルートが図示されているが、新旧関係から葛折れの道が主郭部への登城ルートであり、七曲り口や十二曲り口と比較して通路の幅は半分以下となり、掘削も充分ではない。そのため、双方の近世登城路に比べ尾根上からの見通しが利き、死角が無く、上面からの攻撃に向いている。一旦曲輪上面に出るもの、その先は3方向もししくは4方向に分岐しており、侵入者を感じさせる構造となる。この通路を通らずに谷から主郭部に侵入しようとする敵に対しては、谷の奥側に築かれた腰曲輪や帯曲輪群が備える。発掘調査では通路上に建造物は確認できなかったが、現在湿地となっている部分に戦国期までの大手口があったものと推測される。

大野曲輪及び周辺（第21図）

大野曲輪 城域北西端部に位置する曲輪であるが、上面は平坦ではなく、緩やかな傾斜を有する。



第20図 釜ヶ入口周辺の旧大手道



第21図 大野曲輪及び周辺

面積としては最大の曲輪ではあるが、完成度は高くない。堀により独立性が高く、北西の抑えであり、付近を通る道路の監視も担っていたと思われる。近世の絵図には大野平と書かれており、通路も図示されていないため、戦国期の役割を失っていたものと判断される。

筑紫山と毘沙門山（第22図）

筑紫山 宮原八幡宮に伝えられる明応7年（1498）に筑紫山から現在地に移されたという伝承は、筑紫山を経由する登城口の成立と筑紫山の物見あるいは狼煙台としての利用が関係しているように思える⁽¹²⁾。山頂の平場周囲に腰曲輪が配され、末端は帯曲輪状となる。西に延びる尾根の鞍部も平坦な形状を成して曲輪の可能性も残すが、この部分の独立性を高めた場合、付城として攻城側に利用される可能性も考慮し、自然地形と判断した。

毘沙門山 山頂の広い平坦面は後の改変によるものだが、中心の曲輪は当時から存在したものと考えられ、見張り台としての利用を想定した。南西の長い尾根の鞍部に平坦面はあるが、筑紫山と同じ理由で曲輪として扱わなかつた。



第22図 筑紫山と毘沙門山

太鼓丸と七曲り口（第23図）

車橋 尾根部の短い堀切に引橋が架かっていたと伝えられる。堀切は、筑紫山から城内への進入路が開かれた15世紀末に穿たれたものと判断され、近世初頭に再整備されたと推定される。堀の内側に橋脚の礎石が残る。両端の堅堀状の部分は短く、斜面には伸びていない。

常盤門 車橋の常盤曲輪側に石積みが残り、櫓門と番所が正保の城絵図に描かれている。図示される番所の設置場所は平坦面となっているが、門の内側に小高い部分があり、そこが番所だったのではないだろうか。また、形状からその小曲輪は、戦国期の虎口監視の櫓台であった可能性もある。さらに吹貫門方向に矢穴の残る未使用石材があり、未完成の石垣に使用されるはずのものであったと思われる。

太鼓丸 近世に与えられた名称と考えられる。周囲に腰曲輪を持つ。筑紫山への尾根道や釜ヶ入口への通路、七曲りから大手道への城道の分岐点に位置する。物見からの情報伝達と大手口監視の役割を担う曲輪で、登城合図の太鼓が置かれていたのであろうか。太鼓櫓は高遠城や掛川城のように近世に見られることが多く、近隣では小峠城に見られる。戦乱時の情報伝達は晴天時であれば旗や狼煙が迅速で、雨天であれば法螺貝や鐘が有効であり、湿度に弱い太鼓は戦国期に使用されたものとは考えにくい。

七曲り口 寛永17年（1640）に堀親昌が開いたとされているが、七曲りを開いたのは織田



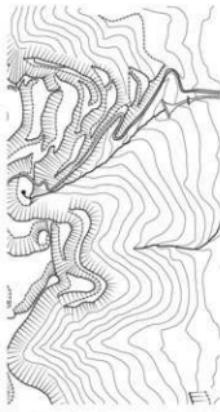
第23図 太鼓丸と七曲り口

信雄段階の天正18年（1590）と想定した。常盤曲輪の石垣が政治的演出を企図して築かれたと考えれば、大手道は太鼓丸方向となる。城下との一体化を目指した安土城を知る信雄が、政治的緊張関係の無くなった烏山を同様に整備しようと考えたとすれば、筑紫山・毘沙門山経由では上下移動が多く、七曲り口を大手とするのが妥当であろうと考える。城道としての幅は充分で、掘削した底を路面としていることから両側に切岸を持つ形状となる。掘り残された尾根は土壠状となって侵入者の迎撃が可能である。

十二曲り口とその周辺（第24図）

十二曲り口 十二曲りは誇張表現であり、実際には十二回の屈曲は認められない。東北地方を中心に山の神を十二様と呼ぶ風習もあり、語呂の良さから名付けられたものと思われる。七曲りは葛折りの一般的な呼称であり、大手口の名称に採用され、搦手口には対としてこの名が当てられたに過ぎない。周囲には帶曲輪群が設置され、法面が急傾斜となり虎口防衛の役割を担う。城道脇に流路を伴うため、より有効な防御体制が構築されている。

井戸沢 十二曲りの上端にある井戸沢は現状で湿地となっているが、井戸曲輪の形状を成す。井戸の大きさは北城西側の井戸に匹敵する可能性があり、地質的には安山岩で、角礫凝灰岩の古本丸を中心とする山上部の雨水が、この地に集まる地質構造となっているものと思われる。正保の城絵図には方形の井戸枠が描かれるが、現状では確認できない。

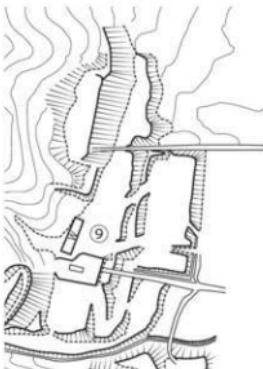


第24図 十二曲り口とその周辺

三の丸及びその周辺（第25図）

三の丸 堀親昌が万治2年（1659）に築いたという記録があり、切石積みの腰巻石垣が残る。縄張は単純なものではなく、現在寿龜山神社境内地と下段の石垣を持つ曲輪の二段構造で、七曲り口前面の抑えとなる。各々の曲輪に横矢を伴う虎口構造が見られるが、独立性は高くない。北西側に一段高い曲輪も付属し、そこにも虎口が設けられており、山裾は切り立った切岸となっている。三の丸南側には七曲り口の門が絵図に描かれており、追手の文字が見られる⁽¹³⁾。延宝元年（1673）板倉重種が「郭内の拡張を図り」とあるのは、この三の丸及び周辺であると思われる。

『烏山町史』によればこれに先立つ寛永17年（1640）烏山城に追手門と神長門を創建し、二つの登城道を新設するとある。正保の城絵図に描かれているのはこの七曲り・十二曲りだと思われるが、前述のように七曲り口を大手と意識していたのは織田信雄段階からであったと思われる。



第25図 三の丸及びその周辺

(6) 城郭に伴う施設

石垣 烏山城の石垣は現在確認されているものだけで本丸虎口（一の門）及び周辺、常盤曲輪、吹貫門脇、常盤門脇、三の丸のものがある。石垣の存在が希薄な東国にあって、それらの構造がこの城を特徴付けている最も大きな要素となる。この章では、表面観察と発掘成果を材料とし、他の城郭石垣との比較を行うことにより石垣の時期と築城者の意図を読み解ければと思う。本城の記載部分は発掘調査報告書の本文や巻末写真及び測量図等を参照していただき、それ以外の部分や比較する城郭の事例は写真を使用する。石垣の実測図は最も重要なデータではあるが、その稜線や石材の表現は主観的なものが多く、規模の違いすぎる石垣の図面を同一の紙面で提示しようとした場合、縮尺の調整等により比較し難い結果を生じることも懸念される。加えて、石垣に使われる石材は県内ののみを対象としても、本城の角礫凝灰岩や安山岩、大谷石と呼ばれる軽石凝灰岩、岩船石と呼ばれる安山岩質角礫凝灰岩、岩井山城・唐沢山城・両崖山城で使用されるチャート、芦野石として流通するデイサイト等多種多様である。その点でも写真の方が石材の質感を表現できるのではないかだろうか。なお使用写真は全て筆者の撮影によるものであり、その一部に当時のものではなく、修復や修理及び復元箇所を含むことをお断りしておきたい。

本丸虎口に築かれた石垣は、現状で腰巻石垣のように思えるが、一部失われており判然としない。付近に崩落した石材は見られず、垂直な面を形成することから高石垣が築かれていた可能性は低いものと判断される。本丸上面との比高を考えると虎口を飾る政治的演出効果を主目的とし、切岸の保護を兼ね備えた造りと判断され、石材も主体は烏山城がある八高山の凝灰角礫岩を使用し、等間隔に大きめの石英安山岩を配し、石垣に意匠への意識が強く感じられる。また、本来の亀甲積みとは異なるが、石材を六角形に加工して組み合わせた部分も認められる。例形に築かれた北西から南東方向の軸線を持つ石垣は北側と南側で積み方が異なり、南側が本来あった石垣の積み方で北側は新たに積みなおしたものと考えられ、石材加工の程度が高い。石垣の高所に見られる横長の石材が天端を形成し、上面に造成された土盛りと共に腰巻石垣を形成していたものと思われる。また、隅角部には角柱状に加工された石材が見られ、算木積みとなっていたものであろうと推測される。ここで等間隔に配置され、象徴的に使用される石英安山岩、現在ではデイサイトと呼ばれるものは、白河石や芦野石として流通するものと同一で、概報段階では芦野石の可能性が高いと筆者は判断していた。しかし、本城近くに所在する神長南砦を踏査した際に、この場所の地質がデイサイトであり、露頭も見られることから、堀や切通しを穿つ際に切り出して、表面加工の上、この石垣に使用したものと考えを改めた。また、一の門（概報では正門）付近にも、発掘調査の結果二段の石積が確認され、根石が安山岩で、積まれる石材は角礫凝灰岩であることも明らかにされた。

常盤曲輪の法面を形成する吹貫門脇の石垣は、積み方・平面形状・石垣としての機能も本丸とは異なり、石材は烏山城から産出可能な安山岩で構成されている。積み方は乱積で、本丸虎口には見られない間詰石も認められる。腰巻石垣ではなく、高石垣とは言えないまでも通路上面から常盤曲輪上面までの間を石材で覆い、整ってはいないものの天端を形成する。墨線が長く崩落しやすいため「輪取り」という平面形がアーチを描く構造を意識したものとなっている。一部崩落個所には栗石が見受けられ、織豊系の石垣である可能性が高い。各石材の大きさは報文記載の通りだが、崩落した巨石も確認できる。隅角部が欠損しており、時期の推定には明確さを欠くが、この付近に矢穴の認められる未使用石材があることから、織田信雄が城主の頃に

築かれたものと推測される。詳しくは後述する。それに対し、吹貫門とされる場所には、精緻な加工が施された角柱状の石材が認められ、時期の異なる石垣脇に新たに門を整備したものと判断される。発掘調査でこの付近に2段の石積が確認され、本丸付近と同様の形態を持つ。

常盤門脇の石垣は、厳密に言えば石積に分類され、現状で地表面上に長軸15~30cm、短軸15~25cmほどの小口の石材を2段程度積んだものである。測量も発掘調査も行われていない。15世紀後半の烏山城における城域南端と考えられる位置にあり、前面に設置された堀切と機能を一体とし遮断線を形成していたものと思われる。積み方や石材は江戸期のものだが、戦国期に石材を異にする石積があったとしても違和感はない。

三の丸の石垣は腰巻石垣であり、南面と東の一部に築かれているが、正保の城絵図には記載がない。三の丸自体は堀親昌の時代に築かれたとされており、正保の後に作成された絵図には三の丸が描かれている。石垣の多くは谷積となっており、石材も加工度が高く、本丸より大きなものが使用されている。後世に積まれた、もしくは積み直された箇所を含むものと思われる。また、南面・東面で積み方に違いが認められ、東が純然たる谷積で基底面が鋸歯状となるのに対し、南の一部には横目地を意識する箇所も認められる。詳しく観察すると、横目地を意識する部分は安山岩の横長で大きめの石材を横方向に据えた後、角礫凝灰岩の切石を横方向に積んでいる。当初から鋸歯状の基底部を持つ東側と異なる。また、修築と思われる南側の一部に見られる谷積みは基底面から抜き取った大型安山岩を谷積み上面の天端として利用しており、天地返しが行われているものと判断される。ただし、双方とも石材加工の度合いが高く、石材も大きめで本丸虎口と比べて時期的に新しいものと思われる。

以上の観察を踏まえて、歴代城主（藩主）の誰がこの石垣を築かせたのかを、他の城郭石垣との比較を通して推論を試みたい。写真1は足利市に所在する岩井山城の石垣である。造成客土中からもかわらけが出土しており15世紀後半に築かれたものと推定されている⁽¹⁴⁾。小口の石で横目地を意識せずに積み上げたもので関東の城郭石垣において最も古いタイプのものであり、厳密には石積と呼ぶべきものであろう。栃木県内においては佐野・足利地区の数か所で見受けられ、唐沢山城土櫓にも認められる⁽¹⁵⁾。設置される位置は登城口前面であり、虎口を形成するというよりは侵入者への威圧と遮断を意図するようである。なお、常盤門脇はこの位置に当たる。

写真2は金山城本丸北面の石垣である。この部分は小田原北条氏の石垣と思われ、金山城の基盤を成す溶結凝灰岩を使用する。織豊系の城郭石垣が関東に取り入れられるよりも前に独自



写真1 岩井山城石垣



写真2 金山城本丸北面石垣

に発達した石垣で、顎留石などの技術が見られる。矢穴も見られ石材採取の点でも注目される⁽¹⁶⁾。また、石材にその城自体から産出される石材を使用することに関して、事例として紹介されたこともある⁽¹⁷⁾。

写真3は秀吉による石垣山一夜城の井戸曲輪石垣である。天正18年（1590）に築かれたことは周知の事実だが、その後管理されても使用や改修はなされていないことを考えればその遺構は貴重である。

写真4は三重県鈴鹿市の神戸城天守台である。本来は織田信雄の田丸城石垣撮影データを比較の対象とすべきだが、改修が顕著で、発掘事例と比較しても限定的なため、当時の遺構がよく残り、信雄の兄弟でもある神戸（織田）信孝の居城であった神戸城を比較に用いた。また、神戸城の中でも文禄4年（1595）天守が桑名城に移築され、その後使用されることのなかつた天守台石垣を採用することとした。算木積みが未発達で、石材は自然石を用い、横目地を意識する積み方であり、本城吹貫門脇のものより古いようである。

写真5は唐沢山城本丸の高石垣である。石垣山一夜城の後、関東に築かれた織豊系の石垣であり、吹貫門脇石垣の比較に用いて同時代性を探ろうとしたものである。唐沢山城高石垣も吹貫門脇のものも「輪取り」が用いられ、織豊系の特徴を呈する。しかし、唐沢山城の石垣は横目地への意識が強いこと等から、烏山城の石垣の方が時期的に新しいと思われる（岡田15）。

写真6は肥前名護屋城山里口石垣である。鏡石も使用されており、乱積みとなる。石材とし



写真3 石垣山一夜城井戸曲輪石垣



写真4 神戸城天守台



写真5 唐沢山城高石垣



写真6 肥前名護屋城山里口石垣

ては鳥山城が安山岩、肥前名護屋城が多孔質玄武岩と異なっており、写真から得られる質感も違うが、石材の加工度に制約が加わるもの、積み方の基本に影響は少ないものと判断される⁽¹⁸⁾。

写真7・8は笠間城の石垣である。笠間は地理的に近く、蒲生郷成が慶長3年（1598）に3万石で入封して石垣を整備した城であり、鳥山城と同様虎口付近に石垣が集中して築かれる傾向を持つ。後世の修築が認められるが、石垣の襤張上の位置は唐沢山城と類似しており、関東における数少ない織農系の城である。写真7は東日本大震災の影響で石材の位置が多少ずれている天守台下のものだが、時期的には慶長期とされる。写真8は、登城ルートにほとんどの石垣が設けられているのに対して、宍ヶ崎櫓跡北側の谷頭に築かれた石垣を提示した。後世の修築を受けていないものと推定され、積み方を比較する好例である⁽¹⁹⁾。

写真9は猪苗代城多門櫓台の石垣である。蒲生氏郷に預けられた成田氏長が受けた影響についての事例として提示した。会津若松城天守台とともに当時の積み方が残り、隅角部の算木積みが未発達であることや鏡石の使用など資料として良好な状態を保っている⁽²⁰⁾。会津若松城天守台を対象として選ばなかった理由に関しては、石垣の規模・傾斜角・天端への負荷等比較する要素に違いが大きすぎるためである。猪苗代城のこの石垣は鳥山城吹貫門脇のものよりやや古手で、鏡石が見られ傾斜もゆるく採られている。

写真10は地理的にも近い棚倉城の石垣である。寛永2年（1625）から同4年にかけて丹羽長重が築いた城で、石垣は川原石・割石を用いて築かれており、一部には巨石も認められる。コンクリートで固められているため最近のものと間違われやすい惜しまれる石垣である⁽²¹⁾。



写真7 笠間城石垣



写真8 笠間城石垣



写真9 猪苗代城多門櫓台



写真10 棚倉城石垣

鳥山城との比較に棚倉城の石垣が持つ意味はふたつある。ひとつは築かれた時期の形式とは異なる一時期古い積み方になっていること。もうひとつは西側にのみ築かれているという類似性がありながら、その意図は全く異なるという2点である。鳥山城吹貫門脇の石垣は形式的に慶長期と推定されるものであるが、石垣の形式が持つ年代観と、その時期の城主が等号では結ばれない可能性を示唆している。2点目の築かれる方位に関しては、棚倉城が西を通る江戸街道に向かって見せる石垣を企図しているのに対し、鳥山城のものは、街道はおろか城下からも見えない尾根の西側に集中して分布することが注目される⁽²²⁾。

写真11は安山岩質溶結凝灰岩（白河石）を使用する福島県白河市にある小峯城の石垣である。近世初頭には会津藩の支城であったものが、寛永4年（1627）前出の丹羽長重が棚倉より移封されて立藩すると、その居城として整備がはじめられた。同年6月白川侍町堀・屋敷新規普請、翌寛永5年（1628）白川之城普請、寛永12年（1635）白川之城本丸石垣築直等の届出が丹羽長重よりされている⁽²³⁾。写真は東日本大震災により崩落した清水門東側の石垣である。間知石という規格化された石材を用いて布積をしているが、石材自体が風化に弱く、上下の接続が表面近くで成されるため、見た目には美しいが崩落しやすい傾向にある。石材の規格化は程度の差こそあれ鳥山城本丸でも認められるもので、ほぼ同時期に鳥山を治めた堀親昌によって築かれたものと推測する根拠のひとつとしている。

写真12は茨城県日立市に所在する助川海防城の石垣である。天保7年（1836）に水戸家の徳川齐昭により築かれた城だが、写真是公園化の際に修築された石垣で、本来比較の対象ではないと思われるが、19世紀の石垣構築と現代のものとの差異が殆ど無いことの事例として提示した。

これらの比較事例に若干の補足を行いながら、鳥山城における石垣の構築について見なおすことにする。まず15世紀前半から16世紀後半に至る那須氏の時期を考えたい。地山の角礫凝灰岩は軟質で堀切も掘削されているため、石材の入手は容易である。また、県南西部に見られる15世紀後半の石垣は15cm程度の小さな石を垂直に積み、一部に崩落が見られるなど、技術的には高度なものではなく、同様の石垣が構築される条件は整っていると思われる。ただし、15世紀後半の享徳の乱（1454～1482）は武藏・上野・下総を中心に戦闘し、那須地域には影響が少ないと見られ、遮断線を石垣で強化する必要は無かったものと思われ、この段階の石垣は存在しなかったものと推測する。続く16世紀前半には上下那須氏の統一や鳥山城が攻められる那須高資・政資父子間の争乱があったが、曲輪や堀の拡充はあったと推測されるものの、



写真11 小峯城石垣



写真12 助川海防城の石垣

石垣の構築は認められない。16世紀後半になると佐竹氏との緊張関係から烏山城の更なる整備が行われたものと思われるが、やはり石垣は築かれなかったようである。天正18年（1590）那須氏改易後に織田信雄が配流され、2か月の後、出羽の秋田へ移されるまで在城したが、短期間であったため柵張の改変には至らなかったと思われている。しかし、本城吹貫門脇に残る石垣はまさしく当時のものであり、信雄が築かせ、未完成に終わったとも考えられる。他の可能性として、天正19年（1591）に二万石で入部した成田氏長による構築が想定される。氏長自身は小田原攻めの際には小田原方であり、参考として石垣山一夜城を目にした可能性は低いが、文禄の役で肥前名護屋城に参陣した氏長が、この城に見られる乱積という積み方を目にして、吹貫門脇の石垣を築かせたとも推測できる。しかし、石垣に隅角部が存在せず、「城割」の行われた形跡も認められないので、未完成であったことは事実である。成田氏はこの後元和8年（1622）氏宗まで城主として存続しており、本丸までを總石垣とすることも可能であったにもかかわらず、そうしてはいない。この石垣が隅角部を持たないこと、「輪取り」が不完全なこと、さらには付近に「矢穴」の残る未使用石材が残されている（写真13）ことから、この石垣は織田信雄が積ませたものと結論付けたい。当時の野面積み石垣は、豊臣政権によって厳しく管理されており、許可なく積み始めた信雄が政権の怒りを買って2か月で改易されたものと推測され、付近に残る矢穴の見られる石材も石垣普請を中止せざるを得なかつた当時の遺物と考えられる。安土城において織田信長段階では見られない矢穴も、天正11年（1583）2月秀吉により二の丸に「信長廟」が建立された時点で、三法師の後見として入城した信雄の手により積み直されたと思われる石垣には矢穴が認められており、その点からも証左となる^[24, 25]。なお、本城の石材に残る矢穴は幅5.5～6.2cm、間隔7～8cm、奥行4.5～5cmで、石材が異なるものの安土城二の丸石垣と類似するようである（写真14）。

では、吹貫門脇のものとは確実に時期差を持って築かれた、本丸虎口の石垣はどの城主の手によるものだろうか。結論から言えば、堀親良・親昌父子によるものと考えられる。石垣に施される意匠から、慶長・元和年間は否定され、成田氏ではないと思われる。また筆者の仮説に従えば、無断で野面積みの石垣を構築して秋田に移封された信雄に替って城主となつた成田氏が石垣を築くとは考えられない。寛永4年（1627）まで城主であった松下重綱の可能性も残されるが、移封前の小張城には石垣が認められず、小張へ移される原因が久野城における無許可石墨構築であったことを考慮し否定してよいのではないだろうか。堀親昌期の烏山城は描いたとされる「正保の城絵図」段階で既に本丸・吹貫門脇・常盤門周辺の石垣は描かれていることによって、それ以降の藩主が築かせたことも否定され、堀氏の構築が裏付けられる。本丸の石垣は寛永14年まで城主（藩主）であった堀親良が築かせたとするのが妥当ではないだろうか。また、正保の城絵図段階では親昌が藩主であり、さらに整備を加えたものとも判断できる。

ここで問題となるのは三の丸の石垣である。表面観察は前述のとおりだが、正保の城絵図に描かれていないこの石垣を、町史でも扱われているように万治2年（1659）のものとして差し支えないか、ということである。城絵図作成の規定は厳格であつたらしく^[26]、その仕様から書き洩らしはないものとすると、三の丸は描かれておらず、城絵図成立後の普請であるとすれば届け出の必要がある。その史料が見当らない現段階では遺構によって判断するしかない。前述のようにその積み方は多種多様であり、隅角部の算木積み、谷積み（落とし積み）の箇所、亀甲積みを思わせる石材加工を施す箇所、横目地を意識し布積みの見られる箇所をどう判断するのかが大きな課題として残される。関東において城郭普請許可の事例を見れば、宇都

宮城⁽²⁷⁾、壬生城、土浦城、川越城、小田原城が見られるが⁽²⁸⁾、石垣修築例は今のところ確認されていない。全国的に石垣修築が半数以上を占める中で例外的な地域である。それゆえこの小規模な石積みと呼んで差支えなさそうな烏山城の石垣は、この城を理解する上で大きな意味を持つと考える次第である。研究略史や曲輪の構成でも触れたように、近世城郭としての記述は絵図や文献等の占める比重が多く、この稿では触れる程度に留めたいとしているが、現段階での三の丸石垣に関する見解を示しておきたい。安山岩の大型石材を根石として横に据え、その上に角礫凝灰岩の切石で横目地を生かして積む箇所や算木積みは堀親昌段階として問題は無く、亀甲積みとは呼べないまでも六角形の石材は本丸でも使用されるため、これも同時期と考えられる、ただし、石材の大きさに関しては時期差によるものか、本丸への搬入に伴う負荷がかかるため敢て山上のものを小さくしたのかは判断できない。一部に見られる谷積みと天地返しに関しては、19世紀以降の修築によるものと考えられる。事例としては幕末に修理された彦根城天秤櫓の石垣が挙げられる（写真15）。これは文献資料と表面観察から導き出された石垣の編年⁽²⁹⁾だが、筆者の経験上19世紀末以降であると判断されるのは、群馬県吾妻地区で行われた発掘調査により、天明3年（1783）の浅間山噴火による泥流下で確認された石垣は、横目地を重視したものに対し、泥流上面でそれ以降に積まれたものは谷積みとなっていることが、その実例として挙げられる（写真16、17）。そこから、最も修築した可能性が高いと判断されるのは嘉永元年（1848）に藩主となつた大久保忠美か、最後の藩主忠順であると思われる。幕府の籠が緩んできた時期にも当たり、修築許可が残っていないこととも矛盾しないのではないかだろうか。

烏山城の石垣を総括すると、常盤門脇の石垣は未完成ながら高石垣を指向し、近世段階では見せる石垣の要素が強く、古墳の石室に見られる模様積みのような凝った意匠の石垣が見られ、常盤門脇に比べ、本丸や三の丸のものは腰巻石垣であり、政権に対する遠慮が看取される。腰巻石垣は県内において烏山城だけに存在すると理解されがちだが、黒羽城坂北門にも確認でき、小口積みの形状からより古い時期のものである可能性が指摘できる（写真18）。他にも日光東照宮や輪王寺大猷院、宇都宮市の大荒山神社等にも城郭石垣に匹敵する遺構が残る。今回の石垣に関する調査成果は県内の石垣変遷を知るうえで充分なものとなる。積み方以外に石材の点では、安山岩と角礫凝灰岩の混在、「野面積み」から「切り込み接ぎ」へ、切石の粗製から精製へと、多種多様な変化も認められる。17世紀後半に三の丸が政務の中心となって以降、儀礼的に正月のみしか使用されなくなった本丸も、19世紀後半に至るまで保守・管理が行われた結果、その姿を明治期まで留めることとなった。

礎石 烏山城に見られる礎石は、本丸・西城・吹貫門・常盤門・桜門等で見られる。本丸の礎石建物には、自然石をそのまま使用するもの、表面のみに加工を施すもの、切石を使用するものの3種類が認められる。柱間は1間が6尺5寸（195cm）となり、半間ごとに礎石が設けられている。桜門には切石の中心に臍穴が開けられており、時期差が認められる。県内の事例では前出の佐野城本丸の主殿建築の柱間が同じ6尺5寸となる慶長期の建築であるが、礎石に臍穴は認められない。桜門が整備されたのは、大手から搦手にかけての城道を整備した堀親昌の頃で、常盤門も同時期と思われる。そこから本丸の主殿建築は慶長期もしくはそれに近い時期と考えられ、成田氏長の手によると判断される。前出の常盤門、吹貫門、桜門は堀親昌によるものだが、本丸虎口から若狭曲輪に至る部分にも門の礎石があり、これも同時期と考えられる。

井戸 この山には湧水点が多く、井戸も各所に見られる。近世の井戸曲輪に対し、北城西側



写真13 烏山城跡の矢穴



写真14 安土城二の丸石垣の矢穴



写真15 彦根城天秤檣石垣



写真16 群馬県吾妻地区調査例1



写真17 群馬県吾妻地区調査例2

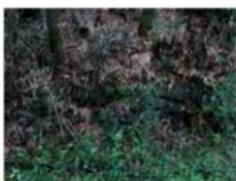


写真18 黒羽城坂北門

に新たに井戸曲輪が確認され、前述のように規模としては唐沢山城大炊の井戸に匹敵するもので、戦国期の井戸として最大級のものとなり、城内の数多くの水の手と合わせて盤石な給水体制を誇る城であった。

通路 この稿では、道路状に残る部分を通路・城道・登城路と使い分けて表現しているが、通路は幅の狭い、中世から戦国期にかけてのもの。城道は近世に整備された幅の広いもの。登城路は七曲り・十二曲りの2本で使用し、釜ヶ入口からのものは幅が狭く、城跡以外に見られる山道と大差ないため葛折りと表現している。15～16世紀末までは釜ヶ入口から葛折りを経て、西城・古本丸へのルート、古本丸から北城経由で搦手へのルートを幹線とし、数多くの分岐点から各々の曲輪を有機的に結合するサブルートが形成されていた。近世になるとそれらが整備され、正保の城絵図段階では前記七曲り口を大手とし、十二曲り口を搦手とする城道が新たな幹線となり、それ以外の通路が整理されて、常盤曲輪下から釜ヶ入口へと向かう通路、戦国期の幹線だった釜ヶ入口から西城へ向かう通路、分岐して本丸へと向かう通路、それに加えて長者峰に向かう通路の5本に統合されたようである。大野曲輪や筑紫山へ向かうルートは不記載であり、役割を終えていたものと思われる。

土塁 土塁断面は古本丸と北城で調査されている。古本丸は一度に築かれたものではないことが観察された。県内に見られる土塁の内、古い時期のものは土塁に埋まれた曲輪内側に溝を持つタイプがあり、下野市の箕輪城で確認されたものをその例とする。これは曲輪内部に溜まった雨水により土塁が崩落するのを防ぐ目的で設けられた排水溝と判断され、箕輪城例では溝に伴うのは叩き土塁であり、規模を大きくした版築土塁がその上を置って築かれている⁽³⁰⁾。そのように内側に溝を持つ土塁が、古本丸の土塁断面に観察される。単純に時期の遅い土塁上に新たな土塁を積み重ねるという構築方法ではなく、曲輪上面の拡張に伴うため土塁の構築土が造成客土として利用されたためか、旧土塁の断面の残存は不良である。しかし、溝状の部分は観察でき、少なくとも5回にわたり手が加えられているようである。今に残る土塁は全て版築

土塁と思われるが、他の曲輪の土塁にも同様の傾向が見られるかは不明である⁽³¹⁾。

堀 本丸・古本丸・中城・北城は堀切によって寸断されている。西城は堀切と共に長大な横堀によって隔てられており、その規模は慶長5年（1600）会津征伐の際に、徳川家康の意を酌んで近世城郭として再整備された、那須氏関連の黒羽城や大田原城と同規模となる。県内の空堀には直線的なものが多く、屈曲する場合も角度は直角に近くなる傾向がある。それに対し、本城の横堀は緩く屈曲しており、特徴的である。堀切の多くは、西城方面に集中し、緩傾斜の欠陥を補完している。堀底の調査は行われなかつたため、当時の深さは不明である。

溝 近世城郭であれば当然見られる排水溝は、この城において確認されておらず、主殿の周囲に雨落ち溝も見られなかった。常盤門から本丸へ至る城道にも側溝は見られず、小砂利を敷くことで透水性を確保する構造になっていたものと思われる。雨落ち溝が無いことは、建物の屋根が茅葺等の、雨水が軒先の一部に集中しない形態であったためと考えられる。出土遺物としての瓦は、量的に非常に少なく、前出佐野城の北出丸南西隅にあった櫓跡で出土した瓦が、1,500kgを超える重量であったことと比較して、屋根の一部にのみ瓦が使用されていたものと推測できる。

以上みてきたように、城郭を構成する各施設も多種多様であり、約450年の長きにわたり存続した烏山城の各時代の様相を良好に残しながらも、改変を繰り返してきたことが読み取れる。

（7）烏山城の変遷

烏山城が初めに築かれたのは、『那須記』によると応永24年（1417）稻積城が平城で防備に適さないため、那須資重がこの城を築いて移ったとされている。『烏山町史』もこの説と資重の孫資実築城説の両論併記となっている。江田郁夫氏は古河公方足利成氏が、烏山城に近い森田郷の領有を認めたこと等から、那須持資が15世紀後半の享徳の乱の時点で本拠を烏山に移したと推定されている⁽³²⁾。当初の烏山城について、本城整備委員でもある荒川善夫氏は、麓に居館を築き、八高山を詰めの城としたセット関係を提唱しておられる。しかし、從来根古屋式山城と呼称されたこの組み合わせは、一乘谷朝倉氏館と一乗山城や躰躅ヶ崎館と要害城等があまりにも有名だが、全国に普遍的に分布するものではなく、確かに本県南西部に珍しく濃密に分布しているものの、その関係がこの地域で成立するかに疑問が残る⁽³³⁾。「那須記」の記載を全面的に信用するわけではないが、上下那須氏が緊張関係にあるのは確かで、稻積城の防備上の不利を補うために本拠を移動したとすれば、平地の居館を築く必要はないものと思われる。近隣の山城を例に挙げても、武茂城や千本城、茂木城等は比高が烏山城に劣るもの70m程度あり、付近に館跡は確認できない。築城当時の居住空間は、現在西城と呼ばれている一帯である可能性が高いものと考えられ、古本丸が詰めの城であったと推定される。15世紀末に持資の子資実の代になって、古本丸周辺の本格的な利用とともに烏山城下の人口増加が認められ⁽³⁴⁾、麓の宿が城下町として整ってきたものと推測される。それに加えて宮原八幡宮に伝えられる明応7年（1498）に筑紫山から現在地に移されたという伝承も、筑紫山の物見あるいは狼煙台としての利用が関係しているようと思える。15世紀後半に築かれ始めた烏山城は16世紀前半には現在の城域に迫る範囲に拡張されていたのではないだろうか。その後、上下那須氏の統一が成り、曲輪の拡張が行われたものと思われる。時期は異なるが県内の事例で16世紀末17世紀初頭に本拠の移転が行われた唐沢山城と佐野城を比較すると、曲輪の規模が本丸で約2,400m²から9,000m²へ、二の丸で約1,250m²から9,600m²へ大幅な増加が見られ、曲輪面積

の増加は時代の趨勢であり、烏山城においても同様の傾向が指摘される。西城の調査では15世紀には曲輪が分割されていたものが、16世紀には堀を埋めて整地し、その面積を広げている。16世紀末の天正18年(1590)小田原征伐に遅参したことを理由に那須資晴が改易されると、明確な資料は無いものの織田信雄がこの城に入ったものと考えられる。石垣や未使用石材からの推測だが、この数か月という短期間が中世城郭から近世城郭への画期となったものと思われる。大手を現在の七曲り方面に置き換え、見せる石垣を配して政治的演出効果を意図する。しかし、山上山下を一体とする新たな城郭縋張を企図した信雄の構想は実現せず、未完成な遺構が残された。その後、成田氏長に引き継がれ、三代を通して近世城郭としての体裁が整えられる。古本丸の使用を取りやめ、本丸を拡充して主殿を建て、内樹形を整備したと思われるが、元々の居城は埼玉県の忍城であり、石垣に対する意識は低く、土造りの城のままであったと考えられる。城主は松下重綱を経て、寛永4年(1627)堀親良へと替り、石垣の整備がはじめられたものと思われる。親良の当初の領国は越後で、居城蔵王堂城に石垣は見られないものの、岳父浅野幸長の和歌山城に居た時期もあり、徳川秀忠に仕えたこともあるため、石垣への志向はあったものと思われる。寛永14年(1637)に城主となった親昌は、七曲り・十二曲りを開き城下との一体化を完成させる。万治2年(1659)には三の丸を新たに築いて山上山下を分割し、幕末に至る烏山城の最終形態を確立した。

以上みてきたように、現在の形となった烏山城であるが、時代ごとにその特徴をまとめると、

- I期 15世紀中頃 西城を主郭として居館機能を与え、古本丸を詰めの城とした小規模な城。
- II期 15世紀末から16世紀初頭 城域を拡張し、筑紫山・毘沙門山を取り込む。
- III期 16世紀中頃 上下那須氏統一により曲輪の再整備、城域の再拡張。
- IV期 16世紀後半 佐竹氏等周辺諸勢力との緊張関係により、防備強化。
- V期 16世紀末から17世紀初頭 大手の付け替え、近世城郭への改変。
- VI期 17世紀中頃 三の丸新設から政務・居住を含めた機能の集約化と山上の象徴化。

の6期に大別されるものと思われる。

(8) 戦国時代の城下について

15~16世紀前半にかけては、前述のとおり人口の増加が見られるのは16世紀中葉であり、当初の宿は小規模であったものと思われる。烏山城本体は、釜ヶ入口を大手、北城ないし大野曲輪を搦手とし、北城から毘沙門山へと連なる山上を、当初の詰めの城から後に東側の防衛線へと変更して城域を広げた。城下を取り囲む丘陵上を利用した要害群、神長北要害から駒頭要害までを西の防衛線として、烏山城本体の八高山・筑紫山・毘沙門山を結ぶ線に、南側の愛宕山を加えて、総構として城下を取り囲むプランを構想したものと思われる。東に唯一開かれた平地の酒主地区に、家臣を集中的に配するなどの対策も行っており、根古屋と称される。また、那珂川がΩカーブする突出部に移転させた宮原八幡宮周辺を、東への抑えとして出城的に配するなど、佐竹氏の侵攻を考慮した配置として見ることも出来る。しかし、16世紀後半の永禄年間に頻発した佐竹氏との戦いは、烏山城を中心とすれば南西・北・南東と各方面で行われており、常に那珂川を越えてくるわけではなかった。そのため、城下から各方面へと至る道路(図中A~G)すべてが監視できるように各要害が配され、Bの先には滝田館が控える形となっている。近世に至ると総構は南流する那珂川と江川と認識されるが、東側にあたる現市街地は戦国期においては、まだまだにぎわいを見せていなかったものと考えられる。また、河川交通を

押さえることは経済面から重視され、宮原八幡宮周辺の突出部とその北側の那珂川に面する低地は、当時から有効に活用されていたものと思われる⁽³⁵⁾。



第26図 戦国期城下想定図

(9) 鳥山城の特徴 一栃木県内での位置付けー

山上に多くの曲輪が密接する網張は県下屈指のもので、多気山城・唐沢山城・皆川城・足利城・西明寺城等と比べてもその密度は随一であり、他の城が放射状の曲輪連携により構造的にはツリー構造であるに対し、鳥山城は通路を多用し曲輪相互の横の連携を強化しているため、ネットワーク構造となることも特筆される。また、横堀を多用することを特徴とするが、県内の城郭と比べ、曲線を描き、堀底の見通しが利かないことも防御上有効である。さらに、16世紀末から17世紀前半、19世紀の補修に至るまで多種多様な石垣が見られ、発見される事例が増加する県内にあって、示唆に富む資料を与えてくれている。また、地質の境界上にあるためか湧水点が多く、山城にもかかわらず全く水に困る様子は感じられない。県内に残る他の山城に比べて長い存続期間を有するがゆえに、多くの遺構と時代ごとの様相が良好に残る県内屈指の城跡である。

(10) 今後の課題

概報において、いくつかの課題が提示されたが、僅かではあるがこの7年に前進できたものと思っている。しかし、鳥山城において発掘調査が行われている面積は1%にも満たない狹小な範囲であり、残された課題は山積している。那須氏時代の建物は、調査の制約上明らかではなく、多くの仮説は提示されたのみである。調査のみならず、経年劣化による破壊を食い止められず、保護という点でも今後ますますの努力が必要とされる。概報から7年が経過した今、その時点で提示された課題の一つを最後に考えておきたい。荒川善夫氏から提示された隠居後の資産が「鳥山南」と呼ばれている件である。氏は、当主と前当主が同一城館に住み、敵方に攻撃された場合の家の滅亡という観点から、神長南要害などに隠居した可能性を想定されておられるが、筆者は現段階で肯定はできない。小谷城の浅井父子を例にとるまでもなく、唐沢山城においても同一城内に住むケースが多い。また、神長南要害等を想定した場合、各個擊破の

標的になりやすく、人質に取られる可能性も増加する。ここに言う「烏山南」は城中の南の曲輪を指す可能性は無いのだろうか。真岡市の中村城においては方半町の南西部の独立した曲輪の主は、「南城」と呼ばれる等の事例もあるため、筆者は筑紫山や毘沙門山の方にその可能性を認めている。

注

- (1) 筆者もこの調査に参加していたが、報告書刊行前であり、詳細の記述は控えた。
- (2) 主郭を含む中心部は現在調査中であるが、樹手口と想定される一部を対象として次の報告書が刊行されている。『二条城跡』栃木県教育委員会・公益財団法人とちぎ未来づくり財團2020
- (3) 2020年6月7日に行われた「現場説明会資料」による。
- (4) 筆者も参加していたが、地域住民対象の現場説明会でこの内容は提示している。
- (5) 本書は、先行する「烏山町郷土誌」において否定的見解であった資重鎌城説を採用している。また、明治5年(1872)の三の丸建物の大雪による崩壊や、同6年(1873)の二の丸建物消失が記載されている。
- (6) 本書において烏山城の構造に関して、内堀の城壁が70~80度の傾斜角を持ち、外壁がはらみ角度を持つと記載されるが、現状でそのような箇所は認められない。測量に基づくものではなく、誇張した表現となっている。
- (7) 研究史の内、烏山城の構造に関して何らかの記載があるものを採用したが、延宝年間(1673~1681)に水戸藩領武茂(現那珂川町)の庄屋大金重貞によって著された『那須記』は軍記物の色彩が強く、この項では扱わなかったが、烏山城を中心とする合戦等には大いに参考をしている。
- (8) 担当したバスコの津口雅彦氏により「月刊測量」に昨年と今年連載中の「レーザー測量で見る城郭の空間」の2021年2月号に「航空レーザー測量を利用して烏山城の城郭空間をみる」として4ページにわたり詳細が記述されている。
- (9) 近世の烏山城に関しては、前出、杉浦昭博『近世栃木の城と陣屋』2011、渡邊正樹「絵図に見る烏山城」『中世城郭研究25』2011に詳しく紹介されており、この項では発掘調査の成果等を加える程度とした。
- (10)『佐野城跡(春日岡城)』佐野市教育委員会1999
- (11) 長の指出候地では6尺5寸であったが、太閤候地では6尺3寸、家康の備前・石見候地では6尺が使用されている。なお長宗我部元親百箇の記載は「古事類苑・秤量部」(古事類苑データベース)から引用した。
- (12) 宮原八幡宮には永禄3年(1560)那須資胤が寄進した本殿内陣中央板扉が現存しており、那須氏との関係が深い。詳しく述べては『近世大名那須氏の成立・資胤・資晴・資景・資重・資弥の軌跡』大田原市那須与一伝承館2014参照
- (13) 国立国会図書館蔵「日本古城絵図 東山道之部」
- (14) 大澤伸悟2003「中世足利の都市的空间」『中世東国世界! 北関東』高志書院
- (15) 佐野市教育委員会編2013「唐沢山城跡調査報告書」
- (16) 宮田毅1996「太田市金山城跡の石垣」『利根川17』他
- (17) 2003年に東北芸術工科大学において行われたシンポジウム「石垣普請の風景を読む」の討論で石切丁場にはばかり焦点が置かれていることに対してこの城が例に挙げられ問題提起された。
- (18) 宮武正登2003「名護屋城跡と諸大名陣跡の石垣」『城と石垣その保存と活用』高志書院
- (19) 額賀大輔2015「中世移行期における笠置城跡について」『野州大田原城—奥羽に臨む城—』大田原市那須与一伝承館
- (20) 北垣鷹一郎・鈴木啓1995「猪苗代城の礪張り・石垣の特徴」『福島考古36』
- (21) 宅地のため間近での観察ができず、鈴木啓「図説城と石垣の歴史」1995の写真を参考にさせていただいた。
- (22) 山川千博2015「赤城城から開倉城へ—近世城郭成立の一事例—」『野州大田原城—奥羽に臨む城—』大田原市那須与一伝承館
- (23) 藤井謙治1990「大名城郭許可制について」『人文学報66』京都大学人文科学研究所
- (24) 西ヶ谷恭弘「城石垣を築いた石工職人に関する一考察—十六世紀の史料に見る「石切・石切共」をめぐって—」『城郭史研究31』2011では、信雄による二の丸石垣の修築には触れているものの、矢穴には言及が無く、矢穴の出現は天正19年の肥前守護屋城からとしている。
- (25) 滋賀県教育委員会編2009「特別史跡安土城跡発掘調査報告書Ⅱ」
- (26) 神山仁1997「江戸時代初期の城郭絵図—正保城絵図と城郭修理願絵図の成立について—」『城郭史研究』17日本城郭史学会
- (27) 宇都宮城にも石垣が築かれていたが、虎口脇の限局的な使用であった。
- (28) 白峰毎1996「居城補修規定の実際的運用について」『城郭史研究16』日本城郭史学会
- (29) 三浦正幸2005『城のつくり方図典』小学館では、19世紀中期以降とされる
- (30) 国分寺町教育委員会編「北台遺跡(推定東山道)・箕輪城跡・山海道2号遺跡」
- (31) 土壙断面に関しては、西ヶ谷恭弘「土壙構築法の編年化試験—関東の発掘成果事例を中心に—」を参考とした。
- (32) 江田郁夫2013「戦国大名那須氏の成立」『北関東の戦国時代』高志書院
- (33) 萩原三雄2014「居館と詰城」に関する覚書『戦国武将と城 小和田哲男先生古稀記念論文集』サンライズ出版
- (34)『烏山町史』p.74~76「烏山の集落形成」を参考とした。
- (35) 額賀大輔氏2015「関東平野の中世 政治と環境」高志書院において、水運や林産資源について評述されているが、那珂川流域についても河川における流通を押さえることが重視される。

第2節 遺跡の概要

1 出土遺構

(1) 本丸

本丸は主郭部分の中央に位置し、古本丸と接する北辺約40m、正門などの侵入路がある南辺約70m、南北が約65mで南北に縱長の台形状である。曲輪の北側約1/4には、本丸平坦面よりおおよそ1～1.5mほど高い平坦面が鎌柄状に設けられている。この本丸高段部分は、現在植林によりスギ・ヒノキ等の樹木が茂っているが、可能な範囲でトレンチを設定し確認調査を実施した。

高段部分の平坦面に設置したトレンチ1、4、6、7（第27、30図）からは、腐葉土である表土を約20cm除去すると地山岩盤層が見られた。これは、曲輪造成の折、古本丸と同様に、地山関東ローム層下の岩盤層まで削平し、平らに整地することで曲輪を構築していると考えられる。またこれらのトレンチ内で、柱痕や礎石が確認できなかった。

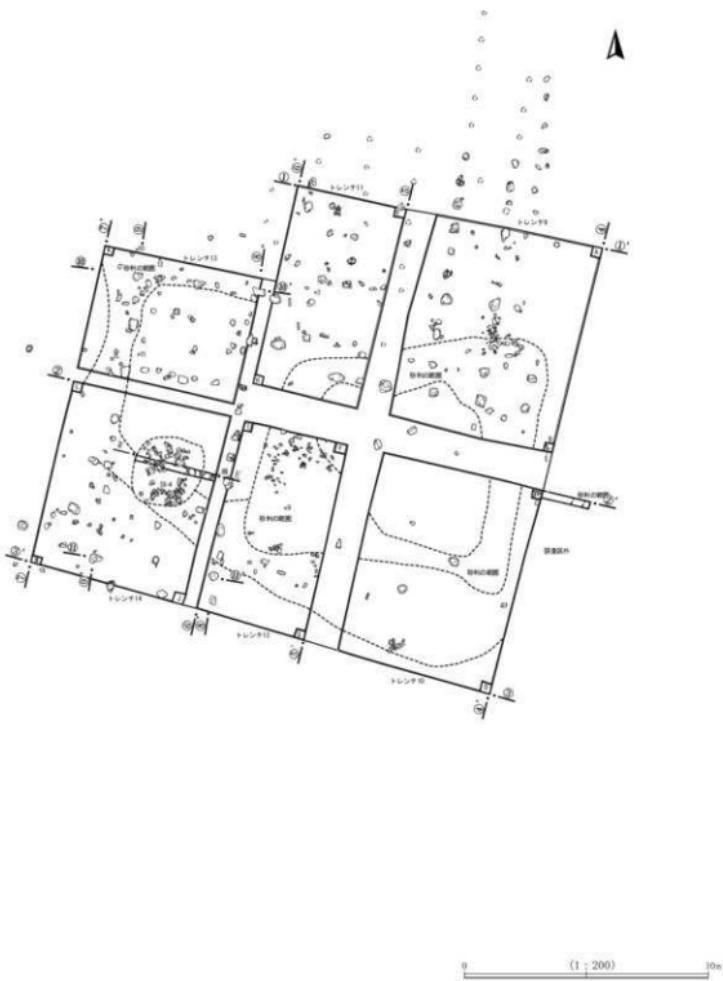
北側古本丸に向かう土橋状遺構付近のトレンチ2では、曲輪自体の法面について確認した。腐葉土であった表土を除去すると鹿沼軽石層(KP)がみられた。古本丸側での調査（古本丸トレンチ14）においても同じような状態であったことから、両曲輪の間は、本来、鹿沼軽石層やローム層などの地山で地続きであった部分を掘り下げることによって分断していることが確認できた。またこのことから、本丸と古本丸は地層的にはつながっており、どの時期で分断されたかは出土遺物等が無く不明である。古本丸と本丸の間については、中央の土橋状遺構の西側については、2011年の東日本大震災の影響で地滑りが発生しており調査が実施できなかつたため、東側のみ掘削を伴わず表面観察を実施した。土橋の東側谷部は、土橋に近いほど堀底は狭く、本丸北東隅の下方付近から古本丸東側横矢掛け部分の下方にかけて、やや平場になっている。また、堀底の狭い部分と下方の平場は急傾斜によってつながっていた。この平場は吹貫門と搦め手の桜門をつなぐ通路沿いにあたり、通路面より1段高くなっている。この場所は防衛を考えた際、平場が1段高くなっているというのは、この部分が敵に通過されてしまうと本丸搦め手に一気に入り込まれてしまうため、ここには防衛柵もしくは堀の存在が推測される。しかし現状では、上方の古本丸、本丸からの崩落土等によりそのような施設は目視調査では確認できなかった。遺物は表面採集でき、本丸北東隅の下方付近から瓦片が表採された。表面に焼成時のまき砂が付着しており、瓦を固定するための釘穴が開いているものも確認できた。瓦についての詳細は、第4章第2節2（1）で大澤伸啓氏の検討記載を参照いただきたい。

トレンチ3では、僅かであるが土堤状の高まりが確認されたため、トレンチを設定した。柱痕や礎石等は確認できなかったが、人為的な盛土が確認された。高段部南側の法面（図版一）には、以前より一部に石が露出していたため、トレンチ5を設定した。トレンチ内東側の石は地山岩盤が露出したもので、西側はその地山岩盤をうまく利用し人為的に石が積まれている。

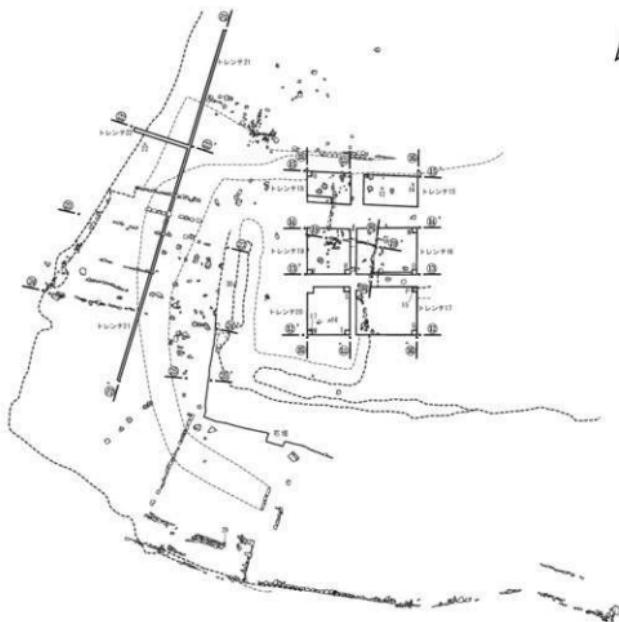
高段部分の出土遺物には18世紀初め頃の磁器で肥前焼（図版一）などが高段平坦面西側のトレンチ1から出土した。図版の肥前焼の底部外側には、「太明年成」と思われる文字が書かれている。この他にも肥前の腕の破片が採集されている。それらの破片資料の中には、こんにゃく印判とおもわれる少しづばやけた図柄も見られる。こんにゃく印判とは、動物の皮などと考えられる柔らかい素材を使用し文様をつくりプリントしたものといわれている。かつては、湾曲した器物にプリントされていることから、こんにゃくに文様を彫ってプリントしたと考えられていた。この他にも、同時期ころと思われる陶磁器片が数片採集された。陶磁器の詳細につい



第27図 本丸 地形図

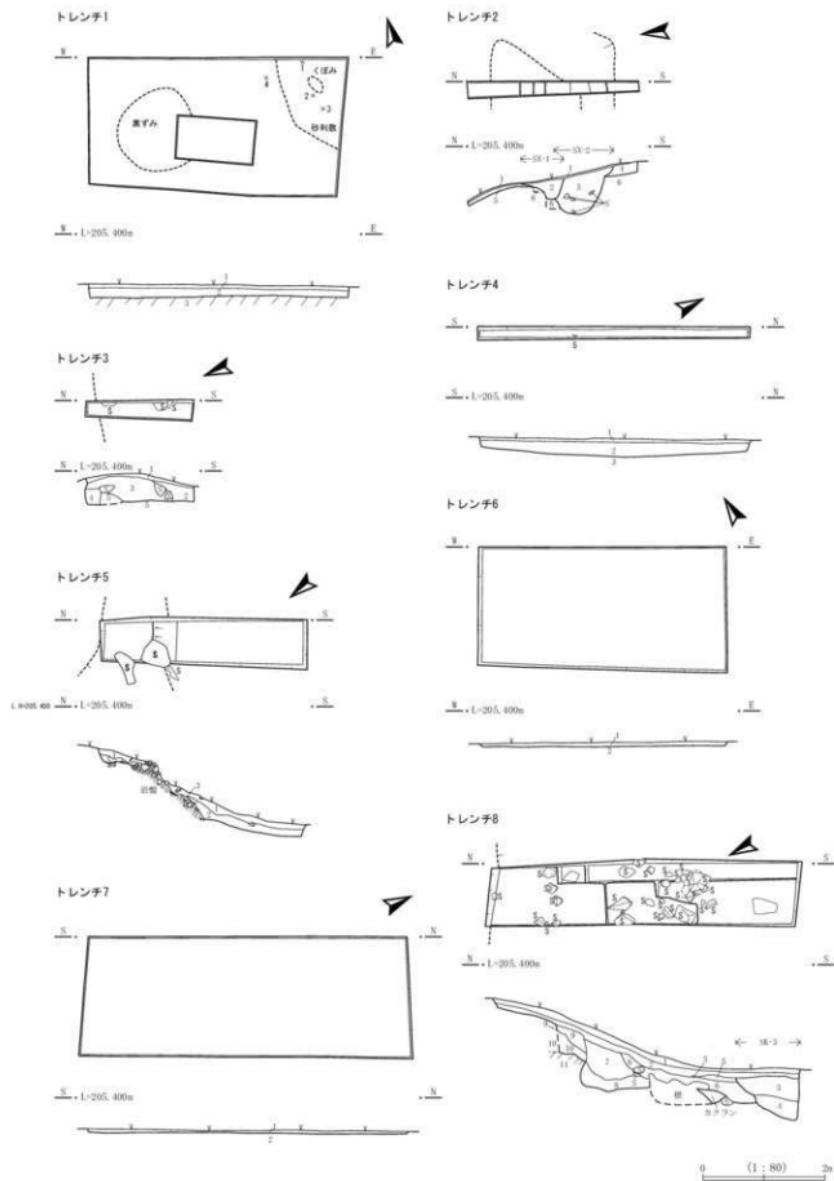


第28図 本丸 全体平面図 (1)



0 (1 : 400) 10m

第29図 本丸 全体平面図 (2)



第30図 本丸 トレンチ1～8

ては第4章第2節2（1）で後述する。またこの他にも和釘と思われる鉄製品が発見された。

本丸の平坦面については、平面等高線図を作成した際に、中央東寄りに方形の地ぶくれ状の高まりを確認したことから始まり、地ぶくれ状の高まりは本丸南西部にコの字状のものや南東部のクランクした段差など数箇所確認できた。そこで本丸東側部分の地ぶくれ状の高まりに調査区（トレンチ9～14）を設け、遺構の確認作業を行った（第27、28、31、32図）。

その結果、建物の礎石と思われる多数の石列や、敷石状のものを確認することができた。（第36、37図、礎石表2）については、角のない平らな河原石のままのもの、その河原石の上面を加工したようなもの、切り石のものの大きく3タイプ見られた。礎石の中には、12～13cm程の方形の痕跡が見られ、約4寸の角材が、設置されていた痕跡と思われる。また、礎石の一部が火を受け焼けはじけた様な赤く剥離したものが見られた。このことから、火災にあった建物があったことが想定できる（第38図）。SB-5とした桁行8間梁行2間の南北棟では北側2間で間仕切りが礎石から想定できる。また、方形の地ぶくれの外側に敷石状のものを確認できた（第37図トーン部分）。さらに、敷石の一部に埋没した石列のようなもの（SX-10）も確認された。これらにより、石の配列や種類、大きさの違いなどから複数の建物が、建替えられたことが考えられる。調査面積も一部であり、時期を推測できる遺物の出土が皆無であるため、建替えの時期、変遷など詳細は不明である。

更に下層の状況確認のため、トレンチ内に設置した40cm四方の枠状に掘り下げた試掘溝（以後「樹掘」と記載）により、本丸平坦面においても、ローム下の岩盤層まで削平し、その上に盛土を行っていることが確認できた。さらに、盛土による整地面が2～3面確認できたことから、複数時期の普請も推測された。

出土遺物については、釘と思われる5cm前後の断面方形の棒状鉄製品が200点近く採集された。これらは表面採集であることから、明治の廃城直後の火災で焼失した伝承があることからその際の建物の床釘の可能性が高い。

正門から平坦面に接する部分（第29、33～35、39、40図）は、2回折れの内折形になっていた。本丸における出入口施設である虎口は、2つの門の間に空間は1つであるが、右へ2回折れ曲がる形状と思われる。これは近世の城郭に多く見られる虎口である。その内折形部分では、階段状の遺構が確認でき、地山岩盤面に石を置き、山側に砾や砂を詰め、最上面は砂質シルト（砂と黄褐色ロームを混ぜたもの）の直上に直径5cm以下の川原石が敷かれていたことが想定できた。またL字に築かれている本丸石垣は、西面は地山岩盤に直積みされており、石垣前には溝等は確認されなかったため、本丸からの雨水等は地山岩盤上面を流れ南西側斜面を透過し、現在崩落して消失した常盤曲輪と若狭曲輪間の通路部分に流れていることが考えられた。

正門から本丸平坦面までは、正門付近石垣の前面を大手道が通り、本丸に向けて傾斜しているが、散在していると思われた石材は、石垣の崩落石を除くと面のそろった列をなしており、階段になっていることが確認された。正門付近石垣と階段との間に側溝などの溝状の掘り込みは確認できず、岩盤層が露出していたと思われる。この石段の一部をたち割り調査（トレンチ21）をおこなった結果、岩盤層の上に階段を構築するために人為的に盛土していることがわかつた。僅かに堆積した腐葉土の下には使用面と思われる小石敷きの層が見られる部分があった。このことから、階段の前面は面をそろえた石列がありその石列間には砂利敷きであった可能性がみられる。また、正門から本丸に進むとすぐ隅になってしまい堀に落ちてしまうが、そのすぐ右側に掘りへと下がる小道がある。正門付近石垣西面の階段を挟んで反対側になる。小道に

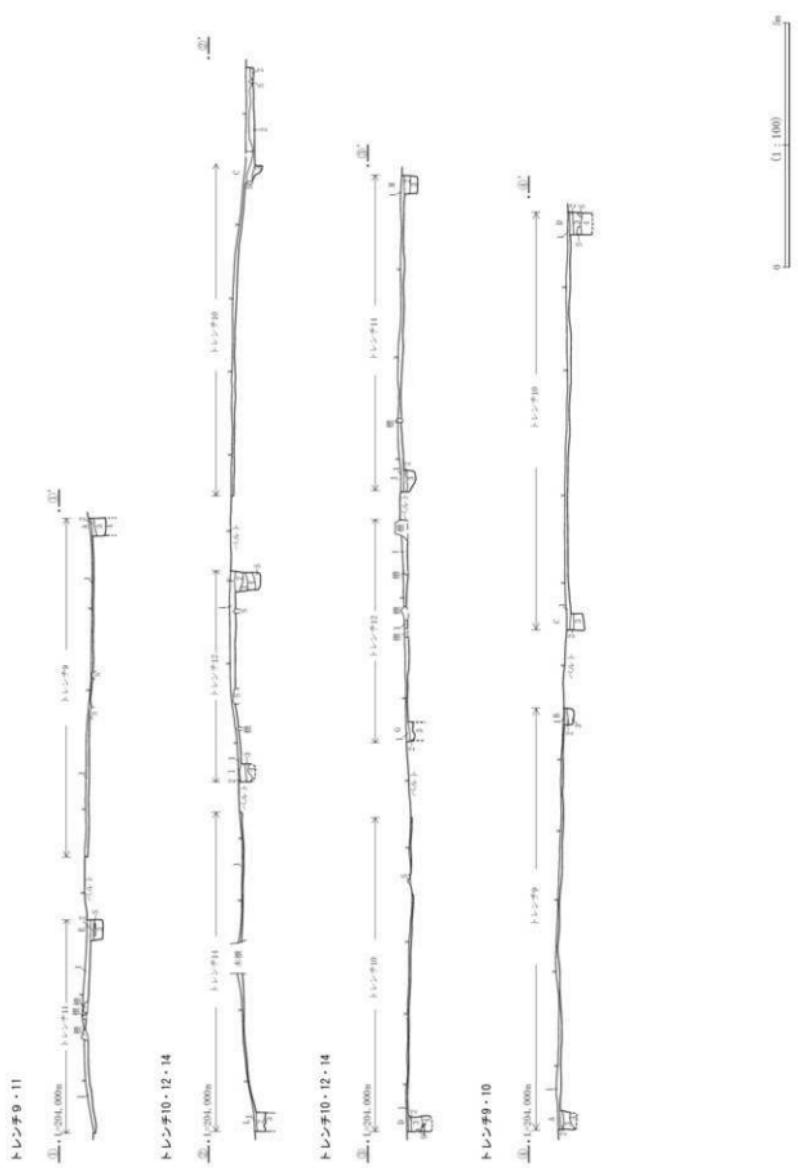
降りる部分には門があったのか、方形の礎石が片方だけ確認できた。

また、本丸平坦面に続く大手道の突当りにはコの字状の地ぶくれの存在が測量により確認していたため、階段部分とあわせて調査した。表土を除くと平坦面のような整地土があらわれ、ゆるやかに段を形成していた。一部分の調査のため、その段の上に塀もしくは柵などの防御壁としての遮蔽物の痕跡を確認できなかった。しかし、平坦面へ続く方には石が所々で高まりに沿って並んでいることがわかった。正門付近石垣西面の並びから平坦面側に半間ほど入ったところで約1間幅の段があることから、ここが本丸平坦面への出入口であったと思われる。ここにある上面が平らな石は礎石であり、おおよそ1間離れた場所に同じような礎石があり、対になっているため、門があったと思われる。これにより鳥山城跡本丸虎口は、正門から本丸平坦面までの1つの空間のなかで2回右に曲がるものと推測されるが、主に現状の表面観察とごく一部のトレンチ調査から所見であるため、正門付近石垣を含めた虎口の究明には、ある程度面的な調査が必要である。

虎口から平坦面に接した部分は、正門付近石垣の直上にあたる本丸平坦面南西部分の地ぶくれや段についてである。この部分の調査については、測量作業終了直後に東日本大震災を受け正門付近石垣が一部崩落し、大手道側にせり出してしまったことから、石垣自体の大規模な崩壊が予測されたため、曲輪のやや内側にトレンチ15～20を設定し調査にあたった。(第33、34図)その結果、地ぶくれの確認された段差に沿って、L字に折れ曲がった石列を確認できた(図版一)。また、この石列の内側上段にあたる面では複数の礎石列を確認できた。

さらにトレンチの一部に40cm四方の試掘枡を数か所おこない整地層についても調査した。その結果、①原地形を地山岩盤(一部ローム土残る)まで掘削。②岩盤層の上に疊で整地。③黒色整地土層(かわらけ有)。④灰褐色の固い整地土。これらの4工程が見られ、3回は整地されている可能性がある。③のかわらけ(第63図17)は、古本丸かわらけ溜り(SX-1)出土品と大きさ、技法的に類似しており、同時期のものと考えられた。また、本丸の南西部分の石垣のある方向に行くほど、深さ1mを越えても地山は確認されなかった。正門付近石垣が地山岩盤層に直積みされていることや石垣の高さから、おそらくは2m以上、正門石垣の高さの分は人為的に盛土されている可能性がある。古本丸に近い北側では比較的浅い位置で地山岩盤層が確認できることから、この層は本丸南西方向下がる傾斜と推測すると、本丸正門付近石垣を含めた出入口周辺の構築にあたり、大規模な盛土を行い本丸平坦面の拡張もされていることが推察された。

正門の両脇には、切り石による石組が突出しており、敵の進入を塞ぐように大手道を狭めている(第39、40図)。この突出した石組の谷側からは吹貫門の石組まで2～3段の石列が確認できた。正門付近石垣の上部の石材と同じ角礫岩の切り石である。現在は2段ほど露出しているため石列と呼んでいるが、下段にはまだ埋もれている可能性がある。また、吹貫門に近い石列は、正門近くより石が小さく不揃いのものが多い。石材も最上部は正門と同じ角礫岩の切り石である。しかし吹貫門脇石垣と同じ安山岩質の石材も見られる。これらのことを考えると、正門付近石垣だけではなくこれらの石列など様々な部分で改修された可能性が確認された。改修の箇所や時期、規模など詳細については、一部分ではなく面的な今後の調査が必要である。



第31図 本丸 トレンチ9～12・14

トレンチ11・12



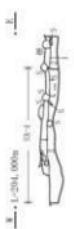
トレンチ11・12



トレンチ13・14



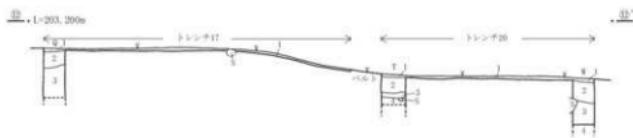
トレンチ14・SX-4



(1 : 1000)

第32図 本丸 トレンチ 11～14、SX-4

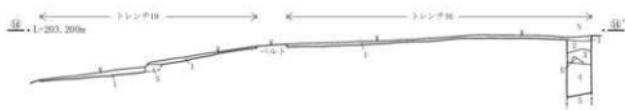
トレンチ17・20



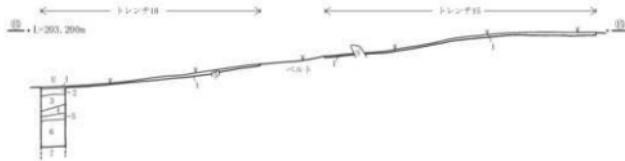
トレンチ16・19



トレンチ16・19



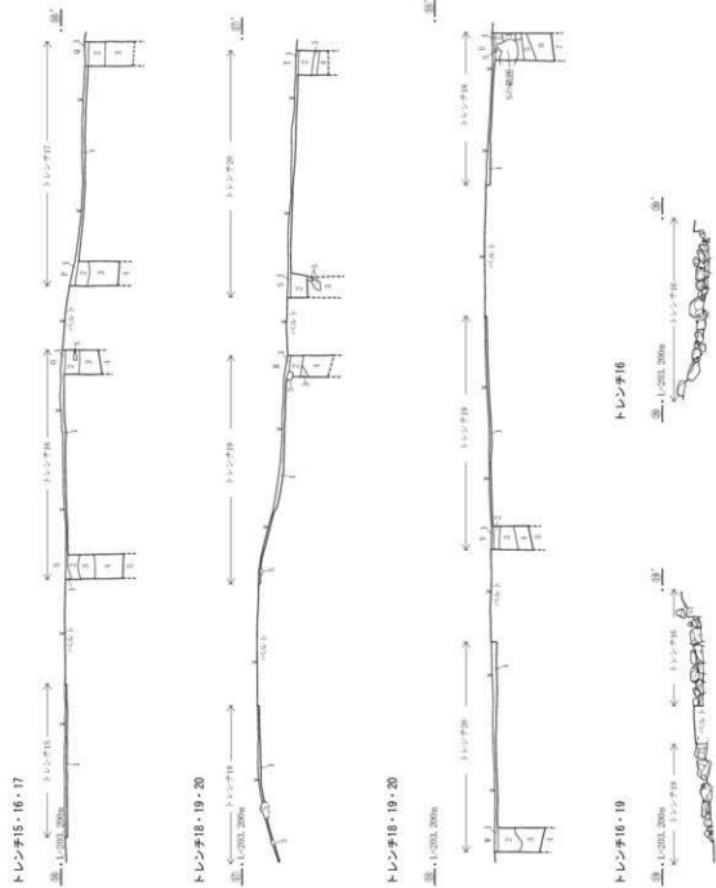
トレンチ15・18



0 (1 : 80) 2m

第33図 本丸 トレンチ 15～20 (1)

比例尺
1 : 80



第34図 本丸 トレインチ15~20 (2)

トレンチ21



②

トレンチ22



正門前石壠セクション1



②

正門前石壠セクション2



②

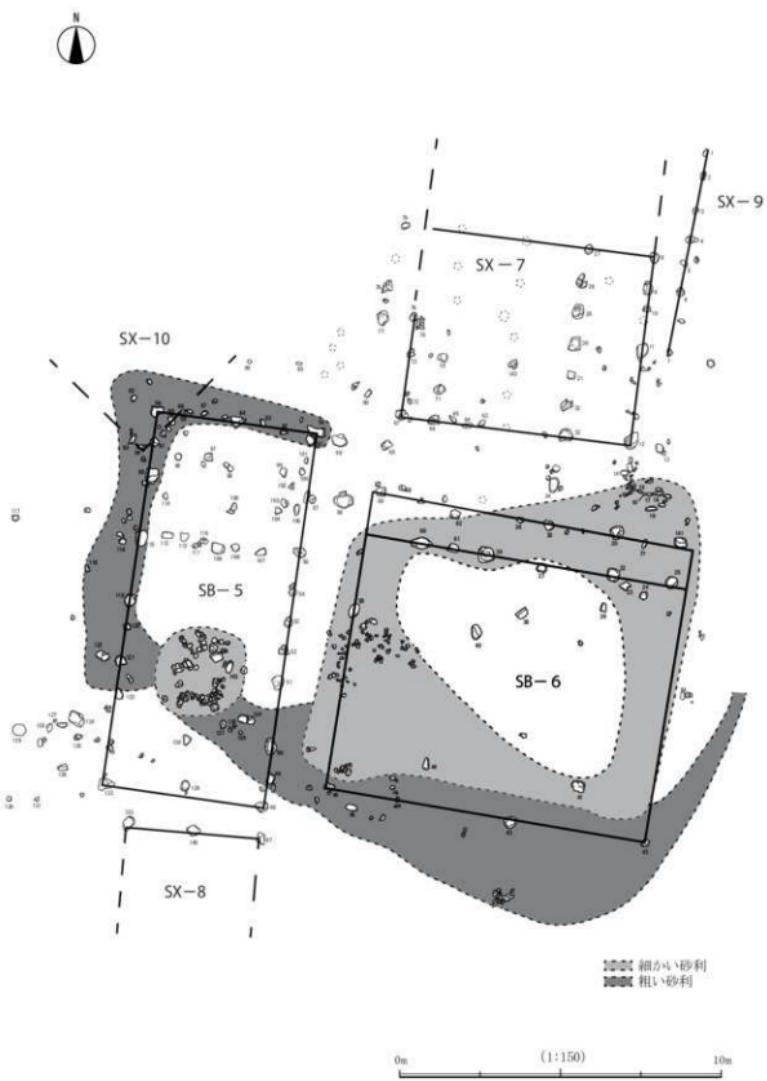
正門前石壠セクション3



②

0 (1 : 100) 50

第35図 本丸 トレンチ 21・22、正門前石壠



第36図 SB-5・6、SX-7～10 全体平面図

表2 本丸礎石 石材観察表

No.	標高 (m)	大きさ (cm)	石材特徴			備考
			原石	一部加工	面取加工	
1	203.264	26	○			
2	203.341	29		○		
3	203.299	24	○			
4	203.235	42	○			
5	203.28	28	○			
6	203.329	26		○		
7	203.332	25	○			
8	203.372	31		○		
9	203.332	38		○		
10	203.34	25	○			
11	203.411	50	○			
12	203.472	50	○		○	
13	203.41	28	○			
14	203.555	28	○			
15	203.45	29	○			
16	203.459	16	○			
17	203.453	20	○			
18	203.505	30	○			
19	203.58	38	○			
20	203.679	41		○		
21	203.482	26	○			
22	203.515	41		○	○	○
23	203.511	26	○			
24	203.445	24	○			
25	203.579	40	○		○	
26	203.475	26	○			
27	203.343	30	○	○	○	
28	203.369	40	○	○	○	
29	203.365	41	○	○	○	
30	203.389	49	○	○	○	
31	203.41	25	○	○	○	
32	203.495	40	○	○	○	
33	203.526	44	○	○	○	
34	203.625	49	○			
35	203.665	36	○			
36	203.469	24	○			
37	203.53	36	○			
38	203.626	39	○			
39	203.525	50	○	○	○	
40	203.445	42	○			
41	203.479	41	○	○		
42	203.193	22	○	○		
43	203.295	38	○			
44	203.44	38	○			
45	203.17	33	○			
46	203.274	34	○			
47	203.284	35	○			
48	203.254	37	○		○	
49	203.295	34	○			
50	203.285	54	○			
51	203.283	52	○			
52	203.317	39	○			
53	203.271	42	○			
54	203.205	26	○			
	203.211	26	○			
55	203.469	20	○			
56	203.298	45	○			
57	203.275	52	○			
58	203.342	30	○			
59	203.425	54	○			
60	203.52	70	○	○	○	
61	203.454	33	○			
62	203.414	30	○			
63	203.45	28	○			
64	203.371	○				
65	203.432	30	○			
66	203.431	35	○	○	○	
67	203.38	40	○	○		
68	203.452	33	○			
69	203.441	54	○			
70	203.376	54	○			
71	203.445	34	○		○	
72	203.413	29	○			

凝灰岩?

河原石

一部加工石

面取加工石

焼成痕

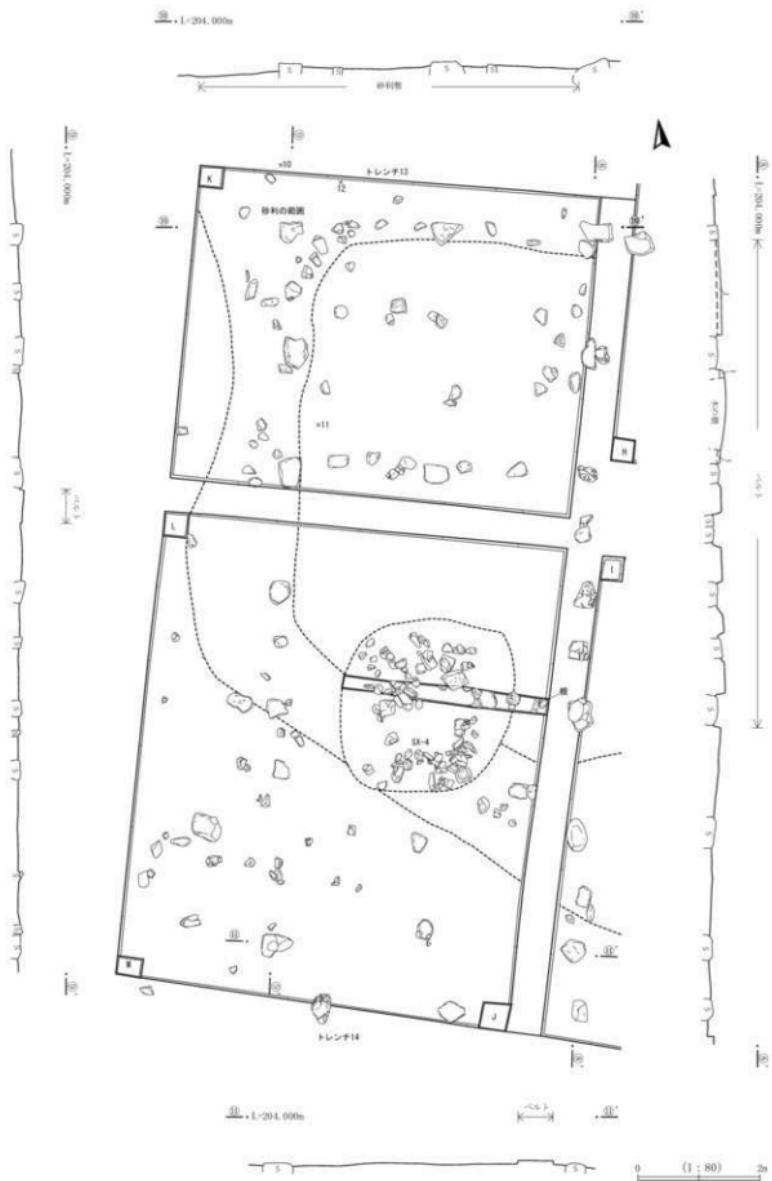
柱痕跡

凡例

- 河原石
- 一部加工石
- 面取加工石
- 焼成痕
- 柱痕跡

0 (1:300) 10m

第37図 本丸礎石分類図



第38図 本丸 SB-5

表3 本丸 土層注記(1)

本丸 トレンチ1		
剖位	土性	内容物
1剝 表土	黒褐色土	腐食土。
2剝 硬地土	暗褐色土	KP粒微量。粘性やあります。
3剝 地山	岩盤	一部風化した裡状。

本丸 トレンチ2		
剖位	土性	内容物
1剝 表土	暗褐色土	腐食土。
2剝 墓土	暗褐色土	SX-1
3剝 墓土	褐色土	ローム粒少量。鍾4個。SX-2
4剝 墓土	にごい褐色土	IP粒少量。
5剝 墓土	明褐色土	KP粒少量。
6剝 墓土	明褐色土	KP多量。ロームブロック少量。

本丸 トレンチ3		
剖位	土性	内容物
1剝 表土	黒褐色土	腐食土。
2剝 地盤土	暗褐色土	炭化物粒少量。KP少量。縫まり無し。粘性あり。
3剝 墓土	褐色土	KP粒微量。縫まりやあります。
4剝 墓土	暗褐色土	ローム土多量。KP粒少量。縫まり無し。(植物根か)。粘性あり。
5剝 墓土	黄褐色土	KP粒多量。ロームブロック少量。

本丸 トレンチ4		
剖位	土性	内容物
1剝 表土	黒褐色土	腐食土。
2剝 硬地土	暗褐色土	KP粒微量。粘性やあります。
3剝 硬地土	明褐色土	KP粒多量。ロームブロック少量。

本丸 トレンチ5		
剖位	土性	内容物
1剝 表土	黒褐色土	腐食土。
2剝 崩落土	暗褐色土	炭化物粒直角1cmほど複数量。
3剝 崩落土	褐色土	岩盤直角10cm以下多量。

本丸 トレンチ6		
剖位	土性	内容物
1剝 表土	黒褐色土	腐食土。
2剝 硬地土	暗褐色土	KP粒微量。粘性やあります。

本丸 トレンチ7		
剖位	土性	内容物
1剝 表土	黒褐色土	腐食土。
2剝 硬地土	暗褐色土	KP粒微量。粘性やあります。

本丸 トレンチ8		
剖位	土性	内容物
1剝 表土	黒褐色土	腐食土。
2剝 自然地盤土	暗褐色土	腐食土。
3剝 地盤土	暗褐色土	炭化物粒極少量。崩落した繊維土。縫まりなし。SK-3
4剝 地盤土	褐色土	やや粘性あり。SK-3
5剝 崩落土	暗褐色土	縫まりなし。
6剝 崩落土	暗褐色土	ローム粒微量。崩落土多量。
7剝 崩落土	褐色土	ローム粒少量。
8剝 崩落土	明褐色土	ローム粒微量。ローム粒少量。やや縫まる。
9剝 墓土	にごい黒褐色土	土壌の積み土。
10剝 墓土	にごい黄褐色粘土土	土壌の積み土。
11剝 地山	黄褐色ローム	

本丸 SK-4(トレンチ14 施工部)		
剖位	土性	内容物
1剝 覆土	褐色土	ローム土多量。繊多量。縫まりなし。
2剝 覆土	明褐色土	ローム土少量。繊。ローム共に1剝より少ない。縫まりなし。

本丸 トレンチ9 A セクション①		
剖位	土性	内容物
1剝 表土	暗褐色土	ローム粒微量含む。土の筋まりはあまりない。粘性あり。
2剝 墓土	黒褐色土	ローム粒微量含む。(やや赤化する)炭化物少量。土はやや縫まる。粘性あり。
3剝 墓土	黄褐色土	KPローム粒多く含む。炭化物・小礫少量。縫まりやあります。粘性あり。
4剝 地山、岩盤	岩盤	

本丸 トレンチ9 B セクション④		
剖位	土性	内容物
1剝 表土	暗褐色土	ローム粒微量。縫まりやあります。粘性あり。
2剝 墓土	黒褐色土	ローム粒微量。(やや赤化する)炭化物少量。土はやや縫まる。粘性あり。
3剝 墓土	黄褐色土	KPローム粒、炭化物・小礫少量。縫まりやあります。粘性あり。
4剝 地山、ローム	ローム	

本丸 トレンチ10 C セクション⑤		
剖位	土性	内容物
1剝 表土	暗褐色土	ローム粒微量。縫まりやあります。粘性あり。
2剝 墓土	黒褐色土	ローム粒微量。(やや赤化する)炭化物少量。底部に大きな川原石あり。縫まりあり。粘性あり。
3剝 墓土	黄褐色土	KPローム粒。炭化物粒。小礫少量。縫まりやあります。粘性あり。
4剝 地山、ローム	ローム	

表4 本丸 土層注記(2)

本丸 トレシチ 10 D セクション③、④		
部位	土性	内容物
1 刷 表土	暗褐色土	ローム粒微細。細まりややあり。粘性あり。
2 刷 級土	黒褐色土	ローム粒微細(やや赤化する)。炭化物少量。細まりややあり。粘性あり。
3 刷 級土	黄褐色土	KP ローム粒多量。炭化物・小礫少量。細まりあり。粘性あり。下部に直径10mm位の礫あり。
4 刷 塚山	黄褐色土ローム土	

本丸 トレシチ 11 E セクション⑤、⑥		
部位	土性	内容物
1 刷 表土	暗褐色土	ローム粒微細。細まりなし。粘性あり。
2 刷 地盤土	黄褐色細粒土	ローム粒微細(やや赤化する)。炭化物少量。細まりあり。粘性あり。
3 刷 地盤土	黄褐色細粒土	ローム粒多量。直径5cm程の礫多量。細まりあり。上面より粘性あり。
4 刷 地盤土	黄褐色土	ローム粒多量。KP ブロック多量。細まりなし。やや砂質で粘性なし。
5 刷 地盤土	黄褐色土	ローム粒多量。KP・炭化物粒少量。かなり砂質。細まりあり。

本丸 トレシチ 12 F セクション⑤、⑥		
部位	土性	内容物
1 刷 表土	暗褐色土	ローム粒微細含む。
2 刷 地盤土	黄褐色細粒土	山野に直徑5cm程の礫多量。しまりあり。
3 刷 地盤土	黄褐色細粒土	ローム粒多量。直徑5cm程の礫多量。細まりあり。上面より粘性あり。
4 刷 地盤土	黄褐色土	ローム粒多量。KP ブロック多量。細まりなし。やや砂質で粘性なし。
5 刷 地盤土	黄褐色土	ローム粒多量。KP・炭化物粒少量。かなり砂質。細まりあり。

本丸 トレシチ 12 G セクション⑤、⑥		
部位	土性	内容物
1 刷 表土	暗褐色土	ローム粒微細。細まりなし。粘性あり。
2 刷 地盤土	黒褐色土	ローム粒少量(やや赤化する)。曲の地点より炭化物粒の量が多い。
3 刷 級土	黄褐色土	KP ローム粒多量。炭化物・小礫少量。細まりややあり。粘性あり。
4 刷 塚山	岩盤	

本丸 トレシチ 12 H セクション⑤、⑥		
部位	土性	内容物
1 刷 表土	暗褐色土	ローム粒微細。細まりなし。粘性あり。
2 刷 地盤土	黒褐色土	ローム粒微細(やや赤化する)。曲の地点より炭化物粒の量が多い。
3 刷 級土	黄褐色土	KP ローム粒多量。炭化物・小礫少量。細まりややあり。粘性あり。
4 刷 塚山	岩盤	

本丸 トレシチ 12 I セクション⑤、⑥		
部位	土性	内容物
1 刷 表土	暗褐色土	ローム粒微細。細まりなし。粘性あり。
2 刷 級土	黒褐色土	ローム粒子数多。ローム粒子数多。
3 刷 級土	黄褐色土	KP粒多量。ローム粒多量。
4 刷 塚山	岩盤	

本丸 トレシチ 12 J セクション⑤		
部位	土性	内容物
1 刷 表土	暗褐色土	ローム粒微細。細まりなし。粘性あり。
2 刷 級土	黒褐色土	ローム粒微細(やや赤化する)。炭化物少量。細まりややあり。粘性あり。
3 刷 級土	黄褐色土	KP粒・ローム粒多量。炭化物粒・小礫少量。細まりややあり。粘性あり。

本丸 トレシチ 12 K セクション⑦		
部位	土性	内容物
1 刷 表土	暗褐色土	ローム粒微細。細まりなし。粘性あり。
2 刷 級土	黄褐色土	KP粒・ローム粒多量。炭化物粒・小礫少量。細まりややあり。粘性あり。

本丸 トレシチ 14 L セクション⑤、⑥		
部位	土性	内容物
1 刷 表土	暗褐色土	ローム粒微細。細まりなし。粘性あり。
2 刷 級土	黄褐色土	KP粒・ローム粒多量。炭化物粒・小礫少量。細まりややあり。粘性あり。
3 刷 塚山	岩盤	

本丸 トレシチ 14 M セクション⑤		
部位	土性	内容物
1 刷 表土	暗褐色土	ローム粒微細。細まりなし。粘性あり。
2 刷 級土	黒褐色土	ローム粒微細(やや赤化する)。炭化物少量。細まりややあり。粘性あり。
3 刷 級土	黄褐色土	KP ローム粒子多く含む。炭化物・小礫少量。細まりややあり。粘性あり。
4 刷 塚山	岩盤	

本丸 トレシチ 14 N セクション⑤、⑥		
部位	土性	内容物
1 刷 表土	暗褐色土	ローム粒微細。細まりなし。粘性あり。
2 刷 級土	黒褐色土	KP粒少量。下部ほどKP粒が多い。細まりややあり。
3 刷 級土	赤褐色土	後土粒。炭化物粒。粗礫とともに少量。4刷上面に川原石1つ。
4 刷 級土	黃褐色土	地山岩盤裡土体。KP粒少量。
5 刷 塚山	黃褐色粘土質土	地山ローム。上面にKP粒が少量。

本丸 トレシチ 16 O セクション⑤、⑥		
部位	土性	内容物
1 刷 表土	黒色土	
2 刷 級土	赤褐色土	KP粒少量。施土粒微細。下部ほどKP粒が多い。細まりややあり。
3 刷 級土	赤褐色土	後土粒。炭化物粒。粗礫とともに少量。4刷上面に川原石1つ。
4 刷 級土	黃褐色土	地山岩盤裡土体。KP粒少量。
5 刷 塚山	黃褐色粘土質土	地山ローム。上面にKP粒が少量。

表5 本丸 土層注記（3）

本丸 トレンチ 17 P セクション㉛		
剖位	土性	内容物
1 線 表土	黒色土	
2 線 燐埴土	灰褐色土	KP 粒少量。焼土粒微量。下部ほど KP 粒が多い。締まりややあり。
3 線 燐埴土	暗褐色粘土	黄褐色多量。
4 線 山地	黃褐色粘質土	地山ローム。上面に KP 粒が少量。

本丸 トレンチ 17 Q セクション㉜		
剖位	土性	内容物
1 線 表土	黒色土	
2 線 燐埴土	灰褐色土	KP 粒少量。焼土粒微量。下部ほど KP 粒が多い。上面がゆるっぽい。締まりあり。
3 線 燐埴土	暗褐色土	直径 5cm ほどの礫少量。
4 線 燐埴土	暗褐色土	

本丸 トレンチ 19 R セクション㉝		
剖位	土性	内容物
1 線 表土	黒色土	
2 線 燐埴土	灰褐色土	KP 粒少量。焼土粒、炭化物粒がともに微量。下部ほど KP 粒が多い。締まりややあり。
3 線 燐埴土	暗褐色土	川原石と共に灰褐色にある。
4 線 燐埴土	暗褐色土	KP 粒少量。鉄酸銅。Q 3 線と類似。

本丸 トレンチ 20 S セクション㉞		
剖位	土性	内容物
1 線 表土	黒色土	
2 線 燐埴土	灰褐色土	KP 粒少量。焼土粒微量。下部ほど KP 粒が多い。上面がゆるっぽい。締まりあり。
3 線 燐埴土	赤褐色土	KP 粒少量。鉄酸銅。Q 4 線と類似。
4 線 燐埴土	黄褐色土	

本丸 トレンチ 20 T セクション㉟		
剖位	土性	内容物
1 線 表土	黒色土	
2 線 燐埴土	灰褐色土	KP 粒少量。焼土粒、炭化物粒とともに微量。下部ほど KP 粒が多い。締まりややあり。
3 線 燐埴土	赤褐色土	焼土粒多量。KP 粒少量。上面に礫が1つ来る。
4 線 燐埴土	黄褐色土	焼土粒少量。

本丸 トレンチ 18 U セクション㉙		
剖位	土性	内容物
1 線 表土	黒色土	
2 線 燐埴土	灰褐色土	KP 粒少量。下部ほど KP 粒が多い。締まりややあり。
3 線 燐埴土	褐色土	KP 粒少量。
4 線 燐埴土	黒褐色土	炭化物粒多量。KP 粒少量。上面に礫が1つ来る。
5 線 燐埴土	赤褐色土	焼土粒少量。
6 線 燐埴土	暗褐色粘土	部分的にこすり形の礫少量。
7 線 山地	に伝い黄褐色土	ローム土主体。上面がややゆるっぽい。

本丸 トレンチ 19 V セクション㉚		
剖位	土性	内容物
1 線 表土	黒色土	
2 線 燐埴土	灰褐色土	KP 粒少量。焼土粒、炭化物粒とともに微量。下部ほど KP 粒が多い。締まりややあり。
3 線 燐埴土	黃褐色土	地山岩盤體全体。KP 粒少量。
4 線 燐埴土	暗褐色土	炭化物粒多量。
5 線 山地	黃褐色粘質土	地山ローム。

本丸 トレンチ 20 W セクション㉛		
剖位	土性	内容物
1 線 表土	黒色土	
2 線 燐埴土	灰褐色土	礫少量。KP 粒微量。締まりややあり。
3 線 燐埴土	黒褐色土	焼土粒、炭化物粒ともに多量。KP 粒中量。礫少量。
4 線 燐埴土	暗褐色土	黄褐色微量。

本丸 トレンチ 21 セクション㉕		
剖位	土性	内容物
1 線 表土	黒色土	
2 線 面土	崩灰褐色砂質土	川原石。小礫少量。灰褐色砂質土少量。
3 線 面土	黃褐色砂質土	礫少量。崩砂少量。
4 線 面土	崩灰褐色砂混土	川原石。小礫主体。
5 線 面土	灰褐色砂質土	礫少量。崩砂多量。
6 線 面土	黃褐色砂質土	岩崩砂少量。

本丸 トレンチ 22 セクション㉖		
剖位	土性	内容物
1 線 表土	黒色土	
2 線 面土	崩灰褐色砂質土	小礫少量。灰褐色砂質土少量。4 線と類似。
3 線 面土	黃褐色砂質土	地山岩盤體全体。ローム土多量。非常に硬く締まる。
4 線 面土	に伝い黃褐色砂質土	礫少量。崩砂少量。
5 線 面土	灰褐色土	ロームブロック中量。KP 粒少量。締まりあり。粘性あり。

表6 本丸 土層注記（4）

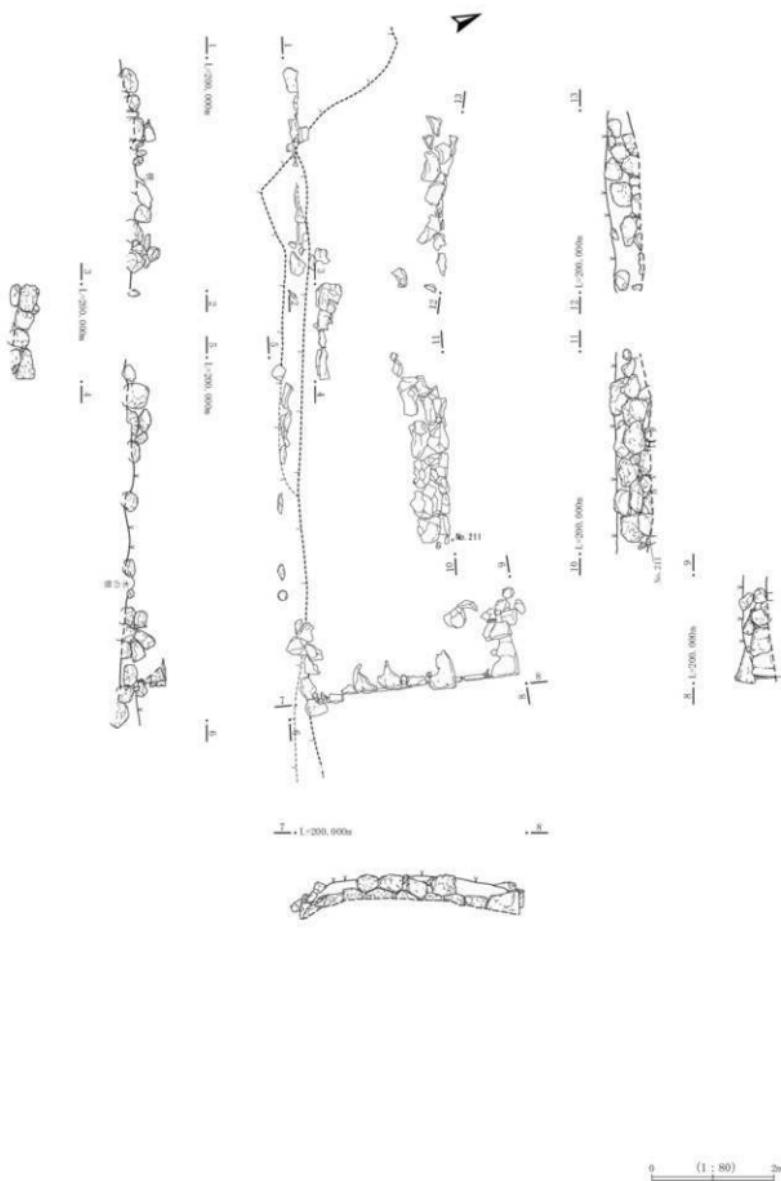
石垣セクション1		内容物
層位	土性	
1層 表土	黒色土。	小礫中量。
2層 (崩落土)	灰褐色雜混土	落石塊多量。灰褐色粘質土中量。
3層 (崩落土)	灰褐色雜混土	灰褐色雜多量。炭化物微量。

石垣セクション2		内容物
層位	土性	
1層 表土	黒色土。	小礫中量。
2層 (崩落土)	灰褐色雜混土	落石塊多量。灰褐色粘質土中量。
3層 (崩落土)	灰褐色雜混土	灰褐色雜多量。
4層 地山	黄褐色岩盤	

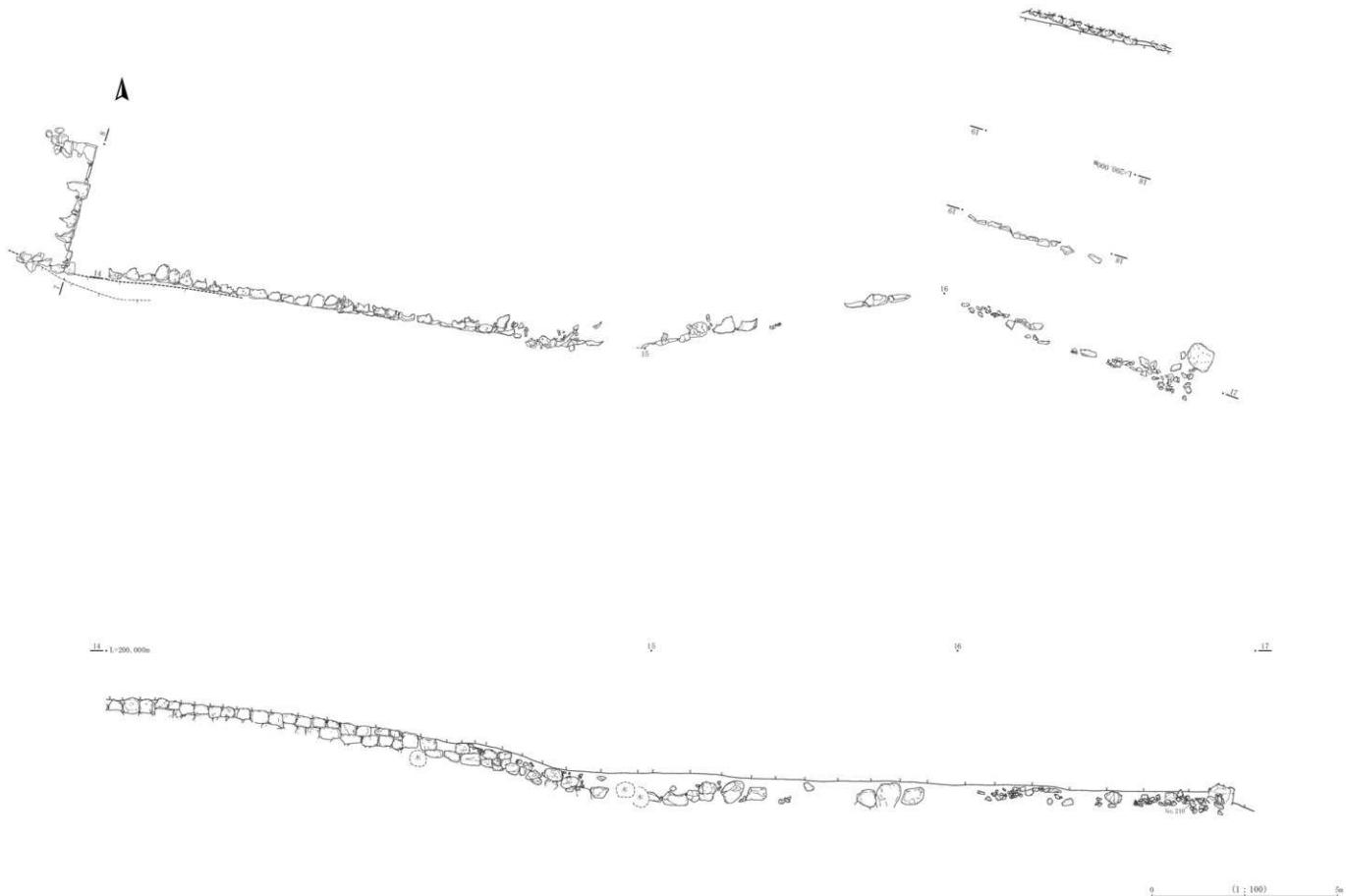
石垣セクション3		内容物
層位	土性	
1層 表土	黒色土	小礫中量。
2層 (崩落土)	灰褐色土	落石塊多量。灰褐色粘質土中量。
3層 (崩落土)	黄褐色土	黄褐色土（地山岩盤に類似）主体。

表7 本丸遺構観察表

No.	遺構番号	位置	長×幅×深 (m)	形状	层数	備考
1	SX-1	2トレンチ	(0.7) × - × 0.3	不整	1層	
2	SX-2	2トレンチ	(0.95) × - × 0.65	不整	1層	
3	SK-3	8トレンチ	(1.05) × - × 0.65	不整	1層	
4	SX-4	14トレンチ	2.9×2.8×0.48	円	2層	
5	SB-5	13・14トレンチ	11.6×5.0×-	南北棟	-	
6	SB-6	10・11・12トレンチ	-	東北棟	-	
7	SX-7	9・11トレンチ	7.0×5.8×-	-	-	
8	SX-8	12・14トレンチ	4.0×- × -	-	-	
9	SX-9	9トレンチ	(6.3) × - × -	-	-	
10	SX-10	13トレンチ	(1.8) × (0.7) × -	-	-	



第39図 本丸 正門石列



第40図 本丸 正門外石列

(2) 古本丸

古本丸は、本丸のすぐ北側に隣接しており、北面がほぼ直線、西～南面にかけ丸みを帯びた蒲鉾状の形状である。高さ1～1.5mの土塁が南・北・西面に巡り（南・北面は半分程度）、東面には台形状の突出部が設けられ、横矢掛りとなっている。北西隅には現在もきれいに切岸が残っており、曲輪の保存状況は良好である。平成21年度に実施された第1次調査では、古本丸南側に本丸からの出入口付近に確認された元位置のままと思われる方形の礎石を基準とし、長さ約70mのトレンチを東西方向（トレンチ1～6）と南北方向（トレンチ7～14）に、十文字に設定して土の堆積状況などを確認した（第41図トレンチ配置図）。

東西トレンチの西側、トレンチ1にて、表面観察で確認された土塁をたち割った。その結果土塁は、地山を削り出したのではなく、人為的に積まれたもので、砂利、粘土が交互に積まれ、単に盛土してはおらず、曲輪内の排水を考えたつくりとなっていることがわかり、それはトレンチ1A、1B、1Cと周辺の状況を把握するため拡張したトレンチでも確認できた。

土塁部分のトレンチ1、出閣状のトレンチ6、本丸側の曲輪斜面のトレンチ14以外の曲輪内平坦面においては、表土を掘削除去すると、すぐ曲輪を利用するために整地された面が確認された。

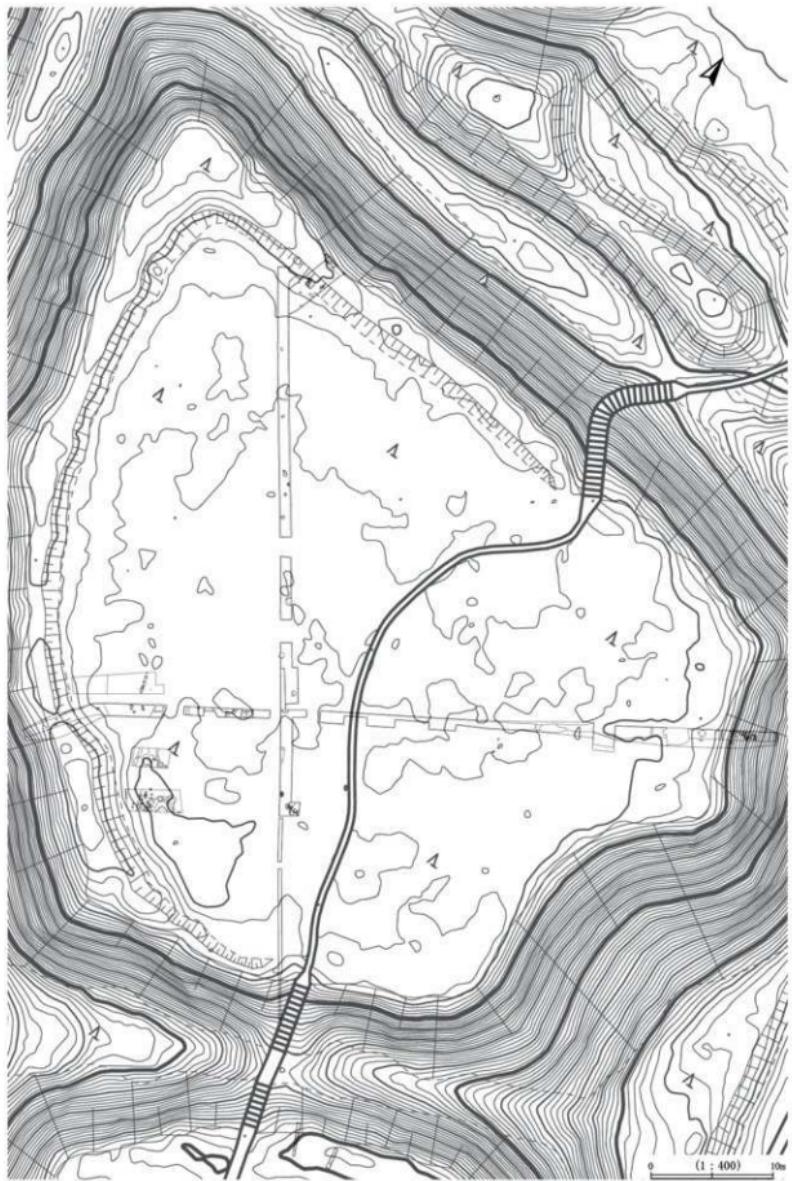
中央付近のトレンチ3では、整地層中に埋められて礎石と思われる石材が1つ発見された。しかし周辺からその他の礎石は確認できなかった。

また東西トレンチの中央やや東よりで曲輪平坦面のトレンチ4では、表土直下に地山岩盤層が確認され、上層に存在するはずの地山ローム土層は整地の段階で掘り飛ばされていた。また近くの整地層の下から掘立柱痕（図版二）が確認された。この新旧関係により、もともとは掘立柱建物が建っていたが、その後整地盛土し、そこに礎石立の建造物があったと思われる。

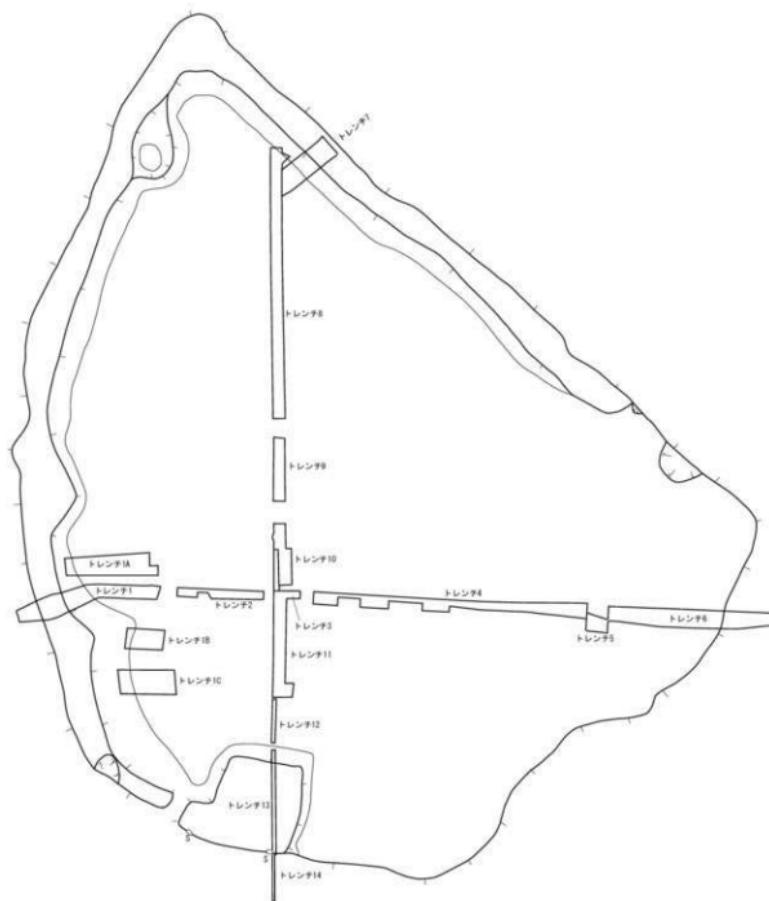
東西トレンチを更に詳しく見ると、トレンチ1（第44図）、トレンチ3（第44図）、トレンチ6（第45図）の精査から古本丸の改変は、トレンチ3で確認された掘立柱痕跡とそれを人為的に埋め、整地した後に礎石を設置した時期、さらに礎石を埋め殺して整地した時期が確認された。このことから、古い段階から順に①掘立柱、②礎石、③更地といった大きく3時期が想定できた。西側土塁トレンチ1では、現在土塁が確認できる曲輪の外側から幅約8mが人為的盛土であり、最も古い使用時期である地山ローム層まで削平し、56層までの盛土により低い土塁と内側の溝のある時期から順に盛土による改変が見られる。26層までの曲輪の外側に平坦面が拡張された時期、12層まで盛土を行い土塁の外側に犬走状の傾斜変換地点からわずかな空間ができ、内側に溝上のくぼみをもたなくなる時期、土塁外側の空間を埋め土塁の幅が広くなり、内側で礎石建物が想定できる時期、土塁をさらに高く積み、平坦面では礎石を埋め殺した時期と、全体で最大5時期が想定された。

トレンチ6では、横矢をきかせた突出部の大半は人為的に盛土されており、地山ローム土層を確認できた部分では、これを掘り込んだ柱状掘り込みと考えられる遺構（SP-35、36、SK-37）も確認され、トレンチ1同様に盛土部分の5時期が確認できた。トレンチ1、6の改変は、トレンチ3で見られる掘立柱の時期、礎石利用の時期、更地の時期とも整合しており、建物構造の面では、曲輪の大半を地山岩盤が露出するまで掘削し掘立柱を使用した時期と、これらを埋め、外側に拡張し礎石を使用した時期、礎石を埋め平坦な更地にした時期と考えられる。

南北トレンチでは、トレンチ8よりかわらけ溜り（SX-1）が発見された（第47図）。明確な遺構の掘り込みは確認できず、最も新しい整地土層中に一括廃棄されていたことから、整地



第41図 古本丸 地形図



1 : 400 10m

第42図 古本丸 全体平面図

作業中の何らかの儀式の可能性も考えられ、出土したかわらけについては後述する。

曲輪造成にともなう整地した範囲は、トレンチ4で表土直下に地山岩盤層が露出していることから曲輪の中心部を除きほぼ全面整地されていると思われる。その際、トレンチ11の調査からSK-47という確認面で直径1.2m、最終整地面でも直径約3mの楕円形のくぼみが確認されている。トレンチ11の東側（トレンチ12に近い方）に0.1m程の平らな河原石が鹿沼軽石層（KP）直上に散乱していたことから水場遺構のようないわゆる可能性もあるが、確認面までの調査であったため、現状では土坑として捉えるが、詳細は今後の調査に委ねたい。

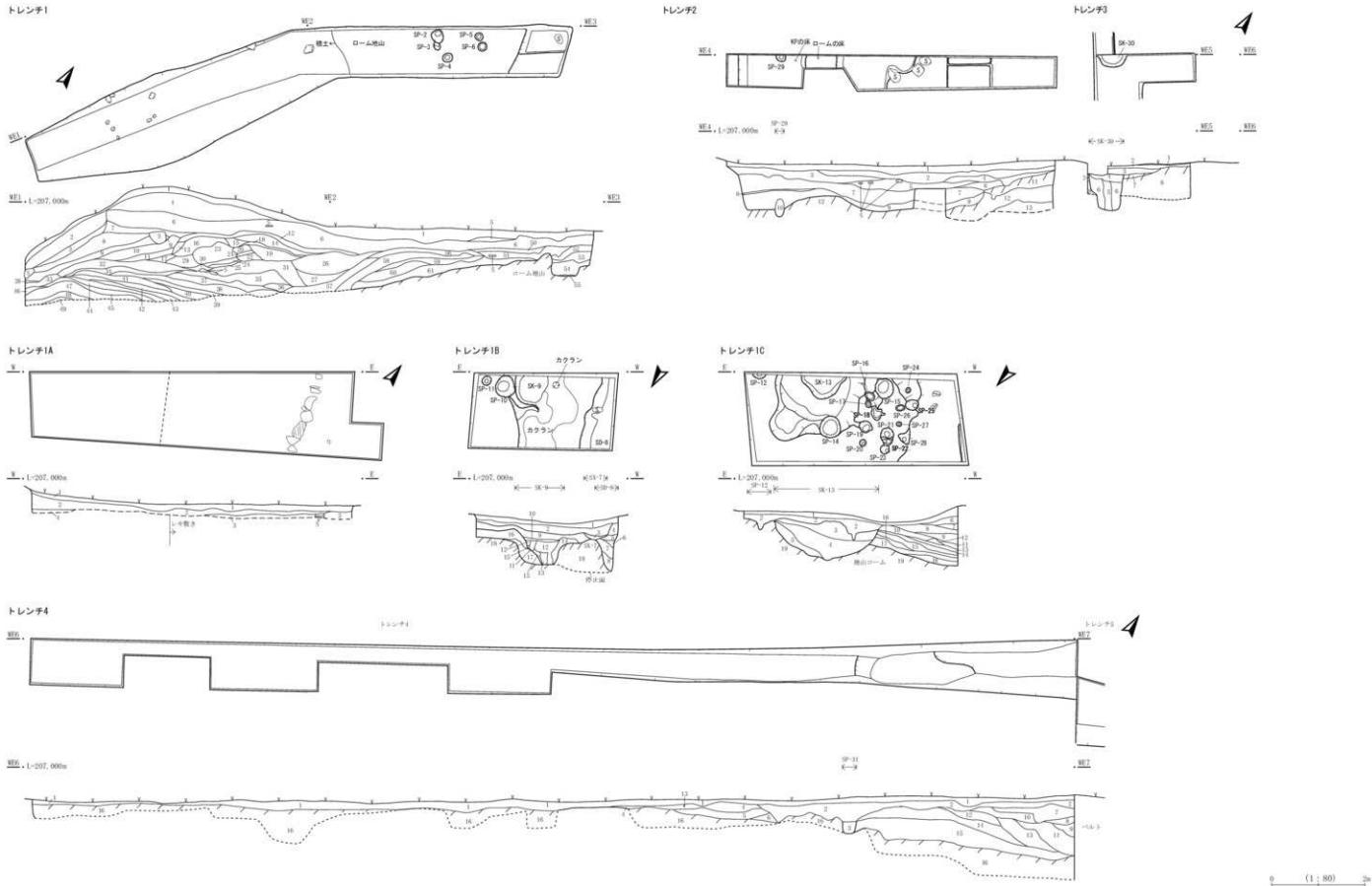
南側の本丸側虎口にあたるトレンチ13では、トレンチ設定時の基準とした方形の礎石以外に同じような礎石を確認できず、門跡等の出入口施設を確認できなかった。しかし、古本丸平坦面側に方形の僅かな高まりを確認することができ、虎口としての施設があった可能性はある。この虎口と考えられる南側は、本丸と堀によって隔てられているが、一か所だけ低く土橋状につなる部分があり、つながった部分の古本丸側にこの方形の礎石と高まりがあるため虎口であると想定できるが、これが虎口としてどういったものなのかまでは、表面観察では不明であった。曲輪の状況や、本丸と古本丸間の堀について確認するため、古本丸南側斜面にトレンチ14を設定した。その結果、斜面部分では地山である鹿沼軽石層（KP）も確認でき、本丸と古本丸間の堀については、元の地形的には1つであった場所をこの堀を掘ることで2つに分けたと思われる。現在古本丸側からは、本丸が見渡せるくらい高低差があるが、古本丸側を盛土して構築しているのではなく、元の地形的を利用して構築された構造であると考えられた。

出土遺物には、土師質土器（かわらけ）、陶磁器片、瓦片、金属製品（釘）などがある。そのほとんどが表採もしくは表土中の採取である。陶磁器、瓦については後述の別項で記載するが、特筆すべきは、かわらけ溜り（SX-1）から出土した一括資料である。良好な一括資料としてかわらけ79個体が発見されたが、トレンチ調査の為、遺構全てを調査していないため、今後の調査にて更なる資料の発見が見込める。またそのさらに下層で、遺構を人為的に埋め戻した後の整地土層より、大窓期の擂鉢やかわらけ溜り出土品より古手な様相のかわらけが発見された。これによりかわらけは、層位的な視点から新旧関係がわかった。

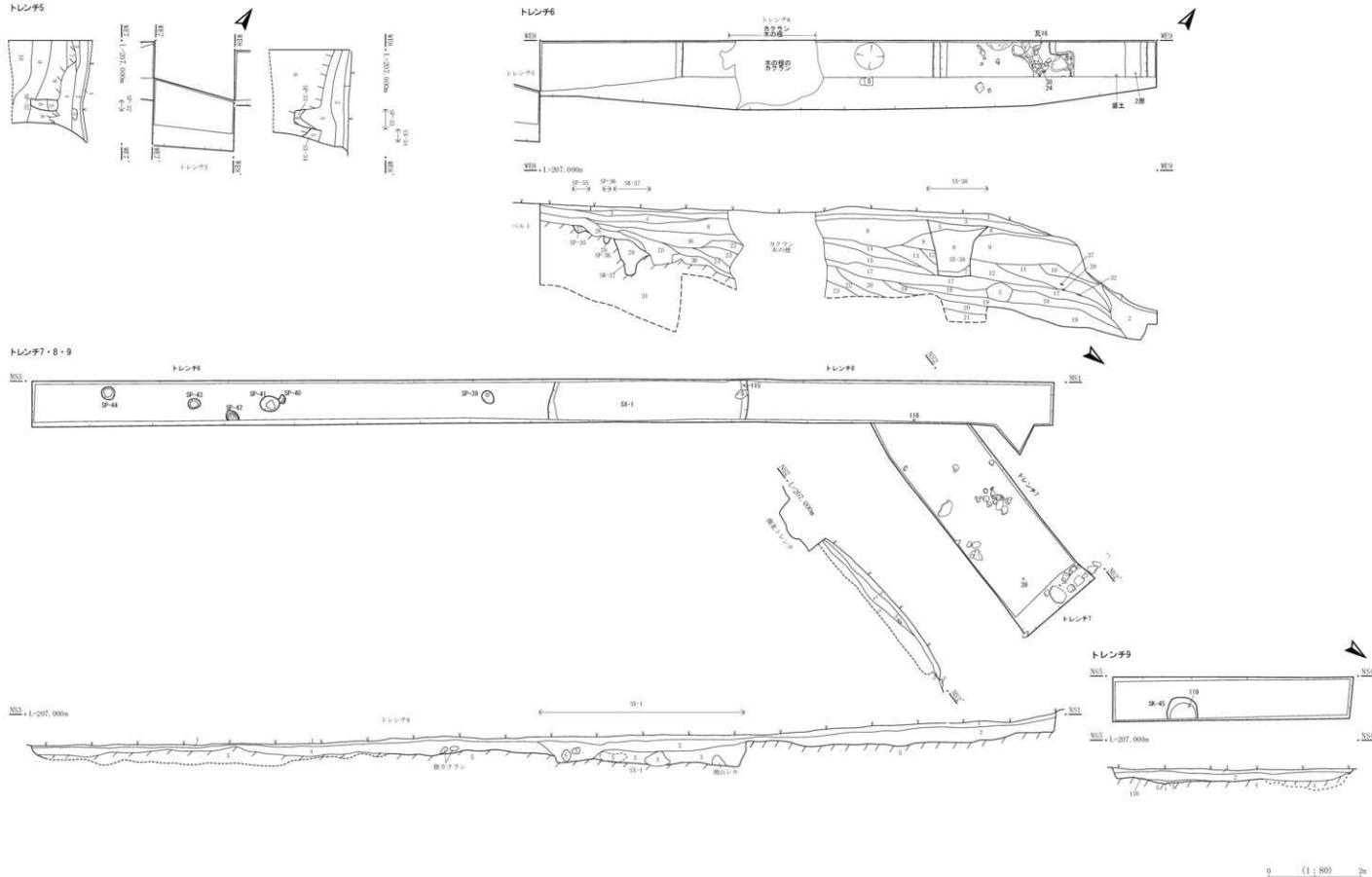
かわらけ溜り（SX-1）のかわらけ（第67～71図）は、現在の段階で大別すると大小の2種類が認められた。ほとんどが大きいタイプのもので、口径8.5～9.3cm、底径4.7～5.2cm、器高2.2～2.5cmである。小さいタイプは少なく、口径6.7～7.0cm、底径3.8～4.0cm、器高1.6～2.0cmである。すべてロクロ成形であり、大きいタイプの内面には渦巻状の凹凸が残り、中央部分には指ナデ痕がみられる。外面底部には回転糸切り離し痕跡が残る。この様な特徴の類似した出土例が栃木県内では見られないが、同じ那珂川流域にあたる茨城県那珂郡東海村「松村白根



第43図 盛土の状況

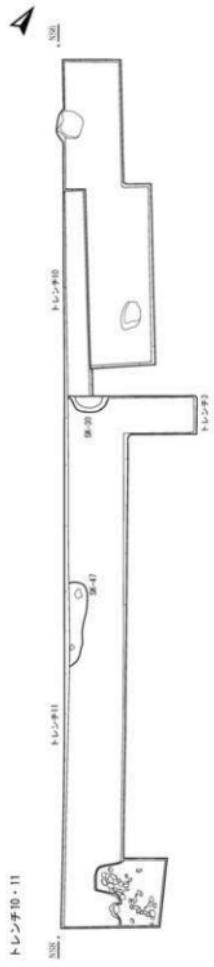


第44図 古本丸 トレンチ1～4

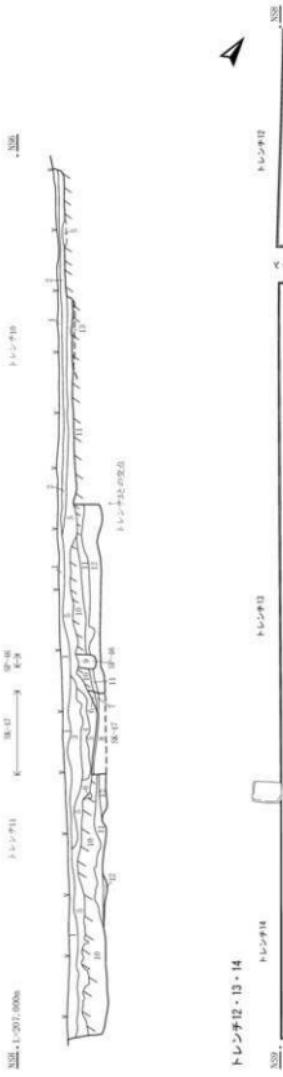


第45図 古本丸 トレンチ5~9

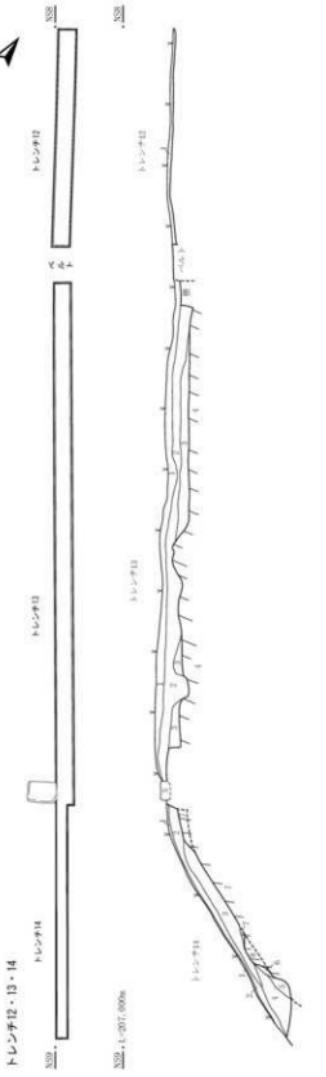
トレンチ 10・11



トレンチ 12・13・14



トレンチ 12・13・14



0 (1 : 80) 2m

第 46 図 古本丸 トレンチ 10～14

表8 古本丸 土層注記(1)

古本丸	トレンチI	土性	内容物
1 線	表土	黒褐色	縦まりなし。粘性あり。
2 線	崩落土	暗褐色混土	直径20cm以下の黄褐色岩礫混多量。縦まりがなく崩れやすい。
3 線	崩落土	暗褐色	2 線と同色だが礫主体。大きな礫は端のみで。こぶし以下が主体。
4 線	底土	暗色砂質土	小礫(直径2~5cm)少量。ローム粒少量。
5 線	底土	灰褐色	礫主体。トレンチ I の礫層と類似。
6 線	底土	明褐色砂質土	平らな川原石が部分に入る。
7 線	底土	褐色	削られた岩盤層少量。炭化物粒少量。
8 線	底土	黒褐色砂質土	黒色土一部礁層。非常にかたく崩れる。
9 線	底土	褐色	地山岩盤の沙礫主体。縦まりあり。
10 線	底土	褐色	縦主体。トレンチ I の礫層と類似。
11 線	底土	青灰色	礫主体。10 線と類似。
12 線	底土	褐色	ローム粒多量。青灰色礫少量。縦まりあり。
13 線	底土	暗褐色	黒色土が礫層に入る。
14 線	底土	暗褐色	ローム粒多量。小礫少量。炭化物(直径2~5cm)微量。
15 線	底土	青灰色	砂利少量。
16 線	底土	墨灰色	ローム粒少量。赤い砂礫微量。粘性あり。
17 線	底土	黃褐色ローム	砂少量。
18 線	底土	暗褐色砂礫混土	砂少量。
19 線	底土	暗褐色	引盤礫主体。
20 線	底土	黒褐色	旧土土を駆んだものか。
21 線	底土	暗褐色	ローム粒礁層。
22 線	底土	黒褐色	ローム粒少量。
23 線	底土	青灰色	
24 線	底土	黃褐色ローム土	引盤砂礫礁層。非常に硬く崩れる。
25 線	底土	暗褐色	非常に縦まる。
26 線	底土	褐色灰褐色	砂利主体。
27 線	底土	橙色	こぶし程度の岩盤層主体。
28 線	底土	黒褐色	KP 粒少量。9 線と類似。
29 線	底土	褐色	直径1cm位の礁層少量。
30 線	底土	黒褐色混土	直径1cm位の礁層少量。26 線と類似。
31 線	底土	暗褐色	直径1cm位のローム粒少量。
32 線	底土	暗褐色	
33 線	底土	褐色	
34 線	底土	黄褐色	KP 粒多量。
35 線	底土	青褐色	KP 粒微量。岩盤の割り石。
36 線	底土	褐色	
37 線	底土	褐色	ローム土のような粘質土少量。非常に縦まる。
38 線	底土	褐色	
39 線	底土	黑色	
40 線	底土	暗褐色	
41 線	底土	黒褐色混土	引盤小礫多量。ローム粒少量。43 と類似。
42 線	底土	暗褐色	KP 粒少量。砂利。微量。
43 線	底土	黒褐色混土	ローム粒少量。41 と類似。
44 線	底土	青色軽石	KP 粒主体。砂利少量。
45 線	底土	黒褐色	ローム粒礁層。
46 線	底土	暗褐色	
47 線	底土	黄褐色	ローム主体。KP 粒多量。
48 線	底土	明褐色	ローム主体。
49 線	底土	黒褐色	
50 線	底土	褐色	ロームブロック少量。
51 線	底土	明褐色	礫少量。
52 線	底土	褐色砂質土	礫少量。
53 線	底土	暗褐色	
54 線	底土	明褐色	赤い粒微量。
55 線	堆積土	褐色	溝の内堆積物か。
56 線	底土	褐色	ロームブロック多量。
57 線	底土	暗褐色	ローム粒少量。
58 線	底土	黒褐色	ローム粒礁層。引盤砂礫少量。
59 線	底土	黒褐色	ローム粒礁層。
60 線	底土	明褐色	ローム粒少量。
61 線	底土	暗褐色	ロームブロック微量。

古本丸 トレンチ I A

辨位	土性	内容物
1 線	表土	黒褐色
2 線	底土	灰褐色砂質土
3 線	底土	に赤い黄褐色
4 線	底土	褐色

表9 古本丸 土層注記(2)

古本丸 トレンチ1B		内容物
剖位	土性	
1剖	表土 黒色土	細まりなし。粘性あり。
2剖	盛土 前褐色の頁土	砂多量。
3剖	堆積土 黒褐色土	炭化物粒少量。地土粒微細。SK-7
4剖	盛土 にぶい黄褐色土	ローム主体。SD-8
5剖	盛土 黄褐色土	ローム主体。4剖より明るい。SD-8
6剖	盛土 黄褐色土	SD-8
7剖	盛土 前灰褐色土	ローム粒多量。白色粒少量。SD-8
8剖	盛土 黄褐色土	ローム主体。橙色粒微細。SD-8
9剖	盛土 浅色土	ローム粒少量。SK-9
10剖	盛土 浅色土	ロームブロック微量。縫隙量。9剖と相似。SK-9
11剖	柱根 黑褐色土	杣又は柱の礫か。SK-9
12剖	盛土 前褐色土	上面に炭化物粒少量。SK-9
13剖	盛土 浅色土	ローム粒少量。SK-9
14剖	盛土 前褐色土	ローム主体。間に黒っぽいロームが混じる。SK-9
15剖	盛土 にぶい黄褐色土	ロームブロック主体。SK-9
16剖	盛土 黄褐色土	ロームブロック多量。
17剖	盛土 黄褐色土	ローム主体。
18剖	地山 黄褐色ローム	

古本丸 トレンチ1C		内容物
剖位	土性	
1剖	表土 黒色土	
2剖	盛土 前灰褐色土	砂理少量。
3剖	盛土 黄褐色土	ローム主体。SK-13
4剖	盛土 にぶい黄褐色土	ローム粒多量。炭化物粒少量。黑色土が部分的にに入る。SK-13
5剖	盛土 明黄褐色土	ローム主体。縦く縦まる。SK-13
6剖	盛土 前褐色土	下部に砂利少量。
7剖	盛土 前褐色土	ローム粒多量。
8剖	盛土 前褐色砂質土	ローム粒少量。縦まりなし。
9剖	盛土 前青灰色砂理	
10剖	盛土 浅色土	ローム粒少量。炭化物粒少量。
11剖	盛土 前青灰色土	炭化物粒少量。粘性あり。
12剖	盛土 前青灰色砂理	
13剖	盛土 黑褐色土	炭化物粒少量。
14剖	盛土 黄褐色土	炭化物粒少量。縦く縦まる。
15剖	盛土 浅色土	炭化物粒少量。
16剖	盛土 前褐色土	ローム主体。炭化物粒少量。
17剖	盛土 前褐色土	炭化物粒少量(粒は13~16剖よりやや大きい)。
18剖	盛土 暗褐色粘質土	ロームブロック多量。炭化物粒少量。
19剖	地山 黄褐色ローム	

古本丸 トレンチ2		内容物
剖位	土性	
1剖	表土 黒色土	
2剖	盛土 前褐色土	
3剖	盛土 浅色土	直徑5cm以下の砂少量。炭化物粒極微量。
4剖	盛土 浅色土	下部にKP粒が微量。3剖と相似。
5剖	盛土 褐色膠泥質土	こよし大の砂少量。
6剖	盛土 明褐色土	KP粒多量。
7剖	盛土 浅色粘質土	小砂微量。
8剖	にぶい褐色粘質土	ローム粒主体。
9剖	盛土 前褐色粘質土	
10剖	盛土 黑褐色土	縦まりなし。SP-29
11剖	地山 黄褐色土	KP粒主体。
12剖	地山 黄褐色粘質土	非常に硬く固まる。粘性あり。
13剖	地山 褐色膠泥粘質土	

古本丸 トレンチ3		内容物
剖位	土性	
1剖	表土 黒色土	
2剖	表土 前褐色土	やや砂っぽい。
3剖	盛土 前褐色土	ローム主体。
4剖	盛土 前褐色土	縫少量。整地跡か。SK-30
5剖	柱根 黑色土	周辺の埋入。SK-30
6剖	柱の埋土 浅色土	KP粒と黒褐色の膠状の埋土。SK-30
7剖	地山 褐色膠泥ローム土	
8剖	地山 浅色膠	

表 10 古本丸 土層注記 (3)

古本丸 トレーンチ4		
層位	土性	内容物
1層 表土	黒色土	
2層 覆土	稍潤色覆土	
3層 杖痕	稍潤色土	繩多量, SP-31
4層 欠土	黄潤色土	赤色砂少量。
5層 欠土	黑色土	ロームブロック微量。
6層 欠土	褐色粘質土	ローム主体。
7層 欠土	稍潤色土	ロームブロック微量。黑色土少量。
8層 欠土	褐色粘質土	ローム主体。黑色土少量。
9層 欠土	黄色潤色粘土	ローム主体。
10層 欠土	明潤色土	KP 粒主体。黑色土少量。
11層 欠土	明潤色土	KP 粒主体。
12層 欠土	褐色	
13層 欠土	褐色粘質土	ローム。
14層 覆土?地山?	褐色砂質土	岩盤砂少量。ロームブロック微量。河原石混じる。
15層 覆土?地山?	褐色	岩盤砂質主体。
16層 地山	稍潤色土	岩盤。

古本丸 トレーンチ5西面		
層位	土性	内容物
1層 表土	黒色土	
2層 欠土	雜混り稍潤色土	繩多量。
3層 欠土	稍潤色土	ローム粒多量。
4層 欠土	稍潤色混土	ロームブロック微量。岩盤砂礫少量。
5層 杖痕覆土	黒色土	SP-32
6層 稍潤色土	明潤色土	SP-32
7層 地山	褐色土	
8層 地山	黄潤色土	ローム土。
9層 地山	明潤色輕石	KP 粒下部に白っぽいKP粒あり。
10層 地山	明潤色土	ローム土。

古本丸 トレーンチ5東面		
層位	土性	内容物
1層 表土	黒色土	
2層 欠土	稍潤色土	
3層 欠土	稍潤色混土	ロームブロック微量。岩盤砂礫少量。炭化物粒微量。白色(直徑10cm粒)繩微量。SP-33
4層 剥離土	黄潤色土	ロームブロック主体。SP-33
5層 墓土	黄潤色土	ローム主体。非常に締まる。SX-34
6層 地山	黄潤色ローム土	ローム土。

古本丸 トレーンチ6		
層位	土性	内容物
1層 表土	黒色土	
2層 剥落土	稍潤色土	繩多量。
3層 5次植土	馬蹄形溝混土	
4層 5次植土	灰潤色混土	
5層 4次植土	黑色砂礫	黒色の砂礫の中に黄色のものが少量混じる。SX-38
6層 4次植土	稍潤色土	SX-38
7層 4次植土	褐色潤混土	SX-38
8層 4次植土	稍潤色砂質土	砂礫少量。
9層 4次植土	黃潤色粘質土	
10層 3次植土	稍潤色混土	青色繩多量。
11層 3次植土	黃潤色土	こぶし大の黄色繩多量。
12層 3次植土	黑色土	砂粒多量。
13層 3次植土	褐色粘質土	繩少量。
14層 3次植土	黃潤色輕石土	上部に赤い繩少量。
15層 3次植土	黃潤色混土	14層より繩少多。
16層 3次植土	稍潤色輕石質土	8層より繩が大きくなれやすい。
17層 3次植土	黑色砂質土	
18層 2次植土	にほい黄潤色混土	直徑15cm位の繩主体。
19層 2次植土	褐色粘質土	ロームブロック微量。繩少量。
20層 2次植土	黑色土	
21層 2次植土	褐色土	河原石が混る。
22層 2次植土	にほい黄潤色粘質土	ローム粒多量。
23層 2次植土	褐色潤混り粘質土	小繩少量。炭化物粒少量。
24層 2次植土	稍潤色輕石土	岩盤繩主体。KP 粒少量。
25層 2次植土	褐色潤混土	岩盤繩少量。下部にロームブロック微量。
26層 1次植土	にほい黄潤色粘質土	KP 粒微量。

表 11 古本丸 土層注記 (4)

27 刷	I 次盛土	黄褐色ローム土	SP-35
28 刷	I 次盛土	黄褐色ローム土	ローム主体。SP-35
29 刷	I 次盛土	明黄色褐色土	KP 粒微量。白色粒少量。炭化粒微量。SK-37
30 刷	盛土	褐色粘質土	ローム土主体。鐵微量。KP 粒微量。
31 刷	地山	にぶい黄褐色ローム土	ローム土。

古本丸 トレンチ 7

刷位	土性	内容物
1 刷	表土	黒色土。
2 刷	上草盛土	黒褐色細粒混土。
3 刷	上草盛土	河原石等の礫が部分的に入る。ローム粒少量。細粒少量。炭化粒少量。外側上面に鉛石あり。

古本丸 トレンチ 8

刷位	土性	内容物
1 刷	表土	黒色土。上面は腐泥土で被りなし。下部はやや緑色。
2 刷	盛土	暗褐色細粒土。地山と同様。人為堆積。
3 刷	盛土	黒褐色細粒混土。周囲の暗褐色土少量。部分的に固まる。人為的堆積。3 層上面かわらけ縁。
4 刷	盛土	赤褐色砂利
5 刷	地土	トレンチヨリの 2 刷と類似。

古本丸 トレンチ 9

刷位	土性	内容物
1 刷	表土	黒色土。
2 刷	整地層	疊混り粘土。トレンチヨリの 4 刷と類似。
3 刷	整地層	褐色粘質土。疊少量。
4 刷	地山	暗赤褐色土。
5 刷	地山	黄褐色土。

古本丸 トレンチ 10,11(共通)

刷位	土性	内容物
1 刷	表土	黒色土。
2 刷	盛土	暗褐色細粒混土。砂礫多量。鉄石あり。緑色あり。
3 刷	盛土	暗褐色土。
4 刷	盛土	褐色土。ローム粒多量。KP 粒少量。
5 刷	盛土	褐色粘質土。ローム主体。KP 粒多量。
6 刷	崩落土	黒褐色土。ローム粒少量。KP 粒少量。SK-47
7 刷	盛土	ローム主体。人為堆積。非常に緑く緑まる。SK-47
8 刷	盛土	明褐色鉄石 KP 粒主体。直徑 20cm の塊を割合す。SK-47
9 刷	盛土	褐色土。KP 粒多量。5 刷と類似。SP-46
10 刷	地山	明褐色鉄石
11 刷	地山	暗褐色粘質土。ローム土。
12 刷	地山	褐色粘質土。ローム土。
13 刷	地山	灰色岩盤

古本丸 トレンチ 12, 13(共通)

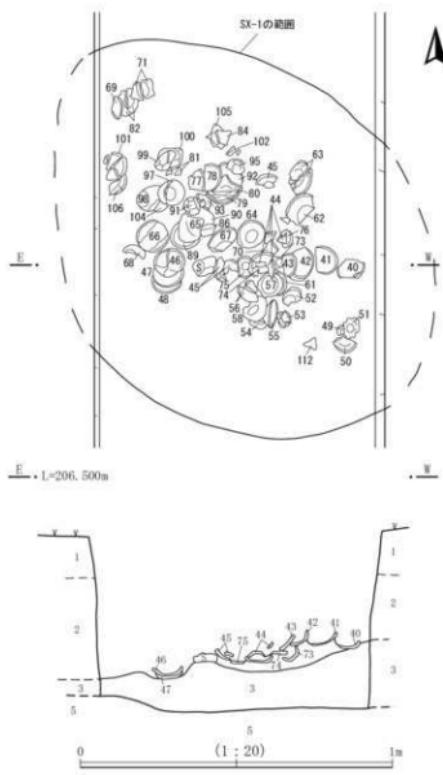
刷位	土性	内容物
1 刷	表土	黒色土。
2 刷	盛土	加熱色粘質土。河原石など一部入る。遺物少量入る。
3 刷	盛土	暗褐色粘質土。
4 刷	地山	黄褐色ローム。

古本丸 トレンチ 14

刷位	土性	内容物
1 刷	表土	黒色土。
2 刷	盛土	暗褐色土。ローム粒少量。
3 刷	盛土	褐色粘質土。ローム土主体。岩盤砂礫少量。
4 刷	盛土	褐色土。ローム粒多量。砂礫少量。
5 刷	盛土	明褐色土。KP ブロック少量。砂礫少量。
6 刷	崩落土	黃褐色土。KP 主体。褐色ロームブロック微量。
7 刷	地山	褐色粘質土。ローム土。
8 刷	地山	明褐色鉄石 KP 粒。

遺跡」出土資料に類例がみられる。田口睦子氏（2011）による「茨城県考古学会シンポジウム茨城中世考古学の最前線』『県央・県北のかわらけ』によると、この資料はV期16世紀末～17世紀前半にあたる資料となる。しかし、かわらけ溜り（SX-1）のかわらけは、松村白根遺跡出土資料より法量が全体的にやや小さいようだが、形態的な類似性はあると言える。また、かわらけ溜りより新しい上層から17世紀前葉の唐津片などがあるため、烏山城跡古本丸かわらけ溜りの一括資料は、16世紀後半から17世紀初頭の時期と考えられる。

かわらけの新旧関係では、かわらけ溜り（SX-1）より古い出土資料として、口径と底径の差が大きく、ロクロ痕跡を残した長い体部のもの（第65図 古本丸（1）の9、18、第66図 古本丸（2）33、39）や、大型のかわらけ（第66図 古本丸（2）32）があり、かわらけ自体の形態や、同層から16世紀前半の瀬戸美濃製品が出土していることから、15世紀後半から16世紀前半くらいのものと考えられる。



第47図 古本丸 トレンチ8（SX-1）

表 12 古本丸 遺構観察表

No.	遺構番号	位置	長×幅×深 (m)	相状	層数	備考
1	SK-1	8トレンチ	3.4×(0.75)×0.52	不整	1層	かわらけ 74点
2	SP-2	1トレンチ	0.3×0.26×0.2	門	1層	
3	SP-3	1トレンチ	0.18×0.14×0.1	楕円	-	
4	SP-4	1トレンチ	0.21×0.18×0.24	門	-	
5	SP-5	1トレンチ	0.18×0.18×0.17	門	-	
6	SP-6	1トレンチ	0.18×0.18×0.26	門	-	
7	SK-7	1Bトレンチ	0.5×-0.1	門	1層	
8	SD-8	1Bトレンチ	(1.5) × (0.25) × 0.95	不明	5層	
9	SK-9	1Bトレンチ	(1) × (0.55) × 0.65	不明	7層	
10	SP-10	1Bトレンチ	(0.45) × 0.4 × 0.21	楕円	-	
11	SP-11	1Bトレンチ	0.2×0.18×0.17	門	-	
12	SP-12	1Cトレンチ	(0.3) × (0.1) × 0.15	不明	1層	
13	SK-13	1Cトレンチ	(1.0) × (0.05) × 0.85	楕円	3層	
14	SP-14	1Cトレンチ	0.45×0.45×0.44	門	-	
15	SP-15	1Cトレンチ	0.4×0.4×0.26	門	-	
16	SP-16	1Cトレンチ	0.2×0.15×0.21	楕円	-	
17	SP-17	1Cトレンチ	0.15×0.12×0.17	楕円	-	
18	SP-18	1Cトレンチ	0.3×0.3×0.45	不整	-	
19	SP-19	1Cトレンチ	0.3×0.23×0.5	門	-	
20	SP-20	1Cトレンチ	0.15×0.15×0.28	門	-	
21	SP-21	1Cトレンチ	0.28×0.2×0.58	楕円	-	
22	SP-22	1Cトレンチ	0.22×0.12×0.55	楕円	-	
23	SP-23	1Cトレンチ	0.18×0.18×0.47	門	-	
24	SP-24	1Cトレンチ	0.1×0.1×0.28	門	-	
25	SP-25	1Cトレンチ	0.28×0.2×0.16	楕円	-	
26	SP-26	1Cトレンチ	0.2×0.12×0.42	楕円	-	
27	SP-24	1Cトレンチ	0.1×0.1×0.17	門	-	
28	SP-28	1Cトレンチ	0.3×0.24×0.35	楕円	-	
29	SP-29	2トレンチ	(0.2) × (0.15) × 0.15	門	1層	
30	SK-30	3トレンチ	0.75×(0.26) × 0.8	不明	3層	
31	SP-31	4トレンチ	(0.3) × (0.3) × 0.25	不明	1層	
32	SP-32	5トレンチ	(0.2) × -0.6	不明	2層	
33	SP-33	5トレンチ	(0.5) × -0.54	不明	2層	
34	SK-34	5トレンチ	(0.25) × -0.35	不整	1層	
35	SP-35	6トレンチ	(0.2) × -0.14	不明	1層	
36	SP-36	6トレンチ	(0.15) × -0.15	不明	1層	
37	SK-37	6トレンチ	(0.8) × -0.75	不明	1層	
38	SK-38	6トレンチ	1.34×-1.2	不明	3層	セクション図中
39	SP-39	8トレンチ	0.31×0.25×0.24	楕円	-	
40	SP-40	8トレンチ	0.18×0.15×0.17	楕円	-	
41	SP-41	8トレンチ	0.42×0.35×0.14	楕円	-	
42	SP-42	8トレンチ	0.25× (0.25) × 0.46	楕円	-	
43	SP-43	8トレンチ	0.27×0.22×0.42	楕円	-	
44	SP-44	8トレンチ	0.3×0.3×0.17	門	-	
45	SK-45	9トレンチ	0.65× (0.4) × 0.65	楕円	-	セクション図中
46	SP-46	11トレンチ	0.22×-0.35 セクションのみ	不明	1層	
47	SK-47	11トレンチ	1.38×0.29× (0.3)	楕円	3層	

(3) 西城

西城は鳥山城跡の西端に存在する曲輪である。この曲輪の周囲には堀底道が巡り、島状に独立した様相である。全体的な平面形は北辺を長辺とする長方形で、その中に東から西へ低くなる三段の平坦面がある。三段の東側にあたり、上段の東辺、中段の北辺には部分的に土塁が確認されている。調査を実施した中段での標高は約188mと位置関係からみても東側の古本丸から見わたされる関係にある。西城の出入口は2か所あり、釜ヶ入口から若狭曲輪の下を通過し入る南側と、中城の西側堀底道を通る東側が想定される。

調査は平成29年度から平成30年度にかけて実施した。

調査では三段ある平坦面のうち最も面積の広い中段を調査区とし、中でも三次元デジタルによる測量調査において方形の高まりが確認された北東エリアにおいてグリッドを組み、4m四方のトレンチを設定し、中世段階の痕跡を確認する調査を実施した。

トレンチ4、5（第49図）では最下層である地山岩盤層より六尺五寸（約197cm）間隔で柱を立てたと想定される柱穴（SB-17）が確認された。建物規模等の詳細は不明であるが、桁行4間梁行2間以上の建造物が想定できる。トレンチ5においては地山岩盤層を掘り、周囲に石を並べ火除とした地床炉（SL-47）が確認された。周囲の石はかなり赤く、焼成痕が見受けられたため、一定期間の使用が認められた。その埋土を箇にかけたが鉄滓などは確認されなかつたことから鍛冶遺構ではなく、日常生活に使用される火除であったと考えられる。

トレンチ8においては大量の礫が出土した。その出土状況においては規則性が認められず、石組も1ヵ所しか確認されていない。鳥山城跡は近代において植林が行われていることから、それによる攪乱の可能性が考えられる。このトレンチでは大小20基余りの土坑・ピットが確認されているが、用途については不明である。

トレンチ12では19基の土坑・ピット群が確認された。SK-55には底面に石が据えられている柱を立てたような痕跡に乏しく、間隔や位置関係に規則性がないため性格については不明である。また、このトレンチでは貿易陶磁器が多く出土した。貿易陶磁器については「2出土遺物（1）」において別に報告しているのでそちらを参照されたい。この貿易陶磁器の中には火を受けて割れたような破片が数点確認されている。火災の可能性が考えられたが、焼土や炭化した柱材など、火災の痕跡は確認されなかつた。また、これらの遺物については遺構に伴うものではなく、整地土中から確認されたものであった。

トレンチ13、14では上端幅約1.7m、深さ約1mの箱築研堀状の溝一条（SD-50）がL字に確認された。トレンチ14でL字に曲がり、調査区外にも延びる。この溝は2回ほど掘り返す作業の様子がセクション図から読み取ることができた（第50図）。溝の作られた年代については溝の底面から逆さになった状態で出土したかわらけ（第76図50）から判断した。このかわらけは15世紀末から16世紀初頭のものと考えられるため、溝使用の最古段階が15世紀末であると考えられる。溝は最終的には人為的に埋め戻され、完全に埋まつたのは埋土中より出土した遺物から、15世紀後半にかけてと考えられる。溝の上端にはピット（SP-101、104、105、108、118～120）が7基確認できた。柱痕のあるものも確認されているが規則性がなく、ピットの規模もばらばらであることから組むものであると判断することが難しく、橋なのか遮蔽物なのかといった性格についてはわかっていない。この溝は段差によって区分けされた西城の中段平坦面をさらに区画する役割を果たしていたことが分かったが、全体像や上端部のピットの性格については今後の面的な調査の課題である。

トレンチ14ではSD-50の上面から土坑（SL-96）が1基確認された（第51図）。焼けた石や焼土が伴っているため炉である可能性が考えられるが、用途については不詳である。時期は判別可能な遺物に乏しく不明であるが、溝が埋まったのちに作られたものであるから、16世紀初頭以降である。

トレンチ15では東西方向に約六尺五寸間隔で組むピットが4基確認された。また、トレンチ外に伸びるため全体の規模は不明だが長辺約1.5m×短辺0.7mの方形の土坑（SK-106）が確認された。出土遺物が無いため用途、年代共に不明である。

その他トレンチについては表土を除去したのみで本格的な調査は実施していない。

出土遺物は実測可能なものについては遺物図版と観察表にまとめた（第73～76図）（表30～34）。

調査の結果、西城は古本丸と同様に地山岩盤層まで掘削し、平坦面を作り出していることが分かった。トレンチ8の東半分までは地山岩盤層まで掘削されており、それより西については地山ローム層が残っている部分もあるため、元々の自然地形は東側に頂部があったことが想定できる。整地の回数は少なくとも2回実施している。まず地山岩盤層まで掘り掘立柱を立て、曲輪中段に溝を掘り、区画して生活をしていた時期と、その区画溝を埋め、礎石建物を利用していた時期の2時期である。西城における最終使用時期については、遺物からみても17世紀～18世紀初頭のものが多く、それ以降の遺物は見受けられない。このことから、西城の使用期間は15世紀末から18世紀初頭にかけてであると想定される。

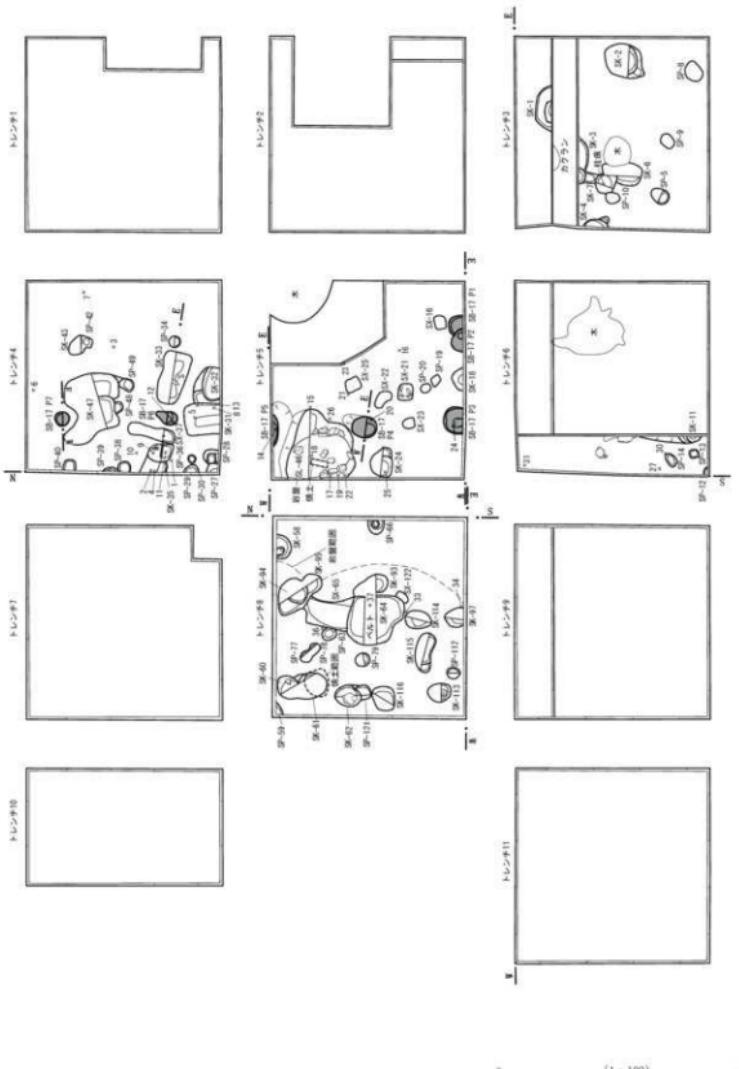


SD-50 土層堆積状況（南面）

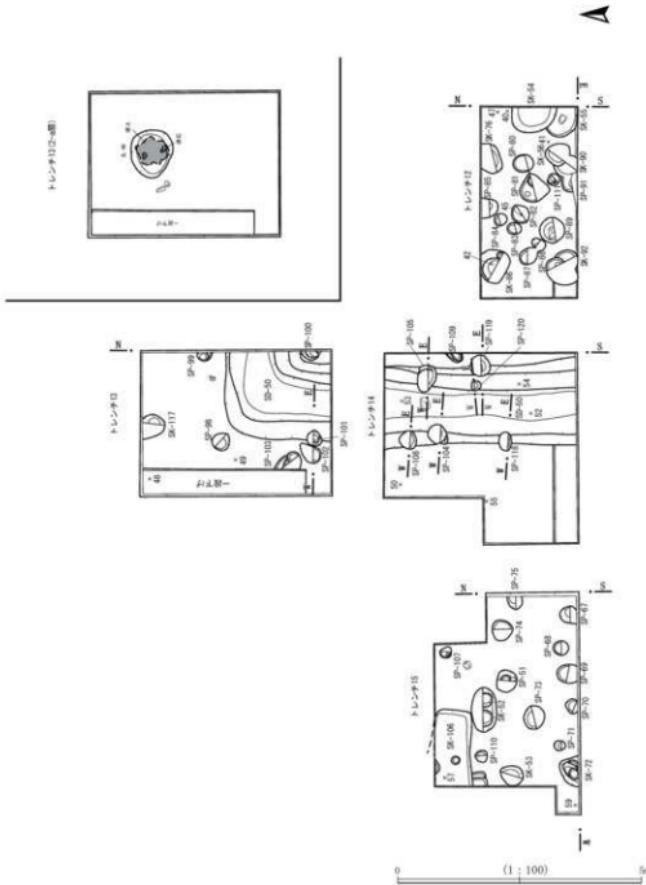


第48図 西城 地形図

A

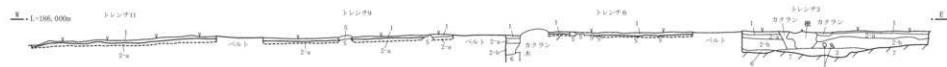


第49図 西城 トレンチ1~11

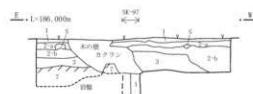


第 50 図 西城 トレンチ 12 ~ 15

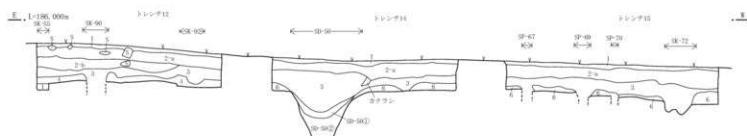
トレーンチ 3・6・9・11 (北面)



トレーンチ 8 (南面)



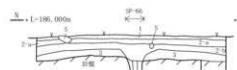
トレーンチ 12・14・15 (南面)



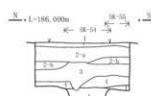
トレーンチ 4・5・6 (西面)



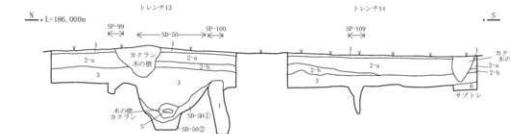
トレーンチ 8 (東面)



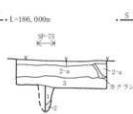
トレーンチ 12 (東面)



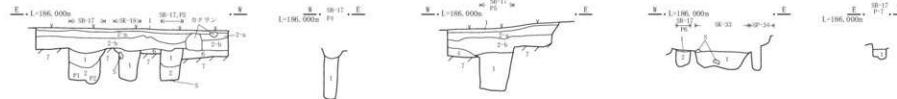
トレーンチ 13・14 (東面)



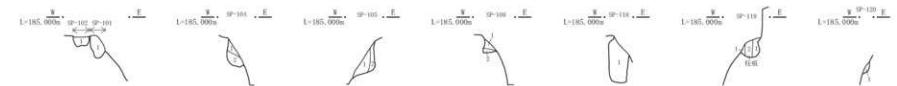
トレーンチ 15 (東面)



38-17 P1～7 セクション



SD-50上端にかかるP群セクション



(1 : 80) 28

第 51 図 西城 トレーンチ セクション図

表 13 西城 遺構觀察表 (1)

No.	遺構番号	位置	長×幅×深 (m)	形状	層数	備考
1	SK-1	3トレンチ	0.96×(0.34)×0.5	箱円	2層	
2	SK-2	3トレンチ	0.92×0.7×0.78	箱円	2層	
3	SK-3	3トレンチ	0.95×(0.23)×0.35	箱円	1層	
4	SK-4	3トレンチ	0.53×(0.2)×0.62	箱円	1層	
5	SP-5	3トレンチ	0.37×0.3×0.2	円	1層	
6	SK-6	3トレンチ	0.76×0.45×0.35	箱円	2層	かわらけ
7	SK-7	3トレンチ	0.42×0.4×0.65	円	1層	
8	SP-8	3トレンチ	0.4×0.33×-	円	-	
9	SP-9	3トレンチ	0.31×0.24×-	円	-	
10	SP-10	3トレンチ	0.28×0.24×-	円	-	
11	SK-11	6トレンチ	1.3×(0.16)×0.6	円	2層	
12	SP-12	6トレンチ	(0.19)×(0.1)×0.4	不明	1層	
13	SP-13	6トレンチ	0.18×0.17×-	円	1層	
14	SP-14	6トレンチ	0.29×0.2×-	円	1層	
15	欠番					
16	SX-16	5トレンチ	0.26×0.25×-	円	-	
17	SB-17 P1	5トレンチ	(0.33)×(0.45)×0.75	箱円	2層	柱穴, かわらけ
18	SB-17 P2	5トレンチ	(0.3)×(0.45)×0.66	箱円	2層	柱穴
19	SB-17 P3	5トレンチ	(0.43)×0.55×0.65	円	2層	柱穴
20	SB-17 P4	5トレンチ	0.67×0.45×1.03	箱円	1層	柱穴
21	SB-17 P5	5トレンチ	0.7×(0.17)×0.91	不明	1層	柱穴, 陶器
22	SB-17 P6	4トレンチ	0.46×0.29×0.37	箱円	2層	柱穴, 人形(箇)
23	SB-17 P7	4トレンチ	0.3×0.3×0.3	円	1層	
24	SK-18	5トレンチ	(0.25)×0.45×0.6	不明	1層	
25	SP-19	5トレンチ	0.3×0.15×-	不整	-	
26	SP-20	5トレンチ	0.21×0.18×-	円	-	
27	SX-21	5トレンチ	0.34×0.3×-	不整	-	
28	SX-22	5トレンチ	0.4×0.22×-	不整	-	
29	SX-23	5トレンチ	0.25×0.22×-	円	-	
30	SK-24	5トレンチ	0.6×0.45×0.54	箱円	2層	かわらけ
31	SX-25	5トレンチ	0.3×0.27×-	円	-	
32	欠番					
33	SP-27	4トレンチ	(0.25)×(0.2)×0.35	不明	1層	
34	SP-28	4トレンチ	(0.33)×0.27×0.22	円	1層	
35	SP-29	4トレンチ	0.3×(0.17)×0.5	円	1層	
36	SP-30	4トレンチ	0.16×0.16×-	円	-	
37	SK-31	4トレンチ	0.78×(0.49)×1.38	不整	1層	磁石, かわらけ
38	SK-32	4トレンチ	0.74×(0.49)×0.80	箱円	2層	磁器, 砂
39	SK-33	4トレンチ	1.08×0.57×0.4	箱円	1層	
40	SP-34	4トレンチ	0.25×0.25×0.5	円	1層	
41	SK-35	4トレンチ	0.46×0.35×0.37	円	1層	陶器
42	SP-36	4トレンチ	0.38×0.35×0.37	円	2層	磁器, 陶器
43	SX-37	4トレンチ	0.96×0.27×0.14	箱円	1層	
44	SP-38	4トレンチ	(0.27)×0.25×0.04	円	1層	
45	SP-39	4トレンチ	0.31×(0.11)×0.17	円	1層	
46	SP-40	4トレンチ	(0.28)×0.25×0.06	円	1層	
47	欠番					
48	SP-42	4トレンチ	0.15×0.14×-	円	-	
49	SP-43	4トレンチ	0.5×0.36×0.48	箱円	1層	
50	欠番					
51	欠番					
52	SL-46	5トレンチ	1.5×1.4×0.27	不整	2層	
53	SK-47	4トレンチ	1.12×1.07×1.2	不整	3層	瓦質土器, 陶器
54	SP-48	4トレンチ	0.22×(0.17)×	円	-	
55	SP-49	4トレンチ	0.3×0.24×0.07	円	-	
56	SD-50	13トレンチ	1.67×0.62×1.05	粘土研	2層	瓦質土器, 陶器, 磁器
57	SP-51	15トレンチ	0.45×0.42×0.72	円	2層	
58	SK-52	15トレンチ	0.9×0.3×1.03	箱円	3層	
59	SK-53	15トレンチ	0.5×0.4×0.63	円	3層	
60	SK-54	12トレンチ	(0.95)×(0.55)×0.35	箱円	1層	磁器
61	SK-55	12トレンチ	(0.63)×(0.6)×0.1	箱円	-	
62	SK-56	12トレンチ	0.5×0.45×0.7	円	1層	かわらけ
63	SP-57	8トレンチ	(0.32)×(0.2)×0.29	不明	-	

表 14 西城 遺構觀察表 (2)

64	SK-58	8 トレンチ	0.5×(0.45) ×0.16	門	1 層	
65	SP-59	8 トレンチ	(0.27) ×(0.2) ×0.1	不明	1 層	
66	SK-60	8 トレンチ	(0.46) ×0.46×0.55	門	1 層	
67	SK-61	8 トレンチ	(0.65) ×0.52×0.67	門	1 層	鉄製品
68	SK-62	8 トレンチ	0.55×0.45×0.75	門	1 層	
69	SP-63	8 トレンチ	0.2×0.25×0.42	門	2 層	
70	SK-64	8 トレンチ	1.12×1.02×0.62	不明	2 層	
71	SK-65	8 トレンチ	(0.9) ×0.5×0.1	不明	-	
72	SP-66	8 トレンチ	0.8×(0.28) ×0.85	門	2 層	
73	SP-67	15 トレンチ	0.36×(0.32) ×0.6	門	1 層	
74	SP-68	15 トレンチ	0.3×0.3×0.28	門	1 層	
75	SP-69	15 トレンチ	(0.4) ×0.4×0.51	門	2 層	
76	SP-70	15 トレンチ	(0.28) ×0.26×0.2	門	1 層	
77	SP-71	15 トレンチ	0.24×0.2×0.33	門	2 層	
78	SK-72	15 トレンチ	(0.63) ×(0.36) ×0.75	箱門	-	
79	SP-73	15 トレンチ	0.49×0.42×0.15	門	2 层	
80	SP-74	15 トレンチ	0.45×0.44×0.45	門	2 層	
81	SP-75	15 トレンチ	(0.3) ×(0.28) ×0.5	箱門	2 層	
82	SK-76	12 トレンチ	0.92×(0.45) ×0.44	箱門	3 層	かわらけ
83	SP-77	8 トレンチ	0.27×0.23×0.15	門	1 層	
84	SP-78	8 トレンチ	(0.28) ×0.19×0.55	門	2 層	
85	SP-79	8 トレンチ	0.3×0.29×0.48	門	1 層	
86	SP-80	12 トレンチ	0.42×0.36×0.39	門	1 層	かわらけ
87	SP-81	12 トレンチ	0.54×0.54×0.44	門	2 層	
88	SP-82	12 トレンチ	0.36×0.35×0.65	門	1 层	
89	SP-83	12 トレンチ	0.31×0.23×0.35	箱門	1 層	
90	SP-84	12 トレンチ	0.28×0.24×0.22	門	1 層	
91	SP-85	12 トレンチ	(0.46) ×0.44×0.22	門	1 層	
92	SK-86	12 トレンチ	0.69×(0.63) ×0.43	箱門	2 層	
93	SP-87	12 トレンチ	(0.42) ×0.32×0.51	箱門	1 層	
94	SP-88	12 トレンチ	0.3×0.22×0.46	門	1 層	
95	SP-89	12 トレンチ	0.5×0.55×0.32	門	1 層	
96	SK-90	12 トレンチ	(0.5) ×0.5×0.28	門	1 層	
97	SP-91	12 トレンチ	(0.4) ×(0.2) ×0.1	不明	1 層	
98	SK-92	12 トレンチ	0.73×0.7×0.53	箱門	2 層	
99	SK-93	8 トレンチ	0.75×0.4×0.76	箱門	1 層	
100	SK-94	8 トレンチ	0.7×0.62×0.67	箱門	1 層	陶器
101	SK-95	8 トレンチ	0.4×(0.35) ×0.36	箱門	1 層	
102	SI-96	13 トレンチ	1×0.85×0.25	門	2 層	かわらけ、陶器
103	SK-97	8 トレンチ	(0.4) ×0.37×0.55	箱門	1 层	
104	SP-98	13 トレンチ	0.4×0.37×0.56	門	1 層	
105	SP-99	13 トレンチ	0.3×0.19×0.23	門	-	
106	SP-100	13 トレンチ	0.41×0.19×1.13	門	1 層	
107	SP-101	13 トレンチ	0.32×0.3×0.49	門	1 層	
108	SP-102	13 トレンチ	0.47×0.31×0.22	箱門	1 層	
109	SP-103	13 トレンチ	(0.46) ×0.49×0.53	箱門	1 層	
110	SP-104	14 トレンチ	0.51×0.37×0.6	門	2 層	
111	SP-105	14 トレンチ	0.6×0.36×0.8	箱門	2 層	
112	SK-106	15 トレンチ	(1.57) ×(0.85) ×0.55	箱門	4 層	かわらけ
113	SP-107	15 トレンチ	0.24×0.24×0.4	門	2 層	
114	SP-108	14 トレンチ	0.5×0.37×0.29	門	2 層	かわらけ
115	SP-109	14 トレンチ	(0.26) ×(0.22) ×0.6	箱門	1 層	
116	SP-110	15 トレンチ	0.25×0.25×0.54	門	1 層	
117	SP-111	12 トレンチ	0.25×0.23×0.4	門	2 層	
118	SP-112	8 トレンチ	0.27×0.24×0.2	門	1 層	
119	SK-113	8 トレンチ	0.48×0.39×0.48	門	2 層	
120	SK-114	8 トレンチ	0.56×0.35×0.34	箱門	1 層	
121	SK-115	8 トレンチ	0.79×0.32×0.6	箱門	1 層	
122	SK-116	8 トレンチ	0.48×0.46×0.46	門	1 層	
123	SK-117	13 トレンチ	(0.58) ×(0.48) ×0.64	不明	1 層	
124	SP-118	14 トレンチ	0.43×0.25×0.95	箱門	1 層	
125	SP-119	14 トレンチ	0.42×0.41×0.42	門	2 層	
126	SP-120	14 トレンチ	0.22×0.18×0.34	門	2 層	
127	SP-121	8 トレンチ	(0.32) ×0.32×0.39	門	1 層	
128	SK-122	8 トレンチ	0.29×(0.16) ×	門	-	
129	SP-123	12 トレンチ	0.12××0.25	不明	1 層	セクション図中

表 15 西城 土層注記 (1)

西城 トレンチ 3・4・5・6・9・11		
層位	土性	内容物
1刷 表土	黒褐色土	腐葉土。
2・a層 塗地土	灰黃褐色土	粘性土。焼け石、小礫微量。縮まりなし。粘性非常にあり。
2・b層 塗地土	灰黃褐色小礫混り土	燒土化物少量。縮まりやあり。粘性ややあり。
3刷 塗地土	灰黃褐色混泥性土	白っぽい岩盤塊 5cm 以下微量。粘性非常にあり。縮まりなし。
4刷 塗地土	灰褐色土	膠糊、砂利。
5刷 塗地土	暗褐色粘性土	2~3cm の小礫少量。やや赤みのある所がところどころにあり赤色岩盤塊が混っているため 2・b 層よりやや白く赤みがある。縮まりなし。粘性あり。
6刷 地山	暗褐色土	岩盤、砂利。
7刷 地山	地山	岩盤。

西城 トレンチ 8		
層位	土性	内容物
1刷 表土	黒褐色土	腐葉土。
2・a層 塗地土	暗褐色土	0.2cm の白色粒少量。0.2cm のローム粒微量。縮まりなし。粘性あり。
2・b層 塗地土	暗褐色土	膠少量。0.2cm のローム粒微量。縮まりほばなし。粘性ほばなし。
3刷 塗地土	暗褐色土	膠中量。ローム粒、0.5cm 以下の焼化物少量。0.2cm の白色粒微量。縮まりややあり。粘性ややあり。
7刷 地山	地山	岩盤。

西城 トレンチ 12・13・14・15		
層位	土性	内容物
1刷 表土	黒褐色土	腐葉土。
2・a層 塗地土	暗褐色土	白色粒少量。0.2cm のローム粒微量。縮まりほばなし。粘性ややあり。
2・b層 塗地土	暗褐色土	0.5~1cm 以下の焼化物少量。0.2cm 以下のローム粒、膠微量。縮まりほばなし。粘性ややあり。※トレンチ 13 には 1~2cm の膠微量。
3刷 塗地土	暗褐色土	ローム粒中量。0.2cm のローム粒少量。1cm 以下の焼化物少量。縮まりややあり。粘性あり。
4刷 塗地土	暗褐色土	ローム粒、0.2cm の KP 粒微量。縮まりなし。粘性なし。
5刷 塗地土	暗褐色土	0.2cm のローム粒中量。縮まりややあり。粘性ややあり。※トレンチ 15 西面のみ
6刷 塗地土	暗褐色土	ローム主体。KP 粒微量。縮まりややあり。粘性あり。

西城 SB-17 P 1 ~ P 3		
層位	土性	内容物
1刷 理土	暗褐色膠混り土	黃灰褐色膠混土体。縮まりややあり。粘性なし。
2刷 理土	黒褐色膠混り土	膠の粒が 1 刷より細かい。極めて崩壊。縮まりややあり。粘性なし。

西城 SB-17 P 4		
層位	土性	内容物
1刷 潜土	暗褐色膠混り土	2~5cm の岩盤繊維。下へ行くほど繊維が多い。縮まりあり。粘性なし。

西城 SB-17 P 5		
層位	土性	内容物
1刷 理土	暗褐色膠混り土	岩盤小礫微量。下部は小礫主体。やや灰褐色っぽい。縮まりあり。粘性なし。

西城 SB-17 P 6		
層位	土性	内容物
1刷 理土	暗褐色土	縮まりややあり。粘性あり。
2刷 理土	灰褐色膠混り土	岩盤繊維多量。橙色の岩盤繊維微量。縮まりややあり。粘性ややあり。

西城 SB-17 P 7		
層位	土性	内容物
1刷 理土	暗褐色膠混り土	岩盤繊維多量。縮まりなし。粘性ややあり。

西城 SD-50		
層位	土性	内容物
1刷 理土	暗褐色土	0.2cm の KP 粒中量。0.2cm のローム粒、0.5cm の炭化物少量。縮まりほばなし。粘性なし。
2刷 理土	暗褐色土	0.2cm の KP 粒多量。0.2cm のローム粒中量。縮まりほばなし。粘性なし。

西城 SP-101・102		
層位	土性	内容物
1刷 理土	暗褐色土	0.2cm の KP 粒、0.2cm のローム粒中量。縮まりややあり。粘性あり。

西城 SP-104		
層位	土性	内容物
1刷 理土	暗褐色土	0.2cm の KP 粒多量。0.2cm のローム粒中量。縮まりあり。粘性あり。
2刷 理土	暗褐色土	0.2cm の KP 粒、炭化物微量。縮まりあり。粘性あり。

西城 SP-105		
層位	土性	内容物
1刷 理土	暗褐色土	0.2cm の KP 粒多量。0.2cm のローム粒中量。縮まりややあり。粘性あり。
2刷 理土	暗褐色土	KP 粒中量。2cm 以下のロームブロック少量。縮まりややあり。粘性あり。

西城 SP-108		
層位	土性	内容物
1刷 理土	暗褐色土	0.2cm の KP 粒多量。0.2cm のローム粒中量。縮まりあり。粘性あり。
2刷 理土	黒褐色土	0.2cm の KP 粒微量。縮まりあり。粘性あり。

表 16 西城 土層注記（2）

西城 SP-118			内容物
層位	土性		
1層 墓土	暗褐色土	ローム粒中量。白色粒少量。2~5cmのロームブロック、炭化物、焼土粒微量。締まりあり。粘性あり。	
西城 SP-119			内容物
1層 墓土	暗褐色土	ロームブロック中量。0.2cmのローム粒、白色粒、炭化物少量。締まりあり。粘性あり。	
2層 犀頭	暗褐色土	KP 粒中量。ローム粒少量。0.5 cm以下の炭化物少量。	
西城 SP-120			内容物
1層 墓土	暗褐色土	KP 粒中量。締まりややあり。粘性ややあり。	
2層 墓土	黄褐色土	ローム土体。締まりあり。粘性あり。	

(4) 中城

中城は古本丸の北に隣接する曲輪で、平面形は西辺を長辺とする長方形である。防衛施設としては南辺に土塁が巡り、西辺にわずかな土塁とみられる高まりがあるのみである。標高は約197mと古本丸から見わたされる関係にある。虎口は曲輪南辺の古本丸側にあり、本丸と古本丸を巡る堀底道へと至る。

調査は中城の使用状況、保存状況の確認のため平成30年度に実施した。

調査では、現況測量調査が地下の遺構を反映しているというこれまでの成果に基づき、中城においても発掘調査前に現況測量調査を実施し、僅かな段差が認められた平坦面中央付近で調査を実施した。

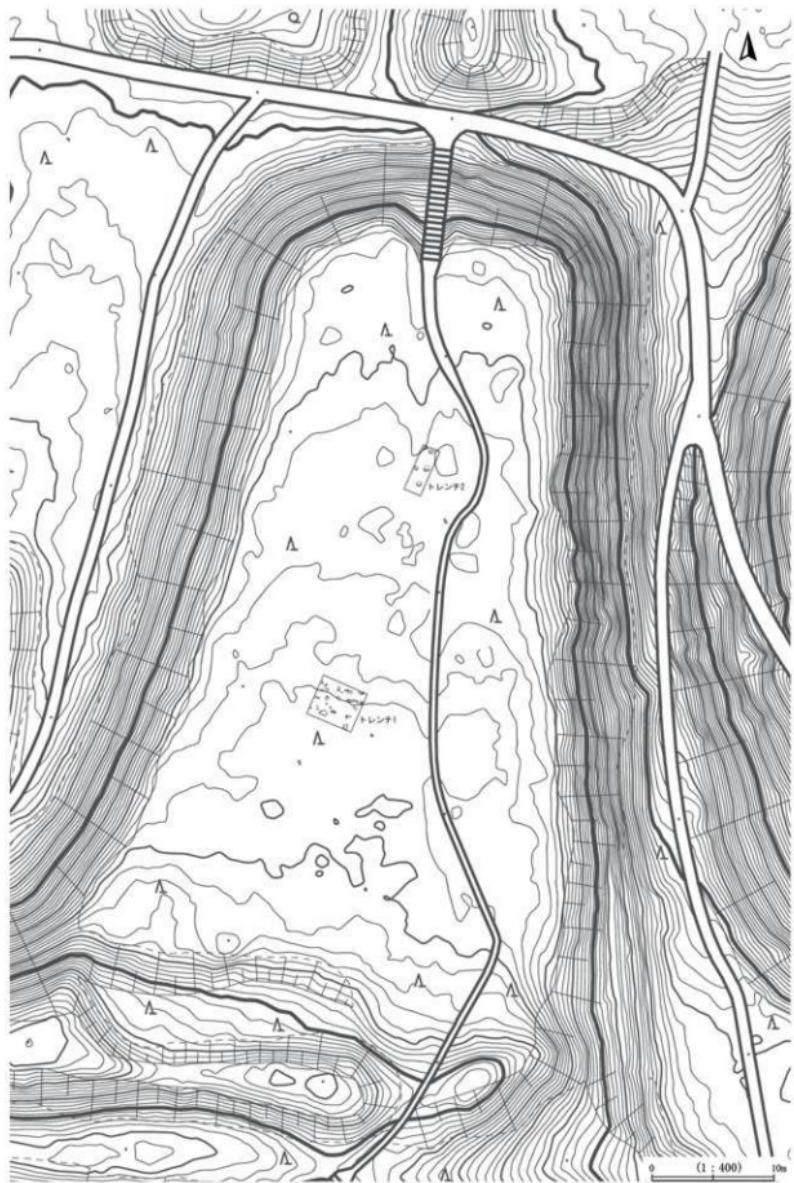
トレント1では段差の認められた箇所において礎石や石列が確認された（図53）。石列については調査区外に伸びることが想定される。礎石や石列などは出土した瓦片（図82、20）により慶長期以降のものと判断された。調査最下面では6基のビットが確認されたが、遺物等も伴わないので正確な年代は不明である。建物の柱跡として判断できるものではなかった。トレント1で確認された遺物は遺構に伴うものはほとんどなく、近世所産のものが大半であった。

トレント2では現地表面から20cmの深さで地山岩盤層に到達した。遺構は6基のビットが確認されたが、柱穴と判断できるものではなかった。

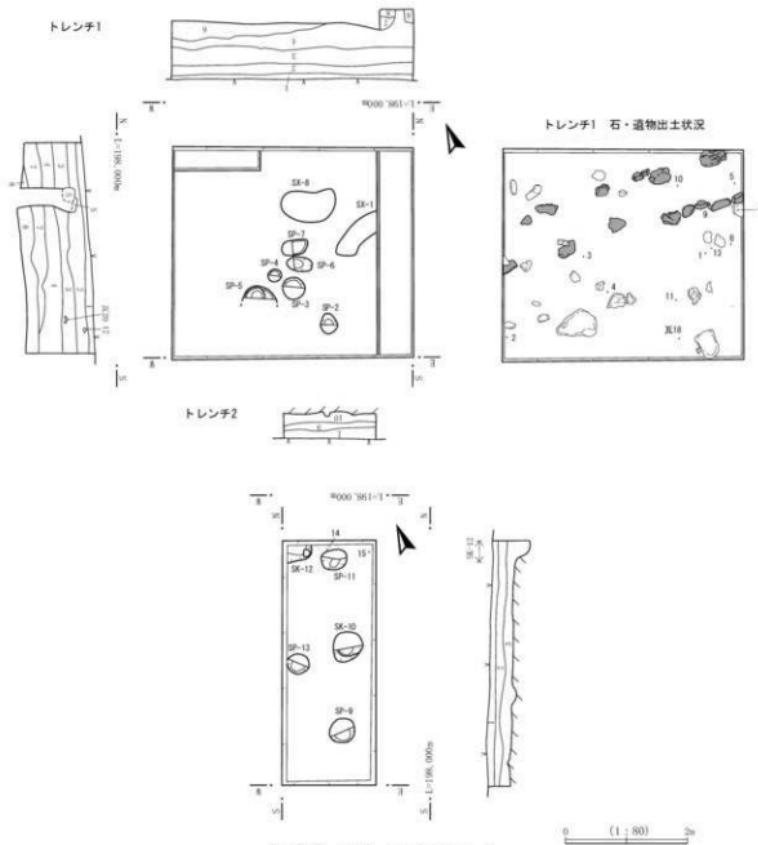
この中城の調査においてトレントを2か所設定し、調査を実施したが、15mしか離れていないのにも関わらずそれぞれ地山が異なっていることが判明した。地表から地山までの深さにも差があり、使用時の中城の地形については疑問が、面的な調査を要する。

表 17 中城遺構観察表

No.	遺構番号	位置	長×幅×深 (m)	形状	層数	備考
1	SN-1	1トレント	[0.8]×0.3×0.45	不整	1層	
2	SP-2	1トレント	0.34×0.33×0.5	円	1層	
3	SP-3	1トレント	0.4×0.35×0.36	円	1層	
4	SP-4	1トレント	0.25×0.2×0.52	円	1層	
5	SP-5	1トレント	0.55×(0.45)×0.5	楕円	2層	
6	SP-6	1トレント	0.4×0.24×0.5	楕円	1層	
7	SP-7	1トレント	0.43×0.24×0.56	楕円	1層	
8	SN-8	1トレント	0.9×0.5×-	不整	-	
9	SP-9	2トレント	0.42×0.4×0.3	円	1層	
10	SK-10	2トレント	0.55×0.45×0.5	楕円	1層	かまらけ
11	SP-11	2トレント	0.4×0.32×0.26	楕円	1層	
12	SK-12	2トレント	[0.5]×(0.35)×0.25	不明	1層	
13	SP-13	2トレント	0.35×0.3×0.35	円	1層	



第 52 図 中城 地形図



第53図 中城 トレンチ1・2

表18 中城土層注記

中城 トレンチ1

土性	内容物
表土	褐暗褐色土。細まりほばなし。粘性あり。
整地土	褐暗褐色土。0.2cmのローム粒少量。細まりややあり。粘性あり。
整地土	褐暗褐色土。0.2cmのローム粒少量。細少見。細まりなし。粘性なし。
整地土	褐暗褐色土。0.2cmのローム粒中量。0.2cmのKP粒R。透徹見。0.2cmの白色粒子少量。細まりほばなし。粘性ほばなし。
整地土	褐暗褐色土。0.2cmのKP粒中量。0.2cmのローム粒少量。3cm以下のロームブロック微量。細まりなし。粘性あり。
整地土	黄褐色土。5cm以下のKPブロック。0.2cmのKP粒微量。細まりあり。粘性ややあり。
整地土	黄褐色土。KPを主とする。0.2cmのKP粒中量。細まりなし。粘性なし。
整地土	褐色土。ロームを主とする。0.2cmのKP粒少量。3cm以下のロームブロック微量。細まりややあり。粘性なし。

中城 トレンチ2

土性	内容物
表土	褐暗褐色土。細まりほばなし。粘性あり。
整地土	黒褐色土。白色粒子少量。細まりなし。粘性なし。
整地土	褐暗褐色土。0.2cmのローム粒子。白色粒子少量。岩盤からはがれた礫を含む。細まりなし。粘性なし。

(5) 北城

北城は烏山城跡の最北端に位置する曲輪である。十二曲道に面しており、十二曲口から来る侵入者に対して中城とともに抑えの役割を果たしている。平面形は西辺を長辺とする長方形である。北辺と西辺には土塁が巡っており、曲輪の西側には井戸曲輪がある。虎口は南東隅にのみ存在している。

調査は烏山城絵図（「野州烏山城絵図」日本古城絵図東山道之部）に描かれている櫓と想定される建物跡等（第54図）の構築物の確認を目的とし、土塁と平坦面の調査を実施した。

北部土塁に直行するようにトレント（トレント1）を設定した。さらに、曲輪北部平坦面の広く調査が可能な箇所にも4m四方のトレントを5箇所（トレント2～6）設定し、調査を実施した（第55図）。

トレント1では土塁の盛土状況の確認のため断ち割りを実施した。その結果、時期の判別可能な遺物が伴っていないため詳細な時期は不明だが、地山ローム層を掘り込むピットの時期（17層）17世紀前半以降の整地層（3～16、18～21層）の2時期が想定された。17世紀前半の整地層は土性や内容物等から3～9層と10～14層に大別できるが、遺物が伴わないので、この差が使われていた時期差なのか、または土塁構築時の工程によるものなのかはわからなかった（第56図）。

遺構は溝状遺構（SD-1）とピットが2基（SP-20、SX-21）確認されるのみであった。

SD-1は上端幅約1.6m、底幅約0.3mの箱築軒を呈する。表土直下から掘り込まれていることから、時期は限りなく新しいものであると考えられる。前述した絵図（第54図）に描かれた櫓構築に伴う遺構であるかは不明である。遺物は時期不明のかわらけ小片が確認されるのみであった。

SP-20、SX-21は部分的な調査であるため全体の規模や主軸は不詳である。一括で埋まっており17層と同様な土質であることから、17層の整地段階において人為的に埋められたと考えられる。この遺構については地山ローム層を彫り込んでいることから土塁構築以前の遺構であろうと考えられる。SX-21は深さがなく、柱が建てられたとは考えにくい形状と深さをしてことから柱穴として捉えることは難しく、柱穴であろうと判断出来るのはSP-20のみであった。ただし、ピットも幅2mのトレント調査であるために柱穴であったとしても建物の痕跡であるかはわからなかった。

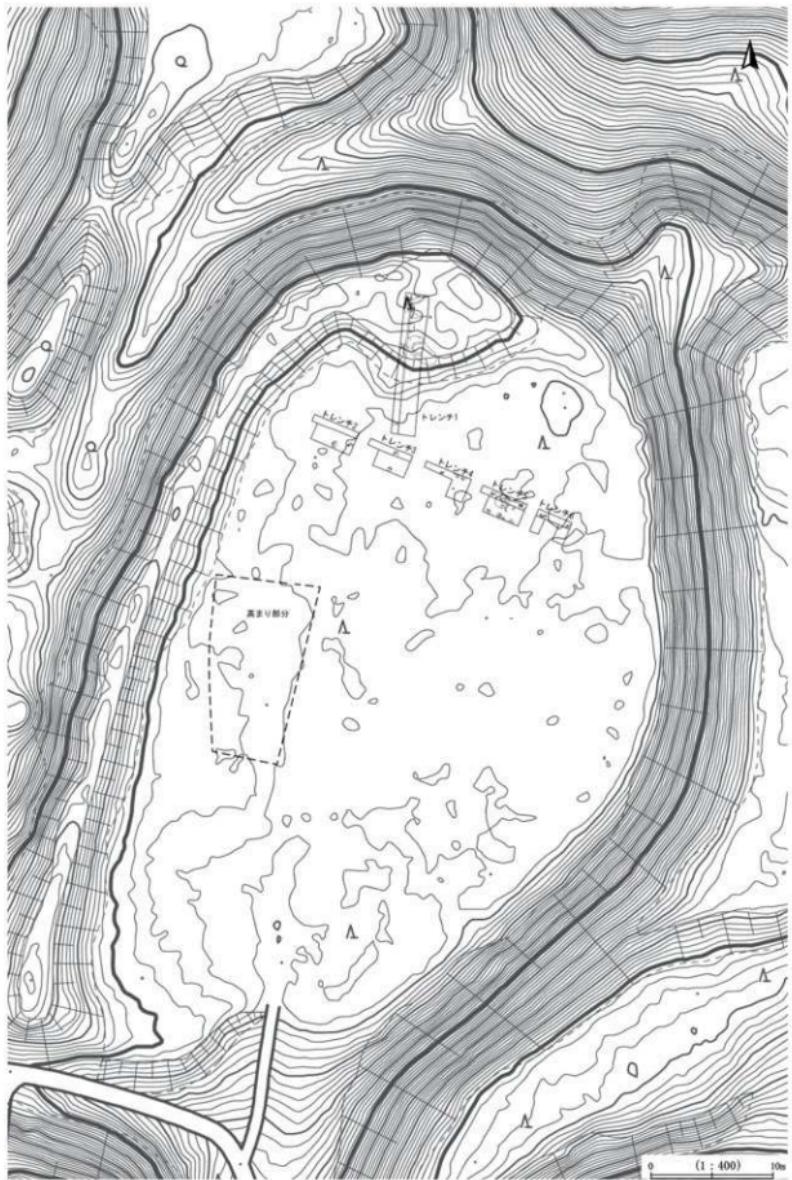
トレント2～6の平坦面においては土塁と同様に3時期を想定した。区分も同様である。平坦面においては地山ロームを掘り込むピットが21基確認されたが、いずれも建物の柱穴として組むものはなかった（第57図）。

トレント3において17世紀前半の志野焼丸皿が出土した。この丸皿は地山層直上の整地層より出土している。のことから、整地が17世紀前半以降に行われたものであると考えられる。

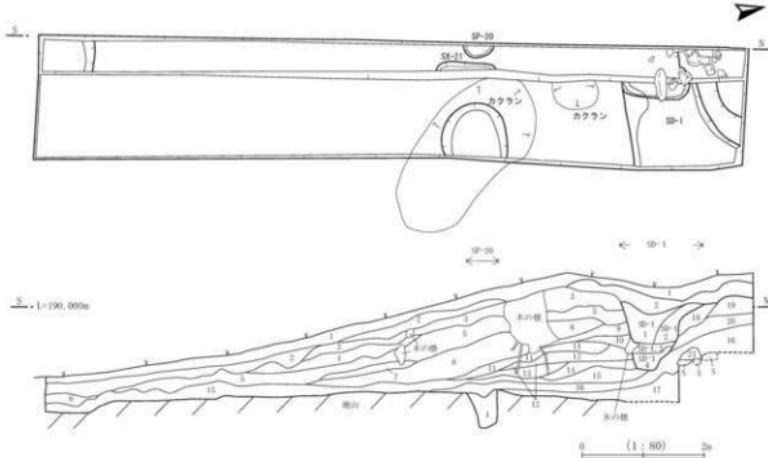
トレント6の17世紀以前の層（5層）では焼土が確認されている。トレント調査であるため面的に焼土の範囲がとらえられなかつたが、トレント6の西側という狭い範囲にのみ確認されているため火災の痕跡とは考えにくい。西城のように石組みや掘り込みを行い、炉として利



第54図 野州烏山城絵図（北城抜粋）



第 55 図 北城 地形図



第56図 北城 トレンチ1

表19 北城(土壌) 土層記述

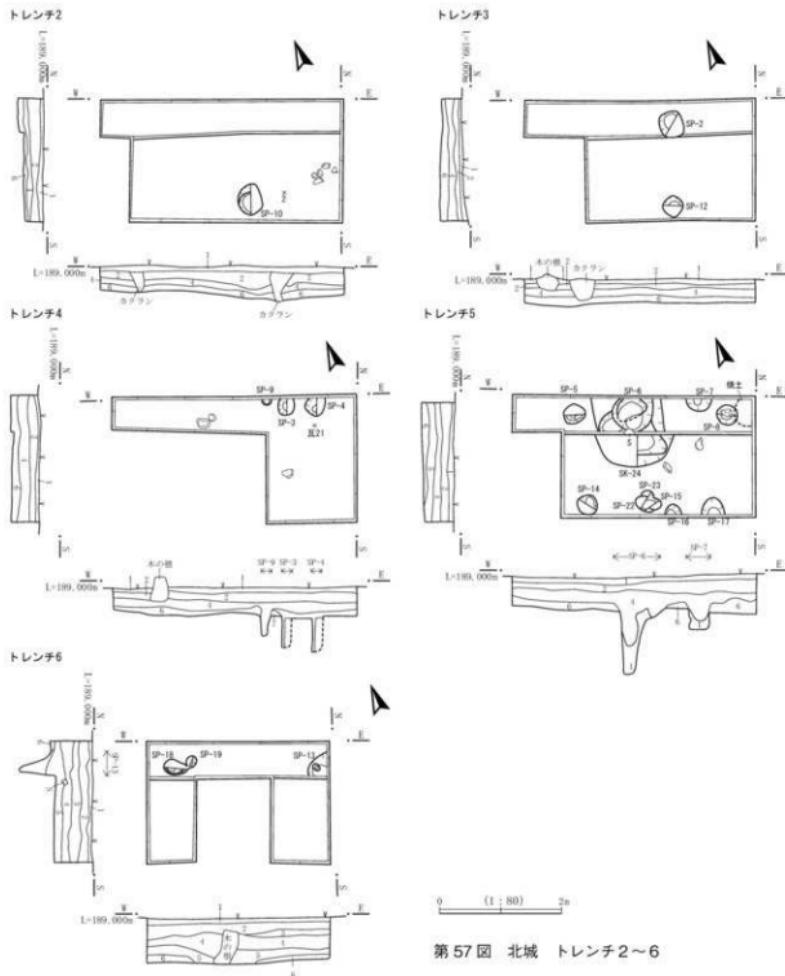
層位	土性	内容物
1層 表土	黒褐色土	締まりなし。粘性なし。
2層 表土	暗褐色土	白色粒少量。ローム粒少量。2cm以下の礫微量。締まりややあり。粘性なし。
3層 繊土	暗褐色土	ローム粒中量。白色粒少量。IP粒、0.5cm以下の炭化物、1cm以下の礫微量。締まりややあり。粘性ややあり。
4層 繊土	暗褐色土	ローム粒少量。白色粒。IP粒、炭化物微量、0.3cm以下の礫微量。締まりややあり。粘性なし。
5層 繊土	暗褐色土	白色粒中量。炭化物少量。IP粒。締まりあり。粘性なし。
6層 繊土	暗褐色土	ローム粒中量。炭化物少量。2cm以下のロームブロック。5cm以下の岩脈。1.5cm以下の小礫微量。締まりあり。粘性ややあり。
7層 繊土	暗褐色土	白色粒中量。ローム粒。1cm以下の小礫。0.2cm以下の炭化物微量。締まりあり。粘性なし。
8層 繊土	暗褐色土	ローム粒。0.1cm以下の小礫少量。炭化物微量。締まりあり。粘性なし。
9層 繊土	暗褐色土	白色粒。ローム粒少量。0.5~1cm小礫。岩脈。0.5cm以下の炭化物微量。締まりあり。粘性なし。
10層 繊土	褐色土	0.2cm以下のKP粒多量。2cm以下のロームブロック微量。小礫微量。締まりあり。粘性ややあり。
11層 繊土	褐色土	ローム粒。繩状根ややあり。粘性なし。
12層 繊土	褐色土	2cm以下の小礫微量。白色粒子微量。締まりあり。粘性ややあり。
13層 繊土	暗褐色土	ローム粒。KP粒少量。小礫。炭化物微量。締まりあり。粘性ほぼなし。
14層 繊地帯	暗褐色土	白色粒。ローム粒。炭化物。小礫微量。締まりややあり。粘性ほぼなし。
15層 繊地帯	黒褐色土	白色粒。ローム粒少量。炭化物。砂利。小礫微量。締まりなし。粘性なし。
16層 繊地帯	黒褐色土	炭化物少量。ローム粒。白色粒。小礫微量。締まりなし。粘性なし。
17層 繊地帯	褐色土	ローム粘土。締まりあり。粘性ややあり。
18層 繊土	褐色土	0.2cm以下のKP粒多量。2cm以下のロームブロック。小礫微量。締まりあり。粘性ややあり。
19層 繊土	黒褐色土	白色粒。ローム粒。2cm以下のロームブロック微量。締まりなし。粘性なし。
20層 繊土	褐色土	白色粒。ローム粒少量。2cm以下の砂利微量。締まりややあり。粘性ややあり。
21層 風土	暗褐色土	ローム粒。白色粒微量。締まりなし。粘性なし。

SD-1(トレンチ1内)

層位	土性	内容物
1層 球土	暗褐色土	白色粒。ローム粒少量。砂利微量。粘性なし。しまりなし。
2層 球土	暗褐色土	白色粒。ローム粒。炭化物。砂利少量。粘性なし。しまりなし。
3層 球土	暗褐色土	白色粒。ローム粒中量。炭化物少量。砂利微量。粘性なし。しまりなし。
4層 球土	暗褐色土	白色粒中量。ローム粒中量。1cm以下のロームブロック、1cm以下のKPブロック微量。粘性なし。しまりややあり。

SP-20(トレンチ1内)

層位	土性	内容物
1層 球土	褐色土	ローム粒。0.5cm以下の炭化物。1.5cm以下のロームブロック少量。白色粒微量。締まりややあり。粘性あり。



第57図 北城 トレンチ2～6

表20 北城(平坦面)土層注記

北城 トレンチ2,3,4,5,6

層位	土性	内容物
1層	栗色土	粘性はぼなし。しまりなし。
2層	堅地	ローム粒微細。炭化物微量。0.2cm以下の砂利微量。トレンチ6はまれに3層に含まれる焼土塊を含む。粘性やあり。しかしややあり。
3層	堅地	5cm以下の焼土塊中量。炭化物少額。ローム粒少額。5cm以下の岩盤微細。粘性やあり。しまりあり。
4層	堅地	ローム粒中量。炭化物少額。2cm以下のロームブロック微量。5cm以下の岩盤微細。1.5cm以下の砂利微量。粘性やあり。しかしややあり。
5層	堅地	ローム粒少額。白色粒少額。0.5cm以下の炭化物微量。0.1cm以下の砂利微量。トレンチ6の土塊にに赤褐色のローム粒含む。また炭化物微量含む。粘性ややあり。しまりややあり。
6層	堅地	白色粒微量。ローム粒微量。0.1cm以下の炭化物微量。粘性ややあり。しまりあり。

用していたものではないため、用途及び焼土が存在する理由については不明であるが、炭化物が多量に含まれており、トレンチ3で確認された志野焼丸皿の出土した層の下の層であることから、想像の域を出ないが、北城改修時に出た廃棄物等を焼却処分していた場であろうと考えられる。

今回の調査では当初の目的であった櫓跡は確認するに至らなかった。調査地点の見直しを含め、今後の課題とするところである。平坦面の調査では中世段階の遺構は確認できなかつたが、北城の普請の状況につ

いて把握することができた。発掘調査前の現況測量において本丸のような地ぶくれ状の高まりも確認されており、建物跡である可能性が考えられる。今後の調査に期待したい。



十二曲道からみた北城入口

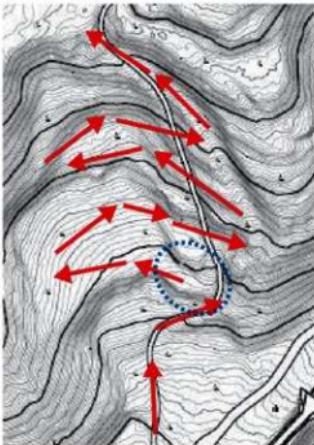
表21 北城遺構観察表

No.	遺構番号	位置	長×幅×深 (m)	形状	個数	備考
1	SD-1	1トレンチ	(1.95)×(1～1.75)×1.14	箱型枠	4	打
2	SP-2	3トレンチ	0.4×0.38×0.72	方形	3	
3	SP-3	4トレンチ	0.28×0.25×0.62	楕円	1	
4	SP-4	4トレンチ	(0.3)×0.3×0.67	楕円	2	かわらけ
5	SP-5	5トレンチ	0.35×0.3×0.18	楕円	1	底面に石 かわらけ
6	SP-6	5トレンチ	0.67×0.56×1.08	円	1	
7	SP-7	5トレンチ	0.43×(0.25)×0.32	不明	1	
8	SP-8	5トレンチ	0.35×0.32×0.3	円	1	
9	SP-9	4トレンチ	0.15×(0.13)×0.47	円	1	
10	SP-10	2トレンチ	0.52×0.4×0.63	楕円	2	
11	矢番					
12	SP-12	3トレンチ	0.3×0.3×0.56	方形	1	
13	SP-13	6トレンチ	(0.4)×(0.35)×0.54	不明	1	
14	SP-14	5トレンチ	0.32×0.3×0.67	方形	1	
15	SP-15	5トレンチ	0.28×0.28×0.36	円	1	かわらけ
16	SP-16	5トレンチ	(0.26)×0.18×0.72	円	2	
17	SP-17	5トレンチ	(0.3)×(0.28)×0.6	楕円	1	
18	SP-18	6トレンチ	0.41×0.28×0.5	楕円	2	
19	SP-19	6トレンチ	0.2×0.15×0.35	円	2	
20	SP-20	1トレンチ	0.5×(0.22)×0.63	楕円	1	
21	SN-21	1トレンチ	(0.05)×(0.1)×0.25	不明	1	かわらけ
22	SP-22	5トレンチ	0.2×(0.15)×0.66	楕円	1	胸壁
23	SP-23	5トレンチ	0.2×(0.12)×0.2	円	1	
24	SK-24	5トレンチ	1.38×(1.11)×0.33	不明	3	底面に石

(6) 釜ヶ入口

中世に使用された登城口との『烏山八雲神社誌』の伝承から調査を実施した。その結果、平坦な平場部分（第59図）にトレントを設定し遺構の確認を試みたが、明確な遺構は確認できなかった。遺構に伴う出土遺物もなく、山麓の門が設置できそうな通路の平坦部分は地山関東ローム層まで掘削し、その上に砂利や粘質土を層状に積み上げて構築されており（第61図）、改修は見られなかった。一部、礫が列状に確認できた（第60図）が、積んだ状態ではないことから混入とも考えられた。

第58図にある現状の直線的な道は後世のもので、別なつづら折りの道（赤矢印）が確認できた。また所々にある開けた場所は、地山斜面に盛土（青点丸）することで造られていた。採集できた遺物はなく、時期的なものを確定できなかったが、傾斜を伴う開けた空間が幾重にも重なる様相は、中世の山城を思わせるつくりとなっている。

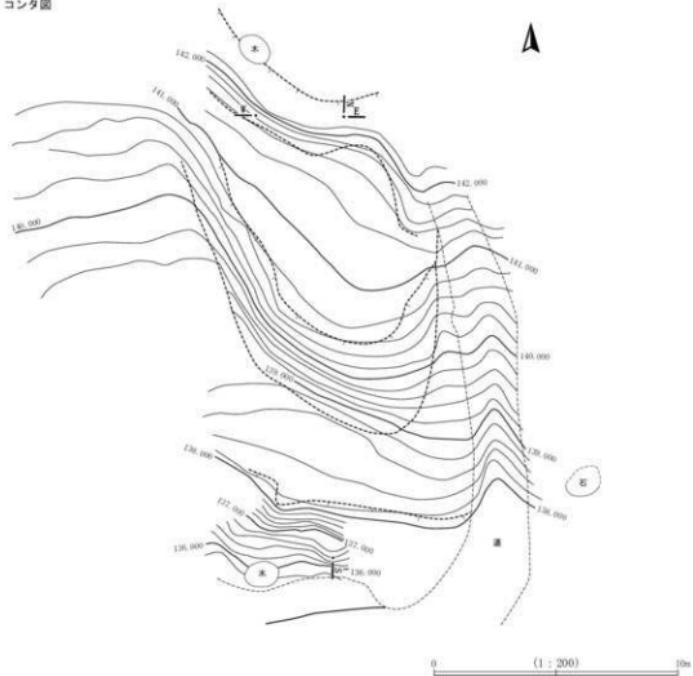


第58図 釜ヶ入口測量図

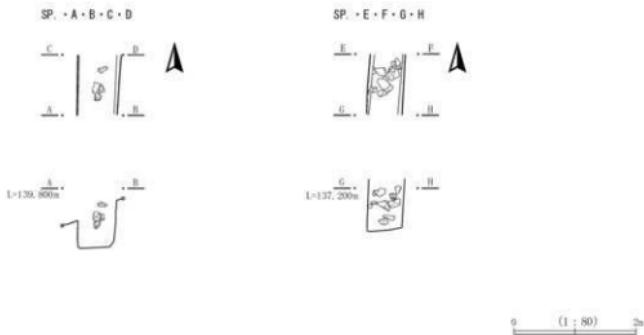
表22 釜ヶ入口 土層付記

層位	土性	内容物等
1 層	表土・黒色土	非常に薄い。
2 層	堆積土・暗褐色土	地山岩盤小礫散在。縦まりあり。粘性や有り。
3 層	堆積土・黒褐色土	地山岩盤小礫散在。縦まりなし。
4 層	盛土・褐色土	地山岩盤小礫少量。下部ほど地山ローム土多い。縦まりあり。粘性非常に有り。
5 層	盛土・黄褐色細混土	地山ローム土主体。岩盤縦。直径2cm以下の河原石。共に少量。縦まりあり。粘性非常に有り。
6 層	盛土・黒灰土・小礫	直径2cm以下の小礫主。縦に縦まる。
7 層	盛土・褐色粘質土	直径1cm以下の小礫多量。変化物粒とともに微量。固く締まる。
8 層	盛土・暗褐色土	直径2cm以下の小礫多量。ローム土少量。固く締まる。
9 層	盛土・黒褐色土	直径1~2cm以下の小礫多量。黒色土少量。縦まりなし。
10 層	黒褐色粘質土	黒色粘質土主体。直径1cm以下の黄褐色小礫少量。
11 层	褐色粘質土	褐色粘質土主体。直径2cm以下の小礫多量。固く締まる。
12 层	盛土・黄褐色細混土	黄褐色細混土主体。一部岩盤が島状に残る。非常に固く締まる。
13 层	盛土・褐色粘質土	褐色粘質土多量。黄褐色ローム土少量。直径3cm以下の礫少量。
14 层	盛土・にじみ黄褐色細混土	直径5cm程の礫主体。
15 层	盛土・暗褐色粘質土	地山ローム土多量。直径2cm以下的小礫少量。固く締まる。
16 层	盛土・暗褐色土	暗褐色小礫中量。下部に石角を含む。
17a 层	盛土・黄褐色粘質土	黄褐色粘質土主体。灰褐色縫隙。赤褐色共に微量。非常に固く締まる。
17b 层	盛土・黄褐色混土	黄褐色小礫多量。
18 层	盛土・褐色細混土	褐色細混土主体。周灰色粘質土少量。
19 层	盛土・黄褐色砂礫	黄褐色砂礫主体。礫は砂岩質。
20 层	地山・黒褐色土	ローム土。
21 层	地山・褐色細混土粘質土	ローム土主体。褐褐色小礫多量。
22 层	地山・褐色細混土	褐色細混土。

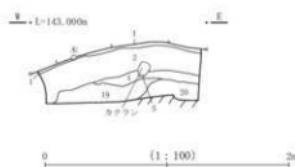
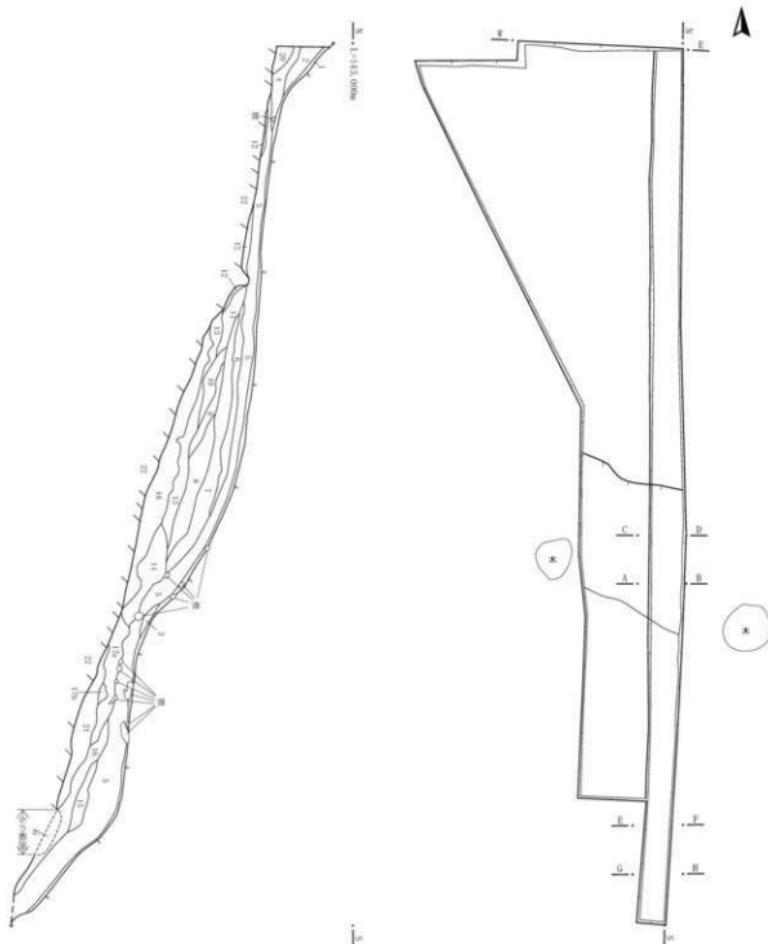
コンタ図



第59図 釜ヶ入口 コンタ図



第60図 釜ヶ入口 トレンチ 平面図・立面図



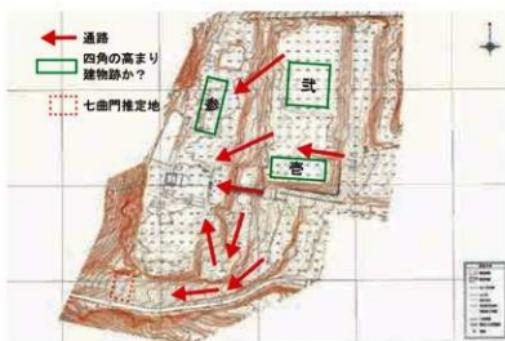
第 61 図 差ヶ入口 トレンチ 平面図・セクション図

(7) 三の丸

平成23（2011）年3月に発生した東日本大震災の影響もあり、石垣等の劣化が見られたため、石垣測量、平面測量を実施し現状の把握に努めた。

その結果、石垣に関する記述は、第4章第1節2、概報掲載の茂木氏論文のとおりであるが、平面図作成によって通路跡が可視化された。その結果、3棟の建物跡らしき高まりを確認できた。壱とした建物は、近世の絵図では多間櫓が描かれており、現地には礎石らしき石も散乱していることから建物の存在が伺える。また弐とした建物は、現状が梅園であり現地にて目視は困難だが、三次元レーザー測量調査によって僅かな高まりとして検出できた。参については、近世の絵図に描かれている主たる建物跡と考えられる。現状は後世の擾乱等により高まりが残るのみでそれ以外の痕跡は確認できない。

現況を記録するための三次元レーザー測量調査によって、近世の絵図に描かれている状況と符合する箇所が多数見受けられ、保存状況は良好である。



第62図 三の丸三次元レーザー測量平面調査成果図



三の丸石垣（南から）

2 出土遺物

(1) 烏山城跡の出土陶磁器

はじめに

本報告は、烏山城跡のなかの古本丸、本丸、西城、北城、中城の五か所の曲輪の発掘調査で得られた陶磁器についての概要説明である。

烏山城跡は、戦国時代から江戸時代末に至るおよそ380年間維持されてきた城館と言われてきた。発掘調査で得られた陶磁器は、城館の存続年代の解明に役立つものであり、また個々の曲輪の役割・性格などの解明の一助ともなるものである。

戦国時代については、出土陶磁器が比較的少ないとから数量化したデータを作成した。

表23は、生産地別の土器・陶磁器の破片数を曲輪ごとにまとめたものである。表24は、貿易陶磁の種類・時期別の組成表である。瀬戸美濃製品については、数量が少ないとから曲輪ごとの説明のなかで触れた。ただ、西城のみは表25のなかで群馬県太田金山城跡、佐野市唐沢山城跡とともに陶磁器の生産地別に数量化した。この表については、後の小結のなかで触れたい。

比較的出土数の多い江戸時代については、器種や产地の判別が可能であり、かつ、それぞれの曲輪の時期や内容を特徴づける遺物を扱った。

表23 戦国時代の曲輪別出土陶磁器数

調査地点	古本丸	本丸	西城	中城	北城
面積(m ²)	600	1700	250	20	120
かわらけ	1954	78	563	151	175
瓦質土器	2	0	0	2	0
瀬戸美濃	6	1	28	0	9
常滑	2	0	9	0	0
貿易陶磁	17	8	79	2	5

1 戦国時代の出土陶磁器について

① 本丸

発掘調査面積は、1700m²と最も広い面積の調査を行った。しかし、江戸時代に盛土により何度も普請が行われた。それと江戸時代の建物跡などが確認されたため、戦国時代の面まで調査を行わなかった。そのため、陶磁器の出土点数は極めて少なく10点ほどであった。

国产陶器は、瀬戸美濃製擂鉢片が1点のみであった。貿易陶磁は青磁皿1点、白磁皿C群1点、白磁輪花皿1点、染付皿E群3点、漳州窯の碗など9点の出土であった。これらの陶磁器は戦国時代末期からその後の時代のものと位置づけられることに注意したい。

② 古本丸

戦国時代には、ここが本丸であったと考えられている。調査面積は600m²であった。

この曲輪での出土遺物の最大の特徴は、かわらけ溜まりが確認されたことである。曲輪全体で1,954点の破片が確認されたが、そのうち672点がかわらけ溜まりからの出土であった。かわらけは、復元可能な個体数は79点であった。かわらけは大きなものが口径8cm前後、小形のものが口径6.5cm前後と二形態にわけられた。

烏山城跡は下野国東部の那珂川流域に位置することから、かわらけについても常陸国の影響を考えてみる必要はある。常陸國の中世土器研究成果（茨城県考古学協会中世シンポジウム実行委員会 2011）を参考にすると、那珂川流域の16世紀後半から17世紀初頭に位置づけられるかわらけと形態的な類似性を求めることができる。

その他の在地産の土器としては、瓦質土器の内耳鍋・火鉢が各1点ずつ確認された。

貿易陶磁は、いずれも破片で17点の出土であった。白磁皿のC群1点、染付皿B1群6点、染付碗E群5点の確認があった。

瀬戸美濃製品は、6点の出土であった。古瀬戸後期IV新の灰釉皿片が1点、大窯第1・2期の天目茶碗片が2点、大窯4期の擂鉢が1点確認された。

常滑製品は甕の胴部破片が2点確認されたのみである。

少量の出土量で明確なことは言えないが、貿易陶磁器、瀬戸美濃製品とも15世紀後半から16世紀前半と16世紀後半に時期が分けられることである。後に述べる最も出土量の多かった西城よりも染付皿B1群、染付碗E群の出土数は古本丸の方が多かったことに注目したい。これは、トレンチ調査で、江戸時代の面とともに、戦国時代の面まで調査が及んだことによるものであろう。

③ 西城

西城と北城に関しては、本報告内の荒川善夫氏の『戦国期鳥山城と周辺地域』に、両曲輪の言われにかかる説明がある。それは、三重県伊勢市神宮文庫に所蔵されている史料「下野国檀那之事」から、実名は不明だがこの史料にある人物が、鳥山城の「西城」に住んでいたことに因み「西城殿」と呼ばれていた可能性を述べたものである。

西城は、古本丸の真西に位置する曲輪で、西側には大きな堀切がある防御性の高い曲輪といえる。発掘調査は、250mとわずかな調査であったが、調査を行った曲輪のなかで最も多くの陶磁器が確認された。表25に出土土器・陶磁器の生産地別・器種別一覧を掲載したので参考にされたい。

国産陶器は瀬戸美濃製品が28点、常滑製品が9点を数えた。瀬戸美濃製品は、古瀬戸後期IV新と思われる擂鉢が4点確認されており、これが最も古い時期のものである。接合はしなかつたが、擂鉢は一、二個体分と思われる。残りの24点は大窯製品であった。

大窯製品は、第1段階と思われる擂鉢が1点、時期不明の擂鉢が4点であった。碗類は、第3段階の天目茶碗2点、第4段階の天目茶碗1点、時期不明の天目茶碗片が1点、それと第2段階から第3段階の丸碗が2点、時期不明の丸碗が2点であった。最も多い器種は灰釉小皿類で第2段階から第4段階の丸皿、折縁皿などが9点確認された。なかでも第3段階が5点が多い。その他、鉄釉茶入の破片が1点確認されている。

常滑製品は、甕の破片が9点であった。この破片はほぼ同一個体の甕と思われる。

貿易陶磁は、79点と国産陶器をはるかに超える数であった。

青磁製品は青稲花皿、青磁香炉などの破片が確認されたが、注目すべき製品としては古手の青磁盤の破片が確認されたことだ。

白磁製品は、白磁C群の碗・皿が各1点ずつ確認された。

染付製品は、貿易陶磁のなかで最も多数確認された。染付の碗類はC群、E群がそれぞれ3点ずつ確認された。それと形状不明のものを合わせても6点と少ない。圧倒的に多いのは染付皿類である。端反皿B1群が4点、端反皿B2群が41点、C群皿、E群皿がそれぞれ3点であった。染付皿B2群の皿は、同一トレンチ出土のものが多いことから同一個体のものがあると思われるが、その数は他を凌駕するものである。

漳州窯の碗、皿、大皿が確認されている。大皿に関しては一個体と思われる。

染付だけをみても碗類に対して皿がおよそ6.5倍と、皿の占める割合が極めて高いと言える。

陶磁器の年代をみてみよう。国産陶器は、古瀬戸後期IV新（15世紀後半）の擂鉢が1点確認された。それ以外の瀬戸・美濃製品は16世紀中葉から後半に位置づけられるものが多かった。

表24 曲輪別の貿易陶磁器集計表（参考資料：唐沢山城跡と太田金山城跡）

種別	器種	窓	型式	年代	西城		本丸		古本丸		中城		北城		唐沢山 (隼人尾敷)		太田金山城 (丁ノ池)		
					破片数	接合数	破片数	接合数	破片数	接合数	破片数	接合数	破片数	接合数	破片数	接合数	破片数	接合数	
青磁	輪相	鹿児島窯系	A型	I - 1 (無文)	13C														
				I - 4	12C後半～13C前半														
				I - 2～4	12C後半～13C前半														
				B															
				B - 0 (直)	14C前半														
			(直文)	B - 1 (I - 5)	13C後半～14C前半														
				B - 2 (-2型)	14C末～15C											1	2		
				B - 3 (B)	15C前半														
				B - 4 (C)	15C前半														
				不明															
			C型	C - 1	14C														
			(直文)	C - 2 (B)	15C前半														
				C - 3	15C末～16C														
				不明															
			D型	D - 1 (A)	14C前半														
			(直文)	D - 2 (B)	15C前半														
				D - 3 (新文)	16C														
			E型 (直口綱)		15C後半～16C前半														
			菊花柄																
			青磁柄不明		16C中葉														
黒磁	輪相	阿波空堀系	梅摘文 (丁頭)		12C後半～13C前半														
			梅摘文 (直頭)		12C後半～13C前半														
			落弁文別縁田相		14C														
			無縁文縁田相		13～14C														
			落弁文																
			鏡面丸頭		13～14C														
			反覆		15C														
			枝花頭		15C中葉～15C後半	1													
			笠頭																
			圓頭																
白磁	輪相	田原空堀系	田頭																
			古頭		14C	1													
			新頭		15C										1	1			
			小頭												1				
			複頭																
			酒井頭																
			豆頭																
			花生頭																
			杏仁頭																
			不明																
白・青磁	輪相	酒井空堀系	C群 (偏反)		15C後半～16C前半	1		1		1									
			不明		2		1												
			田頭																
			古頭		14C	1													
			新頭		15C										1	1			
			小頭													1			
			複頭																
			豆頭																
			花生頭													1			
			杏仁頭													1			
白	輪相	鹿児島窯系	B群 (偏反)		15C中葉														
			C群 (偏反)		15C後半～16C初頭	3													
			D群		15C後半														
			E群		16C中葉～後半	3		5		6		1		1		3			
			不明		2											3			
			B群		15C後半	4		6		6		1		1		7	16		
			C群 (ゴケ底)		15C後半～16C前	3		1		1						5	4		
			B 2 群 (偏反)		16C中葉	41		1		1						3	2		
			E群		16C中葉～後半	3		31		1						22	2		
			折鉢																
白	輪相	吉野空堀系	菊花頭																
			鏡面																
			鏡																
			鉢 (盤)													2			
			その他の													1	1		
			不明													1			
			その他													16			
			長脚瓶																
			不明																
			瓶													1			
白	輪相	鹿児島窯系	圓																
			B群																
			B 2 群																
			B群																
			圓																
			圓																
			圓																
			圓																
			圓																
			圓																
白	輪相	鹿児島窯系	合	計		29	0	9	0	17	0	2	0	5	0	87	0	64	0

常滑製品は壺のみの確認であったが、胴部破片が多く年代がはつきりしない。いずれ15世紀後半以降のものと推測される。

貿易陶磁では15世紀後半から16世紀後半までの染付類が確認されたが、主体は16世紀中葉から後半の染付皿類が主体であった。国産陶器との齟齬はない。

これら土器陶磁器は、掘立柱建物跡およびその周辺の出土遺物であることからある程度一括性を考えてよいのではないかと思う。

この遺跡出土の遺物のなかで、注目したいことは古手の青磁盤が確認されたことである。

④ 中城

古本丸と北城の間にある曲輪である。調査面積は20m²とわずかであった。出土土器・陶磁器は4点である。貿易陶磁の白磁皿C群の端反皿が1点、染付皿B1群が1点であった。残りの2点は瓦質製の擂鉢であった。瀬戸美濃製品は検出されなかった。

⑤ 北城

古本丸の北に位置する曲輪である。先の荒川善夫氏の報告のなかにあるように、戦国時代末期に、那須氏の関係者と思われる「北城殿」が住むとされる曲輪である。

調査面積は120m²であった。

国産陶器は、瀬戸美濃製品大窯第2段階の天目茶碗片が3点、第1段階の灰釉皿1点、第2段階の鉄釉後皿1点、擂鉢3点が確認された。

貿易陶磁は白磁皿のC群1点、染付碗E群2点、染付皿B1群1点が確認された。国産陶器、貿易陶磁の年代幅は15世紀後半から16世紀後半と幅がある。

小結

ここでは、烏山城全体の土器・陶磁器の傾向を西城中心にみてゆきたい。

西城では、国産陶器も貿易陶磁も15世紀後半から16世紀末までの製品が確認できる。なかでも16世紀中葉から後半に主体があるといえる。他の曲輪も出土数は少ないが、ほぼ同様の傾向といえる。

小野正敏氏は、中世陶磁の年代観から遺跡の時間的な継続性などを考慮して、1期を12世紀～14世紀中葉、2期を14世紀後半～15世紀前半、3期を15世紀後半～16世紀とした。ここで問題となるのは3期である。藤澤良祐氏の古瀬戸編年に対応させると古瀬戸後期IV～大窯期に相当する。北東の在地土器でみれば、瓦質製の鍋・釜・擂鉢などが多く生産され始める時期とも呼応する。

烏山城跡西城とほぼ同時期である群馬県太田金山城跡と佐野市唐沢山城跡を比較材料としてみてみよう（表25）。

この三城館の間に、注目すべき二点がある。

一つ目が、西城では瓦質製品がまったく確認できなかったことである。他の曲輪をみても古本丸と中城に瓦質の擂鉢などがわずかに確認されたのみである。

北武藏や上野、下野西部地域では、古瀬戸や大窯の擂鉢などを模倣した擂鉢、鉄製鍋を模倣した土製鍋が、城館などから一定量確認される。その一端を唐沢山城跡や金山城跡の出土遺物に見ることができる。下野東部地域では、発掘調査件数も少ないと挙げられるが、この手の瓦質製品の確認はあまりみない。土製鍋は鉄鍋の補完品もしくは、鉄鍋とは異なる煮炊きも想定されるところで、土製鍋がみられないことは鉄鍋が主体に使用されていたと想定できる。

二つ目が、貿易陶磁製品と瀬戸美濃製品の割合である。

三城を比較すると、唐沢山城跡は貿易陶磁製品が2倍、金山城跡は瀬戸美濃製品と貿易陶磁製品がほぼ拮抗する状況であったのにに対して、鳥山城跡は貿易陶磁が瀬戸美濃製品の3倍近い出土量であった。今回、データとして示さなかったが、鳥山城跡と同期の埼玉県の鉢形城跡、岩付城跡、騎西城跡、菖蒲城跡等の北武蔵の城館資料では、いずれも瀬戸美濃製品が貿易陶磁製品より多いのが一般的であった。

このように貿易陶磁と瀬戸美濃製品の数量の割合が異なる関東各地の城館においても共通することがある。それは、食膳具の碗と皿の出土数をみると、皿類が圧倒的に多いことである。西城の説明で触れたように染付皿は、染付碗より6.5倍も多い。このような傾向は関東全域にみられることであり、小野正敏氏は、「什器の機能分担が焼物から漆器へとその志向が変化したもの」と述べている（小野2005）。ただ、その漆器志向は、それ以前の時代からみられることがあるが、それならば皿も漆器に移行してもよいはずである。食生活のうえで、碗と皿の機能的相違があったのかもしれない。もっと言えば、食生活のなかで碗は、汁物や固形物などあらゆる食物に対応できるが、皿はその機能は限定される。食事の際の副菜を盛るための道具であるとか、日常の酒杯として使われたのかもしれない。いずれにしても陶磁器の皿は特定階層以上のための食器といえる。

表25 北関東の主要城館との出土陶磁器の比較

遺跡名	鳥山城 (内城)		皆武山城 (平入・屋敷)		金山城 (日ノ池)	
	250		962		1,200	
破片数	割合	破片数	割合	破片数	割合	
かわらけ	563	82.9	9,053	96.4	3,205	81.0
丸貫鉢					73	
丸貫皿			158	1.7	370	12.2
丸貫その他					38	
瀬戸美濃鉢	9		3		31	
瀬戸美濃皿	8		23		28	
瀬戸美濃盤	9		10		9	
瀬戸美濃瓶	0	4.1	0	0.4	1	1.9
瀬戸美濃巣・巣組	1		1		3	
瀬戸美濃巣・巣組	1		4		4	
瀬戸美濃不明						
常滑巣・巣組	9		48		125	
常滑鉢		1.3	0	0.5	1	3.2
常滑その他					1	
青磁鉢			3		2	
青磁皿	1		1		4	
青磁盤	1				2	
青磁巣・巣組	1					
青磁その他	1				2	
白磁鉢	3					
白磁皿	1		7		13	
白磁杯		11.6		0.9		1.6
白磁他			1			
染付鉢	9		11		11	
染付皿	62		42		25	
染付その他			4		3	
染付不明			1		1	
その他			16		1	
1件あたりの出土量 (貿易陶磁)		0.316		0.099		0.064
計	679	99.9	9,387	99.9	3,953	99.9

鳥山城跡でも碗皿などの日用品的な道具とは異なる陶磁器が確認されている。西城から出土した鎌倉時代の青磁盤は代表的なものである。

西城から青磁盤が出土したことは鳥山城が鎌倉時代に成立したことを物語っているのではない。戦国時代の城館からは、このような古手の青磁盤、青白磁梅瓶が確認されることが多い。それは、骨董的なもので、所有者の威信を表す材料でもあったとされる。

さらに西城では、瀬戸美濃製の鉄釉茶入、青磁香炉などの奢侈品も確認されている。これらの奢侈品の出土は、威信財に近いものであり、その遺跡の格の高さを示すものといえる。

食膳具の一種にかわらけがある。かわらけは、主に宴会・饗宴儀礼の際に、酒杯として使用されたものである。古本丸で確認されたかわらけ溜まりは、その儀礼に使用されたかわらけが一括廃棄された遺構であった。この遺構は、この曲輪が儀礼的な役割を持つ場を備えていたことを推測させ、鳥山城の主要曲輪のひとつであることを証するものでもあった。

2 江戸時代の出土陶磁器について

① 本丸

陶器については、瀬戸美濃製品、丹波製品、備前製品が出土した。瀬戸美濃製品の器種内訳としては、碗、茶入、茶壺、灯明皿、蓋である。瀬戸美濃製品のはほとんどが17世紀中葉から18世紀初頭のもので、灯明皿のみが19世紀のものであった。丹波製品は17世紀の擂鉢であった。備前製品は17世紀末から18世紀初頭の徳利であった。そのほか、産地不明であるが、ねこあんかが確認されている。

磁器については、肥前製品、瀬戸美濃製品が出土している。肥前製品の器種内訳は、碗、皿、盃であった。18世紀中葉から19世紀初頭にかけてのものが特に集中している。瀬戸美濃製品は19世紀の碗であった。

② 古本丸

陶器については、瀬戸美濃製品、唐津製品、信楽製品が出土している。瀬戸美濃製品は17世紀の志野皿であった。唐津製品は17世紀前半の碗であった。信楽製品は18世紀と想定される腰白の茶壺である。この他に産地の特定ができなかつたが、燭台の出土があった。

磁器については、肥前製品、瀬戸美濃製品が出土した。肥前製品は17世紀中葉の碗である。瀬戸美濃製品は19世紀中葉の染付碗である。

この他に18世紀の火鉢が出土した。

③ 西城

陶器については、瀬戸美濃製品、唐津製品、丹波製品、肥前製品が出土した。瀬戸美濃製品の器種内訳は、碗、皿、鬢皿、鉢、擂鉢、尾呂茶碗、天目茶碗、向付、壺である。唐津製品の器種内訳は皿と碗のみであった。丹波製品は擂鉢のみであった。肥前製品は碗と擂鉢が出土した。時期はどの製品も17世紀から18世紀初頭にかけてのものがほとんどで、これ以降の遺物の出土はない。この他に猿の土製品が出土している。産地は京都のものと考えられる。

磁器は出土したもののほとんどが肥前製品であった。内訳は碗、染付碗、青磁碗、白磁碗、染付皿、大皿、盃であった。染付皿のうち、1点が初期伊万里のもので、大皿は山辺田窯のものである。この他、波佐見の青磁皿や産地不明の白磁が出土した。時期は陶器と同様に17世紀から18世紀初頭にかけてのものであった。

④ 中城

中城は中世の様相と同様に調査面積が小さいため遺物量も少なかった。

陶器については、瀬戸美濃製品、京都系、本焼が出土した。瀬戸美濃製品の器種内訳は皿、天目茶碗、擂鉢、片口、香炉である。時期は出土したもののすべてが17世紀から18世紀初頭のものであった。京都系は内面に竹のような絵が描かれた小皿のみである。これは19世紀のものであった。本焼は頭部が欠損している從者と考えられる玩具のみである。これも京都系陶器と同様に19世紀のものであった。

磁器については肥前製品のみの出土で、内訳は碗、染付碗、皿、仏飯器である。これらすべてが17世紀の後半から18世紀初頭のものであった。

⑤ 北城

北城は調査面積に反比例し遺物出土量が少ない曲輪であった。

陶器については瀬戸美濃製品が出土した。そのすべてが志野のものであった。器種としては皿である。

磁器は小片が多く、肥前製品と考えられるものがほとんどであった。唯一復元可能なものとして猪口が出土した。

小結

近世の遺物はバリエーションの豊かな産地と器種が出土しているのが特徴的である。

まず陶器からみしていく。烏山城跡で出土する陶器は瀬戸美濃製品が圧倒的に多い。瀬戸美濃製品の中でも碗、皿類が多く、ほとんどの曲輪で確認されている。丹波製品は本丸と西城のみに出土し、器種は擂鉢のみである。唐津製品は古本丸と西城のみに出土し、器種は碗が中心であった。京都系の製品は土製品や玩具などの食器ではないもののみであった。

次に磁器を見ていく。ほとんどが肥前の染付であり、瀬戸美濃製品が本丸と古本丸から、波佐見製品が西城から少量確認されるのみであった。器種は碗類が大半を占めている。

瓦質土器の出土は中世と同様に少なく、火鉢が数点出土するのみであった。

以上、烏山城跡出土の近世陶磁器について述べてきたが、このことから烏山城跡で確認される陶磁器についてはほとんどが小型の食膳具であることが分かる。

また、佐々木達夫氏が「江戸へ流通した陶磁器とその背景」において一橋高校構内遺跡の出土遺物を検討した際に、17世紀末江戸の町屋の状況が出土量は「磁器が4、陶器が6」であり「磁器は肥前の染付」が、「陶器は瀬戸」のものが多く出土していることを報告したが、烏山城においても同様の状況がみられた。

近世陶磁器のなかで特筆すべきは古本丸や西城において初期伊万里の染付皿や山辺田窯の大皿、織部の向付などの良品が見受けられ、天目茶碗や茶壺、絵唐津の碗などの茶の湯に用いられたと考えられる器も多く確認されたことである。このことから、ある一定の階層の人物が暮らしていたと想定される。

調理器については擂鉢のみの出土で、鍋類などは確認されなかった。これは中世の様相とも同様であるために、引き続き、近世段階においても主に使用されていたものは鉄鍋であった可能性が想定される。調理施設は遺構として確認されていないが、調理器具の出土は各曲輪において居住していたことを決定づけることのできる資料と考えられるために、北城と古本丸では出土がなかったが基本的にはどの曲輪においても人の居住があったのだろうと考える。

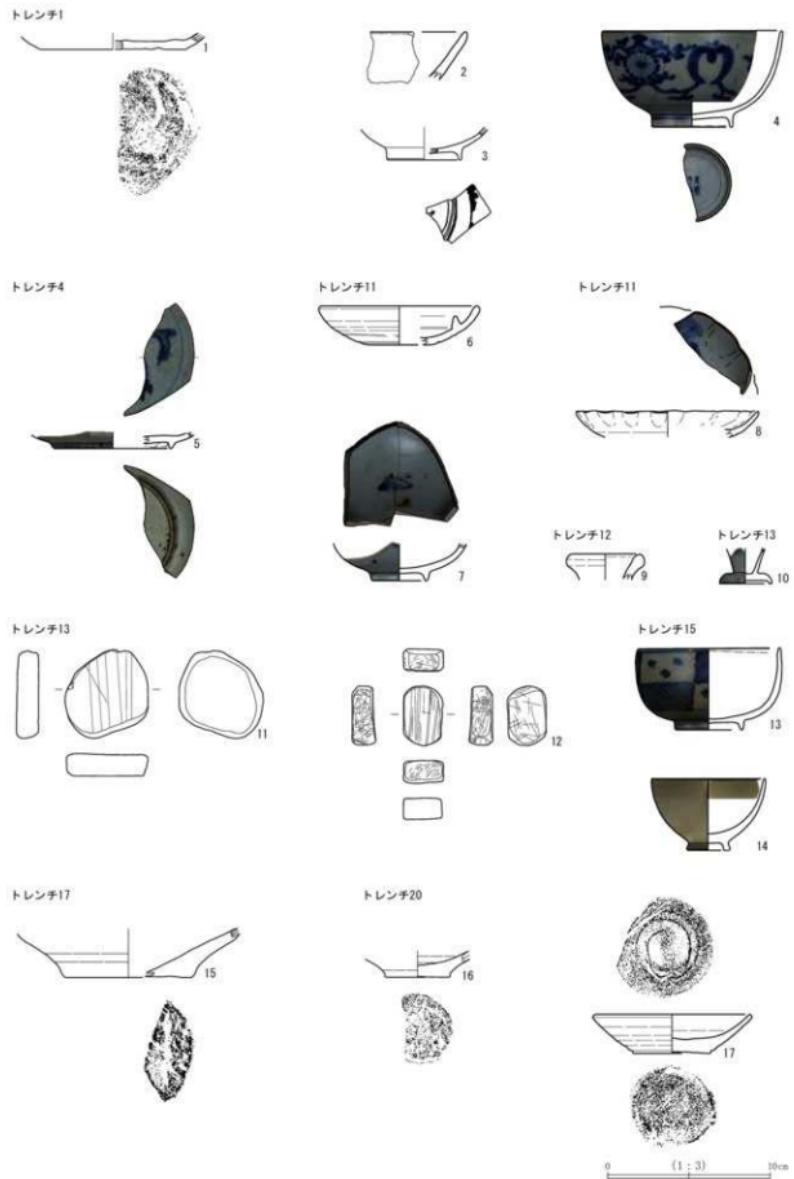
これらの状況をみると、戦国時代まで発掘調査のおよんだ古本丸・西城では、江戸時代初期の志野・唐津・初期伊万里などが確認されていることから、このふたつの曲輪については出土遺物から戦国時代からの継続的な使用が考えられる。本丸に関しては、江戸時代初期の面までしか調査されていないが、古本丸・西城と同様に戦国時代から継続使用したものと考えられる。中城・北城においても戦国時代から継続的に使用されたと考えられるが、各曲輪の調査報告の際にも述べたが、近世段階に実施されたと考えられる改修によって戦国時代の生活面が壊され整地されたために現段階においてその状況をみることは難しい。

西城の出土遺物の主体が17世紀初頭から中葉のものが比較的多く、18世紀中葉以降の遺物は確認されていないことから、西城は17世紀中葉までは確実に使用されており、そして、出土遺物が希薄となる18世紀前半には、ほぼその機能を失っていったことがわかる。そして北城においても17世紀中葉以降は生活されなかった様子が出土遺物から見ることができる。本丸、古本丸、中城では19世紀の遺物も確認されることから生活空間が集約されていく様子もうかがうことができる。17世紀以降の本丸、古本丸の出土遺物は、高級陶器や奢侈なやきものは少なくなっている、さらに18世紀以降に至るやきものは、瀬戸美濃製の磁器碗や肥前製の磁器碗や皿などの日常品が多くなっている。

これは、万治2年（1659）に堀親昌が三の丸の整備をしたことによって、山上から山麓に生活空間を移していくことに呼応するものと考えられる。

引用・参考文献

- 大成可乃2011「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（2）」『東京大学構内遺跡調査年報』7
小野正敏2005「貿易陶磁と中世陶磁組成」小野正敏・藤澤良祐編『中世の伊豆・駿河・遠江－出土遺物が語る社会』高志書院
菊川町教育委員会編1999「横地域跡総合調査報告書」
埼玉県立歴史資料館編2005「戦国の城」高志書院
佐々木達夫1987「江戸へ流通した陶磁器とその背景」『国立歴史民俗博物館研究報告』第14集
佐野市教育委員会編2013「唐沢山城跡調査報告書」
東吾妻町教育委員会編2018「東吾妻町指定史跡 岩懸城跡総合調査報告書」
藤澤良祐2008「中世瀬戸窯の研究」高志書院

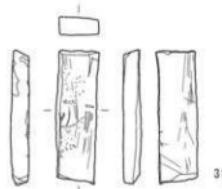
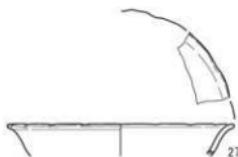


第63図 本丸 出土遺物 (1)

表採

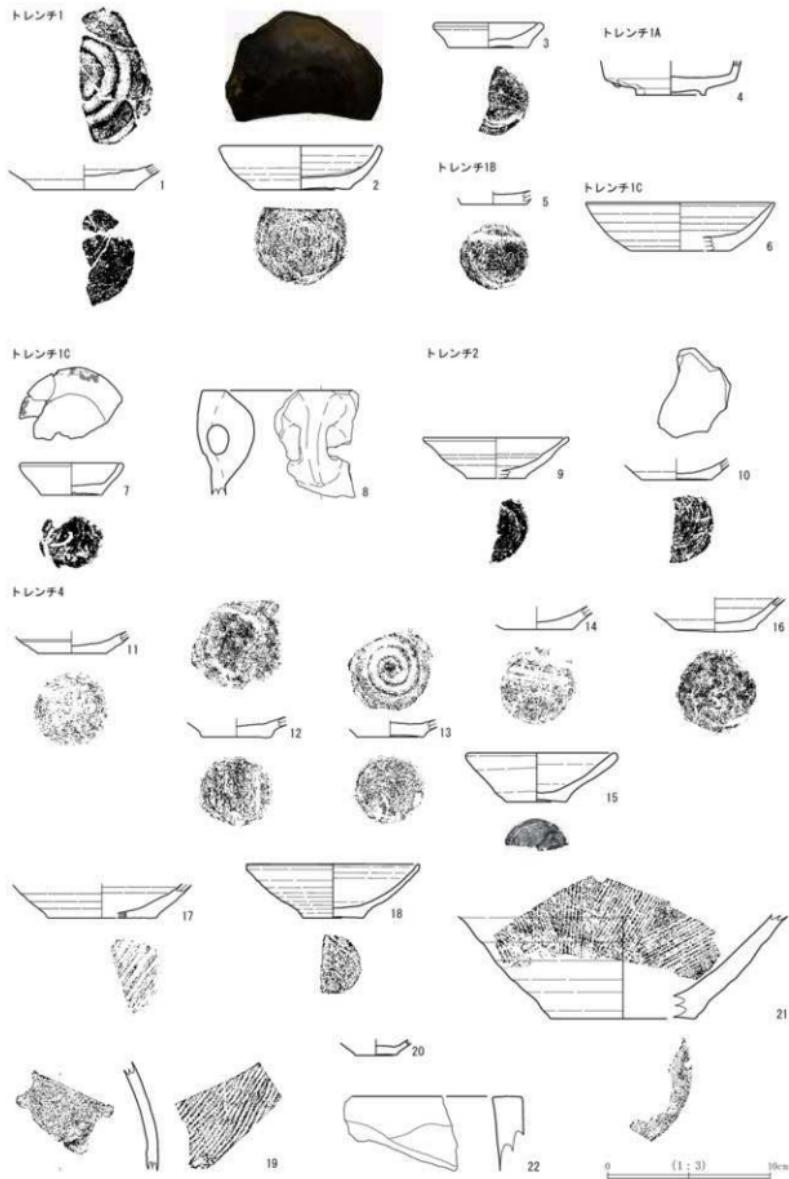


4



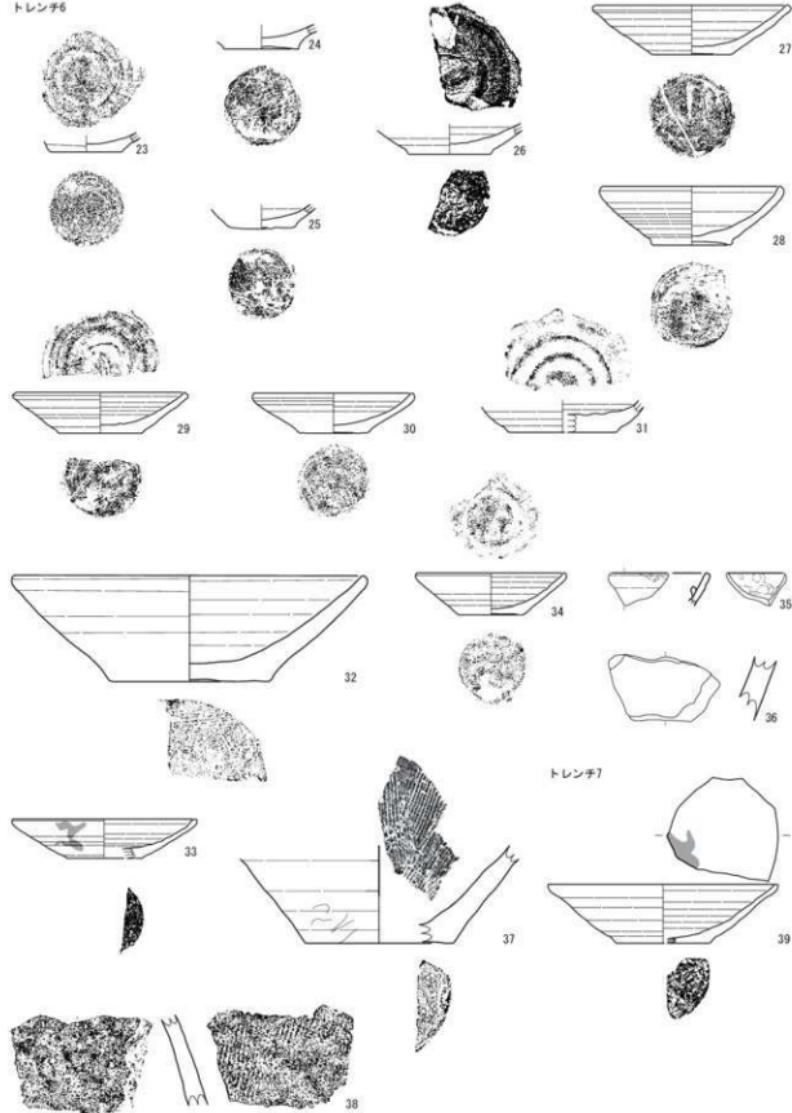
0 30 (1 : 2) 5cm
0 その他 (1 : 3) 10cm

第64図 本丸 出土遺物 (2)



第65図 古本丸 出土遺物（1）

トレンチ6

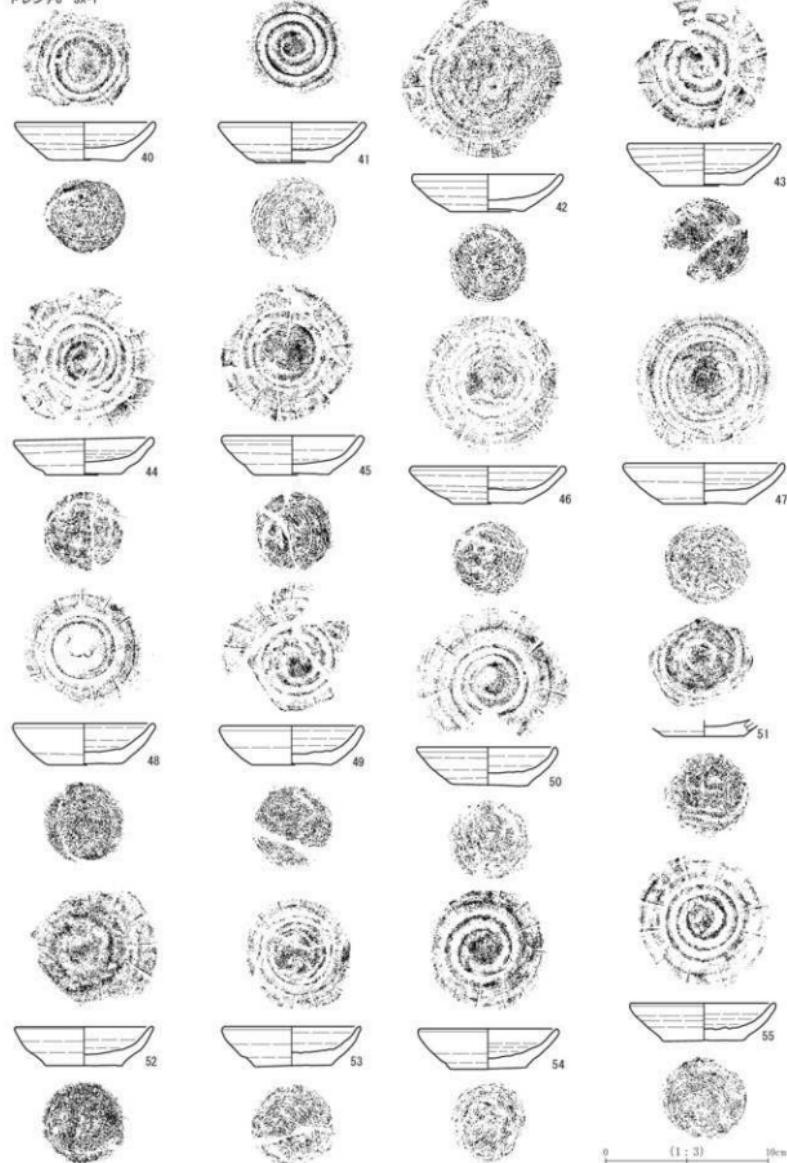


トレンチ7

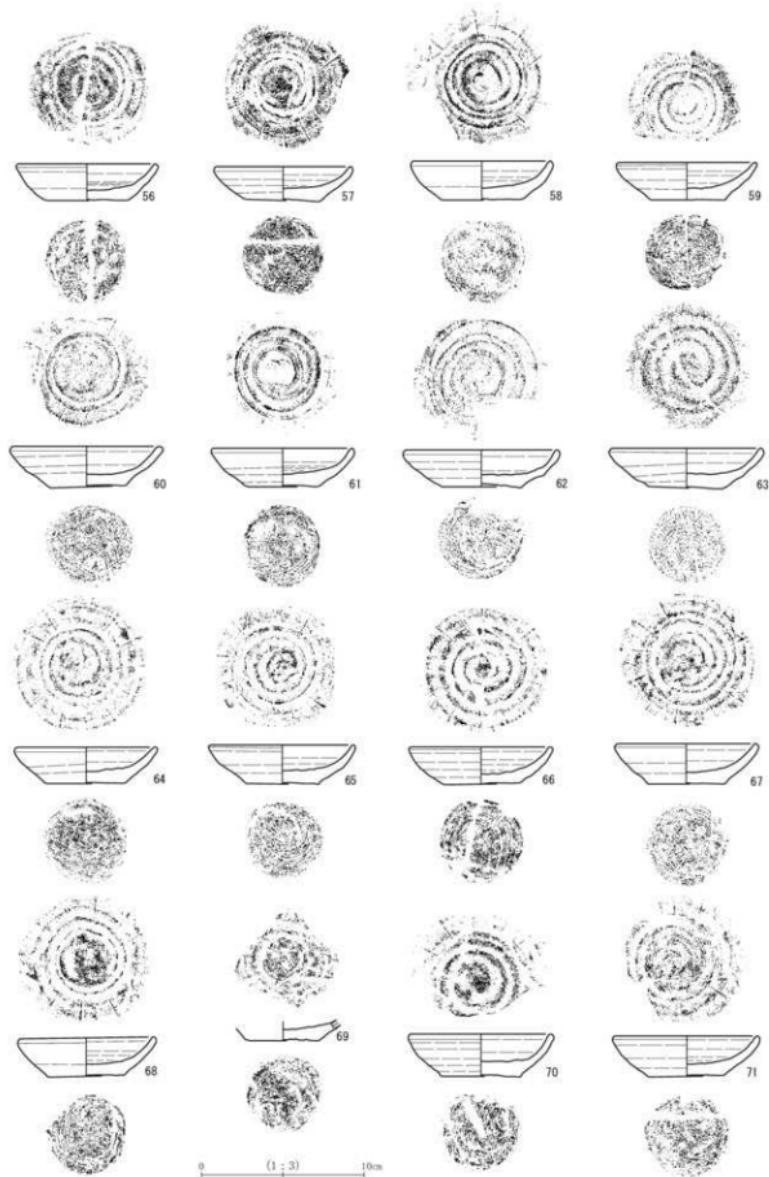
0 (1 : 3) 10cm

第66図 古本丸 出土遺物 (2)

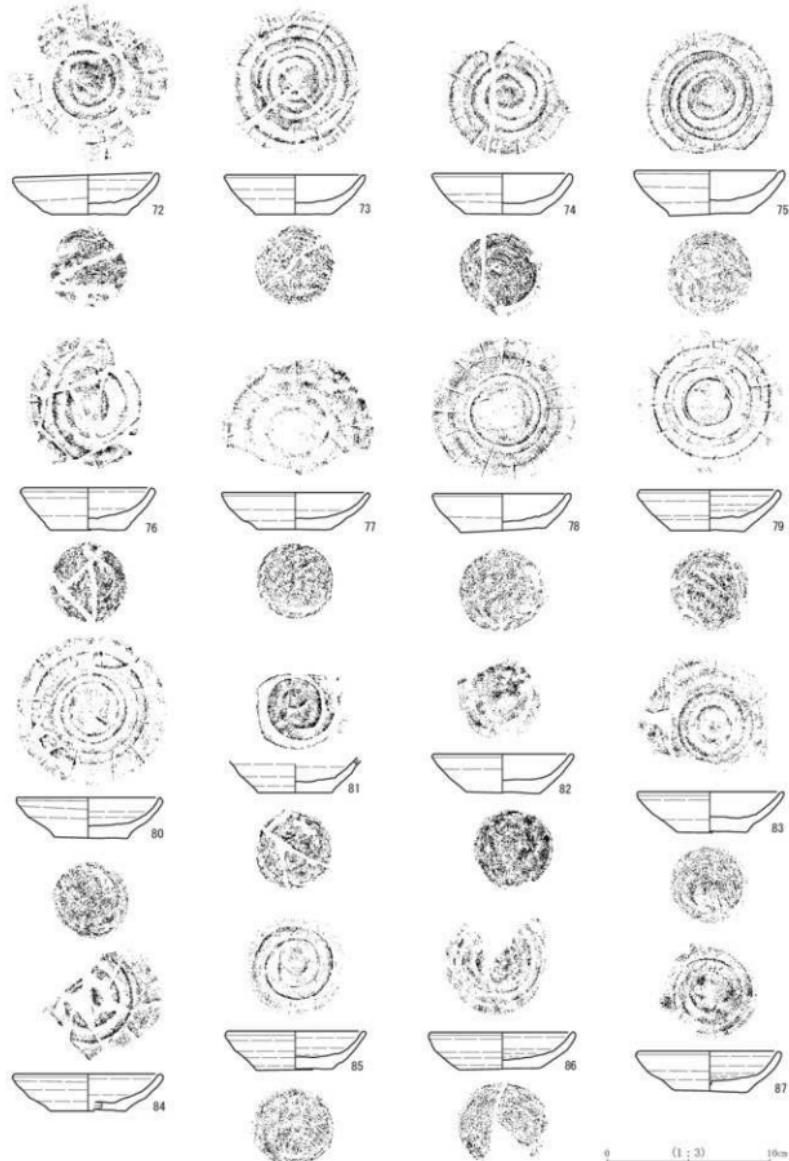
トレンチB SX-1



第67図 古本丸 出土遺物（3）



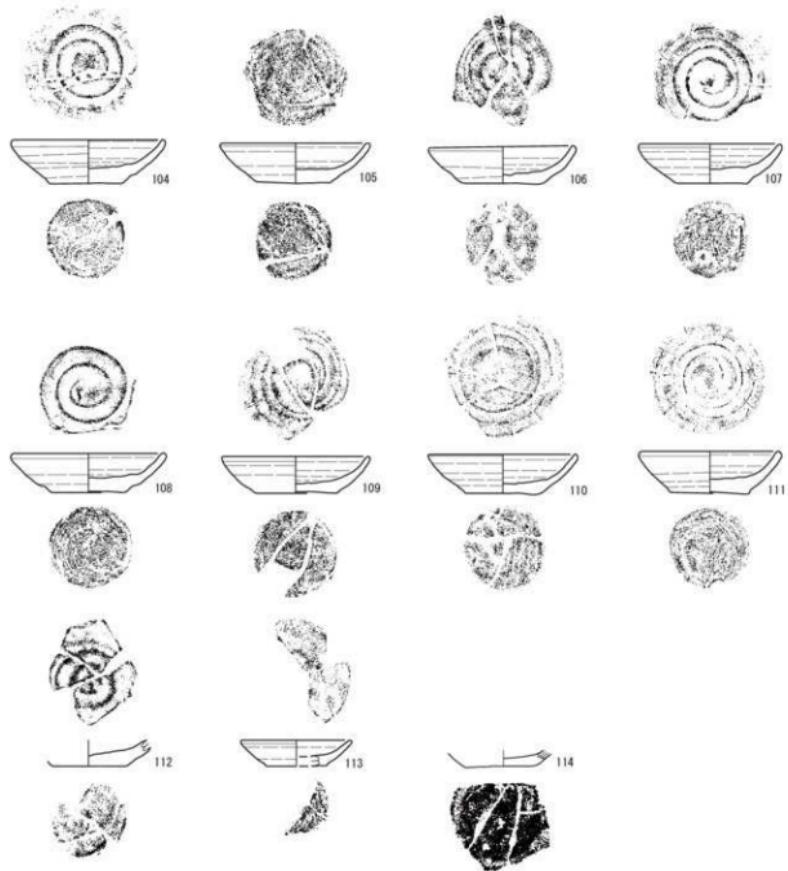
第 68 図 古本丸 出土遺物 (4)



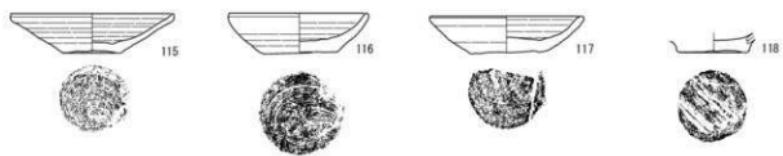
第69図 古本丸 出土遺物（5）



第70図 古本丸 出土遺物（6）



トレンチ8



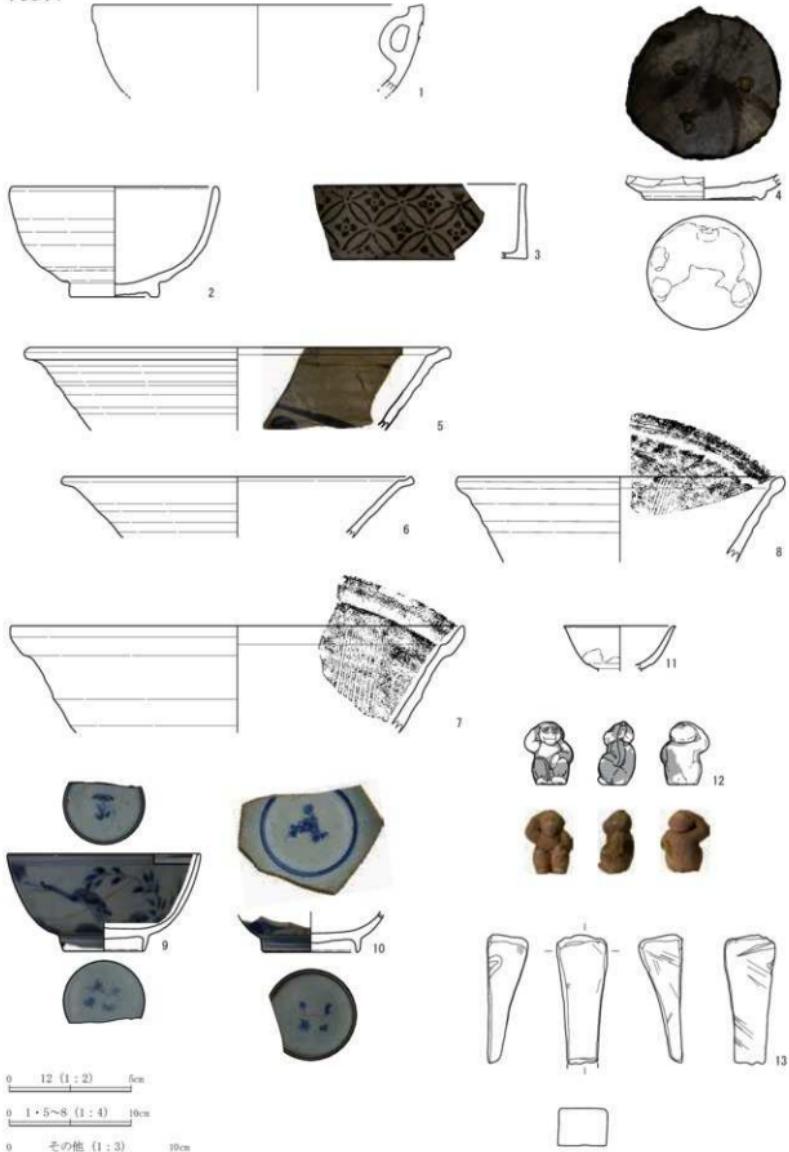
0 (1 : 3) 10cm

第71図 古本丸 出土遺物 (7)



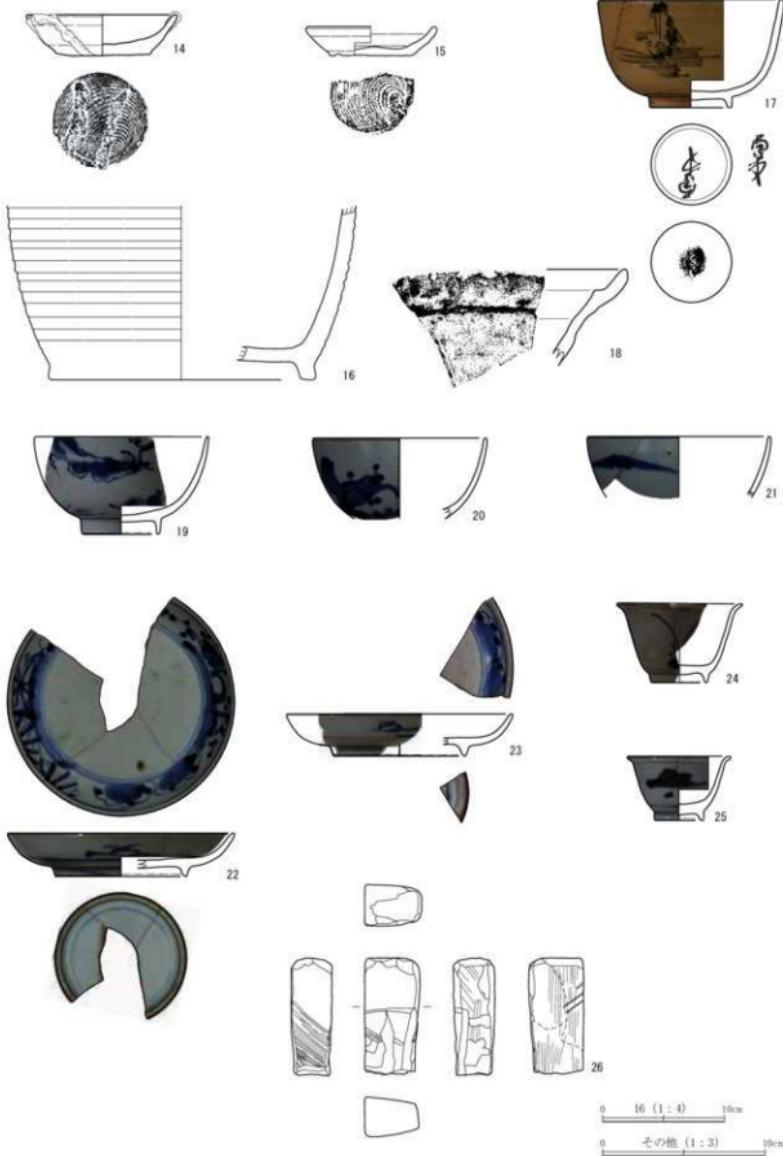
第72図 古本丸 出土遺物 (8)

トレンチ4

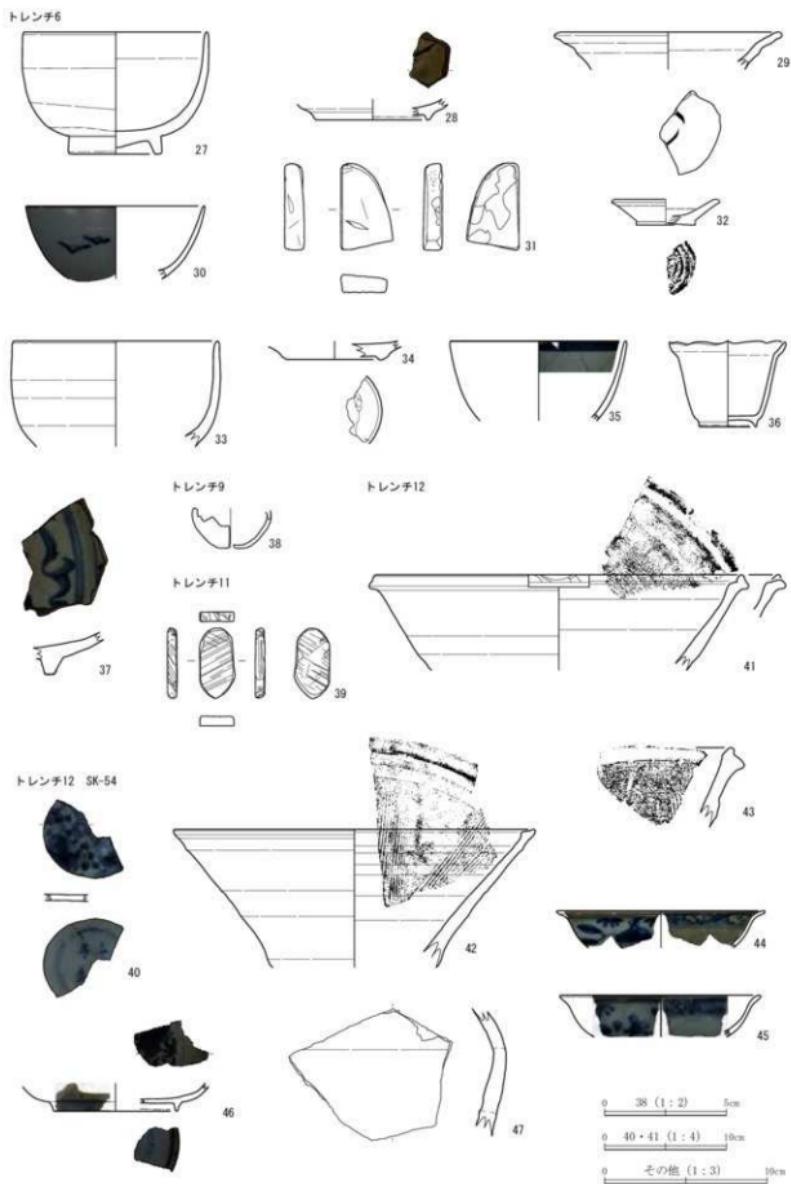


第73図 西城 出土遺物（1）

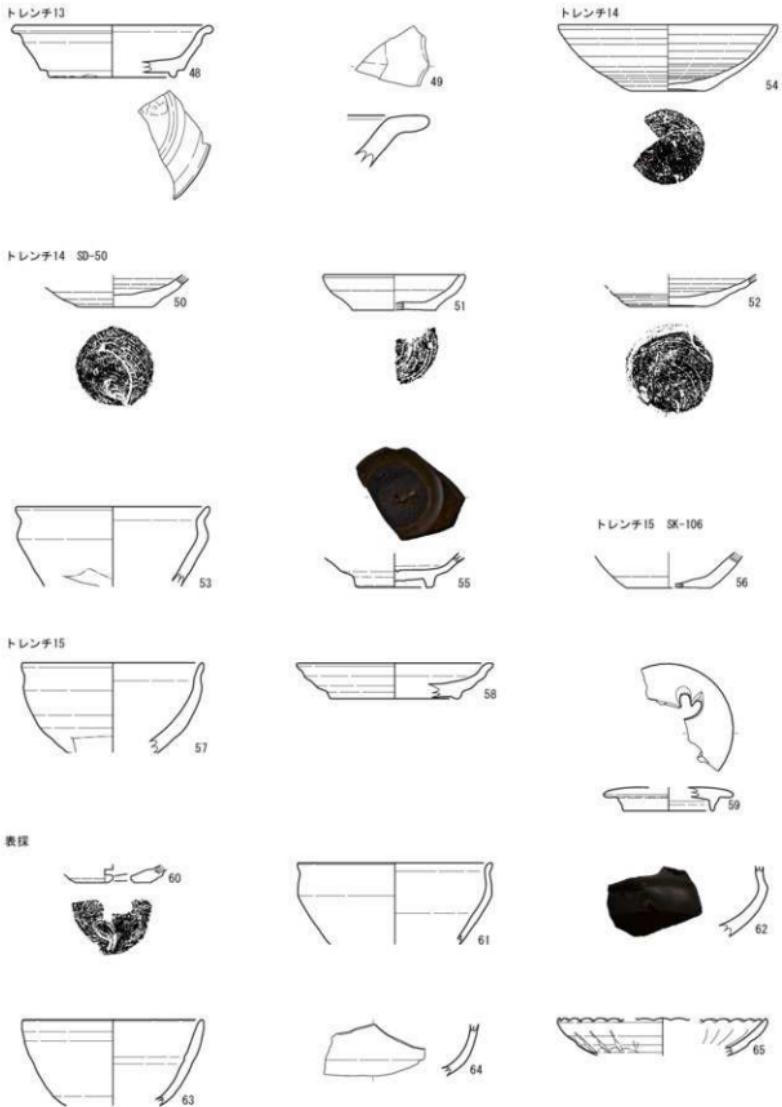
トレンチ5



第74図 西城 出土遺物（2）



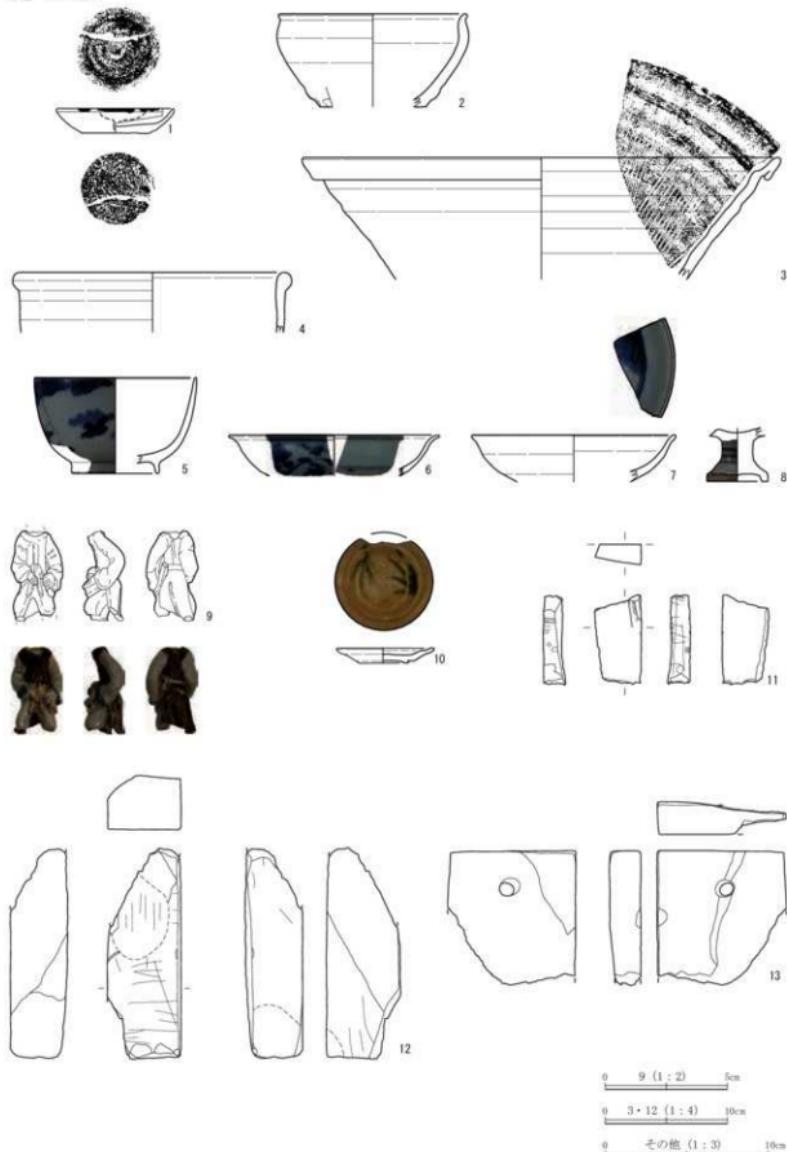
第75図 西城 出土遺物（3）



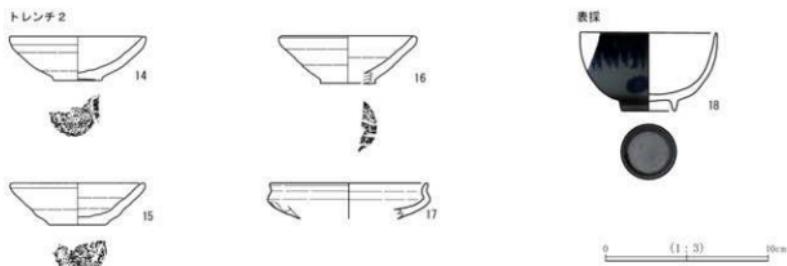
0 (1 : 3) 10cm

第76図 西城 出土遺物 (4)

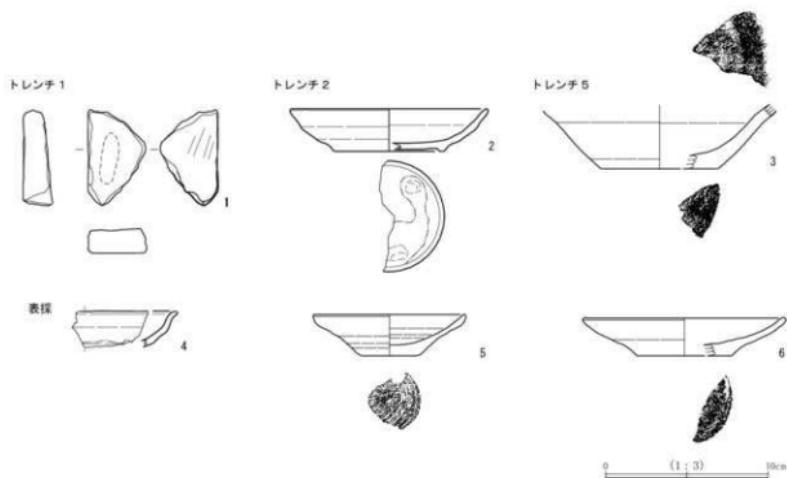
中城 トレンチ1



第77図 中城 出土遺物（1）



第78図 中城 出土遺物（2）



第79図 北城 出土遺物



第80図 釜ヶ入口 出土遺物

表 26 出土遺物觀察表（1）

本丸出土遺物

回	種別・器種	部位・残存 区分	法螺 (mm)			量形比 (1:底) (2:高)	技法・模様等	施成・色調	出土位置	時間・产地	備考
			11底	高倍	基倍						
1	1.頭頂上端 かわら?	底部	-	92	10	-	内外面ヨコナギ 内外面赤	良好 内外面青白色	トレンチ	17C 東 濃江	
2	頭頂 付付鏡	口縁	130B	-	130H	-	口唇張付	良好 内外面紅褐色	トレンチ	16C 東 濃江	
3	頭頂 付付鏡	底部	-	-	-	-	外表面付	良好 内外面紅白色	トレンチ	1680~1690 年代 肥前	「人」(明治期)
4	頭頂 付付鏡	40%	110H	1480	50	-	外表面付	良好 内外面紅白色	トレンチ	1680~1690 年代 肥前	「り」(明治期)
5	頭頂 付付鏡	底部	-	73D	110H	-	内外面付	良好 内外面青白色	トレンチ	日光	豆根鏡
6	頭頂 付付鏡	10%	96H	140H	24	-	内外面ヨコナギ 内外面赤切り	良好 内外面紅褐色	トレンチ 11 SN 10 の範囲	19C 前半 濃江?・美濃	下田
7	頭頂 付付鏡	底部	-	32	12H	-	丸鏡 内外面赤	良好 内外面明褐色	トレンチ 11 SN 10 の範囲	18C 後葉~19C 初頭 肥前	
8	頭頂 付付鏡	11H	812H	-	110H	-	輪花鏡 内外面付	良好 内外面明褐色	トレンチ 11 SN 10 の範囲	1820~春末 肥前	
9	頭頂 付付鏡	底部 ?-?	-	32	12H	-	外表面付	良好 内外面明褐色	トレンチ 11 SN 10 の範囲	19C 中葉 肥前	
10	頭頂 鏡	11H	140	-	11H	-	-	良好 内外面に云い赤褐色	トレンチ 12	17C 東~18C 初頭 濃江	
11	鏡 鏡	元形	53	54	13	-	-	-	トレンチ 13		
12	鏡 鏡	100%	36	24	13	-	-	-	トレンチ 13		
13	頭頂 付付鏡	30%	87	40	50	-	外表面付、蓋付鏡	良好 内外面紅白色	トレンチ 15	18C 後葉~19C 初頭 肥前	
14	頭頂 鏡	40%	70	25	49	-	大白輪鏡 口唇張付	良好 内外面紅白色	トレンチ 15	18C	
15	1.頭頂上端 かわら?	10%	-	92	10	-	内外面ヨコナギ 内外面赤切り	良好 内外面に云い赤褐色	トレンチ 17		
16	頭頂上端 かわら?	底部	-	78	30	-	内外面ヨコナギ 内外面赤切り	良好 内外面紅白色	トレンチ 20		
17	1.頭頂上端 かわら?	80%	-	40	16	-	内外面ヨコナギ 内外面赤切り	良好 内外面に云い赤褐色	トレンチ 20		
18	頭頂不明	11H	106H	-	11H	-	志野	良好 内外面に云い赤褐色	西塀	17C 前半 濃江?・美濃	
19	頭頂 鏡	40%	100	47	61	-	朱雀鏡、内外面赤、外表面斜付	良好 内外面紅色	西塀	18C 東~19C 后葉 濃江?・美濃	
20	頭頂 鏡	20H	277	139	19	-	外表面黒	良好 内外面紅色、外表面黒	西塀	濃江?・美濃	
21	頭頂 ねこあんな	底部	-	180	34H	-	-	良好 内外面黒褐色	西塀	17C 東~(江戸?)	
22	頭頂 鏡	11H	94H	-	130H	-	羅冠、内外面赤付	良好 内外面明褐色	西塀	18C 前半 濃江?・美濃	
23	頭頂 鏡	11H	124	-	146	-	丸鏡、外表面付	良好 内外面明褐色	西塀	17C 肥前	
24	頭頂 鏡	底部	-	134	132	-	外表面付	良好 内外面明オリーブ色	西塀	18C 中~後半 肥前	こんにゃく目
25	頭頂 鏡	11H	103	-	133	-	丸鏡、外表面付	良好 内外面紅白色	西塀	18C 中~前半 肥前	
26	頭頂 鏡	底部	-	134	221	-	内外面赤	良好 内外面明褐色	西塀	18C 前~中 肥前	
27	頭頂 付付鏡	11H	138H	-	129H	-	輪花鏡、羅冠	良好 内外面明褐色	西塀	16C 東~17C 豆根鏡	
28	頭頂 鏡	底部	-	138	134	-	羅冠、内外面赤付	良好 内外面明褐色	西塀	濃江?・美濃	
29	頭頂 鏡	50%	95H	24	29	-	-	良好 内外面紅白色	西塀		
30	頭頂 小鏡	50%	134	127	4	-	-	良好 内外面紅褐色	西塀		
31	鏡 鏡	90%	190H	25	7	-	-	-	西塀		
總整理	種別・器種	部位・残存 区分	法螺 (mm)			量形比 (1:底) (2:高)	技法・模様等	施成・色調	出土位置	時間・产地	備考
1	頭頂 鏡	11H	(26)	-	-	-	皿型	良好 内外面に云い赤褐色	トレンチ 1	17C 前半 濃江	
2	1.頭頂上端 内底鏡?	底部	-	-	-	-	内外面ヨコナギ 標準あり(?)	良好 内外面褐色、内底鏡褐色	トレンチ 1	-	
3	頭頂 銀鏡	底部	-	-	-	-	大皿	良好 内外面リーフ状色、内底鏡白色	トレンチ 1	16C ~ 17C 豆根鏡	
4	頭頂 付付鏡	高台	-	-	-	-	内外面赤付	良好 内外面赤褐色	トレンチ 1	日光 豆根鏡	光を受けている
5	頭頂 鏡	底部	-	36	11H	-	-	良好 内外面紅白色	トレンチ 5	日光 豆根鏡	
6	頭頂 鏡	解	-	-	-	-	鉢形、解巻葉入	良好 内底鏡褐色、内底鏡褐色	トレンチ 14	17C ~ ? 濃江?・美濃	
7	頭頂 奈奈	底部	-	(94)	14H	-	-	-	トレンチ 17	濃江?・美濃	光を受けている 豆根鏡付着者
8	頭頂 付付鏡	鋼部	-	-	-	-	鉢巻鏡、内外面赤付	良好 内外面明褐色	トレンチ 20	16C 前半 豆根鏡	
9	頭頂 鏡	11H	(182)	-	-	-	皿型	良好 内底鏡褐色	え~3 表塀	17C 中葉 伊万里	
10	頭頂 鏡	底部	-	69	130H	-	-	良好 内底鏡に云い褐色、内底鏡褐色	3~3 表塀	大雲 濃江?・美濃	
11	頭頂 付付鏡	11H	(109)	-	-	-	輪花鏡	良好 内外面褐色	3区 表塀	16C	
12	頭頂 付付鏡	足込	-	-	-	-	内外面赤付	良好 内外面明褐色	本丸表塀 豆根鏡		
13	頭頂 鏡	11H	(160)	-	-	-	内外面赤付	良好 内外面明褐色	本丸表塀 豆根鏡	17C 前半 伊万里	
14	頭頂 多孔(切付)	鋼部	-	-	-	-	鉢巻	良好 内底鏡褐色、内底鏡褐色	正門前付近 表塀	17C 濃江?・美濃	

表27 出土遺物觀察表（2）

古本地出土物

図	種類・器種	部位・残存	法長 (mm)			断面比 (1:縦:横)	形状等	焼成・色調	出土位置	時間・地層	備考	
			1	2	3							
1	上部質上層 かわらけ?	21%	-	62	17	-	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ1			
2	上部質上層 かわらけ?	底部	96	59	27	1.6	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ1	戰国時代	かわらけ転用 赤褐色の付着物あり	
3	上部質上層 かわらけ?	40%	65	49	49	1.3	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面青褐色。外面に高い濃褐色	トレンチ1			
4	陶器 瓶	底部	-	43	21	-	直腹	良好 内外面、外面に高い濃褐色	トレンチ1 A	17C前半 鉄作		
5	上部質上層 かわらけ?	30%	-	41	9	-	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り直腹斜腹あり	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ1 B			
6	上部質上層 かわらけ?	20%	116	61	30	1.9	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面青褐色	トレンチ1 C			
7	上部質上層 白質	90%	60	38	20	1.5	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ1 C			
8	瓦質上層 灰瓦	把手	-	-	65	-	-	良好 内外面黒褐色	トレンチ1 C	戰国時代		
9	下部質上層 白質	20%	90	36	25	2.5	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面青褐色	トレンチ2			
10	上部質上層 白質	20%	-	42	13	-	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面黒褐色、外面青褐色	トレンチ2			
11	上部質上層 かわらけ?	30%	-	43	14	-	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り沈澱あり	良好 外面に高い濃褐色	トレンチ2			
12	上部質上層 かわらけ?	30%	-	42	12	-	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り直腹目折あり	良好 外面に高い濃褐色	トレンチ2			
13	上部質上層 かわらけ?	50%	-	41	10	-	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切りチナ	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ2			
14	上部質上層 かわらけ?	20%	-	43	9	-	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面青褐色	トレンチ2			
15	上部質上層 かわらけ?	40%	90	37	30	2.4	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ2			
16	上部質上層 かわらけ?	30%	-	49	22	-	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	中や小良 内外面青褐色、外面に高い濃褐色	トレンチ2			
17	上部質上層 かわらけ?	20%	-	67	22	-	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ2			
18	上部質上層 かわらけ?	30%	106	37	30	2.8	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ2			
19	瓦質上層 筒瓦?	側部?	-	-	87	-	内側ロビンゼ、外面ハケ	良好 内外面黒褐色、当面周灰色	東西トレンチ東側	在地		
20	上部質上層 つぼ?	底部	-	2.5	1H1	-	直腹輪柱目切り	良好 内面明褐色、外面周灰色	トレンチ2	東西トレンチ東側	戰国時代	かわらけ転用
21	陶器 瓶	底部~側 部	890	860	860	-	当面のロコナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面黒褐色	トレンチ2	大業2.2.3 廻りバ・米倉	内山摩底	
22	瓦質上層 瓦	-	-	-	1H1	-	内側ロビンゼ	良好 内外面黒褐色	トレンチ2	1H2か?7	在地?	
23	上部質上層 かわらけ?	30%	-	440	1H2	-	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り直腹斜腹あり	良好 内外面青褐色	トレンチ2			
24	上部質上層 かわらけ?	30%	-	460	1H2	-	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ2			
25	上部質上層 かわらけ?	30%	-	411	1H2	-	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切りチナ	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ2			
26	上部質上層 かわらけ?	30%	-	500	1H2	-	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ2			
27	上部質上層 かわらけ?	40%	1190	500	31H	2.3	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り直腹斜腹あり	中や小良 内外面青褐色	トレンチ2			
28	上部質上層 かわらけ?	40%	1080	480	30H	2.2	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切りヘラヘナ	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ2			
29	上部質上層 かわらけ?	30%	1050	520	25H	2	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面青褐色	トレンチ2			
30	上部質上層 かわらけ?	60%	198	146	25	2.2	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面青褐色	トレンチ2			
31	上部質上層 かわらけ?	30%	-	160	20H	-	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	不良 内外面に高い濃褐色	トレンチ2			
32	上部質上層 かわらけ?	30%	-	214	100	65	2.1	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り直腹斜腹あり	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ2		
33	上部質上層 白質	20%	1130	460	22H	2.4	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面に高い濃褐色、外面周灰色	トレンチ2			
34	上部質上層 かわらけ?	30%	891	100	22H	2.2	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切りチナ	良好 内外面青褐色	トレンチ2			
35	上部質上層 かわらけ?	11H2	-	-	22H	-	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り直腹斜腹チナ	良好 内外面青褐色	トレンチ2			
36	瓦質上層 瓦	側部?	-	-	130	-	内側ロコロナゲ	良好 内外面黒褐色	トレンチ2	在地		
37	陶器 瓶	底部	-	-	690	160	-	内面ロコロナゲ	良好 内外面青褐色	トレンチ2		
38	陶器 瓶	側部?	-	-	550	-	内面ロビンゼ、外面ハケ	良好 内外面青灰色、外面周灰色	トレンチ2	張り出し部		
39	上部質上層 白質	20%	142	580	30H	2.4	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ2			
40	上部質上層 かわらけ?	60%	85	47	23	1.8	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ2 SN1			
41	上部質上層 かわらけ?	11H2	11H2	-	88	46	25	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ2 SN1		
42	上部質上層 かわらけ?	90%	91	45	23	2	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面青褐色	トレンチ2 SN1			
43	上部質上層 かわらけ?	70%	93	51	26	1.8	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ2 SN1			
44	上部質上層 かわらけ?	90%	86	46	22	1.8	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ2 SN1			
45	上部質上層 かわらけ?	90%	85	46	24	1.8	内側ロコロナゲ 直腹輪柱目切り	良好 内外面に高い濃褐色	トレンチ2 SN1			

表 28 出土遺物觀察表（3）

1.上顎臼歯 かわらけ	完形	93	43	23	2.上顎臼歯 かわらけ	内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4	内面黒あり
47.上顎臼歯 かわらけ	90%	97	51	25	1.上顎臼歯 かわらけ	内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4	
48.上顎臼歯 かわらけ	70%	85	42	26	2.上顎臼歯 かわらけ	内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	やや不規 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4	
49.上顎臼歯 かわらけ	50%	86	48	24	1.上顎臼歯 かわらけ	内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	内面明褐色 外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4	
50.上顎臼歯 かわらけ	70%	85	47	23	1.上顎臼歯 かわらけ	内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4	
51.上顎臼歯 かわらけ	追跡のみ	-	48	10	内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内面灰褐色。外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
52.上顎臼歯 かわらけ	90%	84	48	24	1.5.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	不良 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
53.上顎臼歯 かわらけ	完形	94	47	24	1.7.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
54.上顎臼歯 かわらけ	90%	85	41	25	2.上顎臼歯 かわらけ	内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4	
55.上顎臼歯 かわらけ	完形	89	50	23	1.7.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
56.上顎臼歯 かわらけ	70%	84	50	22	1.6.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	不良 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		
57.上顎臼歯 かわらけ	90%	84	46	21	1.8.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	不良 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		
58.上顎臼歯 かわらけ	90%	85	50	24	1.7.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
59.上顎臼歯 かわらけ	50%	84	46	23	1.8.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内面灰褐色。外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
60.上顎臼歯 かわらけ	60%	90	47	25	1.5.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
61.上顎臼歯 かわらけ	80%	86	45	24	1.9.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
62.上顎臼歯 かわらけ	70%	92	50	23	1.8.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
63.上顎臼歯 かわらけ	完形	92	46	25	2.上顎臼歯 かわらけ	内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	やや不良 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4	
64.上顎臼歯 かわらけ	ほぼ完形	86	49	22	1.7.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		
65.上顎臼歯 かわらけ	90%	87	45	24	1.8.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		
66.上顎臼歯 かわらけ	ほぼ完形	87	48	23	1.8.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		
67.上顎臼歯 かわらけ	90%	85	48	25	1.7.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
68.上顎臼歯 かわらけ	ほぼ完形	83	48	24	1.7.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		
69.上顎臼歯 かわらけ	追跡のみ 充てん	-	43	12	1.7.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		
70.上顎臼歯 かわらけ	50%	86	49	26	1.7.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		
71.上顎臼歯 かわらけ	90%	86	47	25	1.8.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		
72.上顎臼歯 かわらけ	60%	86	46	24	1.8.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		
73.上顎臼歯 かわらけ	90%	85	47	24	1.8.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
74.上顎臼歯 かわらけ	60%	85	41	25	2.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
75.上顎臼歯 かわらけ	90%	91	51	22	1.7.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
76.上顎臼歯 かわらけ	50%	78	46	26	1.6.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
77.上顎臼歯 かわらけ	60%	91	41	23	2.上顎臼歯 かわらけ	内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	不良 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4	
78.上顎臼歯 かわらけ	完形	85	53	23	1.8.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		
79.上顎臼歯 かわらけ	90%	85	41	24	2.上顎臼歯 かわらけ	内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4	
80.上顎臼歯 かわらけ	90%	89	41	25	2.4.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
81.上顎臼歯 かわらけ	40%	-	46	22	1.8.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
82.上顎臼歯 かわらけ	70%	86	41	24	2.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	不良 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		
83.上顎臼歯 かわらけ	90%	91	43	25	2.3.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
84.上顎臼歯 かわらけ	40%	90	46	23	1.8.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
85.上顎臼歯 かわらけ	ほぼ完形	84	47	24	1.7.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		
86.上顎臼歯 かわらけ	90%	88	49	23	1.7.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		
87.上顎臼歯 かわらけ	90%	85	66	26	1.8.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	不良 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		(脇城が悪い)
88.上顎臼歯 かわらけ	90%	91	42	22	1.8.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面にぶい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
89.上顎臼歯 かわらけ	完形	88	49	24	1.2.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		
90.上顎臼歯 かわらけ	90%	85	47	23	1.8.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	良好 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		
91.上顎臼歯 かわらけ	70%	78	46	23	1.8.内外面にクロロダ 乳頭輪状切切り	不良 内外面灰褐色	トレンチ8 SN-4		

表29 出土遺物觀察表（4）

92	上顎骨上顎骨 かわらけ	90%	81	42	26	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	やや不良 内外面黄褐色	トレンチ8 SN-4		
93	上顎骨上顎骨 かわらけ	90%	81	44	25	1.9	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	やや不良 内外面黄褐色、外面にひい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
94	上顎骨上顎骨 かわらけ	20%	86	47	25	1.8	内外面クロナデ、中央エビナデ 直頭骨軸孔切り	良 内外面にひい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
95	上顎骨上顎骨 かわらけ	90%	80	46	23	1.7	内外面クロナデ、中央エビナデ 直頭骨軸孔切り	良 内外面黄褐色	トレンチ8 SN-4		
96	上顎骨上顎骨 かわらけ	11.5正完形	81	47	24	1.7	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	良 内外面黄褐色	トレンチ8 SN-4		
97	上顎骨上顎骨 かわらけ	12.5正完形	87	44	23	1.9	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	やや不良 内外面黄褐色	トレンチ8 SN-4		
98	上顎骨上顎骨 かわらけ	70%	92	44	24	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	良 内外面にひい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
99	上顎骨上顎骨 かわらけ	60%	92	40	21	2.3	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	良 内外面にひい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
100	上顎骨上顎骨 かわらけ	80%	82	44	23	1.8	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	やや不良 内外面黄褐色	トレンチ8 SN-4		
101	上顎骨上顎骨 かわらけ	70%	82	45	20	1.8	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	やや不良 内外面黄褐色	トレンチ8 SN-4		
102	上顎骨上顎骨 かわらけ	50%	86	42	22	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	良 内外面にひい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
103	上顎骨上顎骨 かわらけ	50%	91	48	23	1.8	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	やや不良 内外面にひい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
104	上顎骨上顎骨 かわらけ	80%	92	46	27	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	良好 内外面黄褐色	トレンチ8 SN-4		
105	上顎骨上顎骨 かわらけ	70%	92	41	25	2.2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	やや不良 内外面にひい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
106	上顎骨上顎骨 かわらけ	60%	88	49	22	1.7	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	やや不良 内外面にひい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
107	上顎骨上顎骨 かわらけ	60%	87	44	24	1.9	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	良 内外面にひい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
108	上顎骨上顎骨 かわらけ	50%	94	46	24	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	良好 内外面にひい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
109	上顎骨上顎骨 かわらけ	50%	90	50	25	1.8	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	良 内外面にひい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
110	上顎骨上顎骨 かわらけ	70%	91	46	24	1.9	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	やや不良 内外面にひい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
111	上顎骨上顎骨 かわらけ	90%	84	49	26	1.7	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	良好 内外面黄褐色	トレンチ8 SN-4		
112	上顎骨上顎骨 かわらけ	30%	-	45	16	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	やや不良 内外面黄褐色	トレンチ8 SN-4		
113	上顎骨上顎骨 かわらけ	40%	67	38	16	1.7	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	良好 内外面黄褐色	トレンチ8 SN-4		
114	上顎骨上顎骨 かわらけ	-	-	[45]	-	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	良好 内外面にひい黄褐色	トレンチ8 SN-4		
115	上顎骨上顎骨 かわらけ	60%	(30)	(30)	(20)	2.8	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	良好 内外面黄褐色	トレンチ8		
116	上顎骨上顎骨 かわらけ	60%	85	45	20	1.8	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	良 内外面にひい黄褐色	トレンチ8		
117	上顎骨上顎骨 かわらけ	50%	89	46	22	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り	良好 内外面にひい黄褐色	トレンチ8		
118	上顎骨上顎骨 かわらけ	30%	-	(42)	(22)	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り直頭骨軸孔あり	良好 内外面にひい黄褐色	トレンチ8		
119	上顎骨上顎骨 かわらけ	60%	(80)	(44)	(20)	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り直頭骨軸孔あり	良好 内外面にひい黄褐色	トレンチ9		
120	側頭骨 側頭骨	-	-	[100]	-	2	内外面クロナデ	良好 内外面周囲、外側面赤褐色	トレンチ9	7~9 右側	
121	側頭骨	-	-	-	-	-	-	-	トレンチ10		
122	上顎骨上顎骨 かわらけ	20%	-	(50)	(17)	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り直頭骨軸孔ナデ	良好 内外面にひい黄褐色	トレンチ11		
123	側頭骨	-	-	-	[20]	-	-	-	トレンチ16 北側	齿列 馬鹿歯	海蝕あり
124	側頭骨 側頭骨	30%	(80)	31	[33]	-	端部、内外面染付	良好 内外面灰褐色	トレンチ17	19C中葉 廻り・東側	
125	側頭骨 側頭骨	13%	-	-	[33]	-	-	-	イ-7	17C中葉 北側	
126	上顎骨上顎骨 かわらけ	30%	-	(50)	(20)	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り直頭骨軸孔ナデ	良好 内外面にひい黄褐色	カ-7		
127	上顎骨上顎骨 かわらけ	20%	-	(50)	(20)	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り直頭骨軸孔ナデハラヌキ	良 前面灰褐色、背面にひい黄褐色	カ-7		
128	上顎骨上顎骨 かわらけ	20%	-	(60)	(11)	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り直頭骨軸孔ナデ	良 内外面にひい黄褐色	カ-7		
129	上顎骨上顎骨 かわらけ	30%	-	(40)	(20)	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り直頭骨軸孔ナデ	良 内外面にひい黄褐色	カ-7		
130	上顎骨上顎骨 かわらけ	30%	56	42	20	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔切り直頭骨軸孔ナデ	良 内外面にひい黄褐色	カ-7		
131	上顎骨上顎骨 かわらけ	-	-	-	-	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔ナデ	良好 内外面黄褐色	カ-7		
132	上顎骨上顎骨 かわらけ	-	-	-	-	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔ナデ	良好 内外面にひい黄褐色	カ-7		
133	上顎骨上顎骨 かわらけ	-	-	-	-	2	内外面クロナデ 直頭骨軸孔ナデ	良好 内外面黄褐色	カ-7		
134	側頭骨 側頭骨	13%	-	(12)	-	2	内外面染付	良好 内外面灰褐色	南東側下 アーチ 直角	17C 破壊 直角	
135	側頭骨	11%	-	-	[30]	-	-	-	大堀2.0×3 廻り・東側		
136	側頭骨	-	-	-	-	-	-	-	カ-7		
137	瓦片上顎骨 天井	11%	-	-	[45]	-	内外面ナデ	良好 内外面灰褐色	瓦屋	戰国時代	

表30 出土遺物觀察表(5)

觀察者	種別・器種	部位・残存 寸法	法則 (mm)			器形比 11/12	技法・機器等	地肌・色調	出土位置	時間・産地	備考
			11周	12周	高さ						
1	縦壓 壓付鉢	底部	-	-	-	-	内面染付	良好 内外面明緑灰色	トレンチ A	貝塚網	
2	縦壓 壓付鉢	底部	-	-	-	-	内面染付施脂	良好 内外面明緑灰色	トレンチ B	大震 2.9.3. 底	
3	縦壓 壓付鉢	底部	-	(7.0)	-	-	内面染付	良好 内外面明緑白色	トレンチ B 鉢与 出.底	田 B1 貝塚網	高台敷地付着
4	縦壓 壓付鉢	底部	-	-	-	-	内面染付	良好 内外面明緑灰色、外表面白色	トレンチ B	田 B1 貝塚網	
5	縦壓 壓付鉢	口縁	(6.0)	-	-	-	端況、四方摩文	良好 内外面明緑灰色	トレンチ B	田 B2 貝塚網	
6	縦壓 壓付鉢	口縁	(6.0)	-	-	-	内外面染付	良好 内外面明緑灰色	トレンチ A	網 C 貝塚網	
7	縦壓 壓付鉢	口縁	(6.0)	-	-	-	内外面染付	良好 内外面明緑灰色	トレンチ B	網 C 貝塚網	
8	縦壓 壓付鉢	口縁	-	-	-	-	外表面	良好 内外面明緑白色	トレンチ A	網 C 貝塚網	
9	縦壓 壓付鉢	口縁	(6.0)	(6.0)	-	-	端況、四方摩文	良好 内外面明緑灰色	トレンチ B	田 B1 貝塚網	丸を受けている
10	縦壓 壓付鉢	口縁	(6.0)	-	-	-	内外面染付	良好 内外面明緑灰色	トレンチ A	網 C 貝塚網	
11	縦壓 鉢	口縁	(3.8)	-	-	-	志野、内面赤絞	良好 内外面赤絞	トレンチ 12	17C 網 C+貝塚	
12	縦壓 口入系鉢	腰厚	-	-	-	-	鉢底	良好 内外面黒褐色	カ-7	大震 1 or 2 網 C+貝塚	
13	縦壓 口入系鉢	腰厚	-	-	-	-	鉢底	良好 内外面黒褐色、外沿周褐色	カ-7	大震 1 or 2 網 C+貝塚	
14	縦壓 鉢	口縁	-	-	-	-	端況	良好 内外面に赤絞、外周褐色	カ-7	18C 企? 出来	網 Cの形態
15	縦壓 口入系鉢	口縁	-	-	-	-	内外面染付	良好 内外面明緑灰色	カ-7	網 C 貝塚網	
16	縦壓 壓付鉢	腰厚	-	-	-	-	内外面染付	良好 内外面明緑灰色	カ-7	田 B1 貝塚網	
17	縦壓 壓付鉢	不規	-	-	-	-	鉢底	良好 内外面明緑白色	カ-7	田 B1 貝塚網	
18	縦壓 壓付鉢	口縁	(4.0)	-	-	-	端況、内面染付	良好 内外面明緑灰色	カ-7	田 B1 貝塚網	
19	縦壓 口入系鉢	口縁	(1.6)	-	-	-	内面染付	良好 内外面明緑灰色、外表面白色	カ-7	網 C 貝塚網	
20	縦壓 口入系鉢	口縁	-	-	-	-	端況	良好 内外面白色	カ-7	網 C 貝塚網	
21	縦壓 口入系鉢	底部	-	-	-	-	端況	良好 内外面白色	カ-7	田 B1 貝塚網	高台敷地付着
22	縦壓 口入系鉢	口縁	(1.6)	(9.0)	-	-	端況	良好 内外面白色	カ-7	16C 前半	丸を受けている
23	陶瓶	口縁	-	-	-	-	端況	良好 内外面黒褐色、外周褐色赤褐色	カ-7	中世 東南	

西端上遺物

国	種別・器種	部位・残存 寸法	法則 (mm)			器形比 11/12	技法・機器等	地肌・色調	出土位置	時間・産地	備考
			11周 (周)	12周 (周)	高さ						
1	上側質 内側質	把手	(2.7)	-	(7.1)	-	内外面ロクロナナ	良好 内外面、外面に赤い斑	トレンチ 4		
2	陶器 瓶	残 60%	(0.24)	55	68	-	丸窓、鉢底	良好 内外面赤褐色	トレンチ 4 SP 35	17C 前半 網 C+貝塚	
3	陶器 瓶	口縁	-	-	46	-	死頭、輪郭、端輪(鉢輪?)	良好 内外面白色	トレンチ 4	17C 後半~18C 中 網 C+貝塚	
4	陶器 瓶	底部	-	70	(3.1)	-	志野底窓、鉢底輪郭	良好 内外面白色	トレンチ 4 SP 35	17C 前半~中葉 網 C+貝塚	トナン跡あり
5	陶器 瓶	底部	-	-	9	-	鉢底	良好 内外面黄色、外周浅褐色	トレンチ 4	17C 前半~中葉 底窓	
6	陶器 瓶	口縁	(3.8)	(2.84)	-	14.0	折縁底、二彩	良好 内外面白色	トレンチ 4	17C 前半~18C 前 窓持	
7	陶器 瓶	口縁	(3.8)	(3.70)	-	18.7	口縁	良好 内外面赤褐色	トレンチ 4	17C 前半~中葉 網 C+貝塚	
8	陶器 瓶	口縁	(3.8)	(3.69)	-	21.0	非縁	良好 内外面赤褐色	トレンチ 4	17C 末 網 C+貝塚	
9	縦壓 壓付鉢	残 60%	116	59	60	-	「官窯」化製	良好 内外面白色	トレンチ 4 SP 240	17C 第 5 小期 網 C+貝塚	
10	縦壓 壓付鉢	底部	-	56	(25)	-	「官窯」化製	良好 内外面明緑灰色	トレンチ 4	17C 第 3 四半期 肥前	
11	縦壓 底	残 40%	(0.7)	-	(3.0)	-	良好	良好 内外面白色	トレンチ 4	17C 中葉 肥前	
12	製品 瓦具(底)	完形	-	-	-	-	堅毛?	良好 内外面白色	トレンチ 4 SP 173-6	17C 末?	
13	燒石	(2.12) (8)	31	27	(7.9)	-	口縁	良好 内外面赤褐色	トレンチ 4	豊か?	
14	縦壓 口入系	残 70%	(1.38)	56	25	2.4	内外面ロクロナナ	良好 内外面に赤い斑	トレンチ 5	中世 かわらけ転用	
15	縦壓 口入系	残 50%	78	59	18	-	内外面ロクロナナ	良好 内外面に赤い斑	トレンチ 5		
16	上側質 底	残 40%	(2.16)	-	-	-	内外面ロクロナナ 高台底付	良好 内外面	トレンチ 5		
17	陶器 瓶	残 70%	(1.21)	50	60	-	丸窓、外周(山水文)	良好 内外面赤褐色	トレンチ 5	17C 東 肥前	官窯規印
18	陶器 瓶	口縁	(4.0)	-	15.0	-	口縁	良好 内外面赤褐色	トレンチ 5	17C 東~18C 初頭 肥前	
19	縦壓 壓付鉢	残 40%	(1.00)	47	60	-	外表面	良好 内外面白色	トレンチ 5	17C 東 肥前	
20	縦壓 壓付鉢	口縁	(1.00)	(1.00)	-	15.0	丸窓、内面染付	良好 内外面白色	トレンチ 5	17C 東~18C 初頭 肥前	
21	縦壓 壓付鉢	口縁	(1.00)	(1.00)	-	15.0	丸窓、内面染付	良好 内外面明緑灰色	トレンチ 5	17C 東 肥前	

表31 出土遺物觀察表(6)

22	漆付鉢	丸 70%	138	80	26	-	内外面染付、内面漆付文	良好 内面黒白色、外面明オーラー色	トレンチ5	17C末(元禄) 肥前	
23	漆付鉢	口縁 138	1380	800	26	-	内外面染付、内面漆付文	良好 内面黒白色、外面明緑灰色	トレンチ5	17C末(元禄) 肥前	
24	漆付小鉢	丸 40%	1761	33	49	-	外面染付	良好 内外黒白色	トレンチ5	17C末~18C初頭 肥前	
25	漆付小鉢	丸 40%	62	28	39	-	外面染付	良好 内外黒白色	トレンチ5	17C後半~18C初頭 肥前	
26	鏡石	円形	31	23	71	-			トレンチ4		
27	陶器	丸 40%	(112)	56	75	-	鉢	良好 内外黒褐色	トレンチ5	17C後半 肥前・美濃	
28	陶器	丸 40%	(136)	-	(22)	-	鉢	良好 内外黒オーラー色	トレンチ6	17C後半 肥前・美濃	
29	陶器	丸 40%	(106)	-	(45)	-	丸瓶	良好 内外黒オーラー色	トレンチ6	17C後半 肥前・美濃	
30	陶器	丸 40%	(128)	-	(65)	-	丸瓶	良好 内外黒白色	トレンチ6	17C末 肥前	
31	鏡石	完形	32	11	53	-			トレンチ6		
32	上顎骨	丸 20%	652	350	16	1.7	内外面ロクロナダ 近縁側板を切り、内面茎部あり	良好 外面部に深い黒褐色	トレンチ8	17C末 第5小期 肥前・美濃	
33	陶器	丸 40%	(128)	-	(65)	-	丸瓶	良好 内外黒白色	トレンチ8	17C末 肥前	
34	陶器	丸瓶	丸 40%	(111)	-	鉢	良好 内面黒オーラー色 外面部オーラー色	トレンチ8	大型2 肥前・美濃		
35	陶器	丸 40%	(106)	-	(45)	-	内面白漆付	良好 内面黒白色、外面緑灰色	トレンチ8	17C末 肥前	
36	陶器	丸瓶	完形	72	35	52	-		トレンチ8	17C末 肥前	
37	鏡石	丸瓶	丸 40%	(148)	-	内面染付	良好 内外黒オーラー色	トレンチ8	16C後半 肥前		
38	上顎骨	丸 40%	(32)	2	(14)	-	内外面ユビナダ	良好 内外黒黄色褐色	トレンチ9		
39	鏡石	完形	21	6	43	-			トレンチ11		
40	陶器	丸瓶	丸 40%	(240)	-	(77)	-	1型	良好 内外黒オーラー灰色 外面部黒褐色	トレンチ12 古墳? 江戸後期(伊賀 國)?・美濃	
41	陶器	丸瓶	丸 40%	(256)	-	(113)	-	2型	良好 内外黒褐色	トレンチ12 古墳? 江戸後期(伊賀 國)?・美濃	
42	陶器	丸瓶	丸 40%	(310)	-	(46)	-	1型	良好 内面黒褐色、外面部黒褐色	トレンチ12 大型1 肥前・美濃 摩利がほしい	
43	陶器	丸 40%	(131)	-	(27)	-	壺足、四方摩文	良好 内面緑灰色、外面明オーラー色	トレンチ12 日光2 寛政期		
44	陶器	丸 40%	(123)	-	(26)	-	壺足、四方摩文	良好 内面緑灰色	トレンチ12 日光2 寛政期		
45	陶器	丸瓶	底座	-	(76)	(17)	-	内面明緑灰色	トレンチ12	日光2 寛政期 丸を受けている	
46	陶器	丸瓶	底座	-	-	(45)	-	内面明緑灰色	トレンチ12 SK 日光2 寛政期	「大(40) 年生」	
47	陶器	瓶	丸	-	-	(76)	-	外面部白黒?	トレンチ12	菅原 中和年半	
48	陶器	丸	(120)	(76)	32	-	鉢	良好 内面オーラー色	トレンチ13	17C末	
49	陶器	丸瓶	丸 40%	(156)	-	(32)	-	良好 内外黒褐色	トレンチ13	肥前 13C~14C	
50	上顎骨	丸 40%	(314)	(460)	(411)	2.9	内外面ロクロナダ 近縁側板を切り	良好 内面部に深い黒	トレンチ14		
51	上顎骨	丸 40%	-	-	47	(20)	内外面ロクロナダ 近縁側板を切り	良好 内面部に深い黒	トレンチ14 SD		
52	上顎骨	丸 40%	丸 20%	(86)	(52)	22	1.7	内外面ロクロナダ 近縁側板を切り	良好 内面明緑灰色	トレンチ14 SD	
53	陶器	丸瓶	丸 40%	(118)	-	(46)	-	良好 内面黒褐色	トレンチ14 SD 50	17C 第4小期 (東京までいかない)	
54	上顎骨	丸 40%	-	-	148	(20)	内外面ロクロナダ 近縁側板を切り	良好 内面部に深い黒褐色。外面部に深い黒	トレンチ14		
55	陶器	丸瓶	底座	-	-	46	(21)	桜花紋、内面に落書き	良好 内面オーラー色	トレンチ14	15C後半
56	上顎骨	丸 40%	-	-	(52)	(22)	内外面ロクロナダ 近縁側板を切り	良好 内面黒褐色、内面白	トレンチ15 SK 100		
57	陶器	丸瓶	丸 40%	(110)	-	(51)	-	良好 内外黒褐色	トレンチ15	大室1 肥前・美濃	
58	陶器	丸瓶	丸 40%	(120)	(78)	22	-	鉢	良好 内外黒褐色	トレンチ15	17C初頭 肥前・美濃
59	陶器	瓶	丸	180	(56)	14	-	鉢	良好 内面に深い黒褐色。外面部白	トレンチ15	17C(天保~嘉永)
60	陶器	瓶	丸	-	-	46	(11)	内外面ロクロナダ 近縁側板を切り	良好 内面部に深い黒褐色。外面部黒褐色	トレンチ15	底座穿孔?
61	陶器	丸瓶	丸 40%	(120)	-	(56)	-	鉢	良好 内外黒褐色	トレンチ15	大室1 肥前・美濃
62	陶器	丸瓶	底座	-	-	-	(45)	杏葉彫、当面貼付け	鉢	17C 初頭 吉野(近吉野)	
63	陶器	丸瓶	丸 40%	(110)	-	(53)	-	鉢	良好 内外黒褐色	鉢	17C後半 肥前
64	陶器	丸瓶	丸 40%	(120)	-	(56)	-	鉢	良好 内外黒褐色	鉢	17C後半 肥前
65	陶器	丸瓶	丸 40%	(120)	-	(56)	-	壺足、緑釉底の灰釉鉢	良好 内外黒オーラー色	鉢	17C後半 肥前・美濃
66	陶器	丸瓶	丸 40%	(120)	-	(56)	-	鉢	良好 内外黒褐色	鉢	17C後半 肥前

表 32 出土遺物觀察表（7）

觀察者	種別・器種	部位・ 残存 状況	法算 (mm)			器形比 (1/2 残)	説古・施飾等	陶風・色調	出土位置	時期・南北	備考
			寸法	直径	高さ						
1	陶器 鉢	口縁	1160	-	[19]	-	丸底	良好 内外面明鏡色	トレンチ 1	大業 2 ～ 3 南北	
2	陶器 鉢	口縁	220	-	[28]	-	上縁	良好 内外面明鏡色	トレンチ 2	17C 前半 南北	
3	陶器 鉢	口縁	1140	-	[25]	-	折縁、灰地	良好 内外面明鏡色	トレンチ 3	大業 3 南北	
4	陶器 盆付鉢	鉢	-	-	-	-	表面留付	良好 内外面明鏡色	トレンチ 3	田宅 笠置郡	
5	陶器 鉢	口縁	-	-	-	-	豎縁	良好 内外面明鏡色	トレンチ 4	17C 中葉 南北	
6	陶器 盆付鉢	平底	-	-	-	-	内面留付	良好 内外面明鏡色	トレンチ 4	南北 笠置郡	
7	陶器 鍋	身 80%	118	48	63	-	丸底、外面留付	良好 内外面明鏡色	トレンチ 4	17C C 1680 年代 肥前	
8	陶器 盆付鉢	高台	-	[50]	[11]	-	内面留付	良好 内外面明鏡色	トレンチ 4	初代伊万里 伊万里	[1630 ～ 1640 年代]
9	陶器 鉢	口縁	1140	-	[10]	-	灰地、折縁	良好 内外面明鏡色	トレンチ 4	大業 3 南北	
10	陶器 盆付鉢	口縁	-	-	[38]	-	蓮子縁	良好 内外面明鏡色	トレンチ 4	SK 32	笠置郡
11	陶器 小皿	鉢	-	-	[50]	-	鉢底	良好 内にふい赤褐色、外面暗褐色	トレンチ 4	SP 36 大業 3 南北	
12	陶器 鉢	口縁	1200	-	[32]	-	鉢底、丸底	良好 内外面明鏡色	トレンチ 5	大業 3 南北	
13	陶器 鉢	身 25%	122	40	54	-	灰地、内外面研毛目	良好 内外面暗褐色オーバープ	トレンチ 5	17C 南北	
14	陶器 鉢	口縁	1000	-	[11]	-	灰地、菊模	良好 内面淡黃色、外面白黄色	トレンチ 5	大業 4 南北	
15	陶器 盆付鉢	底部	-	-	[24]	-	内外面留付	良好 内外面明鏡色	トレンチ 5	田宅 2 笠置郡	
16	陶器 盆付鉢	口縁	-	-	[19]	-	内外面留付	良好 内外面明鏡色	トレンチ 5	南北 笠置郡	
17	陶器 人口形瓶	平底	-	-	-	-	鉢底	良好 内外面黑色	トレンチ 6	大業 南北	
18	陶器 鉢	口縁	1340	-	[25]	-	灰地	良好 内外面淡黄色	トレンチ 8	大業 3 南北	
19	陶器 鉢	口縁	1340	-	[17]	-	灰地	良好 内外面淡黄色	トレンチ 8	大業 3 南北	
20	陶器 鍋	口縁	252	-	[47]	-	片口	良好 内外面黒褐	トレンチ 8	古代日本 新羅朝後期 南北	
21	陶器 盆付鉢	鉢	-	-	-	-	良好	良好 内外面明鏡色	トレンチ 8	南北 笠置郡	
22	陶器 盆付鉢	口縁	1360	-	[13]	-	翫足	良好 内外面明鏡色	トレンチ 8	田宅 2 笠置郡	
23	陶器 盆付鉢	口縁	1360	-	[42]	-	大底	良好 明鏡色	トレンチ 8	田宅 2 笠置郡	
24	陶器 盆付鉢	口縁	1961	-	[16]	-		良好 内面白白色、外面白色オーバープ	トレンチ 8	田宅 2 笠置郡	
25	陶器 盆付鉢	底部	-	-	-	-	大底	良好 内外面明鏡色	トレンチ 8	16C 後半 南北	
26	陶器 盆付鉢	底部	-	-	-	-	大底	良好 内外面明鏡色	トレンチ 8	16C 後半 南北	
27	陶器 内底、蓋被手形	井	-	-	-	-	蓋被の井の可逆性あり	良好 内外面明鏡色	トレンチ 8	中世	
28	青磁碗?	底部	-	[43]	[19]	-		良好 内外面明鏡色	トレンチ 8	17C (1630 ～ 1640 年代) 南北	高台の底が小さいのが 足がくつ可逆性がある
29	陶器 蓋被手形	手形	-	-	-	-		良好 内外面明鏡色	トレンチ 8	17C 中葉 南北	
30	陶器 鉢	口縁	1140	-	[24]	-	鉢底、丸底	良好 内外面明鏡色	トレンチ 11	南北	
31	陶器 鉢	口縁	980	-	[14]	-	鉢底、茶入れ?	良好 内外面明鏡色	トレンチ 11	大業 南北	
32	陶器 鉢	口縁	-	-	-	-	一部に縦縫	良好 内外面明鏡色	トレンチ 12	17C 南北	
33	陶器 鉢	口縁	-	-	-	-		良好 内外面明鏡色	トレンチ 12	南北 笠置郡	
34	陶器 鉢	手形	-	-	-	-		良好 内外面明鏡色	トレンチ 12	南北 笠置郡	
35	陶器 鉢	手形	-	-	-	-		良好 内外面明鏡色	トレンチ 12	南北 笠置郡	
36	陶器 盆付鉢	口縁	1700	-	[16]	-		良好 内外面明オーバープ色	トレンチ 12	南北 笠置郡	
37	陶器 盆付鉢	高台	-	[72]	[17]	-		良好 内外面明鏡色	トレンチ 12	南北 笠置郡	
38	陶器 蓋被?	口縁	142	-	-	-		良好 内外面明鏡色	トレンチ 12	南北 笠置郡	
39	陶器 盆付鉢	口縁	-	-	[10]	-		良好 内外面明鏡色	トレンチ 12	田宅 2 笠置郡	
40	陶器 盆付鉢	手形	-	-	-	-		良好 内外面明鏡色	トレンチ 12	田宅 2 笠置郡	
41	陶器 盆付鉢	手形	-	-	-	-		良好 内外面明鏡色	トレンチ 12	田宅 2 笠置郡	
42	陶器 盆付鉢	口縁	[112]	-	[21]	-	四方摩文	良好 内外面明鏡色	トレンチ 12	田宅 2 笠置郡	
43	陶器 盆付鉢	高台	-	[62]	-	-		良好 内外面明鏡色	トレンチ 12	田宅 2 笠置郡	
44	陶器 盆付鉢	高台	-	[62]	-	-		良好 内外面明鏡色	トレンチ 12	田宅 2 笠置郡	

表 33 出土遺物觀察表 (8)

45	縫付鉢	不明	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
46	縫付鉢	口縁	-	-	-	難定、内外面染付、四方摩文 良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
47	縫付鉢	口縁	(120)	-	-	難定、内外面染付、四方摩文 良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
48	縫付鉢	口縁	(130)	-	-	難定、内外面染付、四方摩文 良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
49	縫付鉢	口縁	(120)	-	-	難定、内外面染付、四方摩文 良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
50	縫付鉢	口縁	(130)	-	-	難定、内外面染付、四方摩文 良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
51	縫付鉢	口縁	(120)	-	[14]	難定、内外面染付、四方摩文 良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
52	縫付鉢	口縁	(123)	-	-	難定、内外面染付、四方摩文 良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
53	縫付鉢	口縁	(98)	-	-	難定、内外面染付、四方摩文 良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
54	縫付鉢	口縁	-	-	-	難定、内外面染付、四方摩文 良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
55	縫付鉢	口縁	-	-	-	難定、内外面染付、四方摩文 良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
56	縫付鉢	口縁	(103)	-	-	難定、内外面染付、四方摩文 良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
57	縫付鉢	口縁	-	-	-	難定、内外面染付、四方摩文 良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
58	縫付鉢	高台	-	(66)	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
59	縫付鉢	高台	-	(80)	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
60	縫付鉢	底部	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
61	縫付鉢	底部	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
62	縫付鉢	底部	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
63	縫付鉢	底部	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
64	縫付鉢	底部	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
65	縫付鉢	平明	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
66	縫付鉢	平明	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
67	縫付鉢	平明	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
68	縫付鉢	平明	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
69	縫付鉢	平明	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
70	縫付鉢	平明	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
71	縫付鉢	脚部	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	
72	縫付鉢	脚部	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	小瓶
73	縫付鉢	高台	-	(56)	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	小瓶
74	縫付鉢	脚部	-	-	-	良好 内山形彫刻、外面に云い赤陶色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	小瓶
75	縫付鉢	脚部	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 12	田日 2 豆根繩	小瓶
76	縫付鉢	口縁	(116)	-	露皿	良好 内外面明青灰色	トレンチ 13	田日 2 豆根繩	近世
77	縫付鉢	口縁	(126)	-	[14]	難定	トレンチ 13	田日 2 豆根繩	國
78	縫付鉢	口縁	(119)	-	露皿	良好 内外面明青灰色	トレンチ 13	田日 2 豆根繩	國
79	縫付鉢	脚部	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 13	田日 2 豆根繩	國
80	1号縫付鉢	脚部	-	(50)	[14]	内外面ユビナデ	トレンチ 13	田日 2 豆根繩	國
81	縫付鉢	脚部	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 14	大雲 鏡P+、米酒	
82	縫付鉢	脚部	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 14	大雲 鏡P+、米酒	使用著しい
83	縫付鉢	脚部	-	-	-	内面自然焼?	トレンチ 14	17C 丹波	
84	縫付鉢	脚部	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 14	17C 丹波	
85	縫付鉢	口縁	(129)	-	[12]	良好 内白色	トレンチ 14 SD	田日 1 豆根繩	50
86	縫付鉢	脚部	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 14	田日 2 豆根繩	
87	縫付鉢	口縁	-	-	-	内面染付	トレンチ 14 SD	1650 年代 肥前(山田B)	良品
88	縫付鉢	口縁	(127)	-	[21]	良好 内外面明青灰色	トレンチ 14	17C 丹波	
89	縫付鉢	口縁	10	7	[32]	花瓶の耳か?	トレンチ 14	肥前	17C 後～18C 前 肥前
90	縫付鉢	脚部	-	-	-	良好 内外面明青灰色	トレンチ 14	17C 後～18C 前 肥前	

表 34 出土遺物觀察表（9）

91	馬頭 木馬?	底部	-	C32	[21]	-		良好 内面黒褐色	トレンチ 14	17C 後半 肥前		
92	馬頭	側面	-	-	-	-		良好 内面黒褐色	トレンチ 14	中世 肥前		
93	馬頭	側面	-	-	-	-		良好 内面黒褐色、外表面赤褐色	トレンチ 14	中世 肥前		
94	馬頭	側面	-	-	-	-	鉢地	良好 内面黒褐色、外面上に赤褐色	トレンチ 14 SD	大正 2 肥前・美濃		
95	馬頭	口縁	13mm	(120)	-	B10	-	鉢地	良好 内面黒褐色	トレンチ 14 SD	大正 3 肥前・美濃	火を受けている
96	馬頭	側面	-	-	-	-		良好 内面黒褐色	トレンチ 14 SD	田代 1 肥前		
97	馬頭	手明	-	-	-	-		良好 内面黒褐色	トレンチ 14 SD	中世		
98	馬頭	側面	-	-	-	-		良好 内面黒褐色、外表面赤褐色	トレンチ 14 SD	中世 肥前		
99	馬頭	側面	-	-	-	-		良好 内面黒褐色、外表面赤褐色	トレンチ 14	中世 肥前		
100	馬頭	手明	-	-	-	-	鉢地	良好 内面黒褐色	トレンチ 15	大正 3 肥前・美濃		
101	馬頭	側面	-	-	-	-	鉢地	良好 内面黒褐色	トレンチ 15	大正 3 肥前・美濃		
102	馬頭	口縁	13mm	-	-	-		良好 内面黒褐色	トレンチ 15	17C 第 1 四半紀 肥前	良品	
103	馬頭	側面	13mm	(280)	-	[27]	-		良好 内面黒褐色	トレンチ 15	古墳 3 肥前・美濃	
104	馬頭	側面	-	-	-	-		良好 内面黒褐色	トレンチ 15	中 C 肥前		
105	馬頭	手付鉢	13mm	(138)	-	B10	-	籠足、内外面染付、四方摩擦	良好 内面黒褐色	トレンチ 15	田代 1 肥前	
106	馬頭	手付鉢	-	-	-	-		良好 内面黒褐色	トレンチ 15	田代 2 肥前	「大明年造」	
107	馬頭	手付鉢	13mm	(100)	-	B10	-		良好 内面黒褐色	トレンチ 15	田 C 肥前	
108	馬頭	手付鉢 手明	-	-	-	-		良好 内面黒褐色	トレンチ 15	田 C 肥前		
109	馬頭	天日井掛	13mm	(124)	-	-	鉢地	良好 外面上に赤褐色	表面	大正 3 肥前・美濃		
110	馬頭	尾足茶繩	13mm	(118)	-	-	鉢地、側の脚輪	良好 口縁黒白色、側脚輪黒色	発土	17C 後半		
111	馬頭	手明	-	-	-	-	鉢地	良好 内面黒褐色	発土	17C 小 ? 肥前・美濃?		
112	馬頭	手付鉢	13mm	(120)	-	B10	-		良好 内面黒褐色	発土	田 C 肥前	
113	馬頭	手付鉢	高台	-	380	B10	-	外表面付	良好 内面黒褐色	発土	1670 年代 肥前	高台にミ奈縄
114	馬頭	手付鉢	側面	-	-	-	外表面付	良好 内面黒褐色	発土	田 B 1 肥前	火を受けている	
115	馬頭	手付鉢	高台	-	(940)	(1)	-		良好 内面黒褐色	発土	田 B 2 肥前	
116	馬頭	手明	-	-	-	-		良好 内面黒褐色	発土	田 B 肥前		
117	馬頭	手明	-	-	-	-		良好 内面黒褐色	発土	田 B 肥前		
118	馬頭	手付鉢	手明	-	-	-		良好 内面黒褐色	発土	田 E 肥前		
119	馬頭	手付鉢	13mm	(97)	-	-		良好 内面黒褐色	発土	田 D 肥前		
120	馬頭	手付鉢	側面	-	-	-		良好 内面黒褐色	発土	田 D 肥前		
121	馬頭	手明	-	-	-	-	輪轂をした小輪	良好 内面黒褐色	発土	16C 中ごろ 高台の土上で輪轂を無い たものか?		
122	馬頭	側面	-	-	-	-		良好 内面黒褐色、外面上に赤褐色	発土	7~9 常南		

中箱上遺物

図版	種別・器種	部分 ・残存 状態	寸法 (mm)		記述	投げ・転落等	焼成・色調	出土位置	時期・標準	備考	
			横幅	残高							
1	馬頭 木馬頭	完成	72	43	15	1.7 内面凹ロコナダ 底部斜削り	良好 内面に赤褐色	トレンチ 1	17C 後半 肥前		
2	馬頭	完成	20mm	(116)	-	[57]	内面凹ロコナダ 鉢底	良好 内外面黒褐色	トレンチ 1	17C 中葉 肥前・美濃	
3	馬頭	側面	13mm	(390)	-	[100]	内面凹ロコナダ 下盤	良好 内外面黒褐色	トレンチ 1	17C 後半 第 5 小箱 底で傾いた状跡あり	
4	馬頭	完成	13mm	(169)	-	[37]	内面凹ロコナダ 下盤	良好 内外面黒褐色	トレンチ 1	17C 後半～18C 前半 肥前	
5	馬頭	手付鉢	20%	(100)	(56)	59	内面凹ロコナダ 内面斜削り	良好 内外面黒褐色	トレンチ 1	17C 末～18C 初頭 肥前	
6	馬頭	手付鉢	13mm	(130)	-	[25]	内面凹ロコナダ 底盤	良好 内外面黒褐色	トレンチ 1	田 B 1 肥前	
7	馬頭	手付鉢	13mm	(220)	-	[28]	内面凹ロコナダ 内面斜削り	良好 内外面黒褐色	トレンチ 1	17C 第 3 四半期 肥前	
8	馬頭	底盤	底盤	-	38	[33]	乗付あり	良好 内外面黒褐色	トレンチ 1	18C 肥前	
9	馬頭	底盤	底盤	21	17	[37]	-	良好	トレンチ 1	17C 後半 本郷	
10	馬頭	底盤 (底盤)	完成	60	30	9	内面凹ロコナダ 鉢底斜削り	やや不均 内面に赤褐色	トレンチ 1	18C 京都系	
11	鏡台	鏡台	鏡台	(54)	28	12	-	-	トレンチ 1		
12	鏡台	鏡台	鏡台	50%	(172)	6	44	-	トレンチ 1		
13	鏡台	鏡台	鏡台	60%	(82)	78	19	-	トレンチ 1		

表 35 出土遺物觀察表 (10)

14	土器質 かわらけ	50%	(84)	(30)	27	2.8	内側面ロクロナギ 底部側面木切り	表 内外面黒	トレンチ2		
16	土器質 かわらけ	39%	(82)	(34)	29	2.4	内側面ロクロナギ 底部不明、整物(底面)あり	表 内外面黒、外表面に赤い模	トレンチ2		
15	土器質 かわらけ	50%	(82)	(34)	29	2.4	内側面ロクロナギ、外表面ユビナギ 底部側面木切り	表 内外面黒、外表面赤褐色	トレンチ2		
17	陶器 骨灰(ミニチュア)	11個	(90)	-	222	-	鉢	良好 内外面黒焼、生地灰質	黄土	17C 前半 廻り・美濃	
18	陶器 骨灰(白)	30%	(84)	34	47	-	両面塗付	良好 内外面白	表面表面深	1650~1700年代 肥前	こんなに早く判(花)、 世紀分(白)
観察者	種別・器種	部位・ 残存	法長 (mm)	法幅 (mm)	法厚 (mm)	割合比	技法・模様等	施成・色調	出土位置	時間・産地	備考
1	陶器 鉢	11個	(100)	-	-	-	端反、灰地	良好 内側面オーバーパーク	トレンチ2	17C 笠置	
2	陶器 鉢	11個	-	-	-	-	端反、志野	良好 内外面焼付	トレンチ2	17C~ 廻り・美濃	
3	瓦質土器 鉢	不明	-	-	-	-	-	良 内外面黒焼	トレンチ2	小世	
4	瓦質土器 鉢	不明	-	-	-	-	-	良好 内外面焼付	トレンチ2	中世	
5	陶器 骨灰(白)	11個	(100)	-	222	-	端反	良好 内外面白	トレンチ1	組C 笠置鍋	

北尾出土遺物

回	種別・器種	部位・ 残存	法長 (mm)			割合比	技法・模様等	施成・色調	出土位置	時間・産地	備考
			11個	直径	高さ						
1	陶器 鉢	破片	156	(96)	14	-	-	-	トレンチ1		
2	陶器 鉢	残 40%	(122)	696	26	-	内側面ロクロナギ 志野	良 内外面焼付	トレンチ2	17C 前半 廻り・美濃	底辺トランクあり
3	土器質 かわらけ	-	-	(74)	-	-	内側面ロクロナギ 底部側面木切り	良 内面に赤い模、外表面黒	トレンチ5		内面付着物あり
4	陶器 鉢	11個	(60)	-	172	-	端反、灰地	良 内外面焼付	ワード27 表深	大室1 廻り・美濃	
5	土器質 かわらけ?	30%	(82)	(37)	25	2.5	内側面ロクロナギ 底部側面木切り	良 内面黒、外面に赤い模	ワード27 表深		
6	陶器 かわらけ	30%	(321)	(59)	23	2.1	内側面ロクロナギ 底部側面木切り	良 内面に赤い模、外面に赤い模	表深		
観察者	種別・器種	部位・ 残存	法長 (mm)	法幅 (mm)	法厚 (mm)	割合比	技法・模様等	施成・色調	出土位置	時間・産地	備考
1	陶器 骨灰?	足	-	-	-	-	-	良 赤色	トレンチ1	17C 前半 廻り・美濃	良品
2	陶器 骨灰(白)	11個	(78)	(78)	55	-	内外面塗付	良好 内外面明暎灰色	トレンチ1	組C 笠置鍋	
3	陶器 鉢	直部	-	-	-	-	-	良 内外面焼黄色	トレンチ2	17C 前半 廻り・美濃	
4	陶器 鉢	直部	-	-	-	-	-	良 内外面黒焼	トレンチ3	大室 廻り・美濃	
5	陶器 鉢	11個	-	-	-	-	-	良 内外面焼灰	トレンチ4	大室4? 廻り・美濃	
6	陶器 人目(手形)	11個	(80)	-	-	-	鉢輪	良好 内外面焼	トレンチ5	大室2? 廻り・美濃	
7	陶器 人目(手形)	11個	-	-	-	-	鉢輪	良好 内外面黒焼	トレンチ5	大室2? 廻り・美濃	
8	陶器 人目(手形)	直部	-	-	-	-	鉢輪化鉢脚付	良好 内外面黒、外面赤灰	トレンチ5	大室 廻り・美濃	光を受けている
9	陶器 (植付)	11個	(108)	-	-	-	鉢輪	良好 (内外面)黒	トレンチ5 SP.22	大室2? 廻り・美濃	
10	陶器 人目(手形)	11個	(120)	-	-	-	鉢輪	良好 内外面赤色	トレンチ6	大室2? 廻り・美濃	
11	陶器 植付	直部	-	-	-	-	-	良好 内外面黒焼	トレンチ6	大室 廻り・美濃	
12	陶器 植付	11個	-	-	-	-	内外面塗付	良好 内外面明暎灰	トレンチ6	15C 末~16C 笠置鍋	つば群
13	陶器 植付	11個	(138)	-	-	-	内外面塗付	良好 内外面の明暎灰	ワード26	組E 笠置鍋	
14	陶器 植付	直部	-	-	-	-	内外面塗付	良好 内外面明暎灰	ワード26	組E 笠置鍋	
15	陶器 植付	直部	-	-	-	-	内外面塗付	良好 内外面明暎灰	ワード27	組B1 笠置鍋	
16	陶器 植付	11個	(112)	-	-	-	端反	良好 内外面黒	尾土	組C 笠置鍋	

茎+人出(土)遺物

回	種別・器種	部位・ 残存	法長 (mm)			割合比	技法・模様等	施成・色調	出土位置	時間・産地	備考
			11個	直径	高さ						
1	陶器 鉢	直部	-	46	(34)	-	-	良好 内外面焼	人11 表深	1650~1700年代 肥前	
2	陶器 鉢	直部	-	(90)	(118)	-	-	中空不直 内外面焼	人11月12月 表深	15C 末~16C (笠置?)	

(2) 出土瓦の様相

鳥山城跡の出土瓦は、全体でもコンテナ3箱程度と少なく、ほとんどが本丸北東隅斜面で表採されたものである。瓦の種類、特徴がわかる主なものを第81図及び82図に図示した。このうち、本丸の北東隅斜面で表採されたものが第81図1～13、及び第82図14・15、古本丸から出土したもののが第82図16・17、中城から出土したものが第82図18～20、北城から出土したものが第82図21、吹貫門で表採したものが第82図22・23である。以下、その特徴や様相について記述する。

1 出土瓦の種類と説明

第81図1～3及び第82図22は軒丸瓦の瓦当部分である。1は周縁の部分、他は内区三巴文及び外区連珠文の部分である。三巴文は左巻きで内区と外区を区ける界線はない。第81図4は丸瓦だが、釘穴があることから軒丸瓦になると思われる。第81図5及び第82図21は面戸瓦である。凹面は細かい布目痕がつく。第81図10～13は、下辺が湾曲する三角形で板状の瓦で、面戸瓦として使用されたものと推定したい。第81図6・7は丸瓦である。凹面には細かい布目があり吊り紐痕はない、端部をやや広く面取りする。凸面はナデにより調整するが、7は格子状の叩きの上にナデを施す。第81図8・9は平瓦である。凸面には粗い離れ砂があるほか、凹面は明瞭にナデ痕を残す。

第82図14は鰐瓦である。鰐の鱗の部分を半裁竹管状の工具を押しつけて表現する。第82図15は道具瓦で、獅子口の突帯の一部と推定したい。第82図16～20は丸瓦である。凹面は細かい布目痕があるほか、縱方向に糸縫い通し痕があり、端部を面取りする。吊り紐痕はない。第82図23は軒平瓦である。瓦当面がかなり摩滅し、文様も定かではない。唐草文であろうか。

以上、出土している瓦の種類をあげると、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、面戸瓦、鰐瓦、獅子口瓦である。

2 軒丸瓦及び軒平瓦の様相

文様や部位がわかる軒丸瓦は4片確認できる。それによれば、幅約18mmと周縁の幅はやや狭く、文様は内区が左巻きの三巴文、外区が連珠文である。巴の頭は比較的大きく、内区と外区との間に界線はない。連珠は比較的大きな粒で、間隔をあけて配置されている。一周を復元すると12個くらいであろうか。

軒平瓦は、1片のみで摩耗が著しいが、周縁の右側脇区を含む瓦当部分である。上下に比して脇区幅がやや広い。瓦当文様は唐草文と推定される。

これら軒丸瓦ならびに軒平瓦の様相から制作された時期を考察する。軒丸瓦は、周縁の幅がやや狭く高い特徴がある。一般に近世瓦になると周縁が低く幅広になる傾向があることから、この特徴は中世的な様相を遺すものと考えられる。また、軒平瓦瓦当面の脇区幅を広くとるようになるのは、山崎によれば（山崎2008）、天文4年(1537)のヘラ書きがある法隆寺の菊花唐草文272Jが初源例で、佐川によれば（佐川1992）、室町時代後二期(1548～1603)からの特徴とされている。本軒平瓦の脇区幅は幅広くとる近世瓦よりは狭く、軒丸瓦と同じように中世瓦から近世瓦への過渡的な様相とすることができます。

3 出土瓦の種類からみた建物の特徴

出土した瓦のうち、面戸瓦と鰐瓦、獅子口瓦に注目したい。面戸瓦は、大棟など棟の下部で、丸瓦と平瓦との段差の隙間を埋める役割の瓦である（参考写真）。また、獅子口瓦も棟の端に置かれる瓦であり、これらの瓦の出土は、本瓦葺きの屋根に棟がある建物だったことを示している。

また、鰐瓦はやはり棟の両端、鬼瓦や獅子口瓦のすぐ横上に置かれる瓦である（参考写真）。本鰐瓦の特徴は、竹管のような工具を押しつけて魚の鱗を表現したもので、近世後半にみられるような鱗を立体的に表現した鰐瓦よりもより原初的な技法であると考えられる。

以上のことから、これらの瓦が葺かれていた建物は大棟をもち、その両端に鰐瓦が載っていた建物であり、具体的には、隅檼あるいは門などであったと考えられよう。



参考 足利鎌阿寺本堂の瓦

4 出土瓦の年代的な特徴

まず、瓦の色調が黒や灰色のほか灰黄やオリーブ灰、にぶい黄色などと統一されていないことがあげられる。いわゆる近世瓦になると黒や暗灰色でいぶしが施され、色調も統一されている。したがって色調からみて、中世瓦から近世瓦への過渡期のものと考えられる。また、丸瓦内面の細かい布目痕や平瓦表面にやや粗い離れ砂を使用している点やナデ調整痕を残すこと、近世瓦の製作技法とは異なり、中世瓦の製作技法を継承する特徴がある。さらに、第81図6の丸瓦では、玉縁の長さが約3cmあり、短く統一される近世瓦の特徴とは明らかに異なる。

同じ下野国の中世から近世にかけての寺院である足利鎌阿寺本堂の瓦を考察した足立によれば（足立2013）、玉縁の長さは、応永期頃の瓦（第83図5・丸瓦A）が最も長く、その後16世紀末（第83図6・丸瓦D）、18世紀（第83図7・丸瓦E）と短くなる傾向があるという。応永20年(1413)の銘がある足利權崎寺跡D類の丸瓦（第83図2）は約5～5.5cmと長い。さらに、佐野城跡（山口2002）から出土している權崎寺跡F類（14世紀後半）に同范と思われる軒平瓦（佐野城以前にあった寺院のものと推定）に伴う丸瓦もやはり玉縁が約5.5cmと長い（第83図1）。

一方、佐野城跡出土瓦のうち佐野信吉が唐澤城から佐野城（春日岡山）への移城命令を受けた慶長7年(1602)～12年(1607)頃に造られた佐野城に伴う瓦の丸瓦玉縁の長さは約4.5cmと中世瓦よりも短くなっている（第83図3）。烏山城跡出土の丸瓦はこの佐野城出土瓦に比べると玉縁がより短い（第83図4）。このようなことから、烏山城跡出土丸瓦は、佐野城跡出土丸瓦よりもやや新しい様相をもつと判断できる。佐野城跡出土瓦は凹面に吊り紐痕を有する一方、烏山城跡出土瓦にはないが、法隆寺の瓦をみても慶長10年(1605)の銘をもつ丸瓦に吊り紐痕がないものがあり（佐川1992）、あるものとないものが併用されていたものと考える。したがって烏山城跡出土瓦の上限は、佐野城出土瓦よりも新しい慶長年間としたい。

一方、下限については、山崎が紹介する江戸の瓦が参考になる（山崎2008）。寛永寺五重塔は、寛永16年(1639)の焼失後すぐに復興されたもので、軒平瓦は、脇区幅を広くとるいわゆる近世瓦の特徴である。また、軒丸瓦の周縁部も幅広で低いという近世瓦の特徴が顕著である。したがって烏山城跡出土の瓦はこれら寛永期の瓦よりも古い様相を示すと考える。

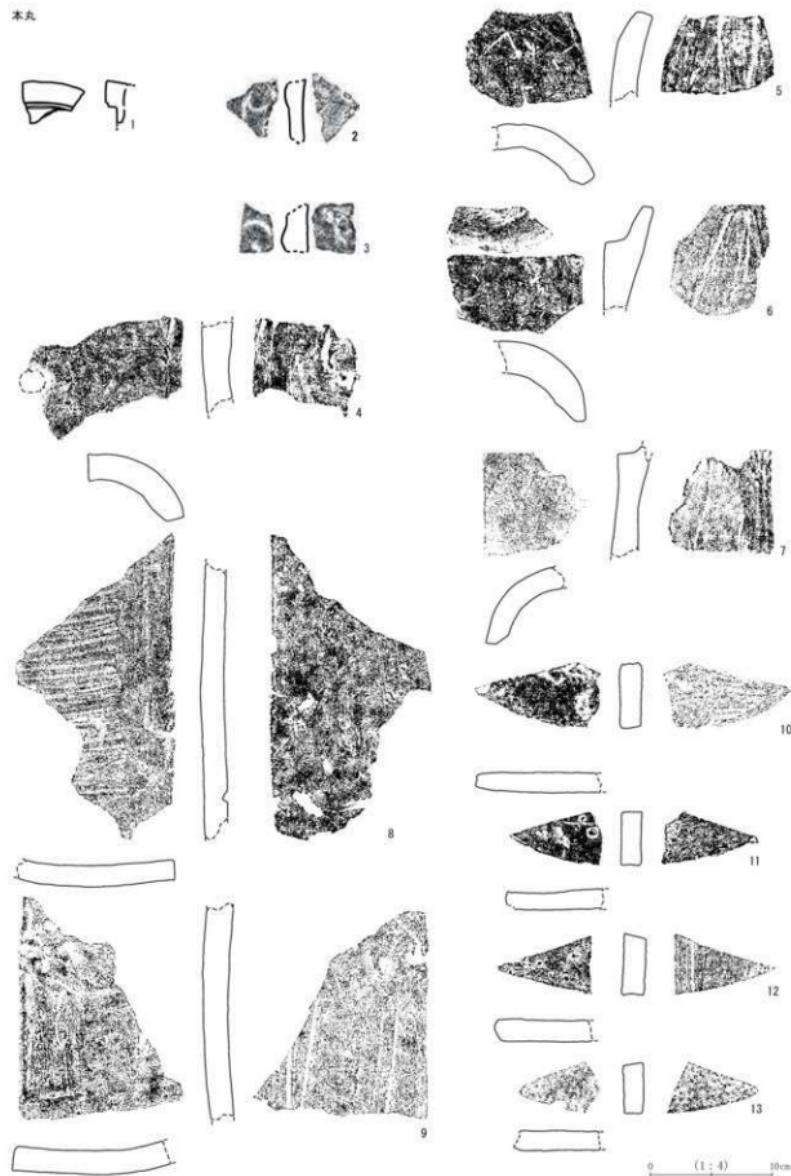
鰐瓦胴部の鱗を半哉竹管状工具で押印して表現する鰐瓦は、長野県松本城の南外堀から出土しており（竹内ほか2020・第83図8）、これは、南西隅櫓にあった鰐瓦に酷似するという。年代は明らかではないが、鱗を立体的に表現する鰐瓦に比べると古い様相を示すものと考える。松本城跡南外堀出土の鰐瓦は、烏山城跡出土のもの（第83図9）に比べて鱗の表現がやや大きいか、鋸部を差し込む方形孔があることから、頭に近い胴部のものである。一方烏山城跡出土のものは、裏面のナデ痕からやや曲がった尾に近い部分であったと推定されることから、鱗の表現がやや小さいものと考えられる。

5 まとめ

以上のようなことから、烏山城跡出土瓦は、佐野城よりは新しく寛永寺五重塔よりは古い時期のものであり、17世紀初頭～前半、慶長～元和年間頃のものと考えられる。また、これらの瓦が葺かれていた建物は、大棟の両端に鰐瓦が載るような、隅櫓あるいは門であったと推定される。

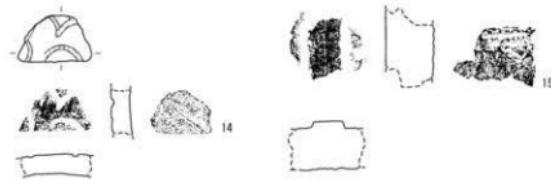
引用・参考文献

- 足立佳代2013「鎌阿寺本堂の瓦何枚あるの？－鎌阿寺本堂の瓦と足利の中世瓦－」『国宝指定記念シンポジウム鎌阿寺本堂を考える－資料集－』足利市文化財愛護協会他
佐川正敏1992「6室町時代の瓦、7江戸時代の瓦」「法隆寺の至宝－昭和資料帳－」第15巻
竹内精長ほか2020『長野県松本市 史跡松本城南・西外堀跡 試掘調査報告書』松本市教育委員会
山口明良2002「佐野城跡（春日岡城）II」佐野市教育委員会
山崎信二2008『近世瓦の研究』（株）同成社

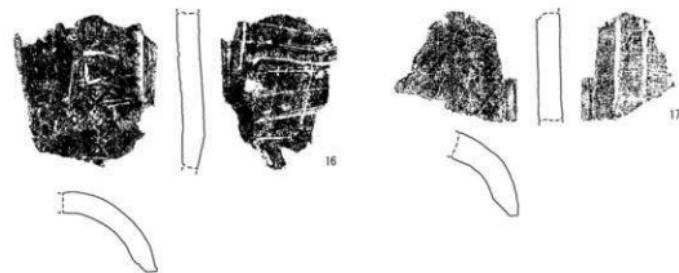


第81図 出土瓦実測図(1)

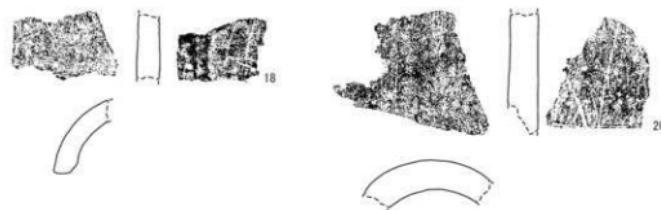
本丸



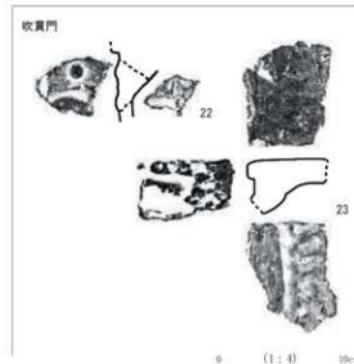
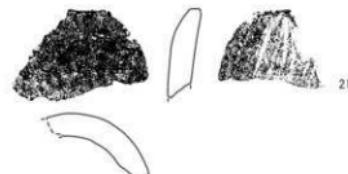
古本丸



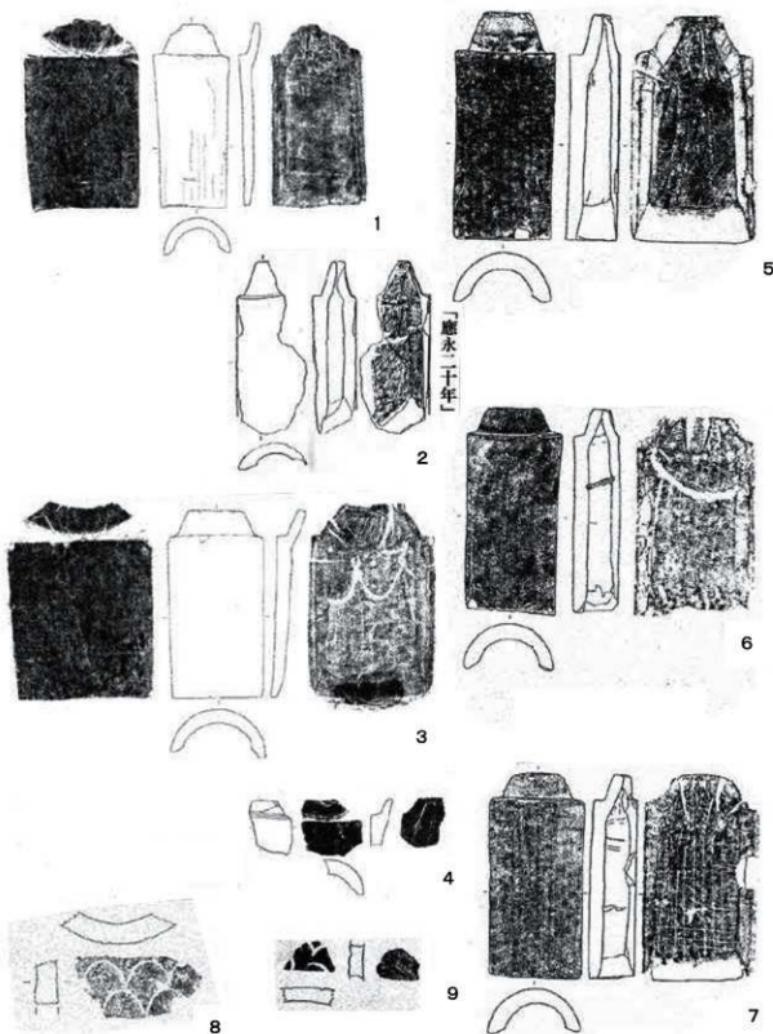
中城



北城



第82図 出土瓦実測図（2）



第83図 他遺跡出土瓦との比較 (1・3佐野城跡 (山口 2022)、2樟崎寺跡・5～7鎌阿寺本堂 (足立 2013)
8松本城跡 (竹内ほか 2020)、4・9烏山城跡)

表 36 出土遺物（瓦）観察表

No.	瓦種類	出土地点	法量 (cm. g)				調整	焼成・色調	胎土	備考	
			長さ	幅	厚さ	重さ					
1	軒丸	本丸	あー8表採	—	—	—	38	周縁 幅1.8cm 高さ0.9cm	凹:5Y2/1 黒 凸:5Y2/1 黒	密 白色粒子少、 雲母粒子微量	
2	軒丸	本丸	あー8表採	—	—	1.1	35	外:三巴文? 内:ナデ	凹:5Y2/1 黒 凸:5Y2/1 黒	密 白色粒子少、 雲母粒子微量	
3	軒丸	本丸	あー8表採	—	—	—	40	外:内区三巴文 外区通常文 内:ナデ	凹:5Y5/2 灰オーリーブ 凸:5Y5/2 灰オーリーブ	密 白色粒子微量	
4	丸	本丸	あー8表採	6.5	7.2	2.1	230	凹:布目一部ナデ 面取り 凸:ナデ	凹:5Y3/1 オーリーブ黒 凸:5Y2/1 黒	密 針穴	
5	面平	本丸	あー8表採	7.7	6.5	1.9	180	凹:布目瓶面取り 凸:ヘラケズリ	凹:2.5Y6/2 灰黄 凸:2.5Y7/2 灰黄	密 細砂微量	
6	丸	本丸	あー8表採	9.4 玉縁長3.0 角度75度	6.4	2.6	260	凹:布目瓶面取り五縁 ヘラケズリ 凸:ナデ	凹:2.5Y5/2 灰黄 内:2.5Y6/3 に高い黄 凸:2.5Y6/3 に高い黄	密 細砂少、 白色粒子微量	
7	丸	本丸	あー8表採	8.5	8.7	1.8	198	凹:布目瓶面取り 凸:格子状タキ	凹:2.5Y6/4 に高い黄 凸:2.5Y6/4 に高い黄	密 細砂微量	
8	平	本丸	あー8表採	22.4	12.6	1.9	620	凹:ナデ 凸:ナデ一部ヘラナデ	凹:5Y3/2 オーリーブ黒 凸:5Y3/2 オーリーブ黒	密 細砂少、 白色粒子少	
9	平	本丸	あー8表採	17	14.2	1.9	590	凹:ナデ 凸:ナデ離れ砂	凹:5Y3/1 オーリーブ黒 凸:5Y2/1 黒	密 細砂少、 白色粒子少	
10	面平	本丸	あー8表採	7.7	6.5	1.9	110	—	2.5Y2/1 黒	密 細砂少	
11	面平	本丸	あー8表採	7.7	4.4	1.7	70	ナデ	2.5Y7/6 刺黄褐	密 細砂少、 白色粒子少	
12	面平	本丸	あー8表採	8.3	5	1.8	80	コビキ痕?ナデ	2.5Y4/1 黄灰	密 細砂微量	
13	面平	本丸	あー8表採	6.7	4.5	1.7	60	—	2.5Y4/1 黄灰	密 細砂少、 白色粒子多	
14	鏡	本丸	あー8表採	3.8	6	1.6	45	外:半円形の連続した 押印で輪表記? 内:ナデ	外:5Y6/3 オーリーブ黄 内:5Y6/2 灰オーリーブ	密 細砂少	
15	鏡子口	本丸	あー8表採	—	—	3.9	170	外:幅2.5cm 高さ0.5 cm の帶状割り付け 内:一部剥離	外:2.5Y7/1 灰白 内:2.5Y6/2 灰黄	密 細砂少、 白色粒子微量	
16	丸	古本丸	トレンチ6	13	8	1.7	290	凹:布目痕、コビキ痕 面取りにへう書き 凸:ナデ	凹:5Y4/1 黑 凸:5Y4/2 オーリーブ黒	密 細砂少、 雲母粒子微量	突出部 No2
17	丸	古本丸	表採	9.2	5.6	2.1	160	凹:布目痕、コビキ痕 凸:タキ後ナデ	凹:5Y6/2 オーリーブ黒 凸:5Y6/2 オーリーブ黒	密 細砂少、 白色粒子少	
18	丸	中城	トレンチI 3解	5.1	4.5	1.8	105	凹:布目痕、面取り 凸:ナデ	凹:5Y2/1 黑 凸:5Y2/1 黑	密 細砂微量、 白色粒子多	
19	丸	中城	西側斜面 表採	7	6.2	2	160	凹:布目痕、繋い通し 赤斑有、面取り 凸:ナデ	凹:5Y2/1 黑 凸:5Y2/1 黑	密 細砂少、 白色粒子微量	
20	丸	中城	トレンチI 3層	9.7	9	2.4	265	凹:布目痕 凸:ナデ、離れ砂	凹:5Y4/1 黑 凸:5Y3/2 オーリーブ 黒	密 細砂少、 白色粒子少	
21	面平	北城	トレンチ4 2層 (整地土中)	7.2	9.9	1.8	160	凹:布目痕 凸:ヘラケズリ後ナデ	凹:2.5Y6/1 黄灰 凸:2.5Y6/2 灰黄	密 細砂少	
22	軒丸	吹貫門	石垣付近 表採	—	—	—	60	外:内区三巴文 外区通常文 内:ナデ	外:2.5Y4/2 灰黄 内:2.5Y3/2 黑褐	密 細砂少、 白色粒子多、 雲母粒子少	
23	軒丸	吹貫門	石垣付近 表採	6.2	8.2	1.9	245	唐草文?周縁が上部で 3cm と幅広	凹:2.5Y7/2 灰黄 凸:2.5Y5/2 灰黄	密 細砂微量	

第4節 烏山城跡での普及活動

烏山城跡の調査は、平成21（2009）年度から実施されてきたが、その当時は烏山城跡の認知は地元でもあまりされていなかった。その原因は、大半が民有地となっており、見通しもきかない藪状態で埋もれてしまっていたことと、烏山城跡の実態が全くわかつていなかつたためである。そこで那須烏山市教育委員会は、地権者を探し、所有地への立ち入りの許可をもらい下草を刈払わせていただきながら現地踏査を実施していった。



第1次調査現地説明会の様子

また、古文書や絵図などの文献調査や、航空機等による空からの撮影や測量調査、現地の発掘調査も併せて実施していった。そうして得た成果を、少しずつでも周知していただけるように発掘調査現地説明会や講演会などを開催してきた。ここではその経過と取り組みの一部を報告する。

烏山城跡という那須烏山市の貴重な文化遺産を周知してもらい、将来に残し、継続的に活用していくためには、近くに生活する人々に興味を持って頂かねばならない。そこでやはり興味を持てもらうためには、本物を見てもらうことが一番であると考え、最初に発掘調査を実施した古本丸で、調査終盤の平成22（2010）年3月13日に烏山城跡で初めてとなる現地説明会を開催した。調査地点が山城の最奥部であったため、麓の三の丸跡に集合し、城内見学を合わせた発掘調査説明会となつたが、地元新聞に掲載されたこともあり、多くの方々に見ていただくことができた。今までではただの杉山ぐらにしか思われてなかつた所だったが、発掘調査によって古の痕跡が発見されたことで烏山城跡の存在が多くの方々に再確認された。しかしこの時点では、縄張図もなく、通路だけが刈り払われているのみで、見通しも悪く案内が困難であることから、「個人では迷つてしまいそうで行けない」といった意見も頂いた。そこで烏山城跡の状態を把握するために、下草刈払い作業と未調査地点の発掘調査、縄張図の作成に取り組んだ。

烏山城跡の普及活動は、この時点から急速に進んでいき、烏山城跡の現況確認を目的とした5カ年計画最終年度の平成25（2013）年度には発掘調査概報を刊行できた。この間、発掘調査に伴う現地説明会だけではなく、文献調査成果の発表やガイドツアーなども実施した。平成



「第1回烏山城、め～っけた！」荒川氏講演会



「第2回烏山城、め～っけた！」松木氏講演会

26（2014）年、平成27（2015）年には「烏山城、めへつけた！」と題した調査成果の報告講演会や現地城跡の見どころ紹介ガイドツアー、出土遺物の展示公開などを行った。この頃になると、少しずつだが城内観光ガイドや地域学習の教材として活用されるようになり、地域でも知られるようになってきた。

そこで那須烏山市では、5ヵ年の調査成果をもとに烏山城跡を今後どのように活用していくか協議した。その結果、市の歴史を語る上では外すことのできないシンボル的存在であることから、国の史跡に意見具申し、未来へ向けて保存・整備し、地域の宝として活用を目指していくこととした。

平成28（2016）年には、文化庁や栃木県教育委員会の指導を仰ぎ、国史跡化を目指した調査指導委員会を整備し、調査成果を普及活動にも活かし現在に至る。

平成30（2018）年には、烏山城が築城されたと伝承が残る応永25（1418）年から600年の節目にあたるため、築城600年記念事業として、「いざ！

烏山城へ」と題し、城好きタレントとしても有名な春風亭昇太師匠や日本城郭協会の萩原さちこ氏を招いての記念講演会や県立烏山高等学校の生徒による城下町調査成果発表、現地城跡見学ツアーなど実施し、イベントの記念ロゴマークも作成された。この築城600年記念事業イベントには多数の参加希望があり、入場が抽選になるなど盛況を博した。

この事業を起爆剤として一気に烏山城跡の知名度が上がり、今では城跡ガイドツアーも各所から要望頂けるようになり、市内小中学校や地元県立高校から、継続的に地元地域の学習の一環として取り組まれるようになった。地域の活性化に向けた、郷土愛の醸成を目指し活用が進んできている。

今後那須烏山市教育委員会では、史跡化に向けて、烏山城跡が保存状態の非常に良い城跡であることを踏まえて、必要最低限の整備を目指し、「山城であることを体验できる城跡」を念頭に、ユニークペニューな取り組みも増やして行きながら、訪れる方々に愛される城跡にして行かねばならない。



北城現地説明会の様子



築城600年記念ロゴマーク



築城600年記念事業「いざ！烏山城へ」（左：記念講演会、右：烏山高校生による成果発表）



第5節 烏山城と城下の景観について

はじめに

ここでは、烏山城が築かれた喜連川丘陵と那珂川の間に展開する城下の景観についてみてゆきたい。

具体的に烏山城の城下の名が出てくる史料としては「佐竹義重書状」⁽¹⁾が早い事例である。この史料には、佐竹義重が永禄10年（1567）に烏山城を攻撃するに際して、まず城のまわりの「烏山宿」と「根小屋」を打ち散らしたと記されており、烏山城下に烏山宿と根小屋があることが確認されるのである。実際、戦国時代の宿や根小屋の景観を復原することは難しいことである。しかし、烏山城と城下については、江戸時代の城絵図や町絵図などが比較的多く残っている。それらに明治時代以降に作成された城内図、地籍図などを参考に、まず現代に最も近い時期である江戸時代後半の城下町の復原を試みた。もとより、これらの古絵図や町絵図は、作成者の意図をもって作られたものであり、空間が誇張され距離感や方向にずれがある場合も多くある。しかし、そのようななかにも戦国時代の景観の痕跡が含まれているはずである。たとえば、地名や道、町割、屋敷割などは、江戸時代さらには戦国時代のものが長く引き継がれる場合が多い。寺や神社なども土地に根ざし、移動することが少ないと考えられている。

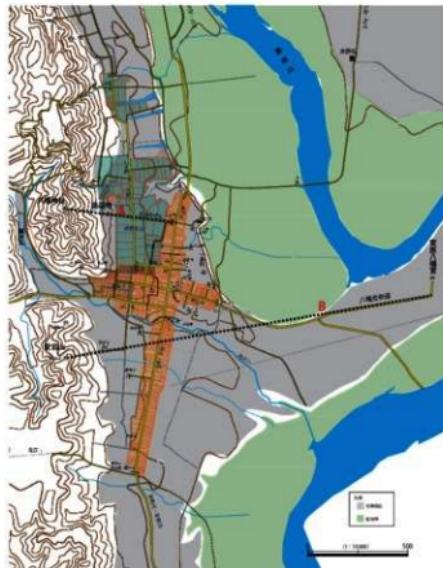
そこで、まずここでは、江戸時代後半の概念図を作成し、そこに描かれた町名の由来、寺社の配置、町割の実態、宿立などの説明を行いたい。さらに、その中から時代を遡り得る情報を採りながら江戸時代初期、さらには戦国時代末期の景観復原を試みたい。

1 城下の復原

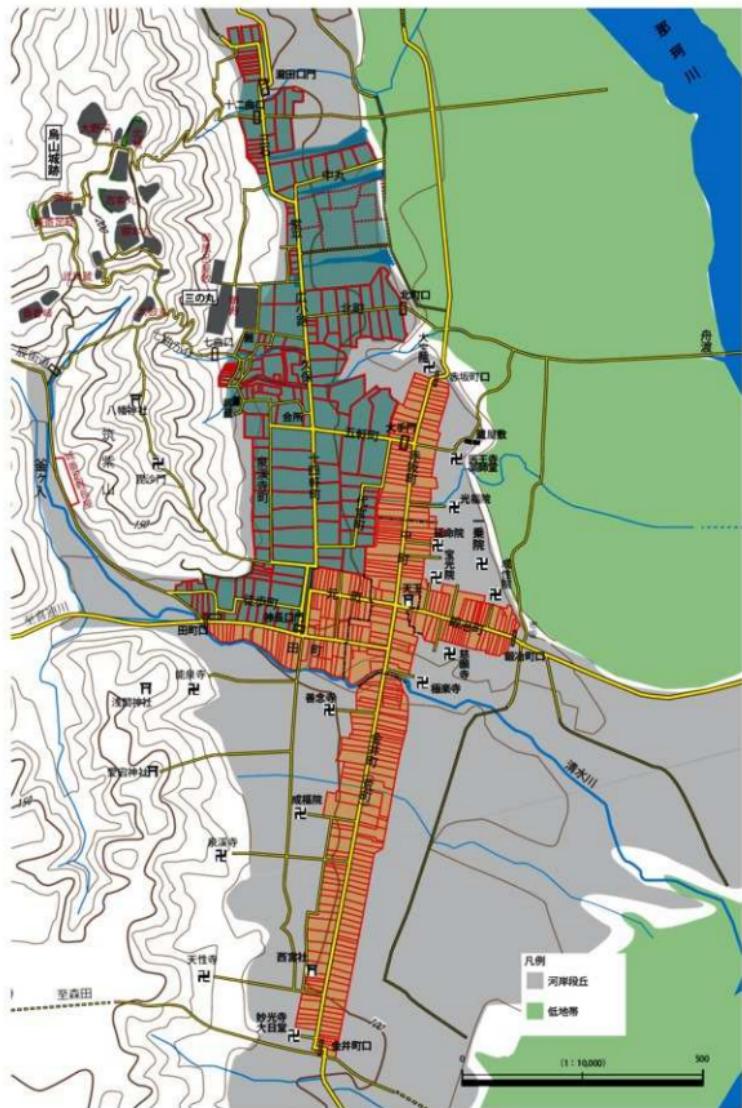
（1）城下の概況

第103図は、具体的には東北大学附属図書館・狩野文庫の烏山城下図⁽²⁾、酒主町惣繪圖、寛政之町絵図⁽³⁾、那須氏資弥時代の烏山城内家中屋舗図、明治時代の城内図、近代の地籍図等⁽⁴⁾を参考に作成したもので、江戸時代中葉から後半に至る間の景観を想定したものである。

酒主町惣繪圖、寛政之町絵図では、烏山の城下の地名は酒主と呼ばれていた。この酒主は古代以来の地名とも言われている。絵図では、酒主村を酒主町と表記している。



第102図 烏山城と城下広域図



第103図 江戸時代後半の烏山城と城下町

酒主村は、南北方向に通過する奥州街道⁽⁵⁾に沿い、北から赤坂町、中町、金井町（享保11年（1726）に荒町から変更）と並ぶ。街道の北の端は、赤坂町の大宝院（天台宗）の手前で大きく東に折れ、低地に下ってゆく。村の南の金井町の端には妙光寺（日蓮宗）があり、それぞれ南北の端に木戸が設置されていた。以後、この奥州街道沿いの町を宿町と呼ぶ。それ以外の町を町屋と呼ぶこととする。

この奥州街道沿いの宿町は、地図上では一見平坦地に形成されているように見えるが、赤坂町と中町の北側と中町と金井町との境に東方向に流れる河川があることからその部分が、今も低くなっている。寛政の町絵図などには、そのふたつの河川部分には「火除土手」が描かれている。

実際、街道の標高を測ってみると、大宝院付近で標高97.5m、追手門（大手門）前で98.4m、中町と赤坂町の境付近の低地で97.3m、中町の北寄り延命院の入口付近が宿の最高地点では99.6m、中町と金井町の清水川境付近で93.1mを測った。

大宝院から清水川までは約640mの距離なのだが、最高地点と最低地点の清水川付近の比高差は6.5mもあり、案外起伏のある宿町であることが分かる。それと大宝院の先は、急激に下り、比高差は15mもある。

金井町は、中町との境が最も低く、その先は98m前後の平坦地となり、妙光寺付近で100mほどの高さとなっている。

中町の中央付近で東西道と交差するが、この交差点は中町十文字と言られ、その一角に牛頭天王が建てられていた。この中町十文字は烏山の城下町の歴史を検討するうえで、最も重要な場所と言つてよいところである。その東が鍛冶町で、さらにその先に宮原八幡宮がある。そして西は元町となる。中町十文字から80m南、元町通りに並行した通りが西に延びているが、これが田町となる。鍛冶町の東端には木戸が設置され、その先は、拠形になっていたことが、今も道路の曲がりで確認できる。田町の西端には、街道側と城内側の二つの木戸が設置されていたとされ、今も市街地の端となっている。

この東西の通りの標高は、西の田町口で101.4m、元町の西端で100m、鍛冶町口で95.8m、宮原八幡入口で81.1mを測り、東に向かい低くなる地形となっている。東西方向の通りの比高差にはあまり意味がないが、南北の起伏のある宿町の地形は、これから述べる町割や屋敷割、その用途などに大いに影響があったものと考えられ、後項でその意味に触れてゆきたい。

（2）町名からみえること

① 中町について

江戸時代の烏山の宿町は、赤坂町から中町が中心的役割を担っていたものと考えられる。

関東の城下町や宿町をみると、元町、本町、元宿、内宿などと呼称される町名が、戦国時代までさかのぼり、中心的な役割を担った町を指す場合が多い。烏山にも元町はあるが、烏山の中心となる宿町ではなく、十文字から西に延びる位置にあり、いまひとつ名前の由来がわからない、元町については後ほど述べたい。ここでは街道沿いの中心にある中町についてみてみよう。

中町は宿の中心にあることから付けられたのであろうか。それならば中町の両側の町に位置を表す北町、南町、上町、下町などの名前が来ても不思議ではないが確認できない。

齋藤慎一氏が、遠江の笠原庄で「中」という地名に注目した論文を著している。少し長いがその内容を紹介したい（齋藤2010）。

笠原庄の浜野浦から荒川を遡上した地点に大字「中」という地名がある。「中」には「公文」「政所」「紋誅所」という小字が伝えられる。公文・政所などは中世的な支配機関が存在したことと示唆している。その「中」には牛頭天王が鎮座する。同社では山車の巡行による祇園祭が挙行されているという。

この祇園祭のなかで「公文」から出される代表者に関して、民俗調査の報告であるが興味深い事例があったという。祭礼に先立ち大寄合が行われ、その寄合の終了後に、山車の宮入の順番を決める籤を引く。籤引きの座次第は、床の間に向かって四者が列に座し、公文の代表は二列中央の末に座る。二列に座した四者は毎年座席が変わるが、公文の位置は変わらなく、籤の順序も必ず最後に引くことが決まっているという。この地に都市に関連する牛頭天王が勧請され、祭礼が挙行される。祭礼の運営には中世的な地名を継承する地域が参画する。このことは、「中」に笠原庄の政治的中心地であったことを如実に語っている。このような齋藤の「中」に関する考えは、烏山の「中町」にも通じるものがあるのでないだろうか。

烏山の中町をみてみよう。近代以降、さらには現代に至っても中心商店街をなす町の中心である。そして、そこには牛頭天王が建っていることも類似する。戦国時代の根小屋の位置などについて後に触れるが、そこでも中町と密接な関係が見えてくるのである。

② 荒町は新宿か

金井町は、以前は「荒町」と言われ、さらにその前は「新町」と表記されていたという。それは、酒主村5町内で最も新しい段階に成立したことから新町と言われたと伝えられている。はたしてそうなのだろうか。

荒町、新町、荒宿という地名は、関東各地に確認することができる。これらの地名は「新宿（しんじゅく）」が、後世に新宿（あらじゅく）、荒宿、新町、荒町などに変化した事例が多い。

そこで思いあたるのが、慶長8年（1603）の那須資晴により宮原八幡宮に捧げられた願文である。そこには「烏山江本意於有之者、御殿筑紫山江被為引、新宿江鳥居お立可申事」^{（6）}とあり、烏山に戻ることができたならば、宮原八幡宮を筑紫山に戻し、新宿に鳥居を立てることを約束する、という内容である。資晴は天正18年（1590）に烏山を追われていることから新宿は天正18年以前にはつくられていたことはまちがいない。

新宿が戦国時代の成立であると考えると、新宿の位置をどこにするかは当時の宿町の規模を考えるうえで、とても大きく関わってくることである。ここでは戦国時代の新宿に関する研究をみてみたい。

戦国時代の新宿の出現は、単に新しい町が出現したという意味だけではないものと考えられている。池上裕子氏の研究にあるように、北条領国では伝馬役との関わりのなかで新宿の町立てが進められた場合があった（池上1999）。市村高男氏は、権力の支配拠点となる城下の宿町に付加建設された新たな城下の宿町と位置づけるものであった。その背景には、権力による城下の整備、権力基盤の拡大政策として推進されたものであり、権力による城下の宿町支配の強化であった。さらに、一部の上層特權町人と結んで、自由に権力意思を発動し得る宿町の確保を目指したものとした（市村1994）。このような動向は、烏山でみられる新宿も同じような時期に出現することから城下町支配との関りのなかで出現したものと考えてよいのではないだろうか。永禄10年（1567）に烏山宿が佐竹により破壊されたことなどをひとつの契機として、新たな支配地としての新宿の「町立」が進められたのではないだろうか。

私は、金井町が荒町であることから、資晴の願文に出てくる新宿は金井町と考えた。しかし、

頼文にある鳥居の位置を考えると一概に金井町を新宿と考えない意見もある。

そのひとつが、渡辺康代氏の研究である。渡辺氏は、烏山の旧家早野家に伝わる文書のひとつの「提要」⁽⁷⁾を分析し、戦国時代末から江戸時代初めの烏山の城下について重要な指摘を行っている。少し長いが紹介したい。

一、中赤金之三組は、往古追手門御門柳太右衛門屋敷跡ニ有之、只今之追手御門は泉渓寺馬場とも云、又筑紫山八幡宮之馬場先とも申事ニ御座候、夫故中赤金と中町を頭にいたし三組ニ分候事由ニ御座候、

この記録から、渡辺氏は「往古の烏山城の追手門は柳太右衛門屋敷跡地に存在していたこと、新設された追手門は、從来は泉渓寺馬場とも筑紫山八幡宮の馬場先ともよばれていたことが記されている。一中略—往古の追手門前に形成された町宿の中心部が十文字に相当し、往古の追手門前を中心とする街区に「宿」が存在し、そこから赤坂町・中町・金井町の3組に分かれていたことが想定される。近世期の追手門前、すなわち中近世移行期までの筑紫山八幡宮の馬場先に鳥居を設けることは理にかなっており、赤坂町付近が「新宿」の後進に比定される。」と述べている。私が新宿と考えた荒町に関しては享保6年（1721）の火災により改称される以前の金井町の旧称は「荒町」であり、これも中町を中心に南へ延長され、新たに形成された町場という意味と解釈された。

渡辺氏がいいうように八幡宮の鳥居を立てる場所としては、赤坂町の追手門が、確かに理にかなっている。しかし、那須氏の経済振興策としての新宿の「町立」を想定するならば、その後の寛政の町絵図などをみると赤坂町の狭小差、屋敷割も比較的小さなものが多い点など新宿の後身としてふさわしくないような気もある。

さらに元の追手門についても言及されているが、この点については、先に中町の由来について齋藤慎一氏の研究を引用したが、その点と一致するところでもある。後に戦国時代の景観復原のところで合わせて検討を行いたい。

③ 田町、元町、鍛治町

田町という地名で有名なのは、東京都港区にある山手線の駅名ではないだろうか。この田町の由来は、江戸時代のことでの町場の拡大とともに田のひろがる土地まで町屋となって行ったことから田町と呼ばれるようになったと言われている。同様の地名は、佐倉城の城下町などでも確認できる。

烏山の田町も城下の西端に位置しており、他の田町同様に町場の拡大とともに町屋がつくられるようになったと考えてよいであろう。寛政之絵図には、田町に朱で「是ヨリ木戸限迄年貢地」と記載されている。田町以外の町では地代は錢で納めていたと推定でき、あえて年貢地と記載されていることは、元々田町が町屋でなかったことを物語っているのではないか。いずれにしても田町の成立は、江戸時代になってからのことである。

中町十文字の西が元町、東が鍛治町である。元町も戦国時代の宿や城下によくみられる地名で、城下や宿町の中心的な町である例が多いことを先に触れた。しかし、烏山の元町は、他の城下などにみられる宿町と同様な性格とは思えない。間口の狭い屋敷地が続く現状からは戦国時代に中心的な場であったことが想察されない。

烏山町史には、酒主村には13軒の鍛冶屋があり、そのうち7軒が鍛治町にあったという。そのように鍛冶屋が集中していたことから鍛治町となつたとある。

東西方向の町は、東の宮原八幡と西の根小屋を結ぶ街路に成立した町で、鍛治屋に象徴され

るよう職人町としての鍛冶屋町、武家地に隣接する元町は、那須氏に従属する手工業者の町としての役割があったのではないだろうか。元町の性格は、職人町を想定したが、名前の由来はやはり良くわからない。

(3) 烏山城下の寺社

寺社は、城下を構成する重要な要素のひとつである。そして、その役割などをみてみたい。初めに、中町十文字に建つ牛頭天王、宮原八幡宮についてみてみよう。

牛頭天王は、永禄3年（1560）に、那須資胤が大桶村から中町十文字の場所に、災厄消滅のために勧請したものと伝えられている⁽⁸⁾。牛頭天王は、市神としても重要な役割を担っていた。しかし、明治時代になり、神仏分離の政策が政府により推し進められたため、牛頭天王も八雲神社と改めたとされる。そして、大正3年には那須烏山市役所庁舎の北の現在地に移されたのである。

市神と言う点では、もうひとつ注目すべき神社として西宮神社がある。この神社、今は姿を消したが、金井町の南寄りに位置し、金井町の市神として天正2年（1574）に勧請された。寛政の町絵図では、金井町南の西宮神社の前は恵美須町と記載されている。金井町を新宿と考える理由として、この市神の存在も重要な要素のひとつである。

もうひとつ、この烏山で重要な役割を担った神社に宮原八幡宮がある。宮原八幡宮の創建は、坂上田村麻呂が東征の祈願のために筑紫山に勧請されたと伝えられているが、その真偽は定かではない。宮原八幡宮の由緒には、当初は烏山の南の筑紫山に築かれたが、烏山城二の丸を築くために明応2年（1493）に、現在の那珂川右岸の琵琶原の地に移されたという。

先に金井町（荒町）の説明の際に、那須資晴の宮原八幡宮に捧げた願文のことを述べた。那須資晴は、天正18年（1590）に烏山を退去させられ、大田原の佐良土城にいたのだが、「烏山江本意於有之者、御殿筑紫山江被為引、新宿江鳥居お立可申事」とあり、資晴自身が「烏山城に戻れたならば、宮原八幡宮の本殿筑紫山に移し、新宿に鳥居を立てる」と願ったものである。

戦国時代に多くの寺院が建てられた。特に注目したいのは、赤坂町、中町の東には、一乗院を中心に医王寺、光福寺、延命院、宝光院、感性院の真言宗の寺院が集中することである。一乗院の地は、戦国時代には金剛壽院があったのだが、成田氏長が入部に際して忍城下から移した一乗院に代わるのである。医王寺の創建ははつきりしないが、それ以外の寺院はいずれも戦国時代末期の創建であった。ここは、金剛壽院（一乗院）を中心と真言宗の一山寺院のような景観が想起される。

南北に延びる宿町の南端には、天正7年（1589）に創建された日蓮宗（元真言宗）の妙光寺がある。そして、宿町の北端には、文禄4年（1595）に創建された天台宗大宝院がある。宿町の両端に配置されたふたつの寺院は結界としての役割を担っていたと思われる。

さらに注目したい寺院としては、中町の南端にある極楽寺である。極楽寺は時宗の寺院であり、創建は他阿真教により嘉元4年（1306）と伝えられている。元治元年（1864）に焼失し（田代1972）、現在は同地に石碑が数基並んでいるのみである。先の宿町の南北両端にあるふたつの寺院同様に、この寺も中町の南端にあることに注目したい。これらの宿の端の寺院は、「宿立（市立）」に重要な役割を担うものと考えられる。その根拠のひとつが「連訛之大事」である。後項で詳細を説明したい。

以上の寺院は宿とのかかわりが強い寺院であるの対して、これから述べる寺院は、権力者側

の寺院と言える。金井町の西に南北に連なる丘陵の東麓に、北から能泉寺、泉渓寺、天性寺の寺院がある。この三寺院は元々筑紫山の麓にあり、戦国時代から江戸時代初期に建てられた寺院であるが、板倉氏の支配の延宝3年（1675）に城内拡張のため、現在の地に移転させられたものである。移転された寺院跡は、家中屋敷などに変わった。

なかでも泉渓寺は、戦国時代以降の城内、城下の設計のひとつの目安になったとも考えられる。そのことは、後項の町割りのなかで詳細をふれたい。

2 城下の町割について

（1）町屋の規模

第103図に示した町割は、那須烏山市教育委員会が所有する近代の地籍図をベースに、明治期の城内図および寛政の町絵図を参考にしながら作成したものである。地籍図と町絵図を比較すると屋敷には分筆や合筆したと思われる箇所もあるが、現在の町割に合致するところが多い。それでは、町ごとにその間口（表口）を比較してみたい。間口、奥行（裏行）については、寛政の町絵図に詳細な数値が記されているので、それを基にみてみよう。

赤坂町に並ぶ屋敷の間口は、追手門のある側で、狭いもので2.5間、3間、広いもので9.1間を測るものもあったが、5間から6間の間口の屋敷が多い。ちなみに赤坂町内にある追手門は、寛政の町絵図では14間6寸と表記されている。

次に中町である。5から6間の間口のものが比較的多いのだが、中央の十文字付近には間口10間を越える屋敷が10軒近く確認でき、なかには15間を越えるものもあった。そして、奥行は20間を越えるものもある。

金井町では、5間から7間ほどの間口の家を主体とし、なかに10間を越える屋敷も複数みられた。奥行きは15間前後のものが多く、比較的屋敷の規模が揃っていた。屋敷の規模からみれば、中町に次ぐ町といえるのではないだろうか。

一方、十文字の西の元町では、間口が5間を越えるものは少なく、3間前後のものが大半であった。奥行きは20間前後を測り、細長い屋敷である。東の鍛冶町では8間を越える町屋も確認できるが、大半が4間から5間のものが多い。なかには3間前後の狭い町屋もある。

このように間口のみならず奥行についても、中町に極めて規模の大きな町屋が多いことがわかる。宿町での役割やヒエラルキーを間口の広さが表していることはまちがいないだろう。先にも述べたが、地形の上でも中町付近の標高が一番高く、中町が中心的位置にあることがいえるだろう。その中心的役割は、戦国時代まで遡るものと推測される。その点は後に触れる。

城内の屋敷については、延宝9年（1681）頃の家中屋敷図には那須氏、明治期の城内図には大久保氏の家臣たちの名が記されており、どちらの屋敷地にも変化はなくそこに住む家臣の階層も大差ないようであり、成田氏以来八代にわたり領主が変わったが、屋敷割は少なくとも17世紀後半の那須氏段階以降に大きな変化はなかったことがわかる。

（2）街路の方向について（第102・103図）

江戸時代の烏山の城内と城外では、主軸となる街路の方向に明確な違いが認められる。まず事実関係を整理してみよう。

城外の主要街路は、宿町の赤坂町、中町、金井町とほぼ南北に直線的に延びる奥州街道である。中町の十文字で奥州街道に直交して東西に街路が延びている。さらに、この東西方向の街

路に並行して田町の街路がある。この奥州街道の成立は、古代にまで遡るのではないかと考えられるが、確かなことはわからない。

この城外の主軸道である奥州街道は真北から東におよそ 8 度振れていた。

一方、城内の主軸線は十四軒町から瀧田口まで延びる街路である。十四軒町から堂平までは、ほぼ直線で、真北に対して 4 度西に振れていた。堂平の先では城山から張り出した山麓の地形に沿うように西に方向を変え、その先はまた直線となり瀧田口に向かっている。

城内の屋敷は、十四軒町のように主要街路に直交するように屋敷をつくる場合、北町、中丸のように主要街路から直交する街路を東に延長し、その街路に直交する屋敷をつくる場合があつた。

江戸時代の城下町の造成は、権力者の権威の演出が十二分に發揮された場所でもある。たとえば、十四軒町の西側は山の斜面がかなりせりだしていたが、そこを切り取り北に延びる直線の街路をつくっていること、これは小大名にとって一大事業であった。それは、本丸、古本丸、常盤曲輪の造営などとも軌を一にする大名の威信の表現でもあったと考えたい。

そのような武家地のなかで主軸方向が異なるのが、五軒町である。早野義伯の「提要」には五軒町は「只今之追手御門は泉渓寺馬場とも云、又筑紫山八幡之馬場先とも申事ニ御座候、」と記されていた。

追手門から西を望むと泉渓寺、さらにその先には筑紫山八幡を見通すことができる。この追手門からみた景観を基準として街路（泉渓寺馬場）が設計されたものと言えるのである（第102図黒い破線を参照）。さらに言うならば、泉渓寺の造営が承正11年（1514）とされることから、その年代からさほど経ない時期にこの街路はつくられたと考えてよいのではないか。そして、この泉渓寺馬場は、宿町の直交する街路であった。この泉渓寺馬場以外に徒歩町、代官町が奥州街道に直交ないしは並行する街路である。

寺社のところでも触れた宮原八幡宮は、筑紫山にあった八幡宮が明応2年（1493）に宮原に移されたといわれている。その参道を宮原八幡宮の入口から望むと、その正面に愛宕社の建つ山を見ることができる。宮原八幡宮の参道は、愛宕社の建つ山を見通してつくられたものと考えてよいのではないだろうか（第102図黒い破線を参照）。

戦国時代や江戸時代の城下町などで街路をつくる際には、道路から見える山、天守や櫓、山上の寺社などをヴィスタとして設計が行われることが多いのである（宮本1985）。

（3）「宿立」について

栃木県の東部には、芳賀郡祖母井・八ツ木方面から、烏山を経て黒羽、さらに北の伊王野へと向かう街道がある。今は奥州街道などと呼ばれ、奥大道の脇道として重要な役割を担っていたとされる。烏山は、北上して那珂川と最初に接近するところであり、陸上交通と河川交通と交わる重要な宿として位置づけられている。江戸時代の烏山は、紙、楮、煙草の集散地として栄えたところで、それらの品物の輸送には河川交通が利用された。

それならば、この烏山宿は、いつ成立したのであろうか。この烏山宿（酒主村）のなかで戦国時代以前に遡る寺社として宿町の中央付近に位置する時宗極楽寺、それと時期が不明であるが戦国時代以前の創建と伝えられる真言宗医王寺がある。そして、このふたつの寺院が「宿立」に重要な役割を担うのである。

中世の宿を立てる場合には、「連积之大事」の「宿立図」が重要な役割を担うという研究が

ある⁽⁹⁾。この「連駕之大事」にしめされた宿立図によって中世の地方都市を知ろうとするとき、三つのポイントがあると榎原雅治氏は述べている（榎原2021）。

第一は、町の両端を阿弥陀と薬師で結界し、宿のなかほどには市神を祀る「中御堂」がある。第二は、町の入口の外側に旦過屋や風呂屋がある。第三に宿町の大きさは「三百六十七口」、広さ「十二ヒロ」であるという。烏山の宿をこの「宿立図」に当てはめてみよう。

中町と赤坂町は、烏山宿のなかでも先行してできた宿町と考えられている。このふたつの町にある医王寺と極楽寺を見ていただきたい。医王寺の本尊は不動木立像であるが、寛政の町絵図には同寺境内に薬師堂が描かれている。極楽寺は時宗であることから本尊は阿弥陀であり、庵寺となった現在でも極楽寺の跡には、名号の石碑があることを先に述べた。そして、中町のなかほどには、市神である牛頭天王が祀られていた。赤坂町と中町の長さは610mを測り、「連駕之大事」に記された宿町の360尋に近い数字であった。烏山宿は「宿立図」に合致する景観と言えるのではないだろうか。

「連駕之大事」は、連雀商人に伝わる秘伝書であり、連雀商人たちは熊野権現の子孫であると記されている。烏山の語源ともなっている烏は、熊野権現の使いともされ、那須地域は熊野神社が多く分布する。そしてその熊野信仰の伝播者であったのが時宗といわれている。おのずと、熊野修験者と時宗は「宿立」におおいにかかわりがあったことが推測できる。

榎原雅治氏は、東海道と鎌倉街道上道などの街道の宿について、「宿立図」に適合する宿を分析され、それらの宿の多くが鎌倉時代後期まで遡るものと述べている。烏山の宿もそのころまで遡る可能性があるのではないだろうか。

遊行寺のホームページで時宗寺院の分布を確認すると、栃木県内では宇都宮、足利、佐野、小山などのように中世前半から都市的な空間を築いてきたところには複数の時宗寺院があり、在郷でも烏山の極楽寺とともに大田原市、那須町など那須氏と関わりの深い地に時宗の寺院が分布する。

那須町伊王野城の城下にも時宗寺院と薬師堂（元の位置は熊野堂と言われるところである）が確認できる。このように那須地域では時宗寺院の分布が確認でき、さらに多くの熊野社が分布することはいまさら言うまでもない。このように考えると烏山宿は、那須氏が入る15世紀後半以前から宿として成立していた可能性は十分想定できるものではないだろうか。

今に残るように奥州街道に沿って直交する短冊形の町割は、間口などは変化したとしても「宿立」が行われていたことを跡づけるものと考えたい。

佐竹義重書状にある烏山宿はどの範囲であろうか。今まで具体的な宿の規模についての研究は、「新宿」位置について検討された渡辺康代氏のみである。その渡辺氏の考えでは、戦国時代前半から中町（第105図では宿町1）、そして戦国時代後半に赤坂町（第105図では宿町2）が新宿として成立したことから、烏山宿は宿町1（中町のみ）を想定している。私は、やはり宿町1（中町）、宿町2（赤坂町）の二つの町を合わせた範囲が烏山宿ではなかっただろうかと考える。それは「連駕之大事」による「宿立」の規模と一致することも理由のひとつである。

今まで、第103図江戸時代後半の烏山城と城下町について概観してきた。そして、さらに時代をさかのぼりえる要素について、その都度提示してきた。次に、江戸時代初期、戦国時代の景観復原を行いたい。

3 江戸時代初期の城下

第104図が、江戸時代初期（17世紀中葉まで）の景観復原を行ったものである。この復原図は、正保城絵図正保年間（1644～1647）の記載内容を参考とした^⑩。

多くの城絵図が、軍事的色彩の強い山上の城館を中心に描かれる場合が多いのだが、正保城絵図は城下の武家地や宿町に至るまでかなりの精度で描かれていることに特徴がある。なかでも街路の寸法、石垣の高さ、郭の規模などが細かく記されていた。街路の寸法に関しては実際の距離と換算してみたが、やや不正確なところが多く認められた。しかし、山上の郭、山下の武家地、町屋、寺院などの位置関係は比較的の正確であった。

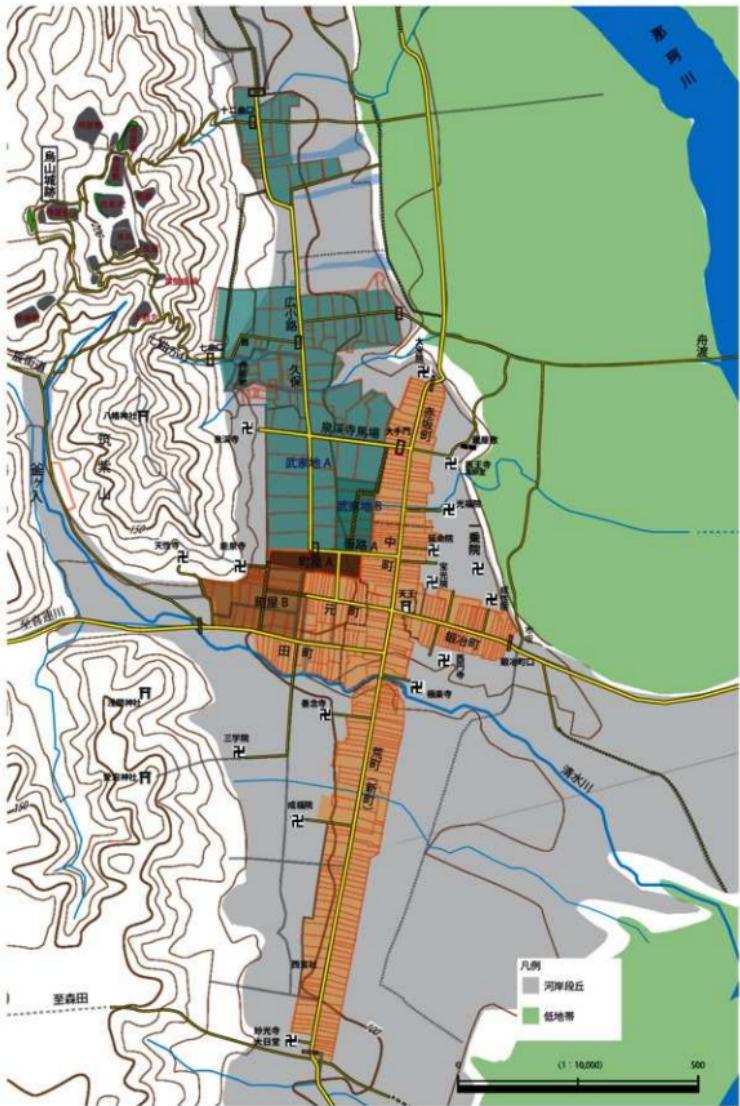
それと絵図のなかの宿町に墨書による土壙状の表記が、追手門の南の赤坂町と中町境界付近、清水川の南側、宿の南端の三か所で確認できた。これは寛政2年酒主町絵図には火除地と記載されていた。この墨書表記は正保城絵図の正確さ示すものと言える。

それでは第104図の特徴について述べる。

- ① 第103図と最も大きな違いは三の丸がないことである。三の丸は万治2年（1659）に造営された。
- ② 十四軒町、五軒町、久保、広小路、堂平と続く街路が描かれ、堂平で西側の山際に曲がる形状は、江戸時代後半、さらには現代まで変わらない道路事情である。そして、この江戸時代の武家地の主要街路の大部分の造成は、正保年間以前の成田氏、松下氏段階のことであつたと判断できる。ただ、松下氏は在任期間が極めて短いことから大半は成田氏段階のことであろう。
- ③ 赤坂町、中町、今井町、元町、鍛冶町は、江戸時代後半と大差なく形成されていたものと判断できる。町間に關しては、まだ田町口付近まで拡大していなかったと推測される。町の町名の説明でも行ったように江戸時代に拡大した町屋であることを裏付けるものと言える。
- ④ 町屋と武家地の境に街路Aがあるのだが、この街路は江戸時代後半ではない。渡辺康代氏は、寛文17年（1640）に新しい追手門が完成する前まで、この街路と中町が交わるところに追手門があったという。早野義伯の「提要」の「往古追手門柳太右衛門屋敷跡二有之」の街路に一致するものと考えられる^⑪。
- ⑤ 街路Aの南に、後に武家地の十四軒町と代官町の一部となる「町屋A」、武家地の徒歩町となる「町屋B」の二か所があることは注目すべき点である。

以上の点が、江戸時代中葉以降の城内、城外と大きく異なる点であった。しかし、正保城絵図が作成された10年も経ない万治2年（1659）には三の丸が造営され、延宝3年（1675）には泉溪寺、能泉寺、天性寺が移転され、跡地は武家地となつた。同時に追手門に加え、北に瀧田口、南に神長口が新たにつくられ城内と城外が厳格に分離されるのである。

⑤で町屋AとBの存在が注目すべきことと述べたことを説明した。町屋Aは、武家地造成地に一部組み込まれるが、町屋B、武家地B（代官町）とともにその街路方向が、奥州街道沿いの宿町に直交するか並行する方向を向いているのである。それは、④で説明した街路Aに規制されたとも言える。さらに言えば、江戸時代の武家地造成時にはすでに町割がなされていたために新たな城内造成からはずされたのではないだろうか。多分に、このエリアが戦国時代に廻るものであったと考えたい。



第 104 図 江戸時代初期の烏山城と城下町

4 戦国時代の城下

戦国時代の城下図は、正保城絵図をベースに作成した江戸時代初期の烏山城下と半世紀ほど前の年代差であることからある程度共通する景観があるものと考えられる。江戸時代初期の景観を基に戦国時代の城下景観を復原したものが、第105図である。この図を参照しながら戦国時代の景観を推測してみたい。

烏山の城下を考えるうえで、次の三点の重要な史料がある。すでに随所でこれらの史料については触れてきたが、再度確認したい。

①天文15年（1546）の「那須政資法要香銭注文写」には、この年に亡くなった那須政資の葬儀に参列した大名、宇都宮一族、那須氏の親類縁者、家臣たちの名と香銭が記されていた。そのなかに「酒主之衆」12名の名があった^[12]。酒主之衆のうち黒羽殿以外の11名には敬称が用いられていないことから那須氏の家臣と判断される。

「酒主」が、第105図の町屋部分とそれに隣接する武家地周辺であることは、近世の文書や古絵図などから明らかである。おのずと「酒主之衆」の12名の那須氏家臣達も、この酒主に住んでいたことはまちがいない。

②永禄10年（1560）の「佐竹義重書状写」^[13]には、「作十一烏山宿・根小屋無残打散候」との記載があり、烏山城下には烏山宿と根小屋があったことがわかっている。

③慶長8年（1603）の「那須資晴願文写」^[14]は、戦国時代の終わりごろに、烏山宿に新宿がつくられたことがわかるものである。

以上の史料により戦国時代には烏山宿と根小屋があったことがわかる。それが、古くから「酒主」とされる地域であった。そして、那須氏により、新たな宿町である「新宿」がつくられたのである。

（1）根小屋について

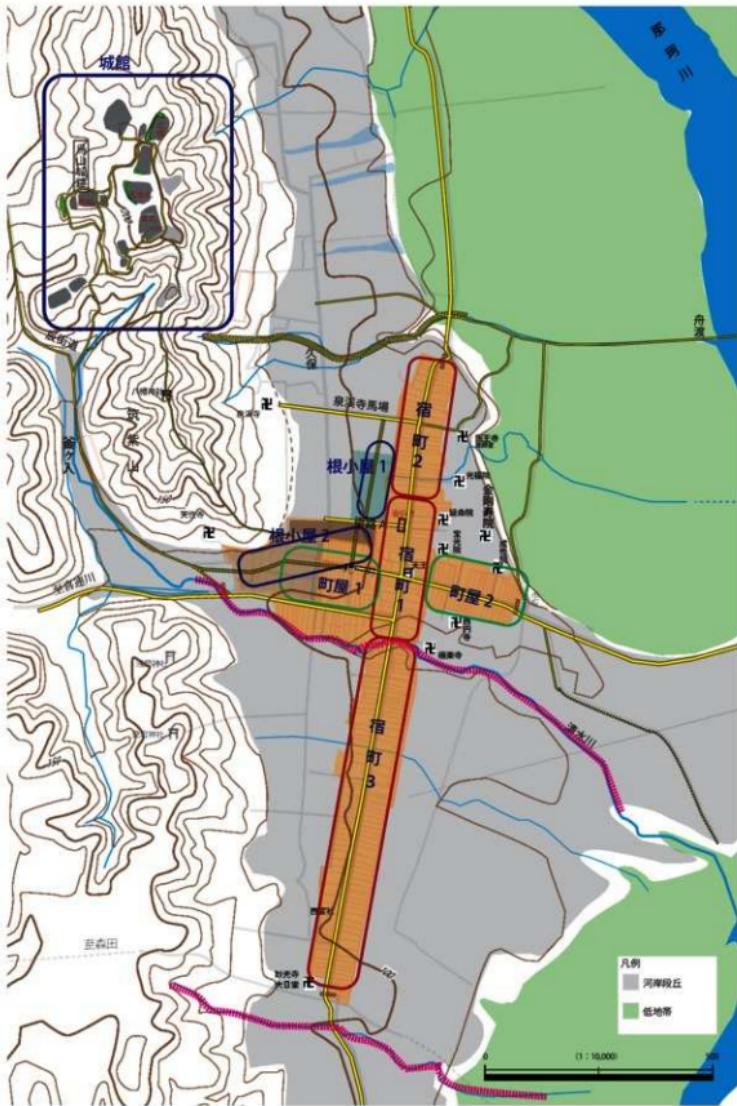
①と②の史料から、少なくとも16世紀中葉には、那須氏の家臣、酒主之衆が定住していたものと考えられている。それならば、その酒主之衆の居住地であった根小屋はどこであろうか。

前項で述べたように、第105図の武家地B、町屋A・Bが、街路Aを中心に武家地造成以前に町割がなされていたことから、そのエリアが戦国時代の根小屋であったと考えてよいのではないだろうか。

もうすこし踏み込むならば、街路Aに追手門がつくれていたことがまちがいないならば、街路Aの先には、追手門にふさわしい施設があったものと考えてもよいのではないか。荒川善夫氏は、「心徹齋道楽皆川宗俊書状」（栃木県史編さん委員会1975）にある「烏山御館」との記載について、「那須氏が戦時には防御の必要から山上の烏山城に、日常的には城の麓の所在地は不明であるが、生活しやすい館に居住していた」と推測している（荒川2014）。

この推測が可能の高いものならば、その館が古追手門の先にあったと考えてもよいのかもしれない。そして、その館を囲むように根小屋1、根小屋2、町屋1があつたのではないだろうか。

関東地方の戦国時代の根小屋の調査例は少なく、はっきりしたことは言えないが、根小屋が面的に広がることは、ほとんどないものと考えられている。烏山では、街路Aの途中から北に根小屋1（第104図武家地B、第104図代官町）、それと街路Aの南街路の先の根小屋2（第3図町屋A、第104図徒歩町）の街路沿いに家臣集落が形成されていたのではないだろうか。その広さは、さほど大きなものでなかつたと考えたい。それは、「那須政資法要香銭注文」にあ



第 105 図 戦国時代後半の烏山城と城下町

るよう、那須氏の家臣が領地内に分散して配置されていたことからも裏付けられるのではないか。

江戸時代初期の城下のなかで町屋A、Bとしたエリアは、後に武家地の徒歩町に組み込まれていくわけであるが、その要因のひとつは戦国時代にあったのではないだろうか。戦国時代の城下の根小屋周辺には職人町などが付随する場合が多い（市村1994）。それともうひとつ、酒主之衆のなかには、那須資晴が佐良土城に移った後も烏山に残り、商人となった家もある。また、新たな領主の下級家臣や足軽などになった者もいたであろう。このような身分の違う者が混在するエリアも、しだいに分離されるようになり、延宝3年（1675）の城内造成の完成段階には厳格に分離されたのではないだろうか。

泉溪寺馬場の北側は、久保の地名にあるように谷地形となっており、宿町の北の大宝院の先まで続いている。根小屋と宿町の南側には清水川が流れている。この川の幅は、広いところで5mほどの小さな川であるが、人工的に手が加えられたように両岸は切り立っている。この谷と河川は、城下を防御する外郭線であったのではないだろうか。私が新宿と考えた宿町3ができたときには、妙光寺の南にある小河川が外郭線となつたと想定したい。

戦国時代、城館へのアプローチは、「釜ヶ入口」が使われていたと言われてきた。今まで述べてきた烏山の城下の構造を考えると、山上の城館へのアプローチは、「釜ヶ入口」を想定することが妥当であろう。ただ、筑紫山には、郭を思わせる平場があったとされることから、筑紫山を経由して城館群に行くルートもあったと考えてもよいかもしれない。

この根小屋とその入口にある中町との関係をみてみたい。

（2）中町の中心性と商人

中町は、古追手門があった場所で、その位置から戦国時代から那須氏と密接な関係があつたと考えられる場所である。

渡辺康代氏の研究では、中町には柳太右衛門とともに有力六家が屋敷を構えていたとされ、その六家は「板橋五郎右衛門、柳太右衛門、森金衛門、斎藤新太夫、船山惣右衛門、椎名三衛門」であることが「提要」⁽¹⁶⁾で確認でき、そのうちの板橋家、椎名家、柳家は、高野山清淨心院の「供養帳」⁽¹⁶⁾にも城主やその家臣とともに名を確認することができ、彼らが旧武士階級であったものと考えられる。また、正徳4年（1714）に町奉行に提出された、船山・柳・森氏による『乍恐以口上書奉願上候事』は、彼らが古那須氏以来の烏山町の代表であり、家中の末席に列座して城主に謁見する家格と身分を有しており、その正規の身分取り扱いを訴えた文書である。これもまた、「六人」が旧武士階級であったことを示していると判断されている。

「古町六人」は、地代免除の特権を得て、表口10間以上もの広大な屋敷地を有した。それらは烏山五町に均等に存在していたわけではなく、中町に集中する傾向がみられた。このことから、烏山において中町十文字の街区は従前より高い中心性を有していたものと判断される。と結論づけている⁽¹⁷⁾。

これらの商人たちは、戦国時代には那須氏の家臣であり、那須氏と経済的に密接な関係を有する特権商人であったのだろう。ただ、その中心人物である柳家は、その出自は織田信雄の家臣であったが、天正19年に織田信雄が出羽に移った際に、烏山に土着して商人となったというものである。まったくの憶測であるが、柳家が織田の家臣であるならば、抵抗なく古追手門に屋敷をつくることができたのではないだろうか⁽¹⁸⁾。

この中町は、烏山宿のみならず根木屋とも密接な位置関係にあり、中心性の高い町であることはまちがいないことである。先の「中町」の町名由来の事例とした齋藤慎一氏の研究とも合致するものと言えるのではないだろうか。

おわりに

本文中でも触れたが、この烏山城および城下に関して、非常に多くの城絵図、村絵図などがあることは、景観復原にとても有利な点であると考えた。

以前、烏山の城下を車で通過したときには、古い建物はなく、寺社もあまり目に留められなかつたことから、江戸時代の景観はほとんど改変されたものと考えたのである。しかし、それは明治時代の数度にわたる火災により、烏山の古い家屋は焼失したことなど表面的な現象であった。

改めて、城絵図や村絵図を片手に城内および城外の宿町を踏査したところ、その絵図に合う景観が随所に残っていたのである。それは、城絵図や村絵図の正確さを証明するものでもあった。

本文中で、たびたび引用させていただいた渡辺康代氏の研究成果は、江戸時代初期やそれ以前の景観を彷彿させる記載が多く、復原にとても役立つものであった。

注

- (1) 秋田藩家蔵文書にある史料である。荒川善夫は永禄10年（1567）と考えた。荒川善夫 2014、茨城県立歴史館編1991、荒川善夫他編2017。本報告「付録」烏山城関係史料6「佐竹義重書状写」参照。
- (2) 東北大付属図書館・狩野文庫には、「烏山城城下図」、「金会津烏山笠間城下図」がある。さらには国立国会図書館に「日本古城絵図東山道之部野州烏山城絵図、岡山大学に「下野烏山城図」がある。いずれも江戸時代中葉以降のものと思われる。
- (3) 「酒主町惣繪圖」、「寛政の町絵図」の二枚絵図を教育委員会から提供された。後に詳細を触れるが、渡辺康代 2021「近世城下町の付祭りの変化」では、「元禄地代帳之写并寛政度改絵図書人」がこれにあたる。「酒主町惣繪圖」が江戸時代初めのもの、「寛政の町絵図」が18世紀末期（寛政2年）のもので、烏山城下町の町瀬の間口、奥行などが詳細に記されている。
- (4) 那須賀氏時代の烏山城内家中屋舗図は、栃木県史編さん委員会「栃木県史 史料編・近世4」に所収。那須賀氏が入部の延宝9年（1681）頃作成。明治時代城内図は、大久保氏支配の幕末の城内の家中屋舗の状況である。近代の地籍図は大正時代のものと推測される。城内図および地籍図は、那須烏山市所有。
- (5) 地元では、この街道を、奥州街道と呼んでいることから、ここでは「奥州街道」と呼ぶ。
- (6) 「那須賀精顕文写」、那須家文書 栃木県史編さん委員会 1975「栃木県史 史料編中世2」
本報告「付録」烏山城関係史料24
- (7) 早野義伯（はやのよしのり）及びその早野が著わした「提要」については、渡辺康代氏の著書「近世城下町の付祭りの変化」に詳しい。今回の報告では、渡辺氏の御著書から多くを引用させていただいた。渡辺氏の著書によれば、早野義伯は文政年間（1818～29）に早野新右衛門に養子入りし、船山家より借りた文書を書写し、早野家および烏山に関する旧記を集め「提要」を記したとある。
- (8) 大鍬家文書 八雲神社由緒などにある、「赤坂町祭礼記」には、永禄6年以降の祭礼などが詳しく記されている。栃木県史編さん委員会1975「栃木県史 史料編」中世2
- (9) 「連駁之大事」は、近世初期に書写された商人の由緒書で、熊野修験の強い影響の基に作成されたものである。従来「市立図」とと言われてきたが、榎原雅治氏は著書「地図で考える中世」のなかで、「連駁之大事」の本文には「宿町ヲ立ル事」とあるので、「宿立図」と呼ぶことすると述べている。私もそれにならうこととした。国立歴史民俗博物館1998、榎原雅治 2021。
- (10) 正保城輪図は、正保元年（1644）に幕府が諸大名に作成を命じたもので、非常にすぐれた記録とされる。
- (11) 前掲注7
- (12) 「那須賀法要香銭注文写」、那須家文書、栃木県史編さん委員会編「栃木県史」史料編中世2。この史料に関しては、市村高男、江田郁夫、荒川善夫氏等の研究がある。市村 1995、江田 2013、荒川 2002。
- (13) 前掲注1
- (14) 前掲注6
- (15) 早野義伯の「提要」には、「古町六人と中候は、板橋五郎右衛門、柳太右衛門、森金衛門、斎藤新太夫、船山惣右衛門、椎名三衛門」とあり、「古町六人」の名が確認できるという。

- (16) 高野山清淨心院の「下野国供養帳」には、那須氏関係の名が多く認められることから、市村、荒川、渡辺氏などにより、その実態についての研究がある。市村 2011、荒川 2017、渡辺 2021。
鹿沼市史資料編 古代・中世には、その詳細が触れられている。
- (17) 渡辺 2021 「近世城下町の付祭りの変化」P181～184
- (18) 柳家は石見吉見氏につながる家で、天正18年に織田信雄が配流同然に烏山に移されたとき、その警護役として同道したとされる（皆川1991）。

参考・引用文献

- 荒川善夫2002「戦国期東国の権力構造」岩田書店
- 荒川善夫他編2017「戦国遺文下野編」第1巻
- 荒川善夫2014「戦国期下野烏山城の歴史」那須烏山市埋蔵文化財報告第4集
- 池上裕子1999「戦国時代社会構造の研究」校倉書房
- 池上裕子1992「戦国の群像」「日本の歴史」10 集英社
- 市村高男1994「戦国期東国の都市と権力」思文閣
- 市村高男1995「戦国期下野那須氏権力の一断面－『那須政法要香銭注文』の分析－」『中央学院大学商経論叢』第10号第1号
- 市村高男2011「戦国末期における下野那須家の戦鳥社参詣－戦鳥神社戯絵馬の墨書きをめぐって－」『栃木県立文書館研究紀要』第15号
- 茨城県立歴史館編1991「茨城県史料 中世編IV」
- 江田郁夫2013「戦国大名那須氏の成立」 江田郁夫・篠原大輔編『北関東の戦国時代』高志書院
- 榎原雅治2021「地図で考える中世」吉川弘文館
- 鹿沼市史編さん委員会1999「鹿沼市史 資料編古代・中世」
- 烏山町史編集委員会1978「烏山町史」烏山町
- 国立歴史民俗博物館1998「歴博フォーラム 中世商人の世界－市をめぐる伝説と実像－」
- 齋藤慎一2010「中世東国の大道と城館」東洋大学出版会
- 田代黒蓮編1927「烏山町誌」
- 栃木県史編さん委員会1975「栃木県史 資料編中世2」
- 栃木県史編さん委員会1975「栃木県史 資料編・近世4」
- 皆川晃1991「烏山文学の碑散歩道」
- 宮本雅明1985「近世初期の城下町のヴィスタに基づく都市設計－その実態と意味」『建築史学』第4号
- 渡辺康代1990「近世城下町における祭礼形態変容－下野国那須郡烏山を事例して－」『地理学評論』72－7
- 渡辺康代2021「近世城下町の付祭りの変化－伊賀国上野と下野烏山を事例に－」海青社

第5章 調査の総括

鳥山城跡は、源平合戦の折、扇的的を射落とした那須与一で有名な那須氏一族の末裔である沢村五郎資重によって、約600年前の応永25年（1418）に築城されたと言われている。それ以後、天正18年（1590）に当主那須資晴が、小田原遼参を理由に豊臣秀吉によって改易されるまで、武勇の誉れ高き那須氏の居城となつた。

戦国時代末から江戸時代中期においては、織田氏、成田氏、松下氏、堀氏、板倉氏、那須氏、永井氏、稲垣氏と頻繁に城主の交代が行なわれ、万治2年（1659）、時の城主であった堀親昌によって、城の東側山麓に新たな居館（三の丸）が築かれ、以後の藩政機能はこちらに移ることになった。享保10年（1725）になると大久保常春が江州（現：滋賀県）より移封され、幕末までの約140年にわたって大久保氏が城主となり、明治時代を迎えた。

明治以降には防空監視哨などの戦争関連施設が造られ、また戦後にはスギやヒノキの植林が行われたが、城郭自体の改変はほとんど行われることはなかった。

しかし、鳥山城跡は中心市街地に隣接していることなどから、80歳を超える人達が子供の頃に遊んだ場所で、今も親しみをもって「お城山」と呼ばれている。

鳥山城跡は、地域の歴史や文化を知る上で貴重な文化遺産である。この様な背景から地域の誇りとしてこれを後世に保存し、活用することを目的として、現状と中世から近世に至る使用状況、その範囲はどの程度かなどの確認を目的として平成21年度から令和元年度まで発掘調査を実施した。

10次に及ぶ調査で、本丸、古本丸、西城、中城、北城、釜ヶ入口のトレンチ調査を実施した。それぞれの調査地点の詳細な結果は第4章を参照頂き、ここでは発掘調査を中心に全体的なまとめとする。

古本丸は、最初に丘陵頂部を地山面まで掘削し、平坦面を作り使用していたと考えられる。地山関東ローム層面に、防護施設と思われる柱もしくは杭を設置した後に抜き取られ、人為的に埋め戻されている遺構（SK-35～37）が確認されている。この時期の平坦面の大きさは、南北方向は現状とあまり変わらないと思われる。東西方向では、西側の土塁や東側の突出した部分がなく、現状より約20m小さかった可能性がある。また平坦面の外周に柵列が巡る構造だった可能性がある。その際に掘削した土砂がどこに使われたかは不明だが、おそらくは曲輪の周間に削り落として利用していると思われる。

その後、東西方向に平坦面の拡張が行われ、東側では出崩状に突出した部分が作られ、西側では内側平坦面から約1mの高さの土塁が造られ、内側に排水用の溝があったと想定できる。この状態は、出土遺物から15世紀後半から16世紀前半にはできあがっていたことがわかる。その後数回の整地、平坦面拡張が行われているが、全体的なものなのか部分的なものなのかまでは今回の調査面積ではわからなかった。ただ土塁部分や突出した部分では、全体でおそらく5回の改修が考えられた。内部構造は、築城当初は掘立柱式の施設が考えられ、整地を繰り返すうちに礎石式の施設に変化していった。最終面は礎石が埋められ、表面に礎石があまり見つからない現状から、平坦な更地であった可能性も考えられ、時期的には、かわらけ溜り（SX-1）から16世紀後半から17世紀初頭が想定できる。しかし表土中から、それ以降の陶磁器片が採集されていることから、廃城に至るまで何らかの形で継続して使用されていたことが伺えた。

本丸は、調査自体が表土除去で停止しており、最終的な利用形態の確認までである。下層の

確認のために調査した40cm四方の枠掘により、本丸も古本丸同様に城域を拡張するように改修をしながら現在に至ったことがわかった。枠掘から数回の整地面が確認でき、平坦面中心付近では地山関東ローム層が約1mの深さで確認されたが南西側では地山面まで到達できなかつたため、大規模な盛土普請が想定できる。また、本丸正門付近石垣の裏側（レンチ20枠掘W）から古本丸のかわらけ溜り（SX-1）出土品と類似したかわらけ（第76図17）が出土している。このかわらけの時期から本丸正門付近現存する石垣は、16世紀後半から17世紀初頭以降に整備されたことは明らかである。さらに石垣の観察から、最下段の一部に、烏山城跡では古い時期と考えている吹貫門脇石垣と、同じ加工の石材が使用されていることがわかった。その他の部分は、石材の材質や加工も違う新しい時期と考えている山麓の三の丸石垣と同様であった。つまり、最下段の一部にだけ古い石垣が残り、大部分のその他の部分は、新しい石垣が積まれており、石垣自体が大きく改修されていることが確認できた。石垣の前面は、正門から本丸平坦面向けて緩やかに上る傾斜で、階段状の遺構が確認できた。地山岩盤面まで掘削し、整地後に石列を置き、段の内側に礫や砂などを交互に詰め、最上面は直径5cm以下の川原石が敷かれていたことから、浸透性の高い砂利敷きの通路であることがわかった。この階段状の遺構がある通路と面する石垣との間には、排水のための溝状の遺構は確認できず、石垣と階段は接していた可能性も考えられた。そのため、排水については、階段状の遺構の地下を、地山岩盤面の上を傾斜に沿って南側に浸透し、流れていたと考えられる。

これらから本丸の構築は、始まった明確な時期は不明だが、地山面まで掘削し平坦面を作り使用しながら南西方向に拡張、改修を行っている。正門付近石垣を含む2回折れの内樹形の防御構造も、16世紀後半から17世紀初頭以降に整備され、現在に至っている。

西城は、古本丸、本丸と同様に丘陵頂部を地山面まで掘削し、平坦面を作り使用していることがわかった。初期段階では、この平坦面はレンチ13、14で確認された箱薬研状の溝（SD-50）で区画されていたこともわかった。溝は2回の掘り直しが確認でき、それに伴う柱痕跡には柱が切り取られているものと根元から抜き取られ人為的に埋め戻されたものがあり、橋なのか柵なのかは不明だが、改修しながら一定期間使用されていたことが伺える。また底面から出土したかわらけ（第76図50）により15世紀後半には存在したことが確認され、本丸、古本丸などの東側に南北に並ぶ曲輪群と同様に築城時から存在したと思われる。その後は、柱間六尺五寸（約197cm）の構築物（建物か遮蔽物かは不明）の柱を抜き取り、箱薬研状の溝（SD-50）を人為的に埋め戻し、二層（2-a層、2-b層に明確な時期差は無い）の整地土層によって現状に近い状況になっている。この二層中より16世紀中葉から後後にかけての陶磁器が比較的多く出土していることから、17世紀以降に大規模な整地を伴う改修が想定できる。また、西城にかかる記録はないが、18世紀半ば以降の遺物が確認されていないことから、このころから主要な曲輪としての機能はなくなつたものと推測される。

中城は、土塁が残る曲輪南辺に虎口が見られ、北へ行くほど地形は緩やかに低くなっている。現在、曲輪北辺に見られる通路は戦後に作られたもので、城として使用していた時期にはなかつたものである。南側に隣接する古本丸と標高差は大きいが、築城時の普請に関しては本丸、古本丸と同様に地山関東ローム層もしくはその下層の岩盤層面まで掘削し平坦面を整備し使用していたことがわかった。調査した最下層では、地山を掘りこむビット群が検出され、何らかの施設の存在が推測される。また2回の整地改修が見込まれ、1回目の整地の時期は不明だが、2回目は1回目の整地層直上に慶長期の瓦片が出土しており、17世紀前半以降が想定できる。

この2回目の整地土層上の最終使用面には、平らな川原石を使用した礎石や曲輪内平坦面の中央付近でわずかな段差が見られ、内部を区画していたことがわかった。これらにより、北城も改修を繰り返しながら廃城まで、長期に使用されていることが推測された。

中城は位置的に、古本丸からは見通しの良い位置にある。しかし中城からは、北城や大野曲輪、城の主要な出入り口の1つである十二曲り口、搦め手と考えられている桜門、北側から西城へ向かう通路をすべて見通せる場所にある。そのため中城は、主郭である古本丸、本丸という島状の高まりの北側を守るだけではなく、城内通路の要衝にもなっていることがわかった。

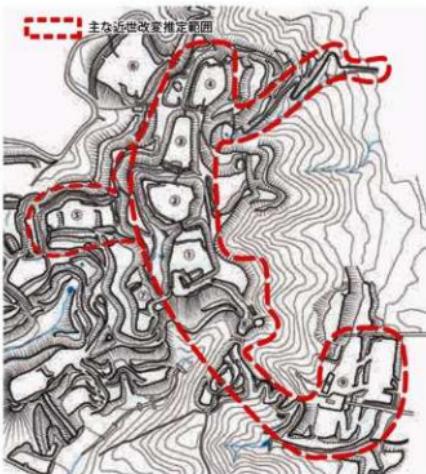
北城は、調査した他の曲輪のように上に積み上げる形の整地盛土の繰り返しではなく、17世紀前半以降に地山関東ローム層まで掘削し大規模に改修整地されている。そのため地山面の観察では、それより古い時期の痕跡はピットが数基確認できたのみで、中世に至る古い時期の使用状況は不明である。整地土層が二層あることから2回の改修が見込まれる。西側から北側へ続く土塁は、北側土塁（トレント1）の土層観察により大規模な改修が行われた17世紀前半以降に築かれた可能性が高い。この北側の土塁には平坦面が見られ、那珂川や川向こうの興野地区が望めることからも烏山城の北端を守る要所であったことが容易にわかる。

鉄張団調査からも、曲輪北側の大堀切を越えて侵入すると、北城と大野曲輪の間にある袋小路に入ってしまうような構造が見られ、東側は腰曲輪群が複雑に入り組んでいる。その間の北東側は、城下へ北端からの出入口である瀧田口外側の水路に繋がる谷のため、急峻な崖となつており、自然地形をも巧みに利用し、とても堅固である。

17世紀前半以降に大規模な改修がされていたが、中世に至る使用痕跡は確認できた。詳細は不明だが、表土中からの出土遺物などから廃城になるまで使用されていたことがわかった。

釜ヶ入口では、周辺にある腰曲輪群や堅堀などの曲輪状況や『烏山八雲神社誌』の伝承などをもとに中世の大手口の確認を目指したが確認できなかった。出土遺物もなく、トレントを設置した通路のやや広がった平坦部分は地山関東ローム層まで掘削し、その上に砂利や粘質土を層状に積み上げて構築されており、改修は見られなかった。

これらの成果をもとに城全体をみると、烏山城跡の北側で発掘調査を実施した主要部分を含む城域（意見具申予定地）は、全城がほぼ中世に作られた山城であることが想定できた。それぞれの曲輪をトレント調査により一部掘り下げた結果、築城は伝承の約600年前まで遡ることは現状では不明だが、少なくとも15世紀後半の中世段階までは、遡るこ



第106図 近世に改変した推定範囲
(細かい破線部分は、段階的に使用しなくなる可能性有。)

とができた。

築城は、古本丸では地山岩盤層、本丸では地山関東ローム層までと言ったように、丘陵頂部を一定の高さまで掘削整地し、平坦な面を造成した後に、掘立柱建物や柵列、堀のような防御施設を構築していたことがわかった。出土した陶磁器などの遺物の検討から、鳥山城は継続的に使用されており、掘立柱建物から礎石建物へなど施設の変遷を重ね、規模の大小はあるが多くの改修を受けながら、明治を迎えるまでこの地域の中心であった。

しかし、広い城域内でも使用頻度には差があり、万治2（1659）年に三の丸が東側山麓につくられ、新たに七曲口が整備されたことに伴い、山城部分に主体があった中世から山麓の居館に移った近世にかけての城の変遷を見る事ができた。山城部分は本丸、古本丸、中城、北城など、東側に面した部分を改修しながら明治の廃城まで継続使用し、西城、大野曲輪、釜ヶ入口など西側については、中世から近世への改修後、段階的に放棄していく事が考えられた。結果的に東側に近世の部分が見られ、西側は中世の部分が多く現在に残っている（第106図）。また、城跡の保存状況も良く、東日本では少ない石垣を有する城跡でもあり、本丸正門付近や吹貫門脇、三の丸など石垣の様相も一様ではなく、部分的な改修など時代の変遷を追う事ができた。

これらの結果から鳥山城跡は、伝承の600年前（15世紀前半）までは遡れなかったが、少なくとも15世紀後半の中世から近世、明治の廃城まで、改修等を経ながら、継続して使用された城郭である。使用頻度や残存状況から、中世の城郭である部分と近世の城郭である部分を両方見ることができ、その変遷を追う事もできる貴重な城郭である事がわかった。



文化庁調査官による視察

東日本大震災による被災状況



常盤曲輪東斜面石垣移動状況（東から）



吹貫門脇石垣の崩落（東から）

第6章 烏山城跡の歴史的評価

烏山城跡の実態を把握するために、本丸、古本丸、北城、西城などの発掘調査を行うとともに、柵張研究、絵画資料の分析、文献史料の調査、さらには山上と山下の歴史地理的研究等を進めてきた。それらの調査により、烏山城跡の具体的な成立年代、山上に展開する城館群とともに、山下の宿や根小屋などの空間構成についてもその成立・範囲などに一定の成果を得ることができた。

1 烏山城の成立

烏山城の成立については、江田郁夫氏の研究に詳しい。江田氏は、15世紀後半の享徳の乱中に那須氏の有力庶子家である五郎家が上那須福原から烏山城に本拠を移したことに始まると考えた。なぜなら、14世紀後半以降、分裂をつづけていた那須氏の太郎家と五郎家はそれぞれ上那須氏、下那須氏と通称され、太郎家は上那須、五郎家は下那須（那須莊南部）を本拠に領域支配を展開し、それぞれに地域権力化をすすめていく背景があった。

本拠を烏山に移すとともに並行して、あらたに下那須に盤踞する領主層を家臣團に組み込み、移転前の家臣團と合わせるかたちで下那須家中が成立した。そして永正13年（1516）には、烏山に拠点を持つ下那須の五郎家が、上・下那須の統一を実現した。

そこで、山上の城館群である古本丸、本丸、西城の発掘調査で得られた出土遺物をみてみよう。いずれの曲輪からも出土量の多寡はあったが、戦国時代から江戸時代の陶磁器が確認された。

戦国時代の出土陶磁器は、古いもので15世紀後半の白磁や染付製の碗・皿、瀬戸美濃製の擂鉢などで、主体となるのは16世紀中葉を中心とする時期の染付碗・皿、瀬戸美濃製の碗・擂鉢などであった。この出土陶磁器の年代は、下那須氏が烏山城を築いたとされる江田氏の見解と符合するものであり、烏山城の成立は、15世紀後半と考えてまちがいないであろう。

2 烏山城の空間構成について

（1）山上にひろがる城館

山上の城館群は、戦国時代の顔と江戸時代の顔がある。

まず戦国時代の曲輪についてみると、古本丸から、かわらけ溜まりが検出されていることから領主の居住空間ないしは儀礼空間であった可能性が高く戦国時代は古本丸が中心曲輪であった。

本丸は、江戸時代の土盛造成が著しく戦国時代の状況はよくわからないが、古本丸に隣接する曲輪であることから、古本丸同様に領主もしくは一族の居住空間ないしは儀礼空間として使用されたものと考えられる。

西城からは多くの建物遺構や出土遺物が確認された。出土遺物をみると、染付碗・皿を中心と貿易陶磁が占める割合が高く、なかには青磁盤のような骨董的な陶磁器もあることなどから、領主につながる一族の生活空間と考えたい。

その他の中城、北城など比較的大きな曲輪は領主一族ないしは重臣の居住空間ではなかったろうか。

そしてこれらの主要な曲輪の周囲には、小さな平場が点在しており、領主や重臣の陪臣たちの居住空間であったと考えたい。

茂木孝行が以前、「西城を中心とする生活空間と本丸間を遮断して根小屋式縄張的な居館と詰の城の関係に例えられる構造」という主張を行っている。このような可能性も留保したい。

この山上の城館群は、15世紀後半には成立し、戦国時代末までその機能を継続していた。そして、宿支配の強化のためなどで、しだいに家臣を中心に山下に住まいを移していったと思われる。本報告のなかで荒川善夫が言うように、山下にも領主の住まいがあった可能性も十分考えられることである。

烏山城は、江戸時代になると様相を一変させる。江戸時代の烏山城の様子を知る手掛かりとしては、『赤坂町祭礼記録』を始めとした記録類、さまざまな城絵図などを挙げることができる。本報告でも船木明夫により城絵図の詳細な分析が行われている。

戦国時代から江戸時代移行期には、城主の居館および儀礼空間は、引き続き山上の城館が使用されていた。ただ、古本丸から本丸にその中心は移った。

正保年間（1645～1648）に作成された「正保城絵図」には、山上の本丸に御殿が描かれ、本丸および本丸東側の郭には築地塀や城門、さらには石垣が描かれている。

現存する石垣をみると二種類の形態が確認された。古い積み方は、あまり加工がされていない石材を使い、その間に間詰石を詰めているものである。新しいものは加工された石材を使い、横目地がとおる積み方で江戸時代中期頃のものであった。古い積み方は織豊期によくみられるものに類似するが、その時期まで遡るものではなく、江戸時代初期のものであろう。

本丸の発掘調査の成果をみると、日用品を主体とする陶磁器がわずかに確認されたが、注目したいのは瓦の出土であった。その形態から17世紀前半のものと考えられた。正保城絵図の御殿の屋根の描写をみると大半が板葺きのように見える。しかし、門の屋根は点描され、瓦を表現しているようにも見える。

このようなことから本丸御殿の造営は、古くは天正18年（1590）以降の織豊期の可能性も考えられなくもないが、天正期から文禄期の城主成田氏の動向は出入りが激しい状況であった。そのような点に加えて、瓦などの出土遺物の時期を考えると、その造営は慶長期以降の江戸時代初頭のことであったろう。

その後、烏山城が大きく変化するのは、万治2年（1659）に三の丸が造営されたことである。造営後に城主の住居や政府機能は本丸から三の丸に移ったことは、記録などからまちがいない。ちなみに三の丸の石垣は、切石を用いて隙間のない積み方であった。

江戸時代中期以降に作られた城絵図にも常に山上の本丸御殿は描かれている。幕末の安政6年（1859）には、藩主が供拵えにて本丸御殿に出向き、「御書院」に着座したとの記録がある。このような記録から山上の本丸は、儀礼空間として江戸時代を通して使用され続けたのではないかだろうか。

山上の城館群のなかで少し気なるのが西城の出土遺物である。西城からは、志野、織部、初期伊万里など17世紀前半から中葉の高級陶器が検出された。戦国時代以来、江戸時代に至つてもその重要性が継続されるのである。

（2）山下の城下町

戦国時代の城下は、烏山宿と酒主之衆とよばれる那須氏家臣団の住む根小屋によって構成されていたと考えた。

烏山宿は、南北に延びる奥州街道と那珂川が接近する位置にあり、古くから交通の要衝地で

あった。宿の成立において「連釈之大事」が想定された。「連釈之大事」の宿立は、その事例の多くが中世前期のことであることから、烏山宿の成立も那須氏の入る15世紀後半以前であることはまちがいない。

一般的に戦国城館では、根小屋や家臣集落の規模や集住の実態については不明な点が多い。また、城主の家臣団の多くは在郷に居を構えていたとされる。そのようななかで、天文15年（1546）「那須政資法要香銭注文写」は、少なくとも16世紀中葉には那須氏の家臣団である酒主之衆の城下集住を証明するものといえる。

南北に延びる烏山宿と東西道が交差する場所は「中町十文字」と呼称されてきた。この十文字には、永禄3年（1560）に那須資胤により上那須大桶より牛頭天王が勧請されたのである。

この勧請の7年後には、佐竹氏により烏山宿・根小屋が打ち散らされるわけであるが、その後は「新宿」がつくられるなど、那須氏の積極的な宿への介入があり、宿は拡大していったと推測できる。往古の追手門の位置、山上の城館への登城口である「釜ヶ入口」との位置関係、那須氏の宿への積極的介入などを勘案すると根小屋は「中町十文字」の西側辺りが妥当であろう。

そして、戦国時代の城下は、南の清水川、北の久保地名のある谷地形を外郭線として囲み、時代とともに一元的に支配が強化されていったものと思われる。

江戸時代の城下町は、「正保城絵図」と延宝9年（1681）頃「烏山城内家中屋敷図」、寛政2年（1790）の町絵図などにより、ほぼその実態を把握することができる。正保城絵図では、ほぼ武家地の街路および屋敷割りが完成している。三の丸御殿がつくられた万治2年（1659）から16年後の延宝3年（1675）には、城主堀氏により歴代城主の菩提寺であった泉溪寺・天性寺・能泉寺が移転され、武家地の城内と城外が厳格に分離された。那須氏入部後に作成された「烏山城内家中屋敷図」は、堀氏の城内拡張が反映された屋敷図であり、以後幕末に至るまでその屋敷割は踏襲された。

宿を中心とする城外は、寛政の町絵図などに詳しい。城内・城外ともにその地割は、現在の町割に踏襲されている。

3 烏山城と「山あげ祭」

「那須烏山市で思い浮かぶものは何ですか」と尋ねたとき、栃木県内の方や祭り好きの方ならば、「山あげ祭」を挙げるのではないだろうか。そして、城好きの方ならば「烏山城」と返してくれるはずである。「山あげ祭」と「烏山城」を合わせて挙げてくれる方は少ない。しかし、この二つは、現在の烏山の町が成立し、発展するなかで切っても切れない関係であった。そのことから烏山城をより深く把握するうえで、「山あげ祭」との関係を考えることはとても重要なことなのである。従来、祭り研究と城下町研究を同一に考える研究はほとんどなかったのではないかだろうか。近年刊行された渡辺康代氏の研究「近世城下町の付祭りの変化」は、その関係を深く掘り起こしたものであった。

「烏山の山あげ行事」は、昭和54年（1979）に国の重要無形民俗文化財に指定された。そして、平成28年（2016）には「山・鉾・屋台行事」の一つとしてユネスコ無形文化遺産に記載されたことでも知られている。江戸時代中ごろに、紙で作られた「大山」が立てられることから、いまでは「山あげ祭」と呼ばれている。

「付け祭り」とは、城主などの支配者が中心となって行われる神事に対して、領民が担い手となって行った祭りを指している。渡辺氏は、町の総鎮守が祀られてきた場所と領民が行って

	1550年	1600年	1650年	1700年	1750年	1800年	1850年
祇園守の祭神			牛頭天王の勧請(1560年)				
付祭りの時期	八月		6月19日～23日(1667年～)		6月20～23日(1797年)		
付祭りの周期	毎年		毎年(1667年～)				
付祭りの内容	御輿・相撲・獅子・神楽	相撲・大鼓踊・足利・花道・參詣・鳥舞衣武者毛織+芝居(1655～21年)～(1673～21年)	佐藤芝居屋台に一本化される(1711年～)				
付祭りの場所	城下町の通り、境内:中町十文字の天王社前の枝松席		1701年～1745年(大手・別山など)中町 1667年～1705年(屋根つきの屋台)1726年再び社務所の屋内へ 境内・寺内・城内・町内(1727年～)		「若者組いじよ方社前山口の西原(1755年)」 「若者組いじよ方社前山口の西原(1755年)」 「若者組いじよ方社前山口の西原(1755年)」 「若者組いじよ方社前山口の西原(1755年)」		
付祭りの担い手	新年寄奉		城下町の町人(1655年)1733年～城下町町人～若者組 若者・役者・三絃師陣・明い(全て町外者)				
付祭りの城内入り		有(1655年～)		1727年～神岡城内入り、各町の屋台は入らず			
付祭りの衣装	不明	1667年 浴衣・蒸帷子		1673年に作られた頃の儀式性を完璧(1715年) 特有の分身子・腰帶(1681) 前半羽根旗(1707)	浴衣・芋籠		
帽子・音楽	不明		太鼓背負・笛・三味線・笙(1695年～) 笛(1667)	笛南・三味線・笙(1695年～)			

図表① 図表②

第107図 烏山城下町における付け祭りの推移(渡辺康代 2021から転載)

きた付け祭りの内容変化から、城下町の構造や人口、付け祭りの担い手となった城下町町人の生活文化を読み解いたのである。第104図は、渡辺氏が烏山城下町における付け祭りの推移を表したものである。

その始まりは永禄3年(1560)に那須資胤による牛頭天王の勧請であった。

そして、牛頭天王が祀られてきた場所と領民が行ってきた付祭りの内容変化から、城下町の構造や人口規模、付祭りの担い手となった城下町町人の生活文化とその変容を端的に表した図である。たとえば戦国時代末から江戸時代前半に烏山城が山上から山下に日常生活の場を移して行くことに呼応し、山下の城下町は武士の住まいの城内と領民の生活の場である城外が厳格に分離されて行くようになる。同じころ、那須氏や織田氏の旧家臣たちが商人となり中町十文字周辺に集住し、祭りの担い手となっていた。そこには、戦国時代の身分の未分化も明確に分離されたことが認められる。

このように渡辺康代氏の研究は、未だ不明な点が多い中近世移行期から近世への城下町構造および人的構成の変化を捉える際に「山あげ祭」は有効な指標であることを示すものであった。

4 継承される歴史空間と文化財の保護

烏山は、明治時代以降の火災により古い建物は残っていないが、城下町時代の空間を想い描いてみると、城内の武家地、宿、寺社地などが形を変えながらもいまも生きている。

城主の住まいであった三の丸は神社となり、武家地には住宅地や役所・学校などが立地し、一乗院を中心とする真言宗寺院が集中していた場所は学校や公民館などの公共用地として利用されている。宿の町人町は、明治時代以降も中心商店街として生き続けてきた。ただ、1960年代以降の急激な経済成長のなかで、中心商店街は以前のような賑わいはない。

このような状況の変化は、烏山に限ったことではない。とりわけ、1960年代以降の自動車社会の発達は、わずかの間に、狭い道は大きくなり、自動車社会に見合った区画整理事業のなかで江戸時代以来の城下町をすっかり失った都市もある。しかし、烏山の城下町は明治以来の度重なる火災で、古い家屋などは失われながらも驚くほど城下町の痕跡をそこかしこに残しているのである。ただ、住民の多くは、狭い路地や直角に曲がる道が城下町以来の道だと認識しながらも不便に感じているであろう。



牛頭天王旧社地（御仮屋組立て風景 2021年）

山上の「烏山城跡」は、戦後の拡大造林政策の一端を担い、杉を中心とした人工林に被われている。本来、本丸の樹木は伐採され麓から御殿を望むことができたはずだが、樹木のない烏山城を想像する方は少ない。

いわんや「山あげ祭」の御旅所が、なぜ八雲八幡通りと山あげ通りの交差点にあるのか、その理由を知らないで祭りに参加する方も多いのではないだろうか。

このような文化財の現状が嘆かわしいというのではない。ただ、戦国時代以来、烏山の歴史のなかで、これらの文化財が重要な役割を担ってきたことはまちがいないことである。それゆえ、今一度、これらの文化財を地域のまとまりの指標の一つとして考えてよいのではないだろうか。

今後、文化財の保護と活用のための具体的な検討が進められるであろう。出すことをいうようだが、その内容は地域住民にとって持続可能なこと、地域住民以外の多くの人に必要だと思われるすることが重要だと思う。

「地域住民にとって持続可能な内容」であることは、たとえば人口が減っても維持できるような「山あげ祭」であり、予算が減少しても荒廃して行かない史跡整備や維持ができることがあるべきだと思う。

そして、「地域住民以外の多くの人に必要だ」と思われることは、地域外の人びとが繰り返し訪れるような場の創生ではないか。それは、ひいては地域社会の活性化につながることではないだろうか。

引用・参考文献

- 市村高男1995「戦国期下野那須氏権力の一断面」『中央学院大学商経論叢』第10巻第1号
江田都夫2013「戦国大名那須氏の成立」江田都夫・築瀬大輔編「北関東の戦国時代」
渡辺康代2020「近世城下町の付祭りの変化 伊賀国上野と下野国カラスマを事例に」海青社

(15)

「相循録」は、音谷八郎右衛門の手記である。相循とは自らを慰撫する意味で、音谷が過去を追憶し、憤慨・悔恨等のやるせ無さを記録し、相循録と名付けたものであると言われている。記録は十冊余に及ぶが、整理されたのは、二冊までである。

(16) 賴德仕法でいう「分度の確立」とは、十か年の収納を平均して一年の収入の限度とする。また、出方も十か年を平均して一年の支出の限度とする。支出の限度内（分度内）から借財の利息を払う。開田によつて収納米を増やし、差額（分度外）を借財の年賦返済と開発資金に充てるといふのである。

(17) 日光山御貸付所は、日光奉行所内にあつて、幕府の公金貸付を扱つていた。日光山は、早くから窮乏していたため、幕府は日光山に対してたびたび救済金を手付していた。救済金は諸大名への利付貸付金となり、その利潤はすべて日光山の援助にあてられていた。

おわりに

「近世の鳥山」を、城主の移り変わりに添つて、ほぼ編年順に概観してきたが、前半は城主の交替が頻繁に行われ、享保十年（一七二五年）、大久保常春が襲封すると、以後明治に至るまでの百四十年余にわたる近世の後半は大久保氏の子孫が代々この地を治めてきた。

織田・成田・松下・堀氏と続き、板倉氏に至つてはじめて譜代大名が入封した。次の那須氏を除き、板倉氏・水井氏・福垣氏は、ともに幕府の要職を歴任した。城主の交替が頻繁であったのは、幕府の中枢に参画する諸代大名が江戸周辺に配置されると、徐々にその外縁部に当たる下野国もその役割の一端を担うことになつたためとも思われる。また、成田氏と那須氏が、後継問題で改易となつたことも、頻繁な城主交替の要因の一つと思われる。

近世後半の大久保氏代で特記すべきことは、農村の貧困と藩財政の逼迫であろう。領内村々の多くが煙作地帯であり、そのうえ、烟方米納の重税と度重なる天災・飢餓が農村の荒廃をもたらし、藩の取納高を極端に減少させたといえる。代々の城主（藩主）のもと、領民は辛苦に耐えながら、この地を嘗々と受け継いできたのである。

この拙稿を書き進めるにあたり、「鳥山城跡確認調査概報」（那須鳥山市埋蔵文化財報告第4集）に掲載されている荒川善夫氏の研究成果、「下野鳥山城主（藩主）の変遷」に多くの示唆を頂いた。謝意を表しておわりとする。

(1) 「蒲生家支配帳（写）」の余白に、「帝国図書館ヨリ借入、筆耕ニ附ス 大正四年十一月」とある。

(2) 「近世大名（那須氏の成立）」（那須与一著、鶴林閣発行）に、この寄進状の写真が掲載されている。

(3) 寄進状は「天性寺文書」の一つで、「那須鳥山市の文化財」（那須鳥山市教育委員会）に、この文書の写真が掲載されている。

(4) 検地の際、一筆ごとに地番・字・名請人・面積・面積・四至などを手帳に記載し、それを抄書したものが検地帳である。検地帳作成の基礎となつた。

(5) 「享保の町絵図」として、「那須鳥山市の文化財」に原本が掲載されている。また、「町史」の見返し（動き、遊びとも）は、この絵図の写真である。

(6) 宽文十二年（一六三二年）三月三日付の「野州興野村子之年免相定之事」（阿相家文書）は、重矩が創始した鳥山領初めての年貢割付状である。写真が「町史」に掲載されている。

(7) 下野国上興野村の「京門御成帳」（阿相家文書）は、延宝三年二月十一日とあり、重矩が鳥山領で初めて作成させたものである。写真が「町史」に掲載されている。

(8) 「近世大名（那須氏の成立）」に、これらの寄進状の写真が掲載されている。

(9) 「那須鳥山市の文化財」に、この天蓋の写真が掲載されている。
（10）烟方水納（金納）の場合、玄米・石・五斗に木貫文の割で錢納することが関東烟方水納の決まりであったから、その額はいつも一定していた。

(11) 烟作の年貢を米で納めるとは、煙の収穫物を売った金で米を買つて納めるか、年貢に相当する米が買えるだけの現金で納めるかである。米価が上昇すれば重税となる。

(12) 「定代石」のこと。米の代わりに金で納める石代納のときの換算米価は、一定地域における米穀市場の平均相場に準じて決められた。

(13) 福垣氏の城付領村は、那須氏が復帰したとき以来の米納二十六ヶ村と、永納の村二十八ヶ村の計五十四ヶ村であつたことがわかる。

(14) 「徳川実記」（有斐閣殿御実記附録巻六）に、「御狩のありさまをもよおさんなりしに、佐渡守常春が練せし者故、御鹿のこゝにもあづかり。いつも放鹿の御供にし

た。九月二十二日、若松城が落城したので、翌十月、帰藩した。この戦役には、農民が軍夫として徴用されている。しかも、その時期がいずれも農繁期であったことは、農村にとって大きな打撃となつた（『町史』）。大久保忠順は烏山藩知事に任命された。

幕末から明治にかけて、米価は年々高騰し、安政元年（一八五四）には一両に付九斗七升であつたものが、明治二年正月には一両に付一斗二升にまで跳ね上がつた（『町史』）。畠地の石高を現物の米で納める畠作地帯の農民は、ますます重税に苦しめられることになつた。

明治二年十月、畠方水納二十六カ村の名主たちは協議し、畠方水納への嘆願書を藩の民政局へ差し出した。同時に、村々一同は、堅い結束のもとに行動を共にする「規定一札」を取り交わした。藩は、「聞き届け難」として、嘆願書を差し戻した。そこで、新政府に嘆願して初志の貫徹を期す以外にない決議し、代表七名が上京して嘆願書を大蔵省税務掛へ箱詰した。七人の家族の嘆き、狼狽ぶりを見かねた村方は協議し、使者を立てて七人を帰村させた。

同年十二月、改めて各村一名の総代を選び、再度上京して嘆願書を民部省へ差し出しあが、取り上げられなかつた。統いて彈正台に差し出しあが、こちらも不成功に終わつた。

明治三年四月七日、政府に訴願するため、農民一同は、大挙して東京へ繰り出すという触れを信じて、宇都宮めざして押し出した。『滝田家文書』によれば、その数六百二十四人という。このとき、農民は鬼怒川

渡船場で取り押さえられ、帰村させられた。

同年六月、烏山藩奉行所は二十六カ村の名主らを一乗院に呼び出し、「時相場より一斗五升安、百姓取り直しになる間五か年の御救」の条件で農民側と示談が成立した。同時に、烏山藩役人は、在京の總代を召し捕りに上京した。大沢村政右衛門は、全員が召し捕られては、この騒動の本意を後世に伝えることが出来ないと考え、向田村倉蔵に書類をまとめてさせて止宿を立ち退かせた。倉蔵の逃走後の記録は皆無で、その行方生死のほどは不明であるが、宮原八幡宮境内の「圃租法變更記念碑」に、土屋倉蔵逃走中保護者として、三名の名前が刻まれている。

明治四年六月、判決があり、政右衛門・上境村政七・下境村惣吉の3名は准流七か年の刑、他の者は百たたきの刑を受け放免となつた。

この騒動の顛末は、板橋・土屋兩家に伝存されている「圃租法變更記念碑実記」（板橋政右衛門口述、宮原八幡宮雜掌大谷津房筆記）に詳述されている。

板倉氏の代に、最初の訴願を提出して以来、明治初年に至るまでの約一百九十年間にわたる長い訴願運動の結果は、農民に大きな犠牲をもたらしたもの、畠方水納の悲願は遂に達せられず、明治六年の地租改正令の実施まで米納が続いた。

明治五年（一八七二）二月、烏山城「三の丸」大雪のため崩壊する。

明治六年十二月、烏山城「二の丸」焼失する（『年表』「烏山町誌」）。烏山城は、二の丸・三の丸とともに、明治六年一月の廢城令（全国城郭存廃ノ処分並兵營地等選定方）が発せられる前後に、建物自体は消滅した。

嘉永三年（一八五〇）三月、仕法金の残金は金次郎の斡旋により、「日光山御貸附所」から烏山藩への融資のかたちに切り替えられた。報徳仕法は、健全な生育を遂げずに、仕法金の返済のみが長く残ることになつた。嘉永四年一月九日、賀谷、仕法金の返済を懸念しつつ没した。

文久三年（一八六三）六月、藩は再三にわたり日光山御貸付所からの強い督促を受け、仕法関係の借金残額をようやく返済した。

七代 佐渡守忠美 忠保三男、嫡子となる。

嘉永元年（一八四八）十月八日、忠保病死により忠美家督を繼ぐ（大保久家系譜）。

嘉永年間は、六代忠保の死、七代忠美の家督相続、大殿忠成の死などそのため出費が嵩み、藩の財政はますます悪化した。藩は、よいよ財政の建て直しに迫られ、安政の初年から藩政改革に乗り出した（『町史』）。安政二年（一八五五）七月、藩の収納増を図るため土地改めを行い、領内すみずみまで年貢の対象地とした。從来、耕作面積を基準に割り付けていた年貢を、手余り荒れ地は帰発するまでの間、百姓持ち林・野山は面積に応じてそれぞれ水納を命じている（『町史』「阿相家文書」）。また、安政二年から同六年までの五年間、運上金細目を制定して公布した。米一俵の取引には米五合、大工弟子三百文など、七十品目余にわたって徵取した（『町史』「石塚家文書」）。

八代 佐渡守忠順 忠美嫡子

元治元年（一八六四）八月二十日、忠美没し、忠順家督を繼ぐ（大久保家系譜）。

慶應二年（一八六六）八月は、大風雨のため収穫前の稻作に大きな打撃を受け、米価は日増しに高騰した。藩は、翌年四月に出穀留めを発令した。ところが、穀屋四軒がその禁を破り、他領へ米を売り渡したことが発覚して騒ぎとなつた。

八月二十一日の曉方と同日夜の二回にわたり、東郷の農民が大挙して押し寄せ、鍛冶町木戸を破り、元町の平野屋を打ち壊すに至り、取り締まりに勤務した役人により鎮圧されるという騒動であった。二十三日朝、役人が引きあげるまでの二昼夜、町民は恐怖のうちに過ごした。騒ぎの原因を作った四人の穀屋は、数日後の営業停止処分を受けた（『町文化財資料』第二集所収「閑家文書」「吉成家文書」）。この騒動は、畠方米納に苦しんできた、東郷農民の「畠方米納訴願」と底流を同じくするものである。

慶應三年（一八六七）十月十四日、將軍慶喜が大政を奉還し、十二月九日には、王政復古の大号令が発せられた。慶應四年（九月八日明治と改元）一月三日、鳥羽・伏見で幕軍と薩・長両軍が衝突し、戊辰戦争となる。このとき、烏山藩は、下野国内の諸藩の情勢から、勤王に踏み切つたものと思われる。同年三月ごろ、宇都宮城をめぐつて会津藩兵と倒幕軍の攻防があつた。四月十八日、烏山藩は、總督府參謀香川敬三の命により、隊長大塚孫八郎が藩兵二小隊を率いて宇都宮へ出兵し、宇都宮藩兵百余人とともに、築瀬・平松（宇都宮市）の守備についている。

翌十九日、倒幕軍敗退し、宇都宮城が落城したので、烏山藩兵は烏山へ帰藩した。藩兵に死傷者はなかつた（『町史』・『栃木県史附録鳥山藩史』）。六月二十七日、隊長若林昌長は、藩兵二小隊・大砲二門・輜重若干など、總員百五十餘人を率いて、越堀駅（那須塩原市）の警備にあつた。次いで、八月二十一日、同隊は、白川口（福島県白河市）の警備に回つ

が、勤務の余暇に月二日から五日、奉仕を申し出た（『正伝』）。

天保九年正月、藩は、仕法実施につき、家中の者への舞応禁止、酒宴、鳴り物・遊芸の停止、農民の精勤、家中・農民一体となっての開発の督励等の触を出した（『全集二十四』）。

順調に推移するかに見えた報徳仕法であつたが、天保九年も不作となり、余剩米が少なく、藩財政を圧迫した。分度外の余剩米は借財の年賦返済と開発資金に充てることが金次郎との約束であったが、分度は未確定となり、仕法の停滞が現れはじめた。文政八年（一八二五）からの家計中への面扶持、天保四年（一八三三）の嚴法再生実施に加えての仕法の推進は、藩士の生活をますます窮屈にした。天保九年八月頃には、江戸詰の藩士から「領民に厚く武士に薄い仕法だ」という不満が強くなり、仕法推進派の国元藩士や仕法役所の役人らとの和が崩れてきた。

同年十二月十七日、菅谷は、病氣を理由に隠居願を提出すると、同二十五日、隠居諱を命ぜられた。一年前に円応を病氣で失い、ここで、菅谷が第一線から姿を消したことは、仕法推進派にとって大きな打撃であつた。

天保十年（一八三九）十二月七日、江戸詰家老大石總兵衛と用人大塚孫太夫は、藩重役会議の席上、突然、仕法停止と江戸回米を申し入れてきた。家老大久保次郎左衛門は、藩内の固い結束をもつて仕法を続行すべきであると反論したため、重役会議は紛糾した。

翌八日、再度重役会議を開き、大石は、仕法停止と藩の御勝手領内村役人一任とする藩主直書を提示した。大久保は、「御上の重き御下知書とは申せ、金次郎への指導謝絶は御不実千方」と論難し、退席した。九日、大石らは、家中全員を召集して説得に当たるも、地方役人である代官らは、折角領中に精農の気が漲りはじめたのに、藩主の直書と言えども「御たたた」。

非道の儀」と強力に反駁した。十一日、主だった村役人十二人を年寄若林助太夫宅へ呼び寄せ、説得したが全員が反対を表明した。十三日、村役人全員を招集しての説得も、「桜町様からの莫大な恩義の万分为一も報いていない」と発言する者があり、全員同調して反対した。

十四日に至り、村役人らは町宿で会合を持ち、仕法続行を条件にお勝手運営を引き受けたとした。その際、藩は領内村々と「規定一札」を取り交わしている。翌十五日、大石ら停止派は、急に強圧的になり、帰発方役所を廃止し、係役人を御役御免とした。仕法は事实上停止となつた（十二月七日からの経緯は、『全集二十四』所収『鳥山御趣法替風聞記』による）。

天保十一年（一八四〇）十月に至り、村役人による御勝手運営は、行き詰まり、仕法再開の動きが出てきた。大石らは、仕法停止強行の失敗を認めず、むしろ、仕法再開の気運を恐れていた。同年十二月十一日、藩は、菅谷に領外追放を申し渡した。

天保十三年（一八四二）十月、家老大久保は、用人久野監物を伴つて出府し、復法工作に入った。十二月二十五日、藩は金次郎の要請を受け、菅谷を家老に復帰させ、仕法再開の任を命じた。翌十四年（一八四三）一月十九日、菅谷は、仕法再開依頼の藩主直書を金次郎に渡して陳謝した。同年二月十二日、大石らは御役御免を申し渡され、江戸詰めの仕法反対派は一掃された。

人事を刷新して仕法は再開されたが、導入当初に見られたような民意の沸騰は期待できなかつた。

発業以来十か年で二百町歩余の帰発田が生まれたが、仕法金の返済残高千八百九十六両余は、藩の勝手方へ繰り入れて、仕法は自然停止となつた。

では、凡二、三百人)が策治町木戸を押し破り、井筒屋に乱入してさんざんに打ち壊した。翌十八日にも押し寄せ、井筒屋の邸宅に乱入し、家財道具などを残らず打ち壊した。当時、井筒屋の西隣に住んでいた乙近同記に、「隣家の者老若男女おしなべて生きたる心なかりけり」とある。この騒動によって、首謀者四人が処罰されたが、農民は年貢減免と、目明かし三河屋忠兵衛追放の要求を勝ち取った(『町文化財資料』第二集所収「下野烏山領騒動記」・「附錄」・「若林永軒日記」及び「町史」)。

報徳仕法の導入は、烏山藩政史上特筆すべき施策であった。天保七年(一八三六)は、天保四年(一八三三)を上回る凶作となつた。この年の藩の年貢収納高千五百三十三石余は、過去十年間の年平均の収納高三千二百六十二石余の半分にも満たなかつた(『二宮尊徳全集第二十四巻』以下、『全集二十四』と略)。

米価は高騰し続け、小規模農家や小作農の多い領内の農民は、その日の夫食にものごと欠く有様であった。このような領内の窮状を目當たりにして、天性寺の円応和尚は、同年九月三日、宇津家領桜町(真岡市)の復興仕法で成果を上げた二宮金次郎を訪ねて復興仕法の教えを受け、家老菅谷八郎右衛門に報告した。九月二十二日、菅谷は、円応を同伴して金次郎に会い、お救い米金の借用を依頼するとともに、荒地開発(帰発)・人別増・村柄取直し・藩財政再建等についての指導を懇願した。九月二十七日、菅谷は、江戸藩現に赴き、江戸詰め重役に報徳仕法導入の必要性を説くとともに、藩主忠保にこのことを申した。

十一月二日、菅谷は、藩主の窮民救済依頼直書を金次郎に手渡した。烏山における報徳仕法は、荒地の復旧、藩財政建て直し以前に、窮民救

濟が急務であったから、給食を要するすべての米金を、桜町から借用することにした。十一月二十五日、桜町から、米五十俵が送られてきた。以後続けて送達された。同年十二月一日(翌年五月五日)、領内困窮者をお救い小屋(間口三間×奥行二間)十二棟と天性寺本堂・庫裡に収容して粥の給食を実施した。炊出しを受けた者、実人數にして八百七十九人、述べ十一万二千五百三十九人といわれ、領内から一人の餓死者も出さなかつたという(『全集二十四』・『二宮金次郎正伝』以下、『正伝』と略)。

お救い小屋の経費は、米二百八十八俵三斗余、稗四十九石七斗余、雜費を含めて金にして四百八十七両一分余であつた。困窮者には炊き出しを実施する一方、労働可能な中難民を救済するための帰発仕法を実施した。そのための資金三百両も桜町から貸与された。この事業により、初年度に二十四町歩余の開田に成功した。

天保八年(一八三七)一月七日より同二十二日まで、菅谷は、郡奉行・代官・勧農方・帰発方役人等を連れて領内を回村し、仕法導入の意義を説いて回った。

同年六月、家老大石總兵衛・郡奉行井上勝二郎が、仕法実施依頼の藩主直書を携えて桜町へ赴き、金次郎に手渡した。金次郎が烏山における仕法を受諾する条件として最も重視したのは、分度の確立であつた。

お救い小屋での炊き出しが順調に推移し、中難民への荒地開發賃料ゆき渡ると、烏山領内には報徳仕法への気運が高まってきた。同年十月には、「御仕法土台金」への加入申告が増え、町方九十一人が三十一両二朱、村民千百三十二人が五十四両一分一朱、藩士二百十四人が五十四両二分一朱を推譲した。また、天保九年(一八三八)正月には、金錢の推譲から荒地開發への勤労奉仕に発展していく。在地の藩士百十六人

藩は、人口増加策とともに、一刻猶予もない藩財政の建て直しに本腰を入れてきた。

文化五年（一八〇八）と同十三年（一八一六）の二度にわたり、向こ

う五か年間の儉約令を出し、各村に儉約規定書の制定を命じた。しかし、

まだまだ不徹底であった。身分不相応の衣服を着、町の髪結い床で整髪

し、小料理屋に出入りする者、博奕に興じ家業を怠る者があつたという。

藩は、嚴法実施を控え、文政八年（一八一五）八月、領民に対して「御

領分困窮二付触書」を出し、「層の質素儉約、博奕の嚴禁と農事出積、

凶作に備えての備蓄の三つを指示した。

家中に対しては、明和七年（一七七〇）二月以来、禄米の借り上げを

実行してきたが、今回はさらに厳しく、文政八年九月一日をもつて面扶持

を実施し、さらなる緊縮政策を導入した（『町史』）。

忠成は、新田開発にも意を用いた。領内巡視の折、巻淵（那須烏山市旭二丁目一番）の上から地形を見分して、郡方へ調査するよう命じて以

來、隧道掘削事業が本格化した。ここは、過去にも何人かの者が手がけ

ては失敗を繰り返してきた場所である。

精密な設計図をもとに、文政八年（一八一五）三月、赤坂町根本小右

衛門が巻淵の水取り入れ口から南へ向かつて掘り出し、大沢村平山助之

丞（後の林泉右衛門）が出口から北へ向かつて掘り進めた。翌年六月、全長二百一十四間の隧道が貫通した。この水を利用して、金井町崖下か

ら野上にかけて、当時二十七町歩余（現在、約四十ヘクタール）の水田

が開発された。忠成は、自らこの隧道を「耕便門」と命名した（『若林

永軒日記』）。

六代 佐渡守忠保 忠成嫡子

文政十年（一八二七）九月、忠成隠居し、忠保家督を繼ぐ（『大久保家系譜』）。

天性寺円応和尚は、田畠の荒廃と藩財政の窮乏を見るに忍びず、文政十一年、藩の許可を得て、上境村・向田村の川原を開墾し、天保五年（一八三四）までの七か年に四十町歩余の開発に成功した。続いて、円応は、第二期開発七か年計画の許可を得るとともに、新設の新田役所の発足と同時に新田係を命ぜられた（『年表』『天性寺文書』）。

文政十二年四月から、勝手非常の「嚴法」を実施するにあたり、忠保は、同年三月、前年隠居した若林兵左衛門（永軒）に、藩政への参与を求める直書を渡した。さらに、天保四年（一八三四）七月、嚴法再生にあたつても、「在中の儀につき、自分の存意を家老・用人共に申し述べるよう」と、依頼している（『県史近四』所収「若林家文書」）。家中に對しては、嚴法再生につき、同月、「御嚴法御再生御書付」として、さらには、五か年延長する旨申し渡した。主な施策は、面扶持の継続、家中帰発・新聞、家中内職の督励であった（前掲書所収「平野家文書」）。

嚴法再生を家中に申渡した四か月後、城下において東郷農民による打ち壊しが起こった。

天保四年（一八三四）は、天候不順のため大凶作となり、米価は急騰した。米価高騰で最も苦しむのは、畑作地帯の東郷村々の農民である。鍛治町木戸前の酒造屋井筒屋が、御禁制の米の買い占めと酒造りをしている証拠を握り、十一月十七日の夜、東郷九ヶ村の農民数百人（『附録』

文化七年（一八一〇）十一月、忠定は、最後の期待を掛けて国元老

若林兵左衛門を訪ね、正式にしたためた公儀役人宛の訴状を示した。若
林兵左衛門は、事の重大さに驚き、急ぎ江戸藩邸に向かつた。島山藩では、

かつて、島山復帰後の那須資弥の代、実子資寛（福原図書）がありながら
他家より養子を迎えたため、那須家は断絶しているからである。この
時、若林兵左衛門が、どのように解決したかについては、何の記録も残つ
ていない。兵左衛門の働きによつて、大久保家断絶の危機は免れたので

ある（『町文化財』第十集所取「若林家文書」）の「大久保家家督相続
訴訟写」を小口芳夫氏が論考）。

困窮・欠落などによる潰れ百姓の続出は、手余り荒れ地の増加に直結
した。藩は、文化三年（一八〇六）九月、去る享和三年（一八〇三）よ
り手余り荒れ地の検分を行い、終わつた年から向う五六年間、年貢を免
除するという英断を下した。その間に、荒地を再開発するよう命じてい
た。

文化十一年（一八一四）三月の「中山村家数人別高書上帳」によると、
当時の村の荒廃ぶりがわかる（『町史』）に「中山文書」とあるのは「義
煎家文書」の誤り）。

一 高五百三拾三石二斗六升八合六勺（水帳高）

内三百拾九石八斗七升四合一勺 古荒引

一 家数 六拾七軒

内訳 二軒は寺・薬師

四拾二軒は前々潰れ者

六軒は潰同様の者

拾七軒は立御百姓（以下略）

中山村の例でみると、水帳高の約六割は収穫出来ない荒地となつてい
ることがわかる。家数六十七軒のうち、百姓が成り立つているのは、僅
かに十七軒という驚くべき数字である。

村々の荒廃に対処して、忠成が執つた施策の一つに、人口増加策があ
る。文化三年（一八〇六）五月以後、出生児に名を付け、七歳のと
きに面会することとした。この施策は、十四年間続けられ、文政二年
（一八一九）中止となつてゐる。また、先代忠喜が寛政年間に導入した

心学の普及も、毎日の夫食に事欠く農民にとつては、口べらしのための
間引きの悪業を絶つまでは至らなかつた。藩は、文化四年（一八〇七）
三月、間引き戒めの触を出すとともに、太平寺の住職を領内村々に巡回
させ、村人を名主宅に集めて間引きの罪悪について説き聞かせた。また、
文化七年（一八一〇）四月、村役人は村内の妊娠を調べ、月々代官所へ
報告することとした。（『年表』「阿相家文書」）。

さらに、結婚を奨励し、領民の他領流出を抑制して領内の人口増を図
ろうとした。そのため、安永年間（文化三年（一八〇六）十月、同七年
（一八一〇）七月と、たびたび触を出し、その度毎に取締りを強化して
きた。文政八年（一八一五）十一月の触書では、「男三男女子供二他領
へ差遣候候」（『町文化財』第五集所取「阿相家文書」とあり、これま
でにも増して厳しい禁令となつた。

も干天と風雨に襲われ、飢饉の年となつた。

忠美、領内風儀取り直しと人口増対策のため、寛政四年（一七九二）に心学を導入する。同九年（一七九七）には、十二坪の心学道場「存養社」を新設し、広瀬玄養を講師に庶民の教化にあたつた。講話の内容は、「町史」所収「附錄」⁽⁵⁾の一部に、「唯胎子間引等之人面獸心成事を戒め、陰徳陽報、因果報応之事共叮嚀に為説聞（以下略）とある。

天明年中、二度の飢饉に見舞われて多くの教訓を得た藩は、備荒貯穀の策を採つた。各郷に郷倉を作らせ、寛政八年（一七九八）六月までに、六か年分を貯穀するように勅を出した（『町史』）。

この頃、村柄著しく疲弊し、年貢米の収納不足により、藩の勝手元甚だしく差し支え、領内外の商人等からの借入れ金が増加する。

借用申金子之事

一 金五百七拾兩也

右者山城守勝手為要用借用申處実証也返済之
義者大桶村白久村片平村三ヶ村物成米を以
其時之相庭二画九利無滞来ル日十二月中可致
返済候為後證仍如件

代官

岡崎喜兵衛

印

（以下七名の役職名氏名略）

寛政八年辰十二月

飯塚 善衛門殿

木村与左衛門殿

（那珂川町「飯塚家文書」）

『県史』近四所取「若林家文書」によると、この頃、領内の人口・戸数の減少著しく、手余り地は増加し、藩収納高が激減する。享保十一年（一七二六）の領内人口一万八千七百七十人余、戸数四千八百九十五戸余であったのが、寛政十二年（一八〇〇）には一万二千六百三十人余、三千二百三十戸余まで減少し、藩収納高は、享保十一年二万四千六百七十俵余が寛政十二年には、一万三千百俵余までになる。文化二年（一八〇五）五月五日、忠喜、病氣のため隠居を許される（『大久保家系譜』）。

五代 佐渡守忠成

実は、島原城主松平忠恕三男 忠喜の養子となる。

室は忠喜の女。

文化二年五月五日、養父忠喜の家督を繼ぐ（『大久保家系譜』）。

大久保家に家督相続訴訟問題起る。大久保家二代忠胤は、家督相続について、忠喜と忠定のどちらかに男子が生まれたら、その子を大久保家五代の藩主とするようとに、遺言しておいた。天明三年（一七八三）十二月、忠定に男子弥五七郎が生まれた。しかし、忠喜は、松平忠恕の三男忠成の養子願いを出し、天明七年（一七八七）十一月、幕府はこれを認めた。忠定としては、「血統の私共を差置し父存念をも忘脚仕続も無之」と、幕府の規定から見ても、亡父の遺言に照らしても、無縁の者を他家から迎える兄忠喜のやり方は見過せなかつた。当主忠成をはじめ、家老達や隠居した忠喜からも心よい対応がなかつた。

安政二年（一八五五）の領知「目録」（菊地正夫氏藏）によれば、鎌倉郡の烏山藩領は、柄沢村・田谷村の二ヵ村のみとなり、替わりに下総國相馬郡音生村・豊田郡箕輪村・原宿村の合わせて三ヵ村が、新たに烏山藩領に編入されている。この時、相模国鎌倉郡のうちで、長沼村・弥勒寺村・小塙村の三ヵ村が上知となつたものと思われる。

二代 山城守忠胤 常春嫡子

享保十三年（一七二八）十月二十六日、遺領を継ぎ、同十四年（一七二九）二月、入部する（『寛政家譜』）。同年七月、常春の東垂姿の木像と宮殿像と宮殿を作らせ、送り届けたものと言われている。（町史）。

農民の欠落・出奔・死にづぶれ等により田畠が荒廃してきたため、藩は、寛延二年（一七四九）、荒れ地反別を調査し、高改めを実施して実収高を整理した。更に、開発を奨励した（町史）。

宝曆九年（一七五九）五月三日、忠胤 病氣のため隠居する（大久保家系譜）。

三代 伊豆守忠卿 忠胤二男、兄早世のため嫡子となる。

宝曆九年五月三日、先代隠居と同時に、封を継ぐ（『寛政家譜』）。

天明十一年（一七六一）十一月、家中藩士に対する御目見格式席次、家督相続・養子縁組等の心得、四十一か条の「御条目」、「追々被 仰出書入」（『平野家文書』）を布令する。

明和六年（一七六九）二月十日、二十七歳にて病死する（『寛政家譜』）。

久保家系譜）。明和六年四月三日、遺領を継ぐ（『寛政家譜』）。

この頃、農村にも貨幣経済が浸透してくる。異常気象や疫病の流行とも重なって、村々の至るところで、欠落・出奔・死にづぶれが続出した。寛延より宝曆・明和年間（一七四八～一七七一）にかけて、領内農村の荒廃甚だしく、藩財政は逼迫した。明和七年（一七七〇）、家中禄米の一部を借り上げて当座を凌ぐほどであった。藩は、人心を引き締めて財政再建を図ろうと、安永元年（一七七二）正月、農民に対する二十一か条の「御条目」を公布し、一層の勤儉生活を促した。零細農民のなかには、年季奉公に出る者もあり、その者たちの作業能率の低下を防ぐ条項まで規定している（『町史』）。第二十条に、「一、奉公人男女共近来主人之中付を不守農事先ニ面長体致し不精之趣相聞候以來右躰之儀於有之ハ急度咎可申付事」（『荒井家文書』）とある。

農村人口の減少は荒れ地の増大に拍車をかけたから、安永八年（一七七九）六月、領内の人口増加対策として、向後出生児へ麦一俵を下さる旨の勅書を出した。また、間引きの悪習に対する教戒の勅書を出して厳しく禁じた（『鳥山町歴史年表』以下、「年表」と略「阿相家文書」）。

天明三年（一七八三）は、田植えのころも綿入れを着るほど冷氣と大雨による大洪水に見舞われ、その上、七月の浅間山の噴火が重なり、大飢饉となる。同年八月、穀類を他領へ売り出すことを禁止する。同年十一月、当年凶作につき、御城内止月の諸式を簡略にし、吉例の正月椀飯を下され、明年正月から三年取り止め、また、出生児へ麦下されも中止する旨の勅書を出す（『年表』「阿相家文書」）。天明六年（一七八六）

四代 山城守忠喜 実は忠胤三男、兄忠卿病氣につき嗣子となる（『大

表 39 領内村々高帳 享保 11 年 (1726) 「町文化財資」第二集 筆者義煎平佐、出典不詳

村名	本高	外二	村名	本高	外二
	石斗升合勺	石斗升合勺		石斗升合勺	石斗升合勺
酒主村	1107 0 9 3 3	66 0 9 4 5	尾村	251 1 5 5 0	0 8 8 0
瀧田村	846 8 1 2 0		宮原村	213 1 3 1 0	
八ヶ平村	103 7 8 4 8		興野村	1102 8 1 5 7	40 7 9 3 0
中山村	484 6 7 0 6	89 8 0 7 5	大沢村	495 9 7 8 0	55 9 3 0 0
谷浅見村	732 0 4 3 0	34 1 5 6 5	横枕村	361 8 0 1 7	
大桶村	1238 2 4 6 0	19 1 6 1 0	大木頭村	980 9 6 0 5	35 8 0 1 6
白久村	638 6 4 2 3		小木頭村	716 8 1 8 5	
高岡村	200 1 0 0 0	52 0 7 5 0	下境村	1199 2 5 7 2	64 4 9 0 5
谷田村	399 2 4 2 5	6 5 8 9 0	小原沢村	192 8 1 3 0	175 6 2 9 0
吉田村	256 4 2 9 0		野上村	1014 0 4 9 5	
小川村	159 0 1 8 0	(相給あり)	向田村	995 1 1 6 3	
三輪村	614 5 3 5 4	35 3 2 8 0	郡頭部 計	2万3,072石9斗7升9合6勺	
戸田村	404 9 1 3 0		竹之内村	248 1 4 0 0	
岸平村	767 1 9 6 2	56 8 8 7 3	大瀬村	56 2 4 4 0	(相給あり)
志鳥村	1018 9 4 8 8	258 0 8 7 3	島生田村	257 4 6 9 0	
上川井村	256 1 4 8 0	(相給あり)	竹原村	158 1 3 4 0	
下川井村	324 7 1 5 0	(相給あり)	生井村	135 8 6 7 2	
中川上村	298 6 3 0 0	3 3 6 9 0	八ツ木村	531 0 7 9 0	
新橋田村	233 6 9 5 6	6 0 6 4 8	下芳志戸村	224 7 3 5 7	(相給あり)
鷺田村	879 9 7 4 9	77 1 7 6 7	下籠谷村	854 3 3 7 0	新田共
小食村	514 8 5 0 0		龜山村	124 3 5 7 3	新田共(相給あり)
大和久村	285 6 2 2 8	55 5 7 9 3	長田村	267 6 9 0 0	(相給あり)
月次村	581 8 5 5 7	10 1 5 0 0	芳賀郡 計	2,858石5斗3合2勺	
神兵村	1040 2 8 8 6	94 6 6 5 6	合 計	石斗升合勺	
上坂村	807 0 6 8 0	107 6 3 3 4		2万5,933 0 3 0 1	

「外二」は、耕免高を示す。

(相給については、又貴惣山が筆第)

表 40 相模国飛地領の構成 加増後の享保 13 年 (1728) 当時 「鳥山町史」

村名	石高	村名	石高	村名	石高
	石斗升合勺		石斗升合勺		石斗升合勺
愛甲郡	10ヶ村	伯母藤村	200 0 0 0 0	田名村	1659 6 2 8 0
厚木村	1841 3 9 3 0	下船谷村	256 0 9 6 0	大崎村	881 4 9 2 0
林村	197 3 2 5 0	北矢名村	226 1 1 4 3	酒野辺村	399 5 9 1 0
田久村	146 3 2 3 0	下谷村	400 0 0 0 0	上矢澤村	272 6 1 1 0
平郷村	209 7 2 0 0	鎌倉郡 9ヶ村		新田村	240 2 5 6 0
角田村	119 8 5 5 0	長沼村	334 1 6 7 0	小山村	84 2 1 1 0
平原村	727 3 0 2 6	田布村	275 0 0 0 0	上溝村	163 7 7 5 0
三堀村	720 9 0 0 0	柄沢村	182 2 2 3 0	下溝村	292 9 3 0 0
上萩野村	1049 2 1 4 0	寄勒寺村	250 5 0 9 0	円行村	107 1 2 5 0
温水村	180 1 2 9 0	小原村	274 9 1 2 0	龜井野村	150 7 2 5 0
飯山村	36 8 0 0 0	笛田村	76 7 5 3 1	大谷村	500 0 0 0 0
大住郡	7ヶ村	片瀬村	198 9 5 5 5	中野村	125 6 6 1 5
上岡田村	169 4 7 5 0	津村	251 4 8 9 0	用田村	97 8 2 6 6
下岡田村	244 6 2 8 0	櫻越村	245 1 6 1 0	合 計	石斗升合勺
栗原村	219 6 0 9 4	高座郡 13ヶ村			14,009 8 8 6 0

表 38 大久保家が福垣家より受け取った烏山城郭等のあらまし

- 一 古本丸（詳細略）
- 一 二の丸 東西 39 間、南北 45 間、塀 187 間半、建坪 216 坪、総坪数 1,755 坪、矢狭間 158 間、御囲の谷に井戸 1 か所、玄関向こう中・西の間、二の丸御住居の内、疊数合せて 274 疊半、障子 75 本、唐紙 15 本、戸 97 本
- 一 北城（詳細略）
- 一 三の丸 東西 52 間、南北 72 間、長屋間数 104 間、塀 289 間、建坪 670 坪、総坪数 3,744 坪、井戸 3 か所、窓 1 つ、土蔵 1 か所 2 間に 3 間のもの、総窓 6 か所表裏門とも、疊数 475 疊半、戸 225 本
- 一 追手門内耕形 南北 12 間、東西 30 間、塀 86 間、坪数 390 坪
- 一 犀 17 死立て 一 武具庫 建坪不詳（武具の詳細略） 一 種蔵 1 棟 2 間に 9 間、板はめ長屋 3 間に 10 間
- 一 下台所（詳細略） 一 寄場（詳細略） 一 作事小屋（詳細略）
- 一 会所（坪数等の詳細略） 土蔵 3 か所、ほかに春屋、雜部屋、長屋があつた。
- 一 十四軒町のところの見付に塀 13 間 一 神長門の耕形 東西 14 間、南北 8 間、塀 18 間、坪数 112 坪
- 一 龍田門外耕形 東西 9 間、南北 10 間、坪数 90 坪 一 宅屋 東西 28 間、南北 47 間、塀 106 間、獄屋 2 間四方の建物 2
- 一 能泉寺組長屋 一 泉溪寺組長屋 一 龍田組長屋（各、詳細略）
- 一 郷倉 赤坂町北表にあり、1 棟は 3 間に 5 間、他の 1 棟は 2 間に 6 間
以上を合せて塀の間数 1,672 間半、矢狭間 697 間、城内の井戸合計 23 か所

（文貴檜山が、詳細を略す。）（「烏山町史」）

常春は、享保十二年（一七二七）九月、明年四月に行われる將軍吉宗の日光社参の下検分を命ぜられた折、許されて在所烏山に立ち寄つてゐる。十三日からの四日間滞在し、十七日に日光へ出立している。

前掲「旧記書抜覧」に、

「今度 殿様日光 御用 付当御城江被遊 御立寄候 尤十一日江戸 御發駕十三日当地江被遊 御着候旨被 仰出候」とある。

常春は、同十三年五月七日、老人となり、相模国鎌倉・高座・大住・愛甲四郡のうちで一万石の加増を受け、都合三万石（表高）を領した。当時、草高四万石と言われた。同年九月九日、江戸下谷の藩邸において、五十四歳の生涯を閉じた。

大久保氏の領知を、城付村と相模国飛地領村で示すと、表2・表3のようになる。

天保十四年（一八四三）、海防上の必要から、相模国鎌倉郡のうち笛田村・片瀬村・腰越村・津村の四カ村は上知となり、代知として芳賀郡のうち芳志戸村（金井地区）・大谷高根沢村・鎌山村・刈生田村の四カ村が烏山藩領に編入されてゐる（『町史』）。



大久保常春木像（寿龜山神社）

二 大久保常春の襲封と大久保氏八代

二十一日であった。

大久保氏八代の烏山在任 享保十年（一七二五）十月～明治二年

（一八六九）六月 約百四十四年

初代 佐渡守常春 忠高一男、兄が父に先立ちて卒し、嫡子となる。

堀垣氏が去った後、烏山城主（藩主）となつたのは、大久保常春である。

元禄十二年（一六九九）九月二十六日、常春は近江国六郡のうちで一万石の封を継いだ。正徳元年（一七一一）九月、六代將軍家宣の御側詰となり、同三年八月、七代家継のとき若年寄に進む（『寛政家譜』）。

將軍家の習わしとして行わってきた鷹狩りは、五代綱吉・六代家宣・七代家継の三代にわたり途絶えていたが、八代吉宗が復活させた。享保元年（一七一六）七月、常春は御鷹野御用を命ぜられ、以後、將軍鷹狩りの行事にはお供を仰せ付けられた。

享保三年（一七一八）三月、近江国三郡のうちで五千石の増加があり、都合一万五十石となる。享保十年（一七二五）十月十八日、五千石を加えられ、二万石の大名となり、封地を下野国那須郡・芳賀郡のうちに移され、烏山城を賜つた（『寛政家譜』）。於、御前御念頭之以上意烏山之城主被仰付（『若林家文書』）たことを城中より知らせ、自分は退出が遅くなるので、家老・用人とも宜しく取り計らうようにという下知書を、城中より発している。

大久保家の家老平野清左衛門と堀越多宮が、幕府出役立会いのもとに、堀垣家家来衆から実際に烏山城地を請け取つたのは、翌十一年三月

前掲「旧記書抜覧」に、次のように記してある。

一 同三月十八日御上使久留嶋數馬様

御上使久留嶋數馬様

御目内藤源助様

御代官鈴木重郎様

一 同二十一日御引渡首尾完被為相済申候

常春は、城地請け取りと同時に、郡奉行三上林右衛門と野守清助の名で、九十二か条からなる「御条目」（荒井家文書）・「菊池家文書」を発し、領民の遵守すべきことがらを明示している。第五十九条に、「一

前々御裁許之公事訴訟御所替ニ付扱リに不可申出事」とあり、前城主堀垣氏代まで展開してきた畠方永納への訴願が、一時沈静化したのは、この条文によるものと言われている。同年四月には、全領村から「差出帳」（指出帳）を提出させている。これは、領内の全容を把握するため、項目別に回答を求める形式の報告書である。「酒主村差出帳」（早野家文書）では、城下町の特色が表れており、職業が多種にわたり、木戸数や竹矢來などの記載も見られる。統いて、同年九月、藩政心得とともにべき基本方針を「被仰出之覧」（中村家文書）として三十か条にまとめさせ、江戸藩邸より井上官右衛門に持たせ、国元家老平野清左衛門と堀越多宮に宛て、役人・藩士への善処方を指示している。

同九月、常春は堂平の光明寺に藩校を創立し、藩士子弟の教育をこころざした。しかし、施設・教授内容等についての詳細は不明である。



第 101 図 野州烏山城絵図（部分）（国立国会図書館蔵）

この絵図は、「日本古城絵図」に収蔵されているもので、元禄 15 年から享保 10 年（1702～1725）まで、烏山城主であった稻垣家旧蔵の 1 枚である。三の丸には、書院・小書院・居間・寝間・風呂屋敷などが描かれており、城主の居館としての機能を備えていたことがわかる。

は叶えられなかつた。永井氏が去つたあと、烏山領は一時城主を欠き、領村の年貢は幕府代官比企長左衛門の取り扱いとなつたため、比企氏に對しても訴願を続行した。間もなく、当御地頭様（稲垣氏）が烏山城主となつたので、以来八年にわたり毎年訴訟を繰り返してきたが聞き届けられなかつた。願書は、次のように続く。

「一 近年は別而他領之三倍余之御年貢納所仕、親妻子共二及飢ニ漬レ申候ニ付、（以下略）

一 当御地頭様より訴願人共被召出、永龍舍ニ被仰付難儀計仕候、（中略）当四月中より江戸御屋舗江相詣、御訴訟申上候得共、御了簡不被成何方江成共願可申候、（以下略）

一 式拾八カ村並之永納二成共、近辺他領黒羽・大田原・佐久山・芦野領並之定石代二成共、末代迄之御救ニ御慈悲を以百姓普ク御助被為遊被下候者難有可奉存候 以上」

このような、農民の悲痛な願いも達せられなかつたばかりか、訴願に對しては極めて彈圧的に対処した。『県史』近四所取「阿相家文書」によると、興野村の所右衛門について、「永納御訴訟ニ付、罷越龍死仕候」とあり、家族を残して半死するという犠牲者まで出ている。

宝永七年（一七一〇）四月十七日、稲垣重富は三十八歳にて没すると、同年六月一日、嫡子昭賢が遺領を繼いだ（『寛政家譜』）。昭賢も畠方農民に対する厳しい施策に変わりはなかつた。

これよりさき、宝永六年正月には、五代将軍綱吉が他界し、六代家宣になつた。折しも、將軍家代替わり恒例の巡見使の出役があつた。『町史』所取「滝田家文書」によると、正徳二年（一七一二）十月、さきに、宝

永六年十一月に藩奉行所宛に訴状を提出した十五ヶ村は、「拾五カ村續書上申御事」として、惣百姓名を以て幕府巡見使に訴状を提出し、次のように窮状を訴えた。

「近村永納定穀代之村々ニ而ハ畠方百石ニ付金十二三両より二十両内外ニ而御上納仕候所二十五ヶ村ニ而ハ畠高百石ニ付金五十三両より四十九両下免之時三十九両御上納仕候就之十五ヶ村の百姓二三倍遅年々御納所仕候故段々困窮仕迷惑申候御事」

十五ヶ村の農民にとって、隣接する村が烏山領もしくは他領であつても、畠方永納か定石代の村であったから、不公平な藩政の誤りを直接幕府に訴えたが、何の進展もなかつたといふ。

享保十年（一七二五）十月十八日、稲垣昭賢は、志摩国鳥羽（三重県鳥羽市）へ転封となつた。

8 番方永納訴願を押圧した稲垣氏

稲垣氏二代の烏山在任

元禄十五年（一七〇二）九月～享保十年（一七一五）十月
約二十三年

永井氏が赤穂へ転封後、烏山城主となるのは、稻垣対馬守重富である。『寛政家譜』によれば、元禄元年（一六七八）二月二十三日、父信濃守重昭の封二万石を繼いだ。元禄十二年（一六九九）七月、若年寄となる。同十五年（一七〇二）九月七日、五千石を加えられて刈屋（愛知県刈谷市）をあらためられ、上総国大多喜（千葉県大多喜町）の城主となるが、同月二十八日には烏山に移る。わずか二十一日にして転封となつたことについて、『徳川実紀』には「旧封の城地狭少によりてなり」とある。「旧記書抜覧」（早野家文書）には、「一、元禄十六末年十一月、稻垣対馬守様三州刈谷守御所替三面御入城ニ成候」とある。稻垣氏は、直接刈谷から烏山城へ入部したことになる。烏山城主となつて二年後の宝永元年（一七〇四）十二月、河内国大郡郡外三郷のうちにおいて五千石の加増があり、都合三万石を領することとなつた（『寛政家譜』）。

稻垣氏は、番方永納訴願（畠作年貢の米納から永納への変更を求める訴え）に厳しく対処した。そもそも、番方米納の発端は、「町史」によると、成田氏の代の元和年間、米価が下落し、金壱両で米五石も買えたので、それまで、畠作年貢は水納であったところ、わざわざ願い出で米納に替えてもらつたという。『県史』近四所取（石塚家文書）では、松下氏の代に改められたとある。同書所収同家文書には、板倉氏の代に至り、米価の上昇にたまらかねた領内の農民は、延宝九年（一六八二）四

月九日、「烏山御領畠方惣百姓」名をもつて、烏山藩奉行所宛に番方永納復帰の最初の願書を提出している。

那須氏が烏山城主に復帰するとき、大幅な領村の入れ替えがあり、板倉氏代の六十九カ村のうち四十三カ村は、幕領あるいは関宿藩領となつて番方永納を許されている。これに対して、酒主村・宮原村・滝田村・八ヶ平村・中山村・大桶村・白久村・志鳥村・熊田村・月次村・神長村・高岡村・片平村・戸田村・三輪村・中井上村・野上村・向田村・下境村・上境村・小原沢村・興野村・大沢村・横枕村・大木須村・小木須村の二十六カ村は、烏山領として留まつたため、引き続い番方米納の村として取り残されることになった。

永井氏入封の際にも、領村の入れ替えがあり、一時烏山領を離れた村々のうち、滝村・谷浅見村・小倉村・大和久村・小川村（相給あり）・谷田村・吉田村の七カ村が、再び烏山領に編入されたことが「元禄郷帳」より言える。これら七カ村は、永納を許されたからの烏山領復帰であつたから、同じ烏山領内に米納と永納の村が併存することとなり、二十六カ村の領民は、一層不公平感を強くした。

『鳥山町文化財資料』（以下、「町文化財資料」と略）第二集所収「義照家文書」によると、宝永六年（一七〇九）十一月、「永納共定穀代共御慈惠を奉願上候事」として、高岡村・片平村・白久村・中山村・大桶村・興野村・大沢村・横枕村・大木須村・小木須村・小原沢村・野上村・向田村・上境村・下境村の十五カ村は、惣百姓名を以て、藩奉行所に願書を出している。願意を強調するため、過去の経緯を述べながら訴えている。経緯の概要是、以下のようである。

永井氏は、元禄十五年（一七〇二）八月、番方永納への意向をもつて調査にかかったが、同年九月に赤穂へ転封となり、番方米納村々の願い

と改めた。資弥は貞享四年（一六八七）六月二十五日、六十歳にて死去する。同年八月二十五日、資徳は養父の遺領烏山二万石を継いだ『寛政家譜』。

ところが、妾腹の子ながら資弥の実子である福原岡書資寛（徳川実紀）・『藩翰譜』では資豊（とある）は、実子の自分をさしあて他家より養子迎え、那須家を相続させることは天下の御法に反するとして、幕府に懇諤に及んだ。『寛政家譜』によれば、「十月十四日書きに養父資弥実子あるのところ資徳を養子とせしこと、曲事のいたりなりとて領知を没収せられる」とあり、資徳が城主となつて二ヶ月足らずで那須氏は改易となつた。

その後、元禄十三年（一七〇〇）五月二十日、嚴有院殿（家綱）の二十一回忌に当たり、幕府は資徳を許し、翌十四年十二月、新たに那須家の旧領福原にて千石の禄を与え、宝永五年（一七〇八）四月、旗本那須衆の上座、交代寄合老中支配とした（『町史』）。

7 播州赤穂城主となる永井直敬
永井直敬の鳥山在任
貞享四年（一六八七）十月～元禄十五年（一七〇二）九月 約十五年

那須氏改易後、鳥山城主となるのは永井伊賀守直敬である。『寛政家譜』によれば、父永井伊賀守尚庸（ながひさ）は、幕府の要職を勤め、延宝五年（一六七七）三月に卒した。同年五月十九日、嫡子直敬が河内国茨田郡外六郡・山城国伊郡・揖津国鷺上郡外一郡のうちにおいて遺領三万石を継いだ。貞享二年（一六八五）九月、奏者番となり、同四年（一六八七）十月二十一日、城地を下野国にあらためられて鳥山城主となる。元禄七年

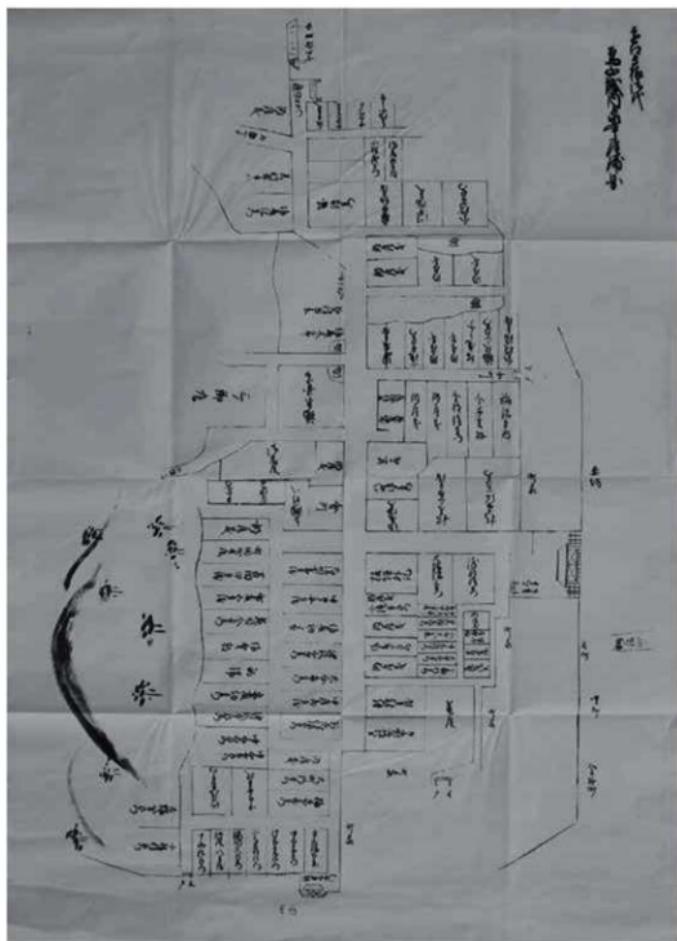
（一六九四）十一月には、寺社奉行を命ぜられている。

直敬は、那須守一宗隆を顯彰して、恩田（那珂川町）の御靈神社に銅製矩形角型定紋入蓋付香炉を寄進している。銘文に「貞享四年予拝 鈴命守于烏山」とあり、『元禄六年西二月十八日烏山城主永井伊賀守大江直敬識』（那珂川町なす風土記の丘資料館提供）と結んでいる。

元禄十四年（一七〇二）三月十四日、播磨国赤穂（兵庫県赤穂市）城主浅野内匠頭長矩が、江戸城中において刃傷に及び、浅野家は断絶した。直敬は、翌十五年（一七〇二）九月朔日、三千石の加増があつて、三万三千石をもつて、浅野家断絶後の赤穂城主となつた。

『町史』によれば、永井氏が赤穂へ転封後、鳥山城は一時空城となつたので、家中屋敷は次の城主主要封までの間、町年寄が管理していたという。また、城付領村の年貢は、幕府官代比金長左衛門の取り扱いになっていたという。ところで、同年九月九日には、老中連名をもつて、佐久山（大田原市）の福原刑部資倍（よしとき）と森田（那須烏山市）の大田原頼母清勝が鳥山城の在番を命ぜられ（『徳川実紀』・『用意仕候処』）もなく同月二十九日になつて「不及其儀」として、福原・大田原両氏は空城管理を免れている。

永井氏の治績として、夫役の金納がある。貢租には、米で納める年貢（本途物成）の他に、現物や労力で納める小年貢・小物成があつた。『町史』所収『石塚家文書』によれば、元禄元年（一六八八）十一月、領内村々から願書が出されて小年貢の金納が許され、農民は労役から解放された。但し、納宣だけは、從来どおり現物納入として残された。お城破損の際入用のためとある。二の丸、三の丸、侍屋敷など、ほとんどが萱ぶきであつたためであろう。



第100図 遠江守様御代 烏山城内家中屋敷図 (『板木県史』史料編近世四付録)

この家中屋敷図は、那須家が烏山に復帰した資弥時代の天和元年(1681)～貞享4年(1687)頃のものである。「三ノ御丸」をはじめ、大手門・神長口御門・瀧田口御門の三つの城門と家臣名が記された家中屋敷が描かれている。ほかに、大手番所・会所・御馬屋・籠(半)屋・御足軽長屋などがあった。「三ノ御丸」の東隣に、資弥の養子與一資徳との後継者争いを起こした実子資寛(福原図書)の屋敷が目を引く。

金井町の町名は、「平野家文書」、「早野家文書」によると、享保6年(1721)4月、荒町の大火後に改められたとある。

保城絵図より推定)にあった能泉寺を富士山下に移して郭内を拡張し、家中屋敷とした(大正十年(一九二二)、一乗院が現在地に移転した際、能泉寺を併合)。

前掲「鳥山城主書上」板倉氏の項に、「追手、滝田、神長三口子、二門を建、旧地之形悉ク改テ今之藩中と成ル」(図2参照)とある。(堀氏の代の寛永十七年(一六四〇)に追手門と神長門が創建されたとする説とのかわわりは、詳らかにできない。)郭内と町人の居住地を区分するため、その境界に竹矢来または築地塀を築いた。前掲酒主町惣絵図によれば、釜ヶ入り口から神長門までは築地塀が描かれており、神長門から追手門を挟んで赤坂町入り口までは竹矢来が続いている。また、町の四方の出入り口や町内の要所に木戸が設けられている。このようにして、板倉氏の代に面目を一新した城下町が出来上がつていつたものと思われる。

6 那須氏の鳥山復帰とお家断絶

那須氏二代の在任

天和元年(一六八二)一月、貞享四年(一六八七)十月、六年八か月

板倉重種が岩槻へ転封後、鳥山城主となつたのは、福原(大田原市)の領主那須遠江守資弥(『寛政家譜』では資彌とする)である。資弥は、相模国高座郡のうちで一万石の領主、後に西尾(愛知県西尾市)二万石の城主となる増山彈正少弼正利の弟である。初名は高春(のち資弥)と改名し、承応元年(一六五二)二月、那須左京太夫資景の養子となる。

これより先、資景は寛永元年(一六二四)十二月、嫡子美濃守資重に一万四千石余の家禄を譲り、致仕を許されている。ところが、寛永十九年(一六四二)七月、資重は父に先立つて病没し、嗣子なく封地取公と

なつた。しかし、那須氏の家名が絶えることを憐れんだ將軍家光は、翌年三月、改めて資景に那須郡のうちで五千石を与えた。那須氏を復活させた。承応元年(一六五二)二月、再び致仕し、同時に資弥を養子に迎えた(『徳川実紀』、『寛政家譜』)とある。

資弥は、養父資景の遺領五千石と先に賜つた麿米二千俵を采地にあらためられ、計七千石を領した。寛文四年(一六六四)十二月に新たに五千石の加増があつたので一万二千石となり、天和元年(一六八二)(延宝九年九月二十九日改元)二月二十五日、八千石を加えられて鳥山二万石の城主となつた(『恩榮録』)。この時の領村は、荒川善夫氏の研究成果によれば、酒主村・滝田村・八ヶ平村など新規に拝領した三十一カ村と、福原村・大神村など那須氏が鳥山城に入部する以前から領有していた十五カ村の計四十六カ村で構成されていたという。總石高は「高合式万四千三百五拾三石九斗武升三合」で、そのうちの「本高」が「武万石」、「籠高」が「四千三百五拾三石九斗武升三合」と記されているという。

天正十八年(一五九〇)八月、資晴が佐良土へ退去してから九十二年目ににして、那須氏は鳥山に復帰したことになる。資弥は、鳥山城主となつた延宝九年(一六八二)八月九日付けで、天性寺・泉溪寺・愛宕別当・一乗院・正眼寺(太平寺)に寺社領を寄進している。また、翌九月には太平寺に真鍮製の天蓋(県指定文化財)を寄進している。

蓮見長氏の『那須郡誌』によれば、「資弥と兄増山正利は、四代將軍家綱の生母於良久の方の弟に当たるを以て、次第に秩禄を増していくつた」とある。確かに、『寛政家譜』の那須資弥及び増山正利の項から、そのことが窺える。

資弥は、天和三年(一六八三)閏五月一日、津幡越中守信政の三男主殿(母は増山正利の娘)を養子とし、名を與一資徳(『廢絶録』では資高)

5 城下を区画整理した板倉氏

板倉氏二代の在任

寛文十二年（一六七二）閏六月～天和元年（一六八一）二月

八年八か月

堀美作守親昌が信濃国飯田へ転封後、烏山城主となつたのは、板倉内膳正重矩である。

重矩は、島原の乱に上使として派遣され、戦死した重昌の嫡子で、父に従つて出陣している。寛永十六年（一六三九）六月、遺領一万石を繼いだ。万治三年（一六六〇）大坂定番、寛文五年（一六六五）老中、同八年（一六六八）京都所司代・侍従、同十年（一六七〇）再度老中に列せられるなど、常に幕府の要職にあつた。その間、たびたび加恩を受け、五万石を領するまでになつていた。

寛文十二年（一六七二）閏六月三

日、「父祖の忠功、重矩が島原の戦功、大坂城雷火のときの処置、所司代の勤労等を感じおぼしめざる」ことにより、下野国烏山城主の恩命を受けた（『寛政家譜』）とある。このときの封地は、城付領六十九か村（那須郡五十四か村、芳賀郡十五か村）、石高三万三千四百三十九石余（『町史』）と、飛地の山城国久世郡外二郡、根津国住吉郡外三郡、三河国額田郡外二郡、上総国山辺郡外



神長門（烏山城で唯一残る建造物）

一郡のうちで、合わせて五万石であった（『寛政家譜』）。重矩は、烏山在任わずか一年にして病没したため、病弱な兄達に代わって三男重種が延宝元年（一六七三）七月、父の遺領を継いだ。重種も父同様に幕府の要職を勤め、延宝五年（一六七七）六月、寺社奉行を兼ねて奏者番、同八年九月には老中に列せられている。

天和元年（一六八一）二月、一万石を加えられて都合六万石となり、武藏国岩槻（さいたま市岩槻区）へ転封となつた（『寛政家譜』・『恩榮錄』）。

板倉氏は、二代九か年足らずの在任であつたが、多くの治績を残している。その第一は、地方知行制を廃止したことである。家臣が、個別に村・農民を直接支配することを改め、領内全域の年貢米を藩の米蔵に集め、その中から家臣に禄米を支給する禄高制に改めたことである。そのため、村ごとに年貢割付状を交付し、年貢の完納を村の連帶責任とする村請制度を確立した。

次に、宗門个别改帳の整備を行つたことである。名主が、毎年村民の移動を詳細に調べて人別帳を作り、戸ごとに何寺の檀家であり、キリスト教徒でないことを確認して役所に提出した。

第三には、城下の区画整理を断行したことである。地方知行制の廃止により、全家臣が城下に移住するようになった。その上、従来の城主よりも石高が多い板倉氏は、家臣の数も多く、家中家屋の新築・敷地の確保が必要になった。「板倉内膳正重道（重種の別名）様の代、延宝元年より始まりて、烏山の家中を御広めこれ有るに付き、熊田村の林より材木伐り出しになる。同三年に泉渓寺、天性寺等を移し、同五年迄に家中の普請成就す。」（『町史』・『塙野目家文書』）とある。泉渓寺町にあつた泉渓寺・福泉坊にあつた天性寺を現在地に、現在の八雲神社付近（正

相家文書）は、畠方検地帳三冊、田方検地帳一冊が揃つて現存している。

享保十一年（一七二六）四月の「志鳥村指出案詞」（瀧口明治家文書）に、「檢地水帳之儀者堀美作守・御代・水帳・御座候」とある。また、明和六年（一七六九）の「下川井郡諸色明白差出帳」（小川伝平家文書）に、「万治式年亥五月 御検地 堀美作守と申伝候」とある。これらは、親昌の代に検地が行われたことの証左である。

親昌の治績の第二は、城下の整備・改造と三の丸の創建である。「鳥山八雲神社誌」（黒崎寿著）によれば、寛永十七年（一六四〇）、鳥山城に追手（大手）門と神長門を創建し、同時に、それまでは金ヶ入道が唯一の登城道であったのを、城山の東側に七曲り道と十二曲り道の二つの登城道を新設したとある。追手門は、間口十二間の奥行四間で、中央に

観音開きの扉を付けた瓦葺の一層構造で、左右に長屋部屋があり、門の両袖には白壁の扉があつたとある。さらに、門を入ると、三百九十坪の枡形が統いていたとある。この門は公式の行事や吉事の場合のみ開閉し、平常は三石・北町・福泉坊にあつた通用門を通つて城内へ出入りしていたとある。

因みに、各種の絵図から追手門の構造をみると、次のようなことが言える。前掲の「正保城絵図」（第99図）では、「大手馬出」とあり、枡形が確認できる。後掲の「家中屋舗図」（第100図）では、門の両袖は柵のよう見え、大手番所がある。同じく



鳥山城跡 三の丸石垣

後掲の「野州鳥山城絵図」（第101図）では、ただ「追手」とある。享保十二年（一七二七）作成の「酒主町總絵図」（那須鳥山市役所所蔵）では、

門の両袖に白壁の扉があり、枡形の奥の左右に「御番所」がある。

再び、「八雲神社誌」に戻ると、万治二年（一六五九）には、城山の東山麓に三の丸を築いたとある。以後、歴代城主は普段ここに居住するようになった。それまで城主の居所であった山頂の二の丸には、日中当番が詰め、夜間には宿直を置くだけになった。三の丸は、建坪六百七十坪、総坪数三千七百四十四坪あり、縦開いの中に、本屋・長屋・土蔵・表裏門とともに六か所、疊数四百七十五疊半、戸二百二十五本、井戸三か所、屋根は茅葺きであったとある。

親昌が鳥山に遺した建造物に、太平寺の仁王門がある。寛文元年（一六六一）、亡父親良の二十三回忌に当たり、亡父の菩提を弔うため、滝田の比丘尼山のふもとに東寺寺を建立したが、寛文十二年（一六七二）六月、親昌は二万石をもって信濃国飯田（長野県飯田市）へ転封となつた。鳥山を去るにあたり、東寺本堂は堀家菩提寺である渋谷の祥雲寺に移し、釣鐘は一乘院、山門は太平寺の仁王門、外門は善念寺の表門として寄進した。善念寺の表門は寛政十年（一七九八）正月の市中大火の際に焼失し、一乗院の釣鐘は第二次世界大戦中に供出した。ところが、平成二十八年（二〇一六）になって、この釣鐘が渋谷の祥雲寺に現存している事実が判明した。戦時中、奇しくも鈎潰を免れたのである。



第99図 正保城絵図 下野国烏山城絵図 (国立公文書館所蔵)

この「下野国烏山城絵図」は、江戸幕府が正保年間（1644～1647）に諸藩に命じて作成・提出させた全国の城郭絵図の一つである。この絵図から、「追手馬出」と記された追手門や七曲り口・十二曲り口の二つの登城道が設けられていたことがわかる。また、侍町・町屋などの町割りの様子も見られる。三の丸は、万治2年（1659）に、堀親昌によって築かれたといわれているが、この城絵図の作成当時にはまだ築かれていなかったことがわかる。

3 檢地を手がけた松下重綱

松下重綱の烏山在任

元和九年（一六二三）三月～寛永四年（一六二七）三月 四年

4 三の丸を創建した堀氏

堀氏二代の烏山在任

寛永四年（一六二七）三月～寛文十二年（一六七二）閏六月 四十五年余

『恩榮錄』によれば、成田氏断絶の後、烏山城主となつたのは、松下石見守重綱である。四千八百石の加増を受けて、常陸國小張（茨城県つくばみらい市）から二万八百石をもつて、元和九年（一六二三）三月十五日に入封したとある。

一方、「寛政家譜」では、「元和二年三月封地を下野国那須郡のうちに移され加恩ありて二万八百石を領して烏山城に住す。」とある。「寛永諸家系図伝」（以下、「寛永系図」と略）・「徳川実紀」ともに元和二年としている。しかし、成田氏関係諸系図によれば、元和二年三月時点の烏山城主は、成田氏である。重綱の入封については、「恩榮錄」の元和九年説が成田氏断絶の年月との整合が保たれている。

松下石見守重綱の烏山在任は短期間であったが、その間、寛永元年（一六二四）九月十二日付で、天性寺に寺領五十石を寄³³してある。また、この地方に初めて検地改めを手掛けている。「寛永三年寅鳥山領小白井村畠方御検地野帳四月拾四日」（『碓氷家文書』）が現存する。寛永四年（一六二七）三月十四日、二万九千三百石もの加増を受けて五万石を領し、二本松（福島県二本松市）へ転封となつた（『恩榮錄』）。この時、伊予松山の城主加藤嘉明が、若松城四十万石の城主に抜擢されている。当時、二本松城は若松城の支城であつたから、特に願つて嘉明の娘婿である重綱を会津若松の近くに配置する措置であつたと言わわれている。

親昌の治績は第一に、松下氏が企て、父親良がすすめてきた検地を推進したことである。寛永二十一年（一六四四）四月の「興野村検地帳」（阿

『土林浜洞』の「成田家譜」や「関八州古戦録」では、三万石とある。

前掲「成田系図」によれば、氏長は、文禄四年（一五九五）十二月十一日（「断家譜」も同じ）に没したが、氏長には娘三人のほかに男子なく、弟左衛門尉泰親が兄の遺跡を繼いだとある。

氏長が烏山城下に遺したものに一乗院がある。同寺縁起によると、那須氏改易により福原へ移転した金剛寿院の跡地（旧烏山小学校跡）へ、旧領忍の城下にあった菩提寺の一乗院を移して祈願所とし、下境村に寺領十五石を給したとある。

「町史」では、氏長としているが、泰親は、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原戦に際して徳川方に与し、那須衆と共に大田原城に籠つて上杉景勝兩下の防衛に当たった。その時の論功行賞として一万七千石の増加があり、禄高三万七千石になつたといふ。また、上三川の飛地領（一万石はこの時）の加増と思われるともある。「恩讃錄」の「慶長五年本領安堵之御」に、泰親が野州烏山で二万石（あるいは三万七千石とも）安堵 とあることと符合している。泰親は、慶長八年（一六〇三）十月十九日付けで、上三川の普門寺へ、土地と屋敷を寄進している（「行田」資）。また、慶長十三年（一六〇八）三月十二日付で、一乗院へ、酒主村のうちで三十石の寺領を寄進している（「烏山城主代々の寄付状 第二巻」）。さらに、慶長十四年（一六〇九）五月十八日付で、家臣青木与兵衛に上三川のうちで二百石の知行を与えていた（「行田」資）。これらは、いずれも開ヶ原戰後に発生している。

同書所収「龍淵寺年代記」及び、前掲「成田系図」・「徳川実紀」・「断家譜」等によれば、泰親（「断家譜」では長忠もある）は、元和二年（一六一六）十二月十八日に没している。（荒川善夫氏の研究成果によれ

ば、泰親の烏山城主としての存在は、元和四年まで確認できるという。いずれにしても成田氏閥諸系図によれば、このとき、すでに長男新十郎重長は、父泰親に先立つて慶長八年（一六〇三）五月七日に没している。ところが、同一の「成田系図」でありながら、重長の項に、「泰親没而後領烏山城」とある。ここには、顛覆を認めざるを得ない。泰親の後、烏山城主の地位は、重長ではなく「男泰之が繼いだものと思われる。

泰之については、「魔絶錄」に、「元和八年十一月七日頃死し、城邑を取めらる。兄新十郎重長が男新五郎房長、其遺跡を繼ん事を請ふといへども許されず」とある。同書補註には、「泰親の没後、旧領三万七千石のうち、二万七千石は没収となり、二男泰之に一万石が与えられた」とある。「徳川実紀」では、元和八年十二月二十八日の条に、「下野国烏山城主成田佐馬之助氏宗頼死す。子なれば封地一万石取公せらる。」とある。「断家譜」でも同様に、氏宗の項に「断絶」とあり、「元和八年頃死、無子領知被召上之」とある（「断家譜」・「徳川実紀」ともに、泰之を氏宗としている）。

ところで、荒川善夫氏の研究成果によれば、成田氏は泰之の後、弟内記泰直（泰尚）が烏山城主の地位にあつたといふ。四通ほどの泰尚の発給文書のうち、最後の文書は元和九年正月晦日付であるといふ。

成田氏改易の原因について、「町史」では泰之急死後、泰直と房長の叔父甥の家督争いによるとしているが、典拠等の詳細な記載はない。

なお、前掲「成田系図」の奥書に、「惜哉代々家系伝記、至氏長之時於野州烏山城焼滅也」とある。

二万石とある。



織田信長の位牌（天性寺）

2 浮き沈みの成田氏
成田氏の烏山在任
天正十九年（一五九一）～元和九年（一六二三）初頭
三十一年余

天正十九年、織田信雄が秋田へ去った後、烏山城主となつたのは成田下總守氏長である。武藏国忍（埼玉県行田市）城主であった氏長は、天正十八年七月、豊臣秀吉の小田原攻略にあたり、北條氏政に与し、小田原城に籠城したが、小田原落城とともに忍の城地を没収され、秀吉の臣蒲生氏郷預けとなつた（『町史』）。

氏郷は、小田原戦の功により、奥州鎮護の要衝黒川城（若松城）四十二万石を賜つた。同年八月、氏郷は、成田氏長とその弟の泰親を伴つて会津へ赴き、氏長に黒川城の要害福井城に一万石の知行を添えて与えた（『成田記』卷九・『行田市史』上巻・『行田史譜』・『町史』）とある。

翌天正十九年、陸奥に九戸政実の乱が起ると、成田兄弟は氏郷に従つて乱鎮圧のため出陣し、戦功があつたという。そのうえ、秀吉は、美貌の聞こえ高い氏長の娘甲斐姫を寵愛するに及び、氏長を織田信雄のあと

ところで、福井城は一体どこにあつたのだろうか。『日本地名大辞典福島県』（角川書店）によると、福井という地名は福島県内に二か所散見できる。いずれも近世の村名である。一つは、南会津郡只見町に、他の一つは、東白川郡棚倉町にあるが、いずれにも中世に城館や陣屋等が存在したという記録はない（近世期に棚倉城は存在した）。また、同県内の城館・陣屋（跡三百五十二ヶ所の中にも福井城の名は確認できない。天正十九年（一五九一）の分限帳、「浦生家支配帳（写）」（会津若松市立会津図書館所蔵）には、「寄合与の中に、二千石 成田兄弟」とあり、さらには、馬廻の中に「一千石 成田左衛門丞」と見える。同支配帳は、城持ち家臣十三人から書き出されているが、成田氏長の名はない。

氏長は、確かに九戸の乱鎮圧のために氏郷軍として参陣している。天正十九年七月二十四日付けの陣立書「氏郷様九戸江御出陣武者押之次第」（福島県立博物館所蔵）には、整然と行軍するために編成された十三隊の八番隊が寄合与で、その中に「成田殿兄弟」の名がある。

わずか三千石の寄合与、あるいは「成田記」卷九でいう食客の身から、一躍二万石の豊臣大名に取り立てられたとすれば、九戸の乱の戦功のみならず、甲斐姫の嘆評が秀吉を動かしたとも考えられる。

氏長が、秀吉から烏山城主として取り立てられた当初の石高には諸説がある。前掲「烏山城主書上」では二万石、「断家譜」や「行田市史」（資料編古代中世（以下、「行田」）資と略）所収「成田系図」（東京大学史料編纂所所蔵写本）では、三万七千石とある。また、同書所収

三 近世の烏山

（頻繁な城主交替と大久保氏の襲封）

はじめに

主題「近世の烏山」の「近世」の起点と終点を設定しなければならない。日本史の時代区分でいう「近世」は、豊臣政権の成立から明治維新までを指すのが一般的である。起点についての異論はないが、終点は明治維新については、さまざまに考えられる。一口に明治維新といつても、指し示す時期に幅があるからである。明治元年（江戸開城、維新政府の確立、改元など）、同二年（版籍奉還）、同四年（藩置県）、同六年（地租改正）等である。

翻つて、烏山あるいは烏山藩についてはどうであろうか。小田原攻略後の天正十八年（一五九〇）が豊臣政権の成立とすれば、烏山においては、那須氏の改易と織田信雄の烏山配流が近世の起点と言える。終点はどうであろうか。歴史現象は、年度や制度で決着するものばかりではない。まして、地方史の場合、そこに生きる庶民の動向をないがしろにはできない。その観点からすれば、近世烏山の終点は、畠方農民による永納訴願の結末まで見届けなければならない。

次に、執筆にあたつての用語、「藩」および「藩主」「城主」については、次のように用いることを前もつてお断りしておく。

そもそも、「藩」「藩主」は江戸幕府の公称ではなかつた。これは、近世の中頃、漢学者（儒學者の説も）が古代中国の周になぞらえて唱えでから広まつたといわれている。拙稿では、極めて機械的ではあるが、享保十年（一七二五）の大久保常春の襲封後は「藩主」を用い、それ以

前は「城主」を用いることとする。中世は勿論、近世前期に「藩主」はなじまないと考えるからである。ただし、「藩」については、便宜上近世を通して用いることとする。

一 頻繁な烏山城主の交替

1 織田信雄の烏山配流

烏山城主那須資晴は、小田原戦後の天正十八年（一五九〇）七月、「奥羽仕置」のために会津黒川に向かう途中の秀吉に小山で参謁したが、時すでに遅く、烏山の城地を没収され、旧領の佐良土（大田原市）に退隠を余儀なくされた（『橋本県史』通史編4）。

那須資晴が佐良土に退去後、烏山城主となつたのは、織田信長の二男信雄である。小田原の北條氏滅亡後、徳川家康は、論功により関東八ヶ国を与えられた。替わって、信雄は家康の旧地三河・遠江・駿河・甲斐、信濃の五か国を与えられたが、信長ゆかりの清洲城を中心とした尾張、伊勢・伊賀に留まる強を強く願つた。そのため、「天正十八年八月太閤の旨にたがうことありて國を除かれ、下野國烏山に配流せらる。」（寛政重修諸家譜）以下、「寛政家譜」と略）とある。烏山へ移つた信雄は剃髪して常真と号し、ひたすら恭順の意を表していたが、秀吉の怒は容易に解けず、翌年春、出羽国秋田へ移された。天性寺に「摂見院殿贈大相國一品泰巖大居士」と陰刻された信長の位牌が安置されている。これは信雄が烏山にいたとき父信長の菩提を弔うため、天性寺で供養を営んだときのものであろう（『烏山町史』以下、「町史」と略）という。

信雄が、秀吉から与えられた石高は、『橋本県史』史料編近世四（以下、「柄史」近四と略）所収「烏山城主書上」（若林家文書）によれば、

おわりに

作成意図や年代が不明確な城絵図が多い中にあって、複数の絵図を比較・検討することで、近世城郭としてのあり方の変遷を明らかにすることは、今後の鳥山城跡の活用を考える上でも重要な作業である。本稿では城郭の範囲をどのようにとらえるかといった問題や、曲輪の活用状況の変化など、その一端を紹介した。

鳥山城を描いた絵図は今回紹介した以外にも多数残されており、今後の研究の進展に期待したい。

注

- (1) 「鳥山町文化財資料第九集」鳥山町教育委員会・鳥山町文化財愛護協会 一九八四年
- (2) 第二十五回企画展図録「下野と近世大名」栃木県立博物館 一九八八年
- (3) 「主要城郭についての解説」(注1)に同じ
- (4) 「平野家文書稿」嘉永三年 平野家文書四八 那須烏山市所蔵
- (5) 注3に同じ
- (6) 「御前様御住居御普請並御迎人用調」慶応四年 平野家文書一五 那須烏山市所蔵
- (7) 「御用留」安政六年 平野家文書一一七 那須烏山市所蔵
- (8) 「栃木県史」通史編4・近世二 一九八一年 栃木県史編纂委員会
- (9) 注7に同じ

(3) 城門

近世城郭としての整備が完成した段階の烏山城のあり方は、「野州烏山城絵図」(第89図)と「鳥山城絵図」(第90図)の二図に示されると考えられるが、この二図には、山中の武家屋敷などの門も含め、大小二〇以上の門の存在を確認することができる。

その後、山中の家中屋敷や組屋敷が姿を消していく中で、幕末段階において明確に城中にその存在を確認することができるは、一之門・吹貫門・車橋門・七曲口門・桜門・井戸沢門・三の丸門(表門・裏門)の八門である。幕末から明治初期にかけての城内の様子を具体的に伝える「鳥山城絵図」(第91図)と「旧烏山城域図」(第93図)中に描かれるこれらの門の種別や形状等をまとめたのが下表(表37)である。

烏山城では二階建ての櫓門が三つ(一之門・車橋門・桜門)あり、いずれも一階部分にも屋根を持つ二重門の形態を取ることが大きな特徴である。これらの門はいずれも本丸を通じる途上に位置しているが、中でも十二曲の坂を登り、最初の曲輪に入る場所にある車橋門が袖塀と袖石垣の双方を備えた最も重厚な城門であり、この位置的重要性を示している。

その他の門は薬医門を主体としているが、三の丸裏門だけが長屋門となっている。また、屋根の葺き方については、ほとんどが茅葺であると思われるが、第93図では、車橋門と三の丸表門の屋根が茅葺ではない屋根の葺き方(瓦葺あるいは板葺か)のように区別して描かれている。このことが何を意味しているのかについては、検討を要する課題である。

城門は、各所それぞれの堅固のあり方や、内部施設の機能、あるいは格式等を知る上で重要な情報を含んでいる。今回検討した以外の絵図における城門の様子についても、段階を追って歴史的に検討していく意義は決して小さくはない、今後の検討に委ねたい。

表37 「鳥山城絵図」(第91図)・「旧烏山城域図」(第93図)による各城門の比較

門の名称	門の種類	袖塀の有無	袖石垣の有無	屋根の形状	屋根葺
一之門	二重門	○	×	入母屋造	茅葺
吹貫門	薬医門	○	○	寄棟造	茅葺
車橋門	二重門	○	○	入母屋造	瓦葺(又は板葺)カ
七曲口門 (追手口)	薬医門	○	×	入母屋造	茅葺
桜門	二重門	×	×	入母屋造	茅葺
井戸沢門	八脚門カ	×	×	入母屋造	茅葺
三の丸表門	薬医門	○	×	切妻造	瓦葺(又は板葺)カ
三の丸裏門	長屋門	× (左右は柵)	×	入母屋造	茅葺

(2) 三の丸付近
 三の丸には、総坪数三七四四坪の広大な敷地に建坪六七〇坪の御殿が建てられていた。^{〔8〕}ここに示した三の丸御殿の様子を描く三図の年代は、第89図が江戸時代中期（一八世紀前半）、第91図が江戸時代後期（一九世紀）と推定され、第93図が明治五年（一八七二）である。

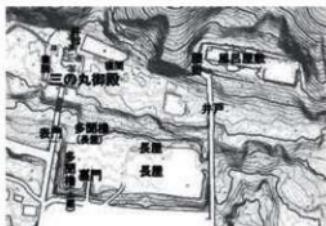


第89-5図 「野州烏山城図」(三の丸部分拡大)

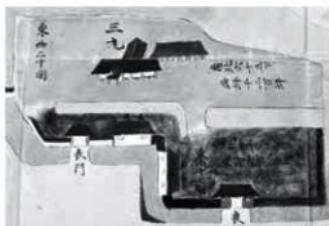


第91-5図 「烏山城図」(三の丸部分拡大)

各絵図を比較すると、第89図の三の丸御殿は、前述したように、唐破風玄関の左右に書院、右奥に藩主居宅としての「寝間」「居間」が描かれ、高まつた部分、後世には使用されなくなった西北部の小曲輪の三つの曲輪としての三の丸は、前面の張り出し部分と、御殿が建てられた奥部分からなっており、それは現在の等高線上にもはつきりとあらわれている（第98図）。藩府の中心をなす建物としての三の丸御殿は表門を入り、左に迂回した坂を上つた奥にあり、明治五年（一八七二）にこの御殿が崩壊した後、その跡地に烏山藩主大久保常春を祭る寿光山神社が旧藩士の人々により建設された。



第98図 現在の等高線上に三の丸内の建物の位置を想定



第93-5図 「旧烏山城城図」(三の丸部分拡大)

安政六年（一八五九）の記録によれば、藩主に対する藩士たちの御見御札が三の丸大書院にてほぼ毎日行われている。後世になり建物の数は圧倒的に少なくなつたが、政 府としての機能が維持され続けた三の丸の存在意義は幕末期まで失われるとはなかつたといえる。

政 府としての儀礼空間と、藩主の私的な生活空間に分かれた典型的な御殿建築の姿を見ることができる。E 図の三の丸御殿も唐破風玄関と左右の建物がはつきり区別して描かれている点で第89図と共通しており、同一の建物を描いている可能性は高い。これに対して第93図に描かれる三の丸御殿は、左右に広がる建物と奥に直角に接続する建物が第89図と類似しているが、玄関の屋根が入母屋造である点が他の二図と異なつてお り、右手奥に別棟の形で存在する長屋風の建物は厩舎のような描かれ方をしている。第89・91図に描かれる御殿に何らかの改変が加わっていると見てよいだろう。

(一) 本丸御殿

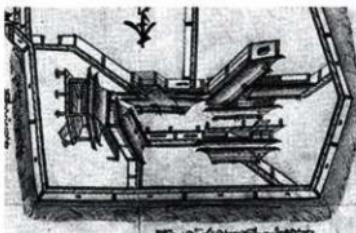
次に建物の状況を各絵図により比較していきたい。
まず、下に示したのは、本丸御殿の様子が描かれる四図を比較したものがである。おおよその年代は第87図が江戸時代前期（一七世紀前半）、第90図が江戸時代中期（一八世紀前半）、第91図が江戸時代後期（一九世紀）と推定され、第93図が明治五年（一八七二）である。

江戸時代の絵図は必ずしも現実の姿を正確に伝えていとは限らないから、これらの内容を単純に比較することには慎重でなければならないが、やはり第87図に描かれる本丸御殿には、政庁と藩主住居を兼ね備えた時代の建物として、規模も大きく、構造も複雑であった様子を見てとることができる。第90図の本丸御殿は、若干具体性に欠ける描き方で、玄関部分と二棟の建物を組み合わせている印象を受ける。

いっぽう、第91図と第93図は年代が下っているせいか、描写は大変具体的で、一部に違いはあるが、共にコの字型とし字型の長屋形式の建物を組み合わせている点で類似した印象を受ける。玄関の形状については、第87図は唐破風玄関を持つのに対し、第90・83図の玄関の屋根は入母屋造、第91図の玄関は切妻であるように見える。
安政六年（一八五九）の家老日記に、藩主が供養えて本丸御殿に出向く、「御書院」に着座したとの記述があり、書院と呼ばれる部屋が本丸御殿に存在したこと、藩主が実際にそこに出向く機会があったことが確認できる。政府あるいは藩主住居としての機能が三の丸に移った後の本丸御殿がどのような使われ方をしていたのかについては今後明らかにすべき課題であるが、幕末期まで本丸御殿が何らかの機能を有し、明治初年まで同等の規模で建物が存続し続けたことが確認できるのは大変貴重である。



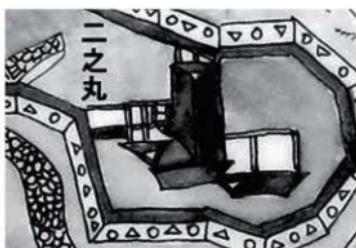
第91-4図 「鳥山城図」



第87-4図 「下野国鳥山城絵図」



第93-4図 「旧鳥山城城図」



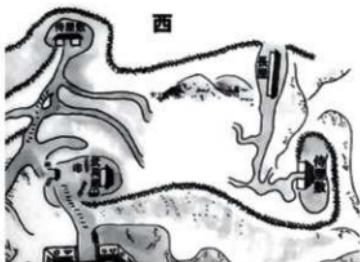
第90-5図 「鳥山城図」(トレース図)



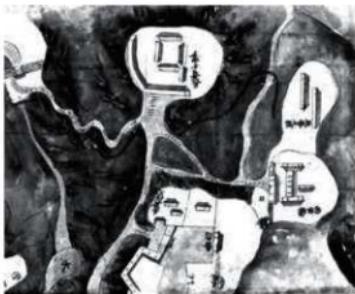
第88-4図 「野州烏山城図」(西城周辺部分拡大)



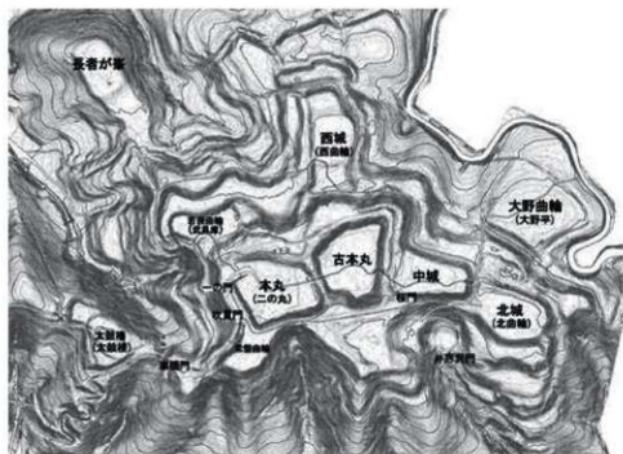
第87-3図 「下野国烏山城絵図」(西城周辺部分拡大)



第90-4図 「烏山城図」(西城周辺部分拡大)
(トレイス図)



第89-4図 「野州烏山城図」(西城周辺部分拡大)



第97図 現在の等高線上に各曲輪の位置を比定

二、各絵図の比較について

1 山中の曲輪の状況

近世の絵図は、作成に際して統一の規則が存在する訳ではなく、年代あるいは関心の違いによって様々な描かれ方をしている諸絵図を同一の基準により比較することは困難である。しかし、そのことを念頭におきつつも、これまで紹介してきた中で、前述したように、烏山城内の各曲輪の配置や築地堀の設置状況を比較すると、類似した特徴が認められるのが「野州烏山城図」(第89図)と「烏山城図」(第90図)の二図である。この二図の類似した特徴が最も顕著にあらわるのが、本丸から北城(北曲輪)にかけて四つの曲輪が連続する部分である。二図を比較すると、築地堀の設置状況はほぼ同様であり、二図ともに北城(北曲輪)の北端に櫓が設置されている点も他絵図には見られない特徴である。



第89-3図 「野州烏山城図」(本丸周辺部分拡大)



第90-3図 「烏山城図」(本丸周辺部分拡大)
(トレイス図)

そこで、この本丸周辺以外の部分で、絵図間の部分的な比較をするために、「下野国烏山城絵図」(第87図)・「野州烏山城図」(第88図)・「野州烏山城図」(第89図)・「烏山城図」(第90図)の四図における西城(西曲輪付近のそれぞれの様子を次頁に掲載した。これらを見ると、曲輪の配置、溜池の存在などにおいて、第87・88図と、第89・90図がそれぞれ類似した特徴を持ち、二つのグループに分別できることがわかる。

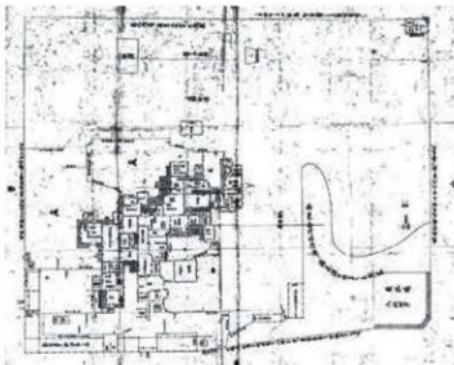
さらに本丸に接する曲輪(若狭曲輪)において、第89図では「武具役人」の現宅、第90図では「武具藏」と、武器の管理に関する機能が持たせられている点。さらに西城(西曲輪)の周囲に第89図では「城番足軽」、第90図では「長屋」と、組屋敷的な性格を持つ曲輪が配置されている点も共通しており、第89・90図との違いを明確にしている。前述したように、第88図の作成された時期について、第89・90図よりもさかのばつて第87図に近い時期を想定した根拠はその点に求められる。

そのような中にあって、四図に共通して見られる特徴に、絵図の最上部(西端)に武家屋敷として使用される曲輪がそこに至る道筋とともにほつきりと描かれている点があげられる。ここにその曲輪が城郭の西端にあたることが明確に示されており、第89図ではその曲輪に「長者ガ峯」という名称が付されている。

以上の検討により、烏山城における山間部の各曲輪の存在形態については、段階的に与えなければならない側面があること、さらに城域の西端に「長者ガ峯」とよばれる曲輪が位置付けられることをここでは確認しておきたい。

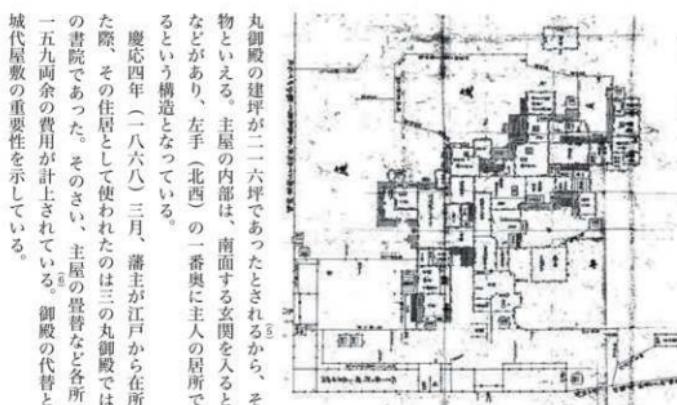
なお、今後の参考として、江戸時代の烏山城における各曲輪の配置、城門の位置などを推定し、現在の等高線上に比定した図を次頁下段に掲載した(第97図)。

烏山藩大久保家の家老職を務めた平野家に伝来した絵図で、表紙には「拝領屋敷之絵図 享保一丙午年六月十五日 平野清左衛門」とある。平野清左衛門は、持高四百石、烏山藩大久保家の家老を務めた人物である。近江国などに一万五千石を領する幕府若年寄の大久保常春が烏山藩に二万石で入封したのは享保一〇年(一八二五)一〇月であるが、平野家の家譜によれば、平野清左衛門が城地の請取のために烏山城に派遣されたのは翌享保二年三月のことである。そのときにこの城代屋敷を拝領したという。



第96図 「拝領屋敷之絵図」(全体)

この城代屋敷は、三の丸から道路を隔てた東部に隣接し、本図によれば敷地は東西四七間、南北五七間半に及び、その面積は二七〇〇坪ほどである。敷地全体に築地塀が廻らされ、南東部(図の左下)に表門、南西部(図の下)に裏門があり、角をはさみ連続した長屋となつてい

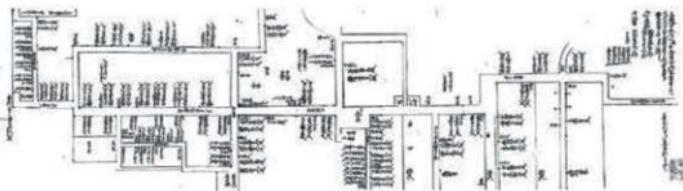


第96-2図 「拝領屋敷之絵図」(主屋部分(左下)拡大)

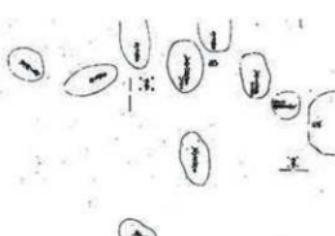
丸御殿の建坪が二一六坪であったとされるから、それを凌ぐ大きさの建物といえる。主屋の内部は、南面する玄関を入ると左手に書院や次ノ間などがあり、左手(北西)の一番奥に主人の居所である奥ノ間が配されているという構造となっている。

慶応四年(一八六八)三月、藩主が江戸から在所である烏山に下向した際、その住居として使われたのは三の丸御殿ではなく、この城代屋敷の書院であった。そのさい、主屋の脇普など各所に手を入れるために一五九両余の費用が計上されている。御殿の代替として位置づけられる

る。敷地の南東部分には、主屋が建てられており、大小四〇余りの部屋数をもち、脇が敷いてある部分だけでも二四〇坪以上、建坪は約二五〇坪にも及んでいる。江戸時代の本丸御殿の建坪が二一六坪であるとされるから、それを凌ぐ大きさの建物といえる。主屋の内部は、南面する玄関を入ると左手に書院や次ノ間などがあり、左手(北西)の一番奥に主人の居所である奥ノ間が配されているという構造となっている。

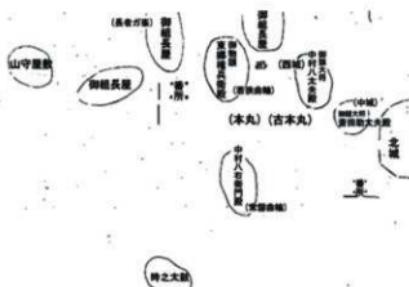


第94図 「家中屋敷絵図面」(右部分)



第94-2図 「家中屋敷絵図面」(左部分)

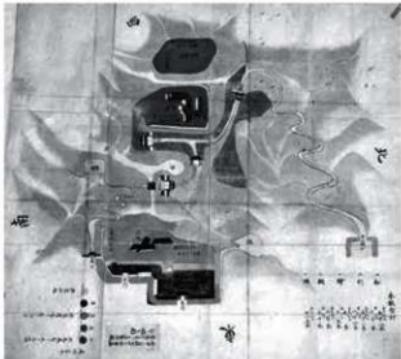
江戸時代に烏山町(酒主村)の町年寄をつとめた早野家に所蔵されていた絵図である。右上の記載から、元禄十五年(一七〇二)の所替により、永井氏から稲垣氏へ烏山城が引き渡された際の武家地の様子を描いたものを後世に写したものと考えられる。縦二七七、横一六〇(さほど)の縦紙のうち、右の2/3程の部分には三の丸の東側に広がる武家地の様子、左1/3には城山の山中の曲輪の配置をしている。



第95図 各曲輪位置推定図(「家中屋敷絵図面」(左部分))

右側の武家地の内部には約二百名の藩士の名前が肩書きとともに書き連ねられているが、よく見ると、一区画につき二名の名前が書かれている場合が多い。これは、転封する水井氏の家中と、武家地を引き継ぐ稲垣氏の家中の名前とを一組として記載したものと考えられる。左側の山中の城郭内部を描いた部分には、各曲輪が梢円形で表現され、その中に藩士の名前や、「御組長屋」「山守屋敷」などの記載がある。図中に示された各曲輪の配置には正確さを欠くと感じられる部分もあるが、「北城」「時之太鼓」等の位置から、本丸と古本丸の位置と、それぞれの曲輪がどの曲輪に該当するのかを推定した名称を()内に示したのが左図である。

これによれば、永井氏・稲垣氏のどちらの家中であるのかは不明であるが、一八世紀初頭の城郭山中の各曲輪が、「御物頭」、「御旗大将」(旗奉行)、「御廻大將」(槍奉行)など、藩の上級家臣と思われる藩士の屋敷や「組長屋」などとして使用されている様子が判明し、他絵図中の城郭山における「侍屋敷」「城番足輕」等の記載を裏付けるものとなつてゐる。



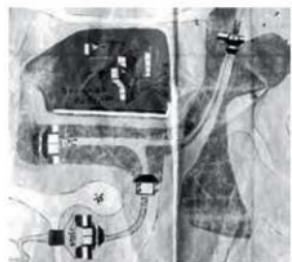
第93図 「旧烏山城城図」(全体)

かつて烏山町郷土資料館に所蔵されていた「烏山城城図」で伝来は不明である。「壬申二月十七日、兵部省出張官員江差出候城郭下図」と書かれた貼紙があり、明治五年（一八七二）の旧城郭の様子を新政府に報告するため作成されたものであることがわかる。青、赤、水色など用いて色彩豊かに描かれているが、これは凡例によれば土地の高低を色別したものである。右下に「木数総計」として、松・杉・檜・櫻・桺の本数が樹種別に報告されている。

明治四年（一八七一）の廢藩置県により烏山藩は廃され、一時烏山県が設置されたが、同年のうちに宇都宮県に編入されているため、行政としての役割を完全に失った段階の旧烏山城の様子を伝える絵図である。したがって、その内容もこれまでに紹介してきた城絵図と比較すると、「本丸」と「三ノ丸」、それに付近の城門の描写を中心とした簡略化されたものとなつていて。しかし、そのような中には、そのよ



第93-3図 「旧烏山城城図」(「三ノ丸」(三の丸)周辺部分拡大)



第93-2図 「旧烏山城城図」(本丸周辺部分拡大)

の描写は大変具体的である。特に注目されるのは、三の丸表門、車橋門・三の丸御殿玄関などごく一部の建物が、他の建物に見られる茅葺屋根とは異なる屋根の葺き方で描かれている点である。

また、烏山城独自の存在とする三の丸東部の多門櫓であるが、本図では二棟のうち北側（絵図では右）の棟には「土蔵」、西側（同じく左上）の棟には「長屋」とその用途が区別され、さらに「土蔵」の屋根の葺き方が「長屋」の茅葺きとは区別して描かれる点もこれまでの絵図には見られなかつた特徴である。これらの建物のうち、本丸周辺の建物は明治六年（一八七三）一二月の大火により焼失し、三の丸御殿はこの絵図が描かれた同じ月に大雪のため崩壊したとされる。いわば烏山城内の建物の最後の姿を伝える資料として大変貴重なものである。

6 那須烏山市所蔵「城山地図見取彩色」(第92図)

烏山藩大久保家の家臣であった中村家に所蔵されていた絵図で、烏山城全城を色彩豊かに描いている。左下部分には注記があり、「古本城地」など五つの曲輪の東西の間数と坪数が記載される。それによると各曲輪の面積は、「古本城地」が一〇二〇坪、「二ノ丸」が一七五五坪、「武具庫地」が二〇八坪、「太鼓櫓地」が二八六坪、「三ノ丸」が三七四四坪である。このうち「二ノ丸」の注記に「二ノ丸 當時本丸」と書かれていることから本図の作成時にはこの場所が「本丸」と呼ばれていたことがわかる。

絵図全体からは明治期以降の絵図のよき印象も受け

るが、作成時期はそこまでは下らぬないと判断される。



第92図 「城山地図見取彩色」(全体)

とか、その存在が失われている前図(第91図)よりは前の段階の烏山城全体の様子を伝えているのではないかと推測される。

本丸周辺の各曲輪の存在については、注記に示された五曲輪の他に「字北曲輪」「字大野平」「字八工衛」「八兵衛」屋敷、「字伝工衛」「伝兵衛」屋敷の四曲輪が図中に示される。これらのうち「字北曲輪」(北城)および「字大野平」(大野曲輪)は他絵図との対応が確認できるが、「八兵衛屋敷」と「伝兵衛屋敷」がどの曲輪を指しているのかについては本図だけでは判断が難しい。そこで前図(第91図)の最上部(西端)に貼られた付箋の「八兵衛屋敷」などの曲輪が、五百本位の記述を参考にするならば、本来は本丸の西部(本図では上部)に位置する「八兵衛屋敷」などの曲輪が、何らかの事情で左(南)方向に描かれていることが考えられ、「野州烏山城

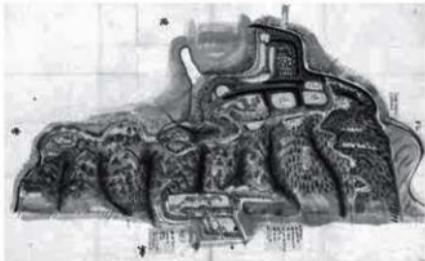
絵図」(第89図)における「長者ガ峯」との関連も想起させる。

また、本図には大小あわせて十の城門が描かれているが、そのうち八つの城門に名称が記載されている。特に「十二曲がり口」を西に上り、かつては土壁上に廻らされていた築地塀を最初に通過する「井戸澤門」の名称が明らかになる点は貴重である。



第92-2図 同上図のうち「二ノ丸」(本丸)周辺部分を拡大

5 那須烏山市所蔵「烏山城図」(樹木本数記載、第91図)



第91図 「烏山城図」(全体)

かつて烏山町郷土資料館に所蔵されていた「烏山城図」で、伝来は不明である。山城としての烏山城全域を尾根線と谷線を強調する形で描いている。絵図中の数か所に「十二曲より北方植付杉凡五千本位」「御馬屋下道より南方べ千三百本位」「十二曲より南北櫻百二拾四本、桺七十七本、松二拾本(後略)など、城山の植生について説明した付箋が貼り付けられている。絵図をよく見ると、確かに尾根ごとに樹種が描き分けられているようにも感じられ、本図作成の目的の一つが城山の樹木の管理に関するものであったことが推測される。

しかし、本図の重要性は、本丸御殿や三の丸御殿、各城門など建物の様子がかなり具体的に描かれている点にある。その描き方とも、これまでの絵図のように建物を平面的にとらえるのではなく、立体的、俯瞰的にとらえる描画方法がとられてゐる点が興味深く、さらに、左端(南端)の堂社(毘沙門堂)の描写(石段・灯籠・手水鉢)に見られるように、そこに存在するものを余すところなく記載する姿勢が注目される。

そういった視点で本丸周辺に目を向けると、本丸以外の曲輪がほとんど空地であり、狭間



第91-2図 「烏山城図」(本丸周辺部分拡大)



第91-3図 「烏山城図」(三の丸周辺部分拡大)

のついた築地堀の配置が一部に限定されている状況が現実味を帯びてゐるのであり、城郭の整備が後退した状況をそこに読み取ることができるのではないだろうか。つまり、本図が幕末期に近い時期の烏山城の姿を描いていることが推測されるのである。

一方、三の丸周辺では、以前の絵図には見られた「風呂屋敷」や長屋などの建物はなく、三の丸区画(曲輪)内のかなりの空間が空地となる中にあって、広大な三の丸御殿と城門、二棟の多門櫓の姿が目を引く存在となっている。

本図が作成された段階において、城郭内部の主要な建物として本丸御殿と三の丸御殿だけで藩としての機能が果たされていたとは考えにくく。この図には描かれていない三の丸付近の武家地中に設けられていた施設も合わせ、広義の烏山城としての範囲を考えていく必要があることを本図は伝えている。

4 烏山町文化財資料第九集掲載「烏山城絵図」

昭和五九年（一九八四）発行の「烏山町文化財資料第九集」において「烏山町の城館跡」が特集された際、口絵として写真が掲載された絵図である。この写真の見出しには「烏山城絵図」（新井氏別邸所蔵）とあるが、現在この絵図は確認されていない。

この写真の左下部分には、この絵図がこれとは別の絵図を写したものであることをうかがわせる記載が見られるが、その原図と思われる絵図が昭和六三年（一九八八）に開催された栃木県立博物館企画展「下野と近世大名」に、烏山町に在住する細川昇氏が所蔵する絵図



第90図 「烏山城絵図」(全体)

称（戦国期の古稱）とされる「二之丸」の文字
には、本丸の別
には、本丸の別
に相当する曲輪
本団には烏山
城の全城が描か
れており、本丸

リースしたもの
（部分）を下段
に掲載した（第
90-2図）。

本団に関する特記すべきなのは、「二之丸」（本丸）から「北曲輪」にかけての築地塀の設置、本丸より西側の曲輪群の様子、「三之丸」周辺の区画等において、「野州烏山城図」（第89図）と類似した部分が数多く確認される点である（後述）。描画の仕方も伝来も全く異なるこの二団において共通した部分が見られるることは重要で、三の丸を中心近世城郭としての整備が完成していく一方で、山中の曲輪の多くが家臣屋敷あるいは足軽長屋として活用されていた時期の烏山城の姿をこれらの絵



第90-2図 「烏山城図」(トレース図)(城郭部分拡大)

称）とされる「二之丸」の文字
がある。この場所には本丸御殿
がやや解釈的に描かれ、本団の
中心としての印象も受けれる。山
中の各曲輪には「古本丸」「北
曲輪」「侍屋敷」「大野平」等と
記載され、築地塀や城門、長屋
等の建物の様子が具体的に描か
れている。

「三之丸」周辺に目を向ける
と、区画の内部は空白となつて
いるが、築地塀や城門、石垣の
様子が具体的に描かれ、北東部
の張り出し部分に一繋ぎりの長

屋形式の建物として多門櫓が描かれている。
また、本団が地元である旧烏山町に伝来したことでも重要であり、原団
の所在の確認が望まれるとともに、今後の活用が期待されるものである。

「野州烏山城絵図」(第89図)



第89図 「野州烏山城絵図」(全体)

「日本古城絵図」に収められる「野州烏山城図」のうち二鋪目の本図は、山間部の城郭部分と、かなり省略はされているが、「家中屋敷」(武家地)と「町屋」(町地)が描かれている。本図では、いかなる理由からか、本来は「本丸」より西側(画面上では上部)に位置するはずの「西曲輪」などの曲輪群が絵図の南方(画面下部)に描かれている。つまり、城郭の一部の方向が左に横倒しになった形で描かれているのであるが、このことは城絵図としての全体的な価値に大きな影響を及ぼすものではなく、本図には烏山城全域にわたる貴重かつ多彩な情報が数多く盛り込まれている。山間部の各曲輪部分には、「本丸」「古本丸」の他、「北城」「西曲輪」「長者ガ峯」等と記され、前図(第87・88図)のように「侍屋敷」の表現は見られない。城門や築地堀、石垣などの様子が具体的に描かれ、本丸には御殿平面図の一部と思われる実線が引かれている。

本丸の西口を通じて接合する曲輪(若狭曲輪)には、「武具役人」「米蔵」「番所」の記載があり、そこからさらに西に連なる「西曲輪」には長屋門を備えた武家屋敷風の建物が描かれている。

この他にも三の丸区画の内外には長屋形式の建物が立ち並んでおり、三の丸に藩庁としての機能が集中した時期の烏山城の様子を彷彿とさせ



第89-2図 「野州烏山城絵図」(城郭部分拡大)

(20頁第89-4図)。さらにこれらは、曲輪より西に位置する山道を直進すると「長者ガ峯」と記された曲輪に突き当たり、築地堀の中に口の字型に長屋が並ぶ様子が描かれている。また山間部に二か所、麓に一か所、「城番足軽」又は「城番足軽長屋」と記載のある長屋が散在する。

三の丸周辺に目を向けると、大変具体的な三の丸御殿の様子が描かれており、本図が伝える最も重要な部分となっている。

唐破風玄関を備えた三の丸御殿は、左部(南側)の書院部分と右奥(東部)の「寝間」「居間」に分かれている。また、三の丸の北東部(画面では下)の張り出し部分に、表門(左)と裏門(右)、石垣の上に多門櫓(長屋形式の櫓)が二棟別棟の形で描かれている。下野国内の城郭では多門櫓は大変珍しい存在であるとされ、その具体的な姿を伝えるものとして貴重である。さらに三の丸御殿の北西部には、「風呂屋敷」と記載のある長屋形式の建物と、「腰掛」(登城した藩士の従者が待機する建物)が存在する一画があるが、後世の絵図ではこの区域は空地又は荷舟などの小社地となっている。

2 国立国会図書館所蔵「日本古城絵図東山道之部」のうち

「野州烏山城絵図」(第88図)は、享保一〇年(一七二五)に下野国烏山藩から志摩國鳥羽藩に転封し、明治維新まで同藩主であった福垣家が所蔵しているもので、現在約三五〇鋪の城絵図が残されている。城郭部分のみが描かれたものや城下町を含むもの、あるいは古戦場などが描かれたものもあり、内容に統一性は見られない。同じ城の絵図が複数あり、実際の城の数は二二〇ほどとなっている。

この中で、下野国内では、宇都宮城、大田原城、黒羽城、壬生城、烏山城など七つの城を描いた絵図が残され、このうち烏山城を描いたものは二鋪存在する。

そのうち一鋪目の本図は、城郭と武家地が描かれ、城郭部分のみが描かれていません。年記はなく、いつの時代の烏山城を描いたものであるかは不明であるが、三の丸部分

であるかは不明であるが、三の丸部分

が「居屋舗」として

描かれていることか

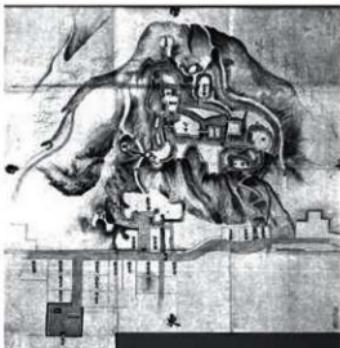
ら、城主居館の機能

が本丸から三の丸

に移転した万治二

年(一六五九)以降

の烏山城の姿を描いたものであることがわかる。山間部の城郭部分が詳細に描かれており、城郭の構造や城門などの細かい部分が丁寧に示されている。

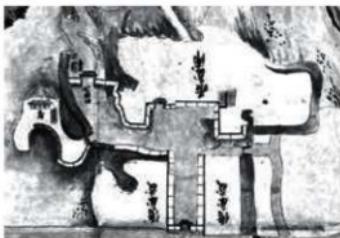


第88図 「野州烏山城絵図」(全体)

郭部分が詳細に描かれており、城郭の構造や城門などの細かい部分が丁寧に示されている。



第88-2図 「野州烏山城絵図」(本丸部分拡大)



第88-3図 「野州烏山城絵図」(三の丸周辺部分拡大)

れ、本丸を中心とする各曲輪の周囲にくまなく築地塀が廻らされている点と、東側(絵図では下)の築地塀に二つの櫓が描かれている点が注目される。しかし、このような特徴は、他の烏山城絵図には認められず、この部分の描写が歴史的に正確で

あつたかどうかを判断することには慎重でなければならないだろう。一方、三の丸部分に目を向けると、「居屋舎」と記載された部分の一帯に築地塀と表門が描かれるほかは具体的な表現はみられず、他絵図にはみられる北西部の小曲輪を確認することもできない。

山中に所在する長屋などが見られない点などから、年代としては「下野国烏山城絵図」(第87図)に近く、後述する数鋪の烏山城絵図よりは前の時期の烏山城の姿を描いたものとして位置付けられるのではないかだろうか(後述)。

二 近世における烏山城関連絵図について

はじめに

江戸時代の烏山城に関する絵図は数多く残されているが、本稿ではその中から特に重要なものをいくつか紹介するとともに、そこから読み取ることのできる若干の課題について論じてみたい。

一 烏山城を描いた主な絵図

1 国立公文書館所蔵「正保城絵図」のうち

「下野国烏山城絵図」(第87図)

「正保城絵図」は、正保元年（一六四四）に幕府が諸藩に命じて作成させた城下町絵図である。もとは紅葉山文庫に収蔵され、幕末期には

一三一鋪の絵図が所蔵されていたとされる

が、現在は国立公文書

館に六三鋪の絵図が所

蔵され、国の重要文化

財の一括指定を受けている。

烏山城と城下を描い

た本図の右下には「下

野国烏山 堀美作守居

城」とあり、寛永四年（一六三七）から

三五年間烏山城主で



第87図 「下野国烏山城絵図」(全体)



第87-2図 「下野国烏山城図」(城郭部分拡大)

あつた堀親昌時代のものであることがわかる。絵図の基本的な特徴は、城郭部と武家地・町地全体を描く中で、画面右上のはば四分の一の面積を占める城郭部分の記載が詳細である点である。そこには、各曲輪(郭)の大きさや麓からの高さ、門と門の間の距離等に至るまでが細かく記載され、幕府に提出するため作成されたという本図の性格をよく表しているといえる。

十数の数が確認される曲輪には、「本丸」「古本丸」と記載されるもの他に「侍屋敷」と記載された数が七と最も多く、一七世紀前半においては山門部の曲輪の多くが家臣屋敷(武家屋敷)として使用されていることをうかがわせるものとなっている。

本丸周辺には本丸御殿をはじめ、築地堀や城門、石垣の様子に至るまで具体的に細かく描かれ、城山の樹木の描かれ方も含め、絵画的要素を感じさせる点が見られるのも本図の特徴である。

堀親昌の時代の万治二年（一六五九）には、山麓部分の武家地があつた区域に新たに三の丸が築かれ、城主の居館としての機能は本丸から移転した。数ある烏山城絵図の中でも三の丸が未だ描かれていないものは本図のみであり、一七世紀前半の烏山城が山城としての姿をとどめた古い時期の様子を伝える貴重な資料であるといえる。

- (5) 「大内家文書」(『戦』下野一 №四八三)。
- (6) 「松野文書」(『戦』下野一 №六七三)。
- (7) 弘前市立図書館所蔵「岡保文書」(『戦』下野一 №六七七)。
- (8) 「辻田文書」(『戦』下野二 №一二六三)。
- (9) 「合編白河田川文書」(『戦』下野三 №一二三七)。
- (10) 「毛利家文書」(『戦』下野三 №一二九四・№二九二五)。
- (11) 「浅野文書」(『戦』下野三 №一九七八)。
- (12) 「戦」下野一 №一八〇一。
- (13) 「芳賀町史」史料編古代・中世所蔵。
- (14) 「日本城郭大系」4巻城・柄木・群馬所蔵「烏山城」の項(新人物往来社、一九七九年)、『茨木県の中世城館跡』所収「烏山城」の項(茨木県文化振興事業団、一九八三年)など。
- (15) 「戦」下野一 №九一。この文書を活用した考察には、江田健夫「宇都宮家中皆川俊宗の立場」(江田「戦国大名宇都宮氏と家中」所蔵、岩田書院、二〇一四年、初出二〇一二年)があるので参照されたい。
- (16) 「辻田文書」(『戦』下野一 №一三〇三)。
- (17) 那須烏山市所蔵「平野家文書」(『戦』下野一 №一五四九)。
- (18) 「立石知満氏所蔵文書」(『戦』下野一 №一五七一)。
- (19) 「戦」下野一 №一三九八。
- (20) 描稿「那須貴鬼隱居後の呼称考」(『那須文化研究』三号、二〇一七年)参照。
- (21) 「戦」下野一 №一八〇三。
- (22) 「戦」下野一 №一五二六。
- (23) 「館林市史」資料編2中世「佐貫莊と戦国の館林」所蔵編年史料 №一八〇。
- (24) 「結城市史」第一巻古代・中世史料編所蔵「松平基則氏所蔵文書」№二八。
- (25) 抽著「戦国期東国の權力と社会」(岩田書院、二〇一二年、初出二〇一年)所蔵。
- (26) 抽著「近世烏山藩主と烏山城との関係について」は、不十分ながら拙稿「下野烏山城主(藩主)の変遷」(那須烏山市埋蔵文化財報告第四集「烏山城跡確認調査概報」所蔵、那須烏山市教育委員会、二〇一四年)で触れた。参照していただきたい。

連雀商人が常設店舗を出店する際には献上品や礼賛の進上を受け、財源にあてていたことを述べた。

なお、烏山城の東側には那珂川の河岸（船着場）があり、那須氏は舟役などを徵収できたと思われる。

これらのことから勘案すると、私としては、那須氏が年間を通じてコンスタントに財源を確保するために、水陸交通上の要衝を掌握・管理しようととして八高山に烏山城を築いたと考えている。

おわりに

最後に、拙稿で明らかにしたことを概括しておく。

第一は、烏山城の築城時期についてである。今まで語られてきた応永二十四年那須資重築城説、明応年間那須資実築城説、及びその折衷案については、江戸時代の伝承に基づく築城説で、同時代（室町時代や戦国期）の史料に裏付けられた築城説ではないことを述べた。それに対し、近年の江田郁夫による享徳の乱の過程で烏山城が築城されたとする説は、戦国期権力の特徴の一つ、流通・交通上の要衝を押さえるために山城が築城されたという考え方であり首肯できることを述べた。ただ、享徳の乱時の烏山城築城については、新地に築城したのか、廢城となつていていた「古城」を再利用したものなのか、検討を要することも指摘した。

第二は、戦国期の史料から見た烏山城やその城下についてである。烏山城の存在が、戦国期の史料で確認できる初見が天文八年（一五三九）九月で、同城跡の考古学的な発掘によつて検出されたかわらけの年代観からも裏付けられた。また、那須氏が那須衆や近隣の領主から城名に因み「烏山」と呼ばれ、城の麓には館（館）が存在し、平時には生活しや

すい館（館）に住み、戦時には防御の観点から烏山城の山上にいたことを推測した。その他、史料的に烏山城内の曲輪として「北城」と「西城」が戦国期まで遡ることが可能である。烏山城下に「烏山宿」「根小屋」「新宿」などの町場が存在したこととも触れた。

第三は、烏山城の位置とその周辺地域についてである。烏山城が水陸交通の要衝を掌握できる独立丘陵に築かれ占地していたことを確認した。因みに、那須氏が交通の要衝に城郭を構えた経済的な理由としては、からは舟役などを徵収していたことを記述した。すなわち、連雀商人などに商品移動や流通の安全を保障する代わりに彼らから諸役を徵収していたことを指摘した。また、那珂川の河岸を利用した商船所有の商人財源（収入）の確保が大であったことを記述した。そのため、那須氏は交通の要衝を掌握管理できる地に城を築き財源に充てていたと考えられる。

以上である。

烏山城は、この後江戸時代を通して烏山藩主の拠点となつていく。烏山藩と烏山城との関係については今後の検討課題としたい。^{〔註〕}

注

（1）江田郁夫「戦国大名那須氏の成立」（江田郁夫・栗瀬大輔編「北関東の戦国時代」所収、高志書院、二〇一三年）。

（2）江田郁夫「家中の成立と山城の登場」（江田郁夫・山口耕一編「戦乱でみるところの歴史——とちぎの潮流を探る」所収、下野新聞社、二〇二〇年）。

（3）竹井英文「史料に現れた『古城』（竹井『戦国の城の一生——くる・壊す・蘇る——』所収、吉川弘文館、二〇一八年）。

（4）『戦国遺文』下野編第一巻第46—以下、『戦国遺文』下野編第一巻は『戦』下野「などと略す。」

2 那須氏が交通の要衝町場近くに城館を構えた経済的な理由

那須氏が交通の要衝である町場近くに城館を構えた理由は何だったのだろうか。軍事的には迅速な軍勢動員と行軍、政治的には領国經營ができるから、往来に便利な交通上の要衝である町場近くに城館を構えたことが推測される。

それでは、交通上の要衝である町場近くに城館を構えた経済的な理由は何だったのだろうか。管見の限り、那須氏に関してこの点を直接的に語つてくれる史料を確認していない。しかし、この点を考える上で興味深い史料があるので提示する。

史料8 大嶋家吉請状写（新田岩松古文書之写 中）⁽¹⁾

うけ申昌之事

右の所者、上野国佐貫庄江黒郷之内近藤原村内畠宅町事、彼所者、

御年貢貰文の所也、しかるを、一貫五百文うけとり申物也、（中略）

、妻の御年貢ハ五月中あハ・ひへの御年貢ハ七月中、したらの

御年貢ハ月中二さた申へく候、

（中略）、仍うけ狀如件、

応永卅三年卯月十一日 作人大嶋太郎五郎家吉（略押影）

史料9 「結城氏新法度」第一〇一条⁽²⁾

一、郷中より年くの取やう、夏ねんくハ五月端午の日より六月晦日にたてきるへし、中のねんく六月の一日たてへし、各可被申付候、

もなかろう。

この点については、「戦国期城館が町場近くに築かれた経済的な理由」という小論を発表したことがあり、戦国期権力が一年間を通じてコンスタントに財源（収入）を確保するためであつたことを指摘した。すなわち、戦国期権力は、連雀商人の安全を保障する代わりに、商品移動の際には関税を、連雀商人が定期市のときに町場に来て商売をする際には連雀役を、連雀商人が町場に定住した際には棟別錢を徴収し、また町場に

史料10 「結城氏新法度」第一〇二条⁽³⁾

一、秋のねんくハ、七月十五日たてはしめ、中ねんく八月十五日、九月一日、そのゑ十月十五日、霜月晦日三たておさむへし、郷

中「可被申付候、

史料8は、室町時代応永三十四年（一四二七）四月に、上野国佐貫庄江黒郷近藤原村（群馬県明和町）に住んでいた土豪の大嶋家吉が、畠一町の耕作を請け負ったときの請状である。この請状によれば大嶋家吉は、麦年貢を五月中に、粟と稗の年貢を七月中に、下地（米カ）年貢を十月中旬に納めると述べている。また、史料9と史料10は、下總北部の結城氏の分国法「結城氏新法度」である。史料9と史料10からは、戦国期結城領の農民が夏の麦年貢を五月端午から六月晦日までに、秋の米年貢を七月十五日から十一月晦日までに納めなければならなかつたことがわかる。

史料8・9・10からは、一方が室町時代の史料で他方が戦国期の史料であるが、年貢を徴収することができた月は、戦国期領主の財政収入（基盤）は安定していたことが推測される。問題は、年貢を徴収することができなかつた月、戦国期権力はどういう財政収入を確保していたかである。年貢が徴収できない月にも財政支出が必要だつたことは言うまである。

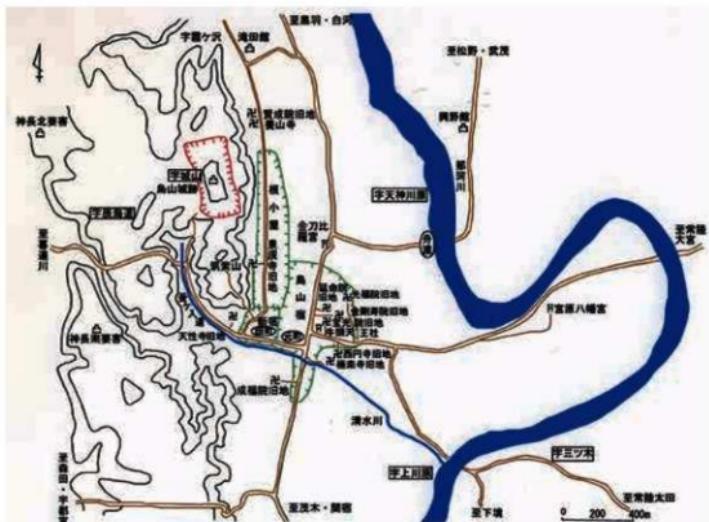
この点については、「戦国期城館が町場近くに築かれた経済的な理由」という小論を発表したことがあり、戦国期権力が一年間を通じてコンスタントに財源（収入）を確保するためであつたことを指摘した。すなわち、戦国期権力は、連雀商人の安全を保障する代わりに、商品移動の際には関税を、連雀商人が定期市のときに町場に来て商売をする際には連雀役を、連雀商人が町場に定住した際には棟別錢を徴収し、また町場に

臣団集落」を打ち散らしていたことである。のことから、この時期の烏山城の周辺には「烏山宿」や「根小屋」が存在したことがわかる。

史料7は、那須資晴が、慶長八年（一六〇三）卯月二十八日付けで宮原八幡宮に捧げた願文である。この時期の那須資晴は、烏山城を退去させられ佐良土城（大田原市佐良土）にいた。史料7によれば、資晴自身の願いが叶って烏山城に戻ることができたならば、烏山城南側の筑紫山の麓にある「新宿」に宮原八幡宮の鳥居を建立する旨が記されている。「新宿」については戦国期まで遡りうる可能性が考えられる。

第86図は、今まで検討してきた戦国期や近世初頭の文書から得られた知見のほかに、現地調査や近世の鳥山城下絵図や町絵図を基に作成した鳥山城一帯の歴史的な景観を復元した模式図である。

図3からは、烏山城が、茂木（茂木町）、関宿（千葉県）と黒羽（大田原市）、白河（福島県）を結ぶ南北の道路、及び常陸大宮（茨城県）と常陸太田（同上）と喜連川（さくら市）を結ぶ東西の道路が交差する所に開けた「烏山宿」や「新宿」などの町場、更には那珂川西岸の河岸「舟渡」を掌握管理するのに個別な独立丘陵上に占地していたことがわかる。その意味では、烏山城は、交通の要衝近くに築かれており、水陸交通を扼する要地に存在していたと言えよう。それでは、那須氏は何故水陸交通を扼する要地に城館を構えたのであるうか。この点は次項で改めて検討する。



第 86 図 烏山城跡一帯の模式図

上者梵天帝尺、四大天王、下者堅牢地神、熊野三所大權現、日光三所權現、当國鹿鳴大明神、八幡大菩薩、別面愛宕大權現、惣面日本國大小神祇、即可蒙御罰者也、仍如件、

天正十年六月二十四日

義重（花押）

1 烏山城周辺の歴史的景観の復元

烏山城下を考える上で興味深い史料があるので二通提示する。

鳥山南
那須殿

史料6 佐竹義重書状写（秋田藩家藏文書）二〇

史料5は、常陸佐竹義重が天正十年六月二十四日付けで那須資胤・資晴父子に送った起請文である。那須家では、天正十年五月下旬までに那須資胤から子の資晴に代替りが行われた⁽²⁾。このことから、当該文書の宛所を考えると、隠居後の資胤が「鳥山南」と、当主の資晴が「那須殿」と呼ばれていたことがわかる。

問題は、「鳥山南」の呼称である。この呼び名は資胤の隠居地が烏山城の南側にあったことによる呼称と思われる。

この時期既に当主と前当主が同一城館に住み敵方に攻撃された場合、家の滅亡という事態を惹き起こす可能性があるので、当主と前当主は同一の城館には住んでいなかった。このことを念頭に、烏山城との関連で、今後は神長南要害など（第85図）、資胤が隠居した可能性のある城館を検討していくことが必要であろう。



第85図 鳥山城跡及び周辺城館位置図

史料6 佐竹義重書状写（秋田藩家藏文書）二〇

當口在陣懇切之起、快然之至候、千本へ押詰及行候、中妻筋へ相動如存候、其上号興野寺地へ罷趣、悉取詰候、昨ト「鳥山宿」根小屋無殘打散候、爰元落居不可有程候、事々期後音候、恐々謹言、

八月十二日
赤坂宮内太輔殿

義重（花押影）

史料7 那須資晴願文（大田原市那須与一伝承館寄託「那須文書」）

宮原八幡大菩薩

御立願之狀

一、烏山正本意於有之者、御殿筑紫山江被為引、新宿江鳥井⁽³⁾お立可申事、

一、御神領之儀、幡田之替可申事、付、補宜光明寺屋敷可被下也、

一、櫻門・廻廊立可申事、

慶長八年癸卯月廿八日

藤原資晴（花押）

史料6は、常陸の佐竹義重が、永禄十年頃の八月十二日付けで南奥の国衆で佐竹氏家臣であった赤坂宮内太輔に宛てた書状で、佐竹氏の下野千本氏及び那須氏攻めのことが記されている。注目すべきは、佐竹氏が烏山城を攻撃するに際しまず城のまわりの「鳥山宿」や「根小屋」（家

した部分からなっていることがわかる。「那須殿今ハ富久原ト云所ニ御入候」や「□□□弥一殿ト申候、なす殿舍也」が後者の部分で、それ以外の部分が戦国末期に元々存在していた檀那帳の記述内容の部分と思われる。これらのこと考慮すると、現在那須弥一と名乗っている那須藤王丸の舍弟「西城殿」（実名不詳）については、福原城の西城とともに考えられるが、烏山城の西城に住んでいたことに因み「西城殿」と呼ばれていた可能性も推測される。ともかく、史料2と史料3からは、烏山城内の北城と西城が戦国末期まで遡れることが指摘できる。この点からは、戦国末期の烏山城の範囲が古本丸・本丸・中城・北城・西城の部分くらいであったと言えよう（第84図）。

次に、烏山城を考える上で興味深い文書を提示する。

史料4 心徹齋道楽書状（栃木県立博物館所蔵「那須文書」）

先日聊及御返答候旨願、御悦喜之段重而貴札、殊更以御使僧条々御懇切蒙仰候、旁以畏入令存候、然者去五日盛氏・義親^{（義親）}正被御對面尽未來之儀被仰堅之由、真美以目出度御簡要至極候、（中略）、恐々謹言、

（前田茂）
心徹齋

道楽（花押）

（元和二年）
九月廿四日

鳥山
御館

史料5 佐竹義重起請文（大田原市那須与一伝承館寄託「金剛寿院文書」）

史料4は、下野南西部の中小領主で皆川城（栃木市）の城主であった心徹齋道楽（皆川俊宗）が、元亀二年（一五七二）九月二十四日付けで那須氏に南奥情勢を報じた書状である。宛所は「烏山御館」と記されて

いる。この点は、心徹齋道楽が那須氏よりも社会的な地位や身分が低いために、宛所に那須氏の名を記すことを憚り敢えて當時存在した那須氏本拠の城館名を記することで間接的に那須氏に宛てたと言える。現在烏山城に登るとわかるが、当時の登城口である釜ヶ入口から主郭の古本丸まで登城するのは急峻で容易ではなく、主郭一帯は守るには堅固であるが、冬場は寒く日常生活には向きである。この宛所表記からは、那須氏が戦時には防御の必要から山上の烏山城に、日常的には城の麓の所在地は不明であるが、生活しやすい館（館）に居住していた可能性を推測させる。

因みに、天正八年閏三月二十三日付け水谷蟠龍斎全珍書状^{（天正十三年三月二十八日付）}や天正十三年五月八日付け水谷蟠龍斎全珍書状^{（天正十三年五月八日付）}も宛所表記は「烏山御館」である。この点も、水谷氏と多賀谷氏が下結城氏の重臣筋で、那須氏よりも社会的な地位や身分の面で下位にあつたために、那須氏の名を表記して宛てることを憚り、敢えて那須氏の城館名を記することで間接的に那須氏に宛てたと言えよう。

ともかく、これら「烏山御館」の表記からは、那須氏が日常的には烏山城の麓の館（館）に居住していたことが推測される。

なお、烏山城との関連で、那須氏の当主と前当主（隠居者）との関係がわかる史料があるので提示する。

右意趣者、度々以証文雖申合候、猶於向後も於此地世上浮沈共、資晴^{（義晴）}御父子へ無二可申合候事、付互之密事不可有他言候、并候人之取成候者、則糾明可申事、若此義於偽者、

史料2

「下野国供養帳」第三、(高野山清淨心院所藏)

(3)

史料3

「下野国檀那之事」(神宮文庫所藏)

(3)

月

中永妙祐禪定尼

天正十六
五月十三日

那須烏山北城廻立之

(3)

那須殿今ハ富久原ト云所ニ御入候、

(3)

那須之分

御城ノ名烏山ト申候、

(3)

文ハ鳥子、御奉行所書也、但藤王丸廻ト也、

(3)

一、藤王丸殿

那須廻御事也、

(3)

御土產

杉原式帖・油煙壺丁、

(3)

御初ハ式百文、近年之事也、

(3)

能杉、鳥也、

(3)

一、西城殿

杉原二帖・油煙壺丁、初廿十疋、

(3)

〔今那須カ〕

(3)

□□□弥一殿ト申候、なす殿舍弟也、

(3)

同 上様江

帶・くし

(3)

杉

(3)

一、富岡河内守殿

帶・くし

(3)

右ノ人西城殿そうしや也、

(3)

烏山城の御張を語る場合、「五城三郭」という言葉が使われ、古本丸、本丸、西城、北城、中城、若狭曲輪、常磐曲輪、大野曲輪を指すと言わ
れている。史料2と史料3からは、戦国末期天正期に烏山城の曲輪とし
て北城と西城があつたことがわかる。詳しく見ていく。



第84図 烏山城跡縄張図 (部分、①本丸②古本丸③中城

④北城⑤西城⑥常磐曲輪⑦若狭曲輪⑧大野曲輪)

史料2は高野山清淨心院に所蔵されている下野国に関する供養帳の抜
粋である。この史料からは、烏山城の北城に住む那須氏の関係者と思わ
れる「北城殿」が、戦国末期天正十六年（一五八八）五月十三日に中永
妙祐禪定尼の月牌供養を清淨心院に依頼していることがわかる。

史料3は、三重県伊勢市神宮文庫に所蔵されている「下野国檀那之事」
である。この史料は、近世初期ないし前期に伊勢内宮御師佐八氏が下野
の檀那諸氏を廻る際に必要な情報をメモ書き風に記した写の抜粋であ
る。史料3の記述内容を見ると、戦国末期にあつた檀那帳の原本に記さ
れていた部分と、この冊子を作成した近世初期ないし前期に補足し注記

魔城となつて「古城」になつていたものを再利用した城もあるという。これらのこと考慮すると、烏山城の築城年代については、享徳の乱の時期が妥当のように思われるが、今後さらなる慎重な検討を要することを付け加えておきたい。

2 同時代の史料から言える烏山城の存在

管見の限り、烏山城の築城時期が明確にわかる同時代史料を確認していない。しかし、烏山城の存在を想起させる同時代史料があるので提示する。

史料1 小山高朝書状（早稲田大学白川文書）^{〔4〕}

其以往通達不自由^{〔5〕}附画、不能音問候、素意之外候、抑佐竹・小田・宇都宮被謀政資、為引汲去月廿一出陣、至于近日者烏山甚近辺へ被押詰候、雖然那須屋裏過半高資相守候故、近日堅固之由其聞候、（中略）、恐々謹言、

十一月十八日

白川殿

高朝
〔6〕
（花押）

二 戦国期の史料から指摘できる烏山城

鳥山城の名は、天文後期から永禄期になると文書に登場していく。すなわち、天文十四年（一五四五）頃から永禄二年（一五五九）頃の端午日付の大田原詠存書状や、永禄四年八月二十六日付け佐竹義昭書状や永禄四七年頃の霜月二十日付け佐竹義昭書状^{〔7〕}の中で見られ、那須氏が那須衆や近隣の常陸佐竹氏などの領主から本拠の鳥山城の名に因み「鳥山」と呼ばれていたことが指摘できる。

史料1は、下野郡園城（小山市）の小山高朝が、南奥小峯城（福島県白河市）の白川義綱に送った書状である。この文書からは、天文八年（一五三九）九月段階の北関東地域の領主同士の抗争事件の一端が読み取れる。すなわち、佐竹義駿・小田政治・宇都宮後綱軍が那須政資とばかりて政資の子である那須高資の擁る鳥山城を攻めたが、堅固な守りにあい苦戦している状況が記されている。この文書からは、天文八年段階十六世紀の前半には鳥山城が存在したことが指摘できる。

史料2は、下野郡園城（小山市）の小山高朝が、南奥小峯城（福島県白河市）の白川義綱に送った書状である。この文書からは、天文八年（一五三九）九月段階の北関東地域の領主同士の抗争事件の一端が読み取れる。すなわち、佐竹義駿・小田政治・宇都宮後綱軍が那須政資とばかりて政資の子である那須高資の擁る鳥山城を攻めたが、堅固な守りにあい苦戦している状況が記されている。この文書からは、天文八年段階十六世紀の前半には鳥山城が存在したことが指摘できる。

第三節 文獻、絵図調査

一 戦国期烏山城と周辺地域 はじめに

下野烏山城は、栃木県那須烏山市の中央部にあり、南流する那珂川の西側、喜連川丘陵系の八高山^(八ヶ岳)一帯に所在した城郭である。戦国期は那須氏の、近世は烏山藩主の拠点となつた城郭である。

ここでは、戦国期の烏山城やその周辺地域について、文献史学を中心にして歴史地理学や考古学の発掘調査の成果を踏まえ素描する。主な先行研究としては、専論は少ないが、一九七八年に旧烏山町が発刊した『烏山町史』や、拙稿「戦国期城館が町場近くに築かれた経済的な理由」(拙著「戦国期東国の大城と社会」所収、岩田書院、一〇二二年、初出一〇二一年)などで触れられている。適宜参考しながら叙述していく。

一 烏山城の築城時期

1 従来の説と近年の説

烏山城の築城時期については諸説ある。従来からの主な説は以下のとおりである。第一は、江戸前明延宝四年(一六七六)に那須郡小口村(現那珂川町小口一帯)の名主大金重貞によつて著わされた「那須記」卷之五所取「資重帝秩山觀音立願事付烏山城築事」の記事である。この「那須記」の記述によれば、那須資重(資之の弟)が室町期応永二十四年(一四一七)二月上旬より築き始め、翌応永二十五年正月十五日に移り住んだという。

第一は、江戸中期以降に作成された滝田永世氏所蔵「那須系図説」(蓮実長著・蓮実彌増補「増補那須郡誌」所収、小山田書店、一九八八年)が明応年間(一四九二~一五〇二)に築城したという。

第三は、第一説と第二説の折衷案で、前記『烏山町史』の記述である。

すなわち、那須資重が応永二十五年(応永二十四年の誤り)にまず古本丸を中心とした小規模な城郭を築き、その後那須氏の勢力が安定した明応年間の那須資実・資房の代に、本丸・二の丸、その他の郭を増改築していくたといいう説である。

これら三つの説の問題点としては、出典の明記がなく、同時代(室町時代や戦国期)の史料を典拠とした築城年代ではなく、あくまでも後世江戸時代の伝承に基づく築城年代であるということである。

近年の説としては、江田郁夫氏の見解がある¹⁾。江田氏は、十五世紀後半の東国の内乱である享徳の乱の過程で、那須氏の有力な庶子家である五郎(越前守)家の那須持貢が居所を「上那須福原から下那須莊由緒の地」に本拠を移したこと、森田・向田両郷にもほど近い烏山城(那須烏山城)を本拠として築城したことを推測している。さらに、江田氏は、成立間もない時期の戦国期権力の特徴の一つとして、軍事的な拠点であると同時に、流通・交通上の要衝を押さえられる拠点として山城が築城されたことを指摘し、具体的な事例として佐野氏の本拠唐沢山城、足利長尾氏の本拠足利城、皆川氏の皆川城と共に下那須氏の本拠烏山城を挙げている。傾聴に値しよう。

ただ、城郭史の研究成果として、南北朝期に築かれて「古城」となつた城が、一〇〇年ないし二〇〇年のときを経た戦国期になつて積極的に再利用された事例も見られるという。また、戦国期前半に築城され、

写 真 図 版



確認された石列の状況 (北から)



折れ曲がる石列 (南から)



礎石上面の柱痕跡 (南から)



肥前腕出土状況 (南から)



高段部分法面状況 (南西から)



本丸正門石垣西面 (南西から)



正門脇石垣西面前石段 (北東から)



正門石垣南面正門付近 (南東から)



西側土壘（北から）



西側土壘立ち割り（東から）



西側土壘礫盛土状況（南東から）



東側張り出し部盛土状況（南西から）



虎口付近方形礫石（北から）



掘立柱痕跡状況（南から）



かわらけ溜り出土状況（西から）



かわらけ溜り出土かわらけ



トレンチ4調査終了後状況（南西から）



トレンチ5調査終了後状況（南西から）



SL-46確認状況（西から）



トレンチ8調査終了後状況（南から）



トレンチ12~15調査終了状況（北から）



トレンチ13・14 SD-50確認状況（南東から）



SD-50かわらけ出土状況（南西から）



SL-96確認状況（南から）



トレンチ1 調査終了後状況（東から）



トレンチ1 石列確認状況（北東から）



トレンチ1 遺物出土状況（西から）



トレンチ1 遺物出土状況（西から）



トレンチ1 東面セクション中遺物出土（西から）



トレンチ2 調査終了状況（北から）



トレンチ2 遺物出土状況（東から）



中城調査終了状況（北から）



トレンチ1 調査終了後状況（東から）



トレンチ1 SD-1セクション（東から）



平坦面調査開始前状況（東から）



トレンチ3 遺物出土状況（北から）



トレンチ4 遺物出土状況（北から）



トレンチ6 焼土確認（南から）



平坦面調査終了状況（東から）



調査終了（西から）



調査地点竹林整備後（東から）



表土除去状況（北から）



地山面確認状況（北から）



調査区北側（南西から）



調査区南側（南東から）



整地盛土内稼確認状況（北から）



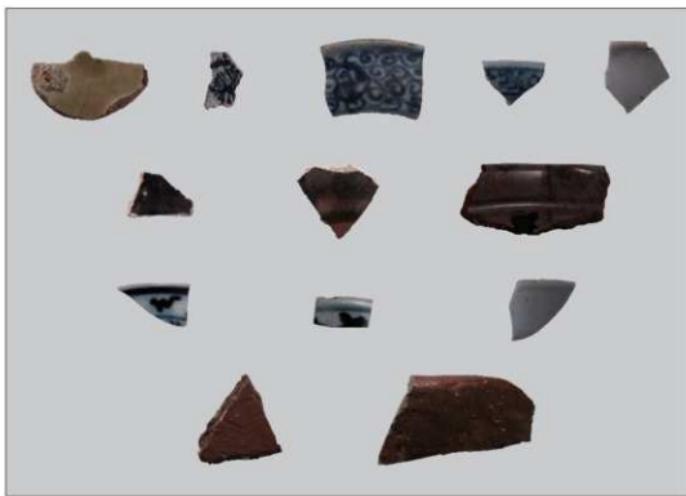
第1回調査指導委員会視察



第2回調査指導委員会視察



本丸出土遺物



古本丸出土遺物



西城出土遺物（1）



西城出土遺物（2）



西城出土遺物 (3)



中城出土遺物



北城出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	からすやまじょうあとかくにんちゅうさはうこくしょ						
書名	烏山城跡確認調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	那須烏山市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第9集						
編著者名	鈴木芳英、石下翔子						
編集機関	那須烏山市教育委員会事務局生涯学習課						
所在地	〒321-0595 栃木県那須烏山市大金 240						
発行機関	栃木県那須烏山市教育委員会						
発行年月日	西暦 2022年2月25日（令和4年2月25日）						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ***	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
鳥山城跡	那須烏山市 城山	9215	36° 39° 50°	140° 8° 52°	第1次（古本丸） 20100112-20100329 第2次（本丸・高段部分） 20101206-20110228 第3次（本丸・平坦面） 20110808-20111204 第4次（本丸・虎口周辺） 20120910-20121204 第5次（古本丸） 20130603-20130729 第6次（釜ヶ入口） 20160901-20170228 第7次（西城） 20170901-20180228 第8次（西城） 20180717-20181207 第9次（中城） 20181210-20190228 第10次（北城） 20190801-20191227	600 600 600 500 600 50 50 170 80 20 120	学術確認 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
鳥山城跡	城館跡	中世 近世	【古本丸】 土壘、かわらけ溜まり 【本丸】 礎石建物跡、石列、階段状造構、石垣 【釜ヶ入】 遺構なし 【西城】 掘立柱建物跡、区画溝跡、土坑（ピット） 【中城】 石列、礎石、土坑（ピット） 【北城】 土壘、土坑（ピット）	【古本丸】 土師質土器（かわらけ）、陶磁器 【本丸】 土師質土器（かわらけ）、陶磁器、瓦、釘 【釜ヶ入口】 陶磁器 【西城】 土師質土器（かわらけ）、陶磁器 【中城】 土師質土器（かわらけ）、陶磁器、瓦 【北城】 土師質土器（かわらけ）、陶磁器、瓦			
要 約	鳥山城跡は、市街地を見下ろす塙那丘陵東端に位置する城郭である。那珂川、江川、荒川の3河川の合流点に近く、河川の航行によって形成された狭地を巧みに利用し、要害の地を選んで築城されていた。調査により15世紀後半の中世期から明治の廢城までの近世期にかけて、大小さまざまな改修等を経ながら、継続して使用された城郭であり、山城を中心とした中世の城郭部分と、東側山麓位置する三の丸を中心に山城の東側半分を継続使用していた近世の城郭部分が確認できた。そのため、中世城郭と近世城郭の両方が現存し、その変遷を追うこともできる貴重な城郭であることがわかった。						

那須烏山市埋蔵文化財調査報告第9集

鳥山城跡確認調査報告書

発 行 栃木県那須烏山市教育委員会

栃木県那須烏山市大金 240

TEL 0287 (88) 6223

令和4年 2月 25日 初版発行

令和4年 9月 30日 第二版発行

編 集 栃木県那須烏山市教育委員会事務局生涯学習課

印 刷 有限会社 吉成印刷
